
ゆっくりゆうやけ

野鶴善明

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゆっくりゆうやけ

【Nコード】

N8686M

【作者名】

野鶴善明

【あらすじ】

これといったテーマは決めずに、気軽なものから、シリアスなものまで、気のおもむくままに筆を走らせようかと思っています。今は中国広東省に住んでいるの中国ネタが多くなるでしょうが、よろしくお付き合いください。2012年は第146部『考える葦』からです。よろしく~

トホホな会議

先日、今住んでいる広東省から中国北部のとある町まで出張してお客さんの会社へ行き、会議に出た。お客さんと同業者たちを合わせて十五人くらいが出席したちよつとした会議だった。

僕以外はみんな中国人だ。

日本語を話せるのは、僕といっしょに出張した中国人の同僚だけ。当然、中国語だけで会議を開くことになる。

中国人はとにかくよくしゃべる。基本的におしゃべり好きな民族だ。そのくせ、要領を得ないし、肝心なことはほとんど言わないから、煙に巻かれたような気分になることがよくある。僕も中国語でおしゃべりするのは好きなのだけど、正直言って、中国語だけの会議はしんどい。でも、そんなことは言ってられない。

——これも仕事のうち。がんばって聞き取るか。

僕は会議の前にちよつと気合を入れた。

会議が始まってすぐ、僕はひっくり返りそうになってしまった。なんと、お客さんの中国人担当者は地元の方言で話し出すではないか。これでは半分も聞き取れない。

うーんと僕は首をひねってしまった。

相手は、誰もがその名を知っている日系グローバル企業と中国企業の合弁会社だ。日本語を話してくれなんて贅沢なこととは言わないけど、せめて、北京標準語くらい話してくれてもよさそうなものではないか。

僕はよっぽど「標準語で話してください」と言おうかと思ったんだけど、彼らの言葉をよく聞いていると、標準語のようにも聞こえる。もしかしたら、下手なりにがんばって標準語で話そうとしているのかもしれない。ここで「標準語で話してください」などと言えば、彼らの面子を潰してしまうだろう。中国人にとって面子は命

より大切なものだ。やっぱり言えない。

結局、三時間ほど、方言もしくは訛りの非常に強い標準語を聞き続けるはめになってしまった。

もちろん、全員が全員、方言で話していたわけではないのだけど、ジグソーパズルのピースを埋めるようにしてわからない言葉を類推しながら聴いていたので、終わりのほうは集中力がすっかり切れて頭がくらくらした。

中国人はとんでもない開き直り発言を平気でするから、いつもびっくりさせられる。それでいて、自分に損だと思ったら、なんにも言わずにちゃっかり軌道修正したりする。相手のトンデモ発言を聞いている中国人も、それがわかっていながら平気で聞き流している。実に奥の深い人たちだ。案の定、相手はびっくり仰天な言い訳を言ったけど、それに反応する気力さえ残っていなかった。

会議が終わった後、中国人の同僚は「会議なのに方言で話すなんて……」と疲れた顔でこぼしていた。中国人にとっても、やっぱり方言で話されるのはつらいようだ。

あれだけ国土が広ければ、方言の差が激しいのもむりはない。若い人はたいていそこその標準語を話してくれるけど、おじさん、おばさんだとなかなかそうもいかない。十三、四億人の中国人全員に同じ言葉で話せということ自体がそもそもむりなことなのだろう。それにしても、なんともトホホな会議だった。

人間はいつ死んでもおかしくないから

暑い日が続いているから、毎日水シャワーを浴びている。

ホットシャワーを浴びたのでは体が火照ってしまって、暑くてかなわない。シャワーの後で汗がどっと噴き出すのも困りものだ。

きのうは雨が降り続いてくれたおかげで、たまたますこしばかり涼しくなった。水シャワーではいささか厳しい。ぎりぎり我慢できるくらの冷たさなのだけど、やはりホットシャワーにしておいたほうが無難だろう。風邪をひいてしまうかもしれない。

そこで僕は、久しぶりにガスボンベの栓を開けようとした。

バスルームのなかに小さなガスボンベが置いてあって、それで瞬間湯沸かし器をつけてホットシャワーが出るようになっていた。

ガスボンベの栓をひねった途端、プシューという不気味な音が響いた。ガス漏れた。しばらく使っていなかったので、ボンベのバルブが壊れてしまったか、つなぎ目のどこかが緩んでしまったようだ。たちまち、卵の腐ったようなガスの臭いがたちこめる。僕は急いで換気扇をつけた。

さいわい、三十分ほどでガスの臭いはすっかり消えてくれた。爆発しなくてよかった。僕はほっと胸をなでおろした。ボンベを確かめてみたけど、栓を閉めてからガスが漏れている気配はない。プシューというあの音も聞こえない。念のため、一晩中換気扇をつけっぱなしにしておいて、今日はそのまま出勤した。仕事から帰ってドアを開けたとたん、ガスに巻かれてぽっくり逝ってしまう、なんていうのは御免こうむりたい。危なかった。

スリルを味わえたのは面白かったけど、もうちょっとで死ぬところだった。ぐでんぐでんに酔っ払っていたら気づかなかったかもしれない。

人間はいつ死んでもおかしくない、と思い知らされた。

ゆうべ、僕が死んでいてもなんの不思議もなかった。ガス漏れによる死亡事故なんて、世間ではありふれたことだ。人は自分が事故で死ぬだなんてあんまり考えないものだし、僕もそれまで真剣に考えたこともなかったけど、事故はどこにでも転がっている。つまりない事故にあわないようになるべく気をつけていても、どこでどうアクシデントに見舞われるかはわからないから、どうしようもない。いつ死ぬかなんて自分では決められない。命なんて、案外あっけないものだ。

もし死んでしまっていたら、僕自身はどう思っただろう。

とりあえず、大切なものは見つけたから、それほど未練や後悔は残らないかもしれない。それを知らないままだったら、死んでも死にきれなかっただろうけど。人は誰でも、「それでお前はもうするのだ?」と人生に問いかけられている。僕は、物足りないかもしれないけど必要最低限の答えを出しておいた。今まで書いた作品もその一部だ。だけど、それでもやっぱり、やり残したことがあると思ってしまうだろう。まだやってみたいことがある。

連載中の小説が終わっていないのにこんなことを書くのはなんだけど、ほかに書いてみたい小説がいくらかある。読んでみたい本も、旅をしてみたいところもたくさんある。いろんな人ともっと出会ってみたい。欲をいえばきりがないけど。

いつ死ぬことになっても、その時は「できるだけのことをしたんだから、そろそろこの世を離れてもいいだろう」と自分自身で納得できるようにしておきたい。この連載を始めたのも、生きていられるうちになるべくたくさん書いておこうと思ったからだ。

一日いちにちを大切にしたい。いろんな障碍にぶつかったとしても、できれば毎日、後悔のないように生きたい。

もしかしたら今回のガス漏れ事故は、最近僕がたるんでいるのでちょっとびっくりさせて気合を入れようと、神さまかなにかがたくらんでくれたのかもしれない。やっかいなアクシデントだったけど、僕はそう思うことにしている。

みなさんの毎日が実り豊かなものでありますように。

魔法の桃

真夜中になにか食べるものはないかと冷蔵庫をあさっていたら、きれいな桃を一個見つけた。

桃でもむいて食べるか、と思ったのだけど、はたと不思議に感じた。

この桃は、たしか二か月ほど前に買ったものだった。果物屋で小さなビニール袋一杯分買い、一個だけ食べ残してその存在さえ忘れていた。

桃はどこも腐っていない。いくら冷蔵庫に入れっぱなしとはいえ、二か月も持つものなのだろうか？魔法の桃でもない限り、たぶん持たないと思う。ふつうは腐ってしまうはずだ。ということは、農薬がいっぱいかかっているとしか考えられない。

——こんなものを食べていたんだ。

僕は妙に感心してしまった。

中国の農産物には農薬が大量にかかっていることは知っていたけど、ここまですごいとは思わなかった。

司馬遼太郎さんの歴史小説を「小説」と呼んでいいのか？

『龍馬がゆく』をはじめて読んだのは中三の時だった。

それが司馬さんの作品との出会いだった。

こんなすごい本が世の中にあるのかと興奮しながら読んだ。歴史上の人物が生きいきと描かれ、歴史を精密に解釈している。単行本で五冊とかなりのボリュームなのだけど、文章のリズムが非常にいいから、一気に読めてしまう。維新のために東奔西走する龍馬がまぶしかった。家の本棚に父が買った司馬さんの本が何十冊も置いてあったので、『龍馬がゆく』を読み終えた後、司馬さんの小説をかたっぱしから読んだ。

司馬さんの作品はどれも面白いのだけど、ただ、司馬さんの歴史小説を「小説」と呼んでいいのかどうかは、わからなかった。司馬さんの「小説」は、

「筆者は考える」

と、作者が頻繁に登場して歴史をどう解釈すべきか考察しているからだ。登場人物が考えるのならわかるけど、一般的にいつて、小説ではそんなことをしない。作者が登場して迷ったところを書くにしても、さらっと流してしまう。それに、

「余談だが」

と、しばしば話が脇道へそれる。それがまたたまらなく面白いのだけど、そんなことをすれば、物語の流れがよどんでしまう。作品はすばらしいけど、「小説」とはまた違ったものなのだろうなと感じた。

大人になってから、主に児童劇の脚本を書いていたある老作家と出会った。根はやさしいけど頑固な人だった。かたい信念の持ち主だった。僕はそんな人が好きだ。その先生には、喫茶店でコーヒーをご馳走になりながらいろんな話を聞かせていただいたのだけど、ある時、

「わしは司馬遼太郎といっしょに徳島へ旅行に行ったことがあるんやけど、その時にあんたの書くものはつまらんって言って喧嘩をふっかけてやったんや。あんなもんは歴史小説やない。くだらん歴史講談や」

と彼が怒ったように言った。

僕はびっくりしてしまった。

司馬さんの作品を悪く言う人はほとんどいない。歴史小説好きの男と司馬さんの作品の話をすれば、例外なく盛り上がる。嫌いだという人にはじめて出会った。

「小説やない」というのはわかるけど、司馬さんの書くものはとても勉強になったから、なぜ彼がそんなことを言うのか理解できなかった。「くだらん歴史講談」というのも評価としてはあんまりな気がする。

司馬さんの作品を読むたびに老作家の言葉を思い出し、どういう意味なんだろうと考えた。

最初はさっぱりわけがわからなかったけど、繰り返し考えているうちになんとなくわかってきた。

司馬さんの「小説」はどれも明るい。太陽が燦々とふりそそいでいる感じがする。それは司馬さんが人間のいい面を見ようとしているからだ。本人のやさしい性格もあるだろうし、なにより、司馬さんの「小説」からは日本人のいいところを見つけたという意気込みが感じられる。

司馬さんは、学徒出陣で兵隊にとられた。戦争のなかで、軍隊のなかで、人間の嫌な面を見すぎてしまったのだろう。そして、なぜ日本人があんな無謀な戦争を始めてしまったのか、とことん考えさせられた。そのあたりは晩年のエッセイに書かれている。

日本人のマイナス面を思い知った司馬さんは、逆に日本人のプラス面を探したかったに違いない。あほな戦争をした日本人だけいいところだっていっぱいあるんだと「小説」のなかで描きたかったに違いない。

そんな司馬さんの考えが高度経済成長で発展し続ける日本人の心にフィットした。日本人は自分のことをほめてくれる人がほしかった。戦争に負けたけど、ほんとうはすごいんだと認めてほしかったのだ。司馬さんの「小説」を読んだ日本人はプライドをくすぐられ、誇りを取り戻した気分になれただろう。昇り龍のような時代の雰囲気司馬さんを国民的作家にした。

だけど、人間のプラス面だけでは「小説」は成り立たない。それでは「寓話」になってしまう。人間には、必ず光と影の部分がある。いい面もあれば、悪い面もある。「文学」ではその両面をきちんと描かなくてはならないのだけど、司馬さんの「小説」では負の側面が切り捨てられてしまう。

たとえば、『新史 太閤記』では、晩年の豊臣秀吉が描かれていない。天下を統一した後、秀吉はぼけてしまったとしか思えない行動をとり続ける。一例を挙げれば、大名の妻を呼んで床の相手をさせるだなんて、天下人としてはあるまじき行為だ。そんなことをすれば、恨まれるに決まっている。道義的な問題は置くとして、政治的に間違っている。妻を寝取られた大名はいつか復讐してやろうと胸に誓うだろう。無用な怨恨を自ら招き寄せたのでは、天下を統治することなどできない。だけど、司馬さんの太閤記では、秀吉が認知症にかかる前に小説が終わってしまう。影の部分が描かれていない。近代小説の作家ではないけど、もしシェイクスピアが『太閤記』を書いたとしたら、老いの悲しみといった負の側面もしっかり描いて、人間性の本質に迫る不朽の名作に仕立て上げたことだろう。

また、司馬さんは「ノモンハンの戦い」（一九三九年の日ソ軍事衝突。近代化が遅れ兵站を軽視した日本陸軍がソ連陸軍に敗北した）を「小説」にしようとして資料を収集したけど、結局書かなかった。理由は、あんなばかなことを書いたのでは精神衛生上悪いということだった。

「文学」であれば、自分の精神が病んでしまおうとも、人間がなぜ愚かな行為をするのか描かなくてはいけない。人間の心には、天使

の心と悪魔の心の両方が宿っている。魂の深遠をのぞく前に引き返したのでは「文学」にはならない。

おそらく、老作家はそのことを指して、「つまらん」と言ったのだろう。大岡昇平さんや野間宏さんといった戦後派の作家たちは、自らの戦争体験をもとに人間の本性をえぐりとった作品を書いている。その意味では、いいか悪いかは別にして、司馬さんの「小説」は、「近代文学」でも「近代小説」でもない。司馬史観などとてもはやされているけど、司馬さん本人が、「自分が書いたものはフィクション」と断っているとおり、史観というほど大袈裟なものではない。だから、老作家の言った「歴史講談」という批評は的を得ていると思う。もちろん、決してくだらないものではないけど。

八十年代の終わり頃、司馬さんは「自分の義務は果たした」と言って「小説」を書くのをやめた。当時、日本はバブル経済に沸きかえり、「ジャパン・アズ・ナンバーワン」などとてもはやされていた。日本が世界に冠たる経済大国になったので、戦争で殺されてしまった人たちのぶんも十分がんばったと自分で納得がいったようだ。死んでしまった友人たちのぶんも生きて日本をいい国にしなければいけないという想いは、その世代の人たちにしかわからないものだ。僕の祖父もそんなことを言っていた覚えがある。

余談になるけど、最後の「小説」は、中国が明朝から清朝へ変わる激動の時代を描いた『韃靼疾風録』だった。僕の個人的な思いこみかもしれないけど、宮崎駿さんの漫画版『風の谷のナウシカ』のある場面に似たシーンが出てくる。もちろん、もし同じだとしたら、制作年代からいって宮崎駿さんが『韃靼疾風録』にインスピレーションを受けて描いたものだ。宮崎駿さんは司馬さんに心酔しているから、ありえないことではないと思っている。

老作家の批評は、いささか厳しすぎるだろう。

「文学」の側から見れば、物足りないかもしれないけど、やはり稀有な作家だと思う。

司馬さんの「小説」は、たしかに「小説」ではないかもしれない

けど、とびきりすぐれた「歴史講談」だ。

講談なのだから、講談として読めばいい。今でもたまたに司馬さんの作品を読み返すことがあるけど、あれだけ資料を調べて書くなるとすごいなと素直に思う。もちろん、司馬さんの作品にも欠点はいろいろある。だけど、完璧な作家などいないのだから粗探しをしてもつまらない。司馬さん独特の一筆書きのリズムに乗って、一気に読むのがいちばん楽しい味わい方だ。司馬さんほど日本人の長所を探し続け、日本人を励まし続けた人はいないだろう。今でも僕の好きな作家だ。

ニューミュージック演歌の流れるマクドナルド in 広東省広州

会社からの帰り、広東省広州の街中にあるマクドナルドでフィレオフィッシュセットを食べていたら、聞き覚えのあるイントロが流れてきた。

なんと昔の人気ドラマ『はぐれ刑事純情派』の主題歌だった『ガキの頃のように』（堀内孝雄さん）ではないか。ニューミュージック演歌といった感じのしっとりした曲調で、男の切なさを歌いあげた名曲だ。じっくり聴いていると泣けてくる。

いい歌だとは思うけど、しかし、マクドナルドで流す歌なんだろうか？ ふつう、マクドで演歌は流さないと思うんだけどなあ。ちなみに、ニューミュージック演歌が流れるからといって店の内装は日本のそれとほぼ同じだ。居酒屋のようなマクドナルドがあったらこわいけど。

『ガキの頃のように』の次になにが流れるのだろうかと思って待っていたら、『ドラえもん』の主題歌の中国語版だった。

ニューミュージック演歌の次はアニメの主題歌。

この落差に僕はまたびっくりしてしまった。

ドラえもんの主題歌は、「アンアンアン♪」という部分以外は全部中国語だ。ちなみに、タケコプターの中国語は「竹直昇機」。そのまんまですね。雲南省昆明で留学していた頃、昆明弁バージョンの『ドラえもん（機械猫）』のDVDを借りて観たことがあるけど、さっぱり聞き取れなかった。ドラえもんの名前は、「小叮当」シャオ・ディン・ダンに変ディン・ダン更されていたような気がする。叮当とは鈴がちりんちりんと呼ぶことを表現する擬音語だ。つまり、「ちりんちりんちゃん」というわけ。小学校へ上がる前の子供は北京標準語を話せないので各地でその土地の方言に吹き替えをした『ドラえもん』のDVDを売っている。

そのマクドでは「ドラえもん企画」みたいなことをやっていて、

店の中にドラえもののポスターが張ってあった。セツトに何元か足すとドラえものの小さな人形が手に入る。時々、パッチ物のドラえもんで、微妙におかしいものや、なんだか怖い表情をしたドラえもんもどきを見かけるけど、そのドラえもんはちゃんとしていた。

一度、なにを思ったのか、店員の若い女の子がそのドラえもん人形を僕に売りつけようとしたことがあった。

「要らないよ。そういうのは子供とか、子供連れとかに勧めなよ（不要了。那？的？西，？？小朋友或者？小孩子的父母推荐？）」

と、僕がその子に言ったら、

「プレゼント用でもいいかなって思って（我想送人也可以）」

と、エヘへと笑ってごまかす。誰にあげるねん。子供のいる勤め人がマクドで夕飯を食べたりしないだろう？

ドラえものの主題歌の後はなんだろうと思ったら、また『ガキの頃のように』が流れた。どうやらこの二曲が繰り返し流れているようだ。かえすがえすも、すごい取り合わせだ。どうせ日本の歌を流すのなら、浜崎あゆみさんとか中島美嘉さんとか、若い中国人の間でも人気のある歌手の歌を流せばいいと思うんだけどなあ。個人的には『ガキの頃のように』を歌っている堀内孝雄さんのボーカルが好きだからいいんだけど。アリスの歌が好きでよく聴いていた。今でも時々、こっそりギターの弾き語りをする。

中国には足かけ六年近くいるけど、マクドナルドでニューミュージック演歌を流したりする中国人のセンスがいまだに理解できない。だから面白いんだけどね。やっぱり中国はワンダーランドだ。

新しい夏 ——NPTについて——

今年もヒロシマの日がやってきた。

人類初の原爆投下から六十五年。この間、様々な人々が核兵器廃絶を訴えてきたものの、今もって核兵器はなくならない。ナガサキ以降、実戦で使われていないのがせめてもの慰めだろう。

ご存知の人も多いだろうけど、核拡散防止条約（NPT）という国際条約がある。国連の安全保障理事会の常任理事国であるアメリカ、イギリス、フランス、ロシア、中国以外の核兵器保有を禁止した条約だ。もちろん、核兵器を持っているのはこの五カ国だけではない。インド、パキスタンなどが核兵器を保有し、イスラエルなども保有している可能性が濃厚だ。

二〇〇六年、北朝鮮が核実験を行なった際、日本は大騒ぎになった。近くの国が核兵器を持つとなれば、神経をとがらせるのはごく当たり前の話だ。相手に恐怖心を抱かさせるのが、核保有の第一の目的だとすれば、北朝鮮はそれを十分に達成したことになる。

高校の「現代社会」の授業でこの条約のことを習った時、なんていい条約なのだろうと思った。世界のあちこちらの国が核兵器を持つようになれば、困った事態になる。核保有国が多くなれば、当然、核戦争の勃発の可能性もそれだけ高くなる。それを防ぐのはいいことだとナイーブに考えてしまった。

しかし、この条約は本当に核戦争を防ぐための有効な手段なのだろうか？ よくよく考えてみれば、NPTはおかしな条約ではないだろうか。

まず第一に、NPTは典型的な不平等条約だ。

世界を一棟のマンションにたとえるとこうなる。

このマンションには大小二百ほどの部屋があって、それぞれの家庭がそれぞれの部屋で生活を営んでいる。

基本的に、このマンションではピストルの所持は禁止されている

が、アメリカさん家やロシアさん家などのごく一握りの住人だけがピストルの所持を許可されている。というよりもむしろ、彼らが勝手に自分たちだけがピストルを持つことができることにしてしまい、ほかの世帯になかば強制的にそれを認めさせてしまった。ほかの家は怖いなと思うながらも、みんながみんなピストルを所持した時のリスクを考え（あちらこちらで撃ちあいが始まるのは目に見えている）、一部の世帯がすでに手に入れた「ピストル所持」という既得権を取り上げられないこともあわせて考え（既得権を取り上げるなどといえれば撃たれるに決まっている）、彼らだけにピストルを持たせるようにした。

だけど、冷静に考えればおかしいことだ。これでは、ピストルを所持した家はまるでやくざではないか。ピストルを持っているというだけで、ほかの家はびびる。なにかあっても、注意もできなければ、逆らうことなどできない。

もちろん、全員が全員、大人しく従うはずもない。ピストルで撃たれるのはかなわないから、自分もピストルを持って抑止力を手に入れようとする人も現れる。それが、インド、パキスタン、イスラエル、北朝鮮などだ。強いて言えば、彼らに非があるわけではない。アメリカ、ロシア、中国がピストルを持っているのなら、ほかの家にもピストル所持の権利が認められてしかるべきだ。アメリカさんが家がピストルを持ってよくて、なぜインドさん家がいけないのかと訊かれたら、答えようがない。どちらの家も持っていないはずだ。

結局、徐々にだけピストルは拡散してしまうことになる。マンシオンから暴力が消えることはない。そんな暴力など、誰も望んでいないのに。

核兵器はその性質からして、どこか一つの国が持てば、ほかの国も持ちたがるものだ。いちばん人を突き動かすのは恐怖だ。核兵器を打ち込まれたくないと思えば、自ら核装備して、核兵器を使うのならこちらも報復の用意があると相手に知らせるしかない。ほかの国も当然、核を保有する。だから、どこか一つの国が核兵器を持っ

ている限り、核兵器は拡散し続け、核戦争の危険性もなくなるらない。ここで誤解のないように断っておきたいけど、僕は核兵器を持つようにすすめているわけではなく、その反対だ。核兵器なんてなくなっただけだ。だから、NP Tの欠陥と欺瞞を指摘しておきたいだけだ。

核を持ちませんと条約に署名する国々も、彼らなりの打算がある。日本のように親分の核の傘に入れば、とりあえず安全だ。寄らば大樹の陰。自国で核兵器を開発する費用やそれをメンテナンスする手間も省ける。自国が核兵器を保有することで発生する新たなリスクも回避できる。親分に逆らうわけにはいなくなるけど、けっこう安上がりだ。これが日本人の集合無意識といったところではないだろうか。

ただし、状況が変われば判断もおのずと変わってくるに違いない。現在の核非保有国が「この条約は自分たちにとって損だ」ととらえれば、いつでも条約から脱退して核保有を実行する可能性がある。日本もその例外ではないだろう。

NP Tはないよりましかもしれないけど、「とりあえずそうしておいたほうがいい」というだけの条約だけであって、実に危うい損得勘定のうえに成立しているものだ。根本的に核拡散を防ぐことはできない。

第二に、核拡散防止条約は、裏を返せば一部の核保有国の特権を認める条約だ。ほかの国に核兵器の保有を認めないというのは、すでに核を持った国のご都合主義以外のなものでもない。

先に、マンシヨンのたとえで、ピストルを持っている家はやくざそのものだと書いたけど、要するに、核兵器をもっている国が世界を仕切ることになる。

核保有国は、その力を背景にして、世界を自分たちのいいようにしようとする。アメリカがいい例だ。もしイラクやアフガニスタンが核を保有してアメリカへ照準を合わせていたら、アメリカは攻めこんだだろうか。たぶん、そんなことはしなかっただろう。戦争を

仕掛けても自国の本土まで被害は及ばないと相手をみくびったうえで戦争を始めているのだから。

核保有国が核を持たない国を踏みにつけていい道理などどこにもない。戦争でいちばん苦しむのはごく真面目に、ごく当たり前に暮らしている人たちだ。そんな人々の生活を踏みにじる権利など、誰にもない。

これまで見てきたように、NPTは根本的な欠陥を抱えている。

日本人があまりこのことを考えないのは、アメリカの核の傘に守られているので、そのほうが都合がいいと思っているからだだろう。だから、無意識のうちにNPTの欠陥から目をそらしてしまうのではないだろうか。

だけど、ほんとうにそれは都合のいいことなのだろうか？ 核兵器を持った親分に逆らえずに唯々諾々《いいだくだく》と従うしかないのは、自立していかないだけのことではないだろうか。繰り返しになるけど、もちろん、日本が核兵器を持つべきだということを言いたいのはではないので念のため。

核があるのがこの世の現実だし、そんな世界で生きていくしかない。それは事実だ。世界はさまざまな欠陥と欺瞞と妥協のうえに成り立っているものだから、核拡散防止条約のような、一見よさそうに見えて、実はとんでもない条約が存在するのも、当然といえば当然のことなのかもしれない。だけど、核兵器が存在する世界というもののは、変えようのない事実ではない。

現実だからといってあきらめていたのではなにも変わらない。みずから限界を設けるようなことをしては、なにもかわらない。これは個人の人生でも同じことがいえると思う。核兵器は、完全に廃絶しようとしないう限り、減りもしなければなくなりもしない。つまるところ、意志の問題だ。あるべきなのは、核拡散防止条約などではなく、核廃絶条約だ。要は、その目標に向かって進もうとするかどうかではないだろうか。

長い時間がかかるかもしれないけど、人類はいつかこの問題を克

服できると信じている。人間は、自らの愚かさを乗り越えてもつと
いろんなことができるはずだから。

ノーモア・ヒロシマ。

ノーモア・ナガサキ。

旅支度

指折り待ってた夏休みが始まる。

八日間と短いけど、勤めがあるからしょうがない。

去年ははじめて広州で働き出したので、どこかへ旅行しようと考えてる余裕がなかった。慣れない土地に住み、慣れない仕事についていたからかなりへばっていた。日本へ帰って骨休めすることしか考えていなかった。

今年は、この街に一年半ほど住んですこしばかり余裕が出てきたのだろう。せっかく広東省へきたのだから、華南地区でまだ行ったことのないところをまわってみようかと考えるようになった。

会社で夏休み前の仕事を片付けて、帰りに駅へ寄ってみた。旅行客がぞろぞろ歩いている。中国にお盆休みの習慣はないけど、「高温暇」という名の夏休みを取る人もけっこう多い。明日の汽車のチケットを取ろうとしたら、残念なことに硬座（普通の座席）はもう売り切れていた。硬臥（日本のB寝台に相当）はあるけど、バスの二倍以上の値段だ。六時間弱の真昼の列車で寝台車に乗るのももつたない。鉄道の旅はゆっくりしていていいものだけど、また今度にしよう。

バスの切符も、宿もまだ取っていないけど、なんとかなるんじゃないかと思う。バックパッカーをやっていた頃のようにふらりと旅を試してみたい。短い期間だけど、気ままにほったつき歩いてみたい。今まで見たことのない風景に出会ってみたい。

荷物はいつものように適当につめるつもりだ。だけど、パソコンはどうしよう？ あれば便利だけど、やはり重いしけっこう邪魔になる。必需品というわけでもない。さてさてどうしたものか。

自由（前書き）

アネクドート（小話）です。ご賞味ください。

自由

中国人…「お金さえあれば、今の世の中、なんでも自由にできるよ。どこにだって旅行へ行けるし、家も二軒買って愛人を囲うことだってできるんだからね」

日本人…「お金で買える自由って、ほんとうの自由なのかな？ 自由だって言うんだったら、民主化を求める小論文でも書いて新聞に投稿してみなよ」

中国人…「できるわけがないだろ。そんな小論文が掲載されるわけがないし、第一、警察に捕まるのが落ちだよ。今ままで築いてきたものが全部パーだ。そんなことをしようとも思わないけどね」

日本人…「政府の腐敗がひどくて困るって怒っていたよね。君は事情通なんだし、中国社会の暗黒面を風刺小説風にでもまとめて発表してみたらどうだろう。文章だってうまいんだから、きっと売れると思うよ」

中国人…「書いてもむださ。もしベストセラーになったとしても発禁処分になるだけだよ。おまけに、公安の監視もつくだろうね」

日本人…「案外、不自由なものなんだね。君の言う自由っていったいなんなのだろう？」

日本人…「日本はなんでも自由だよ。なにをするのも自由だし、なんでも話していいんだよ」

宇宙人…「その場の空気を乱すようなことでも言えるかい？ よくないことはよくないって」

日本人…「そんなこと、言えるわけじゃないじゃないか」

宇宙人…「どうして？」

日本人…「どうしてって、だめなものはだめなんだよ」

宇宙人…「仏滅の日に結婚式を挙げたり、友引の日に葬式をしてもいいのかな？」

日本人..「気にするかどうかは本人の自由だけど、あんまりそんなことをしないほうが無難だよね」

宇宙人..「どうして？」

日本人..「君はうるさいな。なんだか気持ち悪いだろ。結婚式はともかく、友引の日に葬式なんかしたら、怒られちゃうよ」

宇宙人..「迷信にとらわれているんだね」

日本人..「迷信といえばそうだけどね。僕が気にしなくても、周りで気にする人がいると厄介なことになるんだよ。世間の目ってものがあるだろう？」

宇宙人..「なるほど、世間の目ね」

日本人..「あっちへもこっちへも、いろいろと気を配らなくっちゃいけないってことだよ」

宇宙人..「案外、不自由なものなんだね。君の言う自由はいつたいなんなのだろう？」

さて、みなさん。

自由とはなんでしょうか？

ムーミンママの智慧(前書き)

童話『楽しいムーミン一家』第二章のネタバレを含みます。ご注意ください。

ムーミンママの智慧

何十年かぶりで童話『楽しいムーミン一家』を読み返している。幼稚園の年少組だった頃、毎朝、アニメの『一休さん』か『ムーミン』を観てから送迎バスに乗っていた。あの頃は、毎日アニメを観ていたような気がする。ちなみに、アニメ版の新しいバージョンがあるそうだけど、僕が見ていたのは七十年代半ばに再放送していたものだ。

『楽しいムーミン一家』を読んでいると、ムーミン役を担当していた岸田今日子さんの声が自然と脳裡に響くから不思議だ。ムーミンパパの声も、ノンノン（原作ではスノークのお嬢さん）の声もしっかり覚えていいる。アニメ版で描かれていたムーミン谷の景色やムーミンの家が目の前に甦る。とても素敵風景だった。今度生まれ変わる時は、あんなところに生まれ落ちたい。

第二章でこんな話がある。

魔法の帽子のなかへ入ったムーミンがとても醜い姿に変わってしまい、ノンノンもスナフキンも、誰も彼がムーミンだとわからない。ムーミンは「僕だよ。わかってよ」と言うのだけど、「嘘つき」と邪険にあしらわれてしまう。途方に暮れて怯えきったムーミンは母親に救いを求め、あなたなら自分の息子がわかるはずだと訴える。ムーミンママはもとのムーミンとは似ても似つかない姿になりはてたムーミンの目をじっと覗きこみ、

「そうね、おまえはたしかにムーミントロールだわ」

と自分の息子を認めた瞬間、ムーミンにかかっていた魔法がとけて元の姿へ戻った。

童話とはいえ、なんて智慧のあるお母さんだろうと感心してしまった。

これはとても示唆に富んだ話だと思う。

子供がほんとうに困った時、母性の助けなしでは、どうにも切り

抜けられなくなってしまうことがある。自分の姿をきちんとわかってくれる存在が必要だ。母親に見つめてもらい、認めてもらうことで、子供はほんらいの自分を取り戻す。「おまえはわたしのこどもだ」と言ってもらえるだけでいい。

逆に言えば、母性が試される場面なのだろう。

ひと口に子供を認めるといっても、簡単なようではなかなかできないことかもしれない。「おまえはわたしのこどもだ」という言葉に、自分の子供を思い通りにしようとする打算や欲得があってはいけないから。それでは、子供を醜い姿に変えてしまう魔法と同じになってしまうから。

たぶん、付け焼刃ではだめで、ふだんから子供の姿を見つめていなければ、いざという時に誰が自分の子供なのかを見分けることもできないければ、承認を与えることもできないだろう。もつともムーミンママはそのために特別な訓練を積んだわけではなく、ふだんの生活のなかで自然に母性を鍛え、母性の智慧を養ったのだと思う。それは、ムーミン谷の素朴な暮らしだからこそできることなのかもしれないけど。

子供の頃はただ面白がって読んでいた『楽しいムーミン一家』だけど、ムーミンママは素敵なお母さんだとあらためて見直した。こんな素晴らしいキャラクターが登場するからこそ、ムーミンシリーズは世界中で愛されているのだろう。そして、子供が求めているのは、強くてあたたかい母性なのだとあらためて感じさせられた。それさえあれば、たとえどんなことがあっても子供は困難を乗り越えられるのだと思う。

謎の半ケツ娘

タイのある町でゲストハウスに泊まった時のことだった。夜、テラスで日本人のパッカーたちとお喋りしていたら、

「半ケツっすよ。半ケツっ！」

と、ドミトリ（相部屋）の同室の男の子が興奮して駆けこんできた。

「どうしたの？」

僕はわけがわからず聞き返した。

「白人の女の子が半ケツを出して寝てるんすよ！」

男の子は今にも鼻血を出しそうだ。

そんなことってほんとうにあるのだろうかと思いながらドミトリへ引き返したら、素っ裸にシーツだけまとった二十歳くらいの白人の女の子が、うつぶせになりながら半ケツを出していた。彼女はすやすや眠っている。どうやら、寝返りを打ってお尻が出てしまっただけらしい。

そのドミトリールームには、住み込みで働いているタイ人の従業員の子が二人、毎晩床にマットレスを敷いて寝ていた。彼らはマットレスに腹ばいになり、かっと目を見開いて彼女の白いお尻を見つめている。「食い入るような目つき」という表現はこのような顔をいうのだろう。今にも噛みつきそうだ。そんなにお尻を見たいのかと思うと、歯を食いしばっている彼らが痛ましいような、ほほえましいようなんだか妙な気持ちになってしまった。やがて、女の子はまた寝返りを打ち、きれいなお尻はシーツに隠れた。それでも、タイ人の男の子たちはまだじっと見つめ続けている。彼らは自分の気持ちに正直だった。

ところで、中国の路上を歩いていると半ケツを出している娘をよく見かける。たいていは小さな食堂で働いているウェイトレスだ。店の前の路上にたらいを出してしゃがみこみながら野菜や皿を洗っ

ているのだけど、ジーンズがずりさがりお尻が半分見えている。

はじめて見た時はさすがにびっくりしてしまった。

半ケツ娘は自分がお尻を出していることにも気づかず、せっせと食器を洗っている。ジーンズからお尻がはみ出ていることなどまるで気にしていない。ドミトリーで見かけた女の子とはわけが違う。白昼堂々、天下の公道でお尻をさらしているのだ。

半ケツ娘は彼女一人だけではなかった。別の場所でも半ケツを出しながら洗い物にいそんでいる女の子をちょいちょい見かける。だけど、お尻を出しているからといって、べつにいやらしくは見えな。道行く人は、誰もじっと彼女たちを見たりしない。半ケツ娘の姿は路上の風景に溶けこんでいる。

中国の山奥を旅していた時、ある女の子と仲良くなった。彼女もやはり半ケツを出してせっせと洗濯している。どうしようか迷ったけど、やっぱり言ってあげたほうがいいだろうと思った。こういうのは、注意するほうが気恥ずかしいものだけだ。

僕はなるべく彼女のお尻を見ないようにしながら自分のお尻を指して「出ているよ」と合図した。彼女は「あらっ」と恥ずかしそうな顔をしてジーンズをあげる。ようやくお尻が隠れてくれた。お尻を見られれば恥ずかしいという意識はやはり持っているようだ。

ところが翌日、彼女はまた半ケツを出して洗い物をしていた。

しょうがないのもう一度さりげなく注意したら、彼女は「なに見てんのよ」と表情をくもらせる。別に見たくて見たわけじゃない。そんなものを見せられては目のやり場に困る。知らない人なら無視できるけど、知り合いだとそうもいかない。

困ったなと思いつつも、それからは半ケツを見てもなにも言わないことにした。お尻を出しても誰もとがめないのがこちらの習慣なら、それにしたがうよりほかにない。彼女とはそれでけんかになつたりしなかったからよかったものの、下手に注意して無用な摩擦を生むのはさききたいところだ。

今では誰かが半ケツを出していてもそれほど気にならなくなった。

でもやっぱり、自分のお尻くらいきちんとしておいてほしいと
思ってしまう。

おおらかといえはおおらかなんだけどなあ。

ひょっとして、僕がこだわりすぎているのだろうか？

星新一さんの長編『人民は弱し 官吏は強し』について

星新一さんのショートショートにはまったのは中学二年生の時だった。

国語の先生が星さんの作品をプリントして配ってくれたのを読んだのだけど、びっくりしてしまった。

とても読みやすくて面白い。アイデアもひねりがきいていて素晴らしい。星さんのショートショート集をむさぼるようにして次から次へと読破した。そのうち自分も書いてみたくなってノートに鉛筆を走らせてみたのだけど、結局ろくなものではできなかった。なんど試してもどうにもうまくいかない。「読みやすくて、面白くて、グッドアイデアのある」作品を書くのは、とてもむずかしいことなのだと思い知った。一つだけならうんとかんばればなんとかなるかもしれないけど、三拍子揃った作品を書くのは生まれもつてのエンターテイナーでないとむりだ。星さんは天才だ。

星さんはアメリカの雑誌に載っている一コマ漫画を集めるのが趣味だそうで、自分でコレクションした一コマ漫画集の本も出していた。これも面白くて何度も読み返した覚えがある。一コマ漫画はひねりのきいたアイデアをどうやって一枚にまとめるかが勝負だから、日夜アイデアを生み出すために苦心していた星さんはそれを読んで自分の肥やしにしていたのだろう。

星さんといえばショートショート、ショートショートといえば星さんというくらい、ショートショートの代名詞みたいな作家だけど、星さんは『人民は弱し 官吏は強し』という長編小説も書いている。日本を代表するショートショート作家の長編小説ってどんな作品なのだろう？ 興味津々になった僕はさっそく読んでみた。

その長編は、星新一さんのお父さんの星一さんのことを書いた伝記小説だった。アメリカへ渡って留学したり、事業を起こして星製薬という会社を作ったり、衆議院選挙に立候補して国会議員になっ

たりと、ほかにもいろいろあるけどとにかくエネルギーで八面六臂の活躍をみせた人物だったらしい。

明治、大正、昭和初期といった時代を駆け抜けた主人公星一も魅力的な人物だし、当時の世相や時代の流れを知るためのいい勉強にもある。ショートショートと同じようにとても読みやすくてわかりやすい。機会があればぜひ読んでみてほしい一冊だ。

この小説では、政治家、官僚機構、財界人と戦う主人公の姿も描かれている。

星さんのお父さんの活躍は目覚しかったけど、そのぶん、反発や嫉妬も買った。商売も大成功を収めたし、開明的な政治家だった後藤新平と組んでいたのでおさらだった。開明的な政治家というものは、特権にしがみついて甘い汁を吸おうとする人たちからみれば邪魔者以外のなにものでもない。星さんは、星製薬と星一さん自身をつぶそうと画策する内務省や検事局（現検察庁）にあの手この手で追いつめられてしまう。

印象に残ったシーンがある。

選挙前に検事局（現検察庁）が強制捜査した。

法律に違反するようなことはなにもしていないのだけど、検察がやってきたというだけで世間に悪評がさっと広まってしまう。新聞が検察に同調して、星さんがあたかも悪人であるかのように書き立てる。ほかにもいろいろと妨害工作に遭い、世間からすっかり敵視されて選挙に落選してしまった。

実は、商売敵や反対勢力の政治家たちが仕組んだ芝居だった。彼らは目障りな人物を蹴落とすために事件をでっちあげ、それをマスコミにリークしてセンセーショナルに報道させたのだった。

まだ中学生だった僕は検察は正義の味方だとばかり思いこんでいたから、検察がそんな悪いことをするのかと驚いた。政治家、官僚機構、財界人が結託すれば、ライバルを蹴落とすためにはなんでもするのだと背筋が寒くなった。時代は大正の終わり頃。世界恐慌、軍部の暴走といった非常事態が続いた暗い昭和初期へ突入する前触

れの時期だったのかもしれない。

今の日本にも検察に悪い奴だと何度も騒がれる政治家がいるけど、そのニュースを読むたびに『人民は弱し 官吏は強し』を思い出す。時代が変わっても、人間のすることはさほど変わらない。同じ手口を使っているのだろうな、と思ってしまう。

『人民は弱し 官吏は強し』は、当時の時代ばかりではなく、利権争いのためになら曲がったことでも平気でする人間のどうしようもない性^{さが}をえぐり取っている。星新一さんの作品のなかでは異色作だけど、優れた小説だ。星さんが決してアイデア勝負だけの作家ではないとよくわかった。

そのiPhoneはホンモノですか？

日本人の友人がiPhone 4を買ったのだけど、中国人は彼のiPhoneを見るたび、必ず好奇心に目を輝かせながら、

「あなたのiPhoneはホンモノ？ それともニセモノ？」

と異口同音に言う。べつに嫌らしい訊き方をしているわけでも、妙な勘繰りをしているわけでもない。道を尋ねるみたいにごく自然に訊いている。

彼が「ホンモノだよ」と答えると、これまた十人が十人とも、「わあー」

と歓声をあげる。子供が新しい玩具を見て喜んでいるようだ。単純明快な人たちだと思う。

それにしても、iPhoneを見てまっさきにホンモノかどうかを確かめるだなんて、日本ではあり得ないやりとりだろう。それほど中国ではニセモノが生活の隅々にまで浸透してしまっている。

もちろん、iPhoneのニセモノもかなり出回っているようで、けっこう売れているらしい。ホンモノは高く買えないので、せめてニセモノで満足しようということだろうか。中国人はニセモノに対する抵抗感が薄く、むしろ、ニセモノをありがたがっているようにさえ見受けられる。ニセモノのおかげで、安くて格好いい商品が手に入ると喜んでいるとしか思えないこともしばしばだ。品質や機能は日本人ほど重視しないから、使えればそれでOKというノリだ。そういえば、体育西路という広州の繁華街にある地下鉄駅の地下道でニセモノのMP4なんかワゴンに入れて売られていた。「Sony」と書いたMP3があつたので買ってみたのだけど、やはりニセモノだった。初めからニセモノだとわかっていたし、音質はともかく使えるからいいんだけど。値段も安かった。

もちろん、ホンモノだと思って買ったのに騙されることもある。先日、別の日本人の知人がノキアの携帯電話を買ったのだけど、ど

うもおかしい。そこで携帯をよく見てみたら、「NOKIA」の「O」の字に切れ目が入っていた。完全な偽ブランドだ。ぱっと見ただけではわからないから、騙されたのもしかたないだろう。

なんでも、カローラのニセモノまであるそうだ。とある中国の自動車メーカーがトヨタ・カローラそっくりの車を生産しているのだけど、ディーラーに頼めば、もとのエンブレムを引き剥がしてカローラのエンブレムをとりつけてくれるらしい。とはいえ、いくら外観がそっくりといっても乗り心地はカローラにかなわないから、やっぱりホンモノが欲しいと言ってカローラに買い換える人もわりといるのだとか。ここまでくるとほんとうかどうか、わからない。笑い話だと思いたくなるけど、いかにもありそうな話だ。

中国の生活はニセモノ抜きでは考えられない。表面上は近代化が進んでいるように見えて、その実、近代経済の仕組みとはまた違った仕組みで動いている国だ。

中国人に知的所有権を理解してもらうのは、たぶん永遠にむりなんだろうなあ。

一人称で書くか、三人称で書くか

小説の構想を練る時、いつも一人称で書くか、三人称にするかで迷ってしまう。どちらも一長一短なので、この小説はどちらがふさわしいのだろうかと考えこむ。

一人称は主人公の気持ちになってそのまま書けばいいから、とつきやすい。それに、主人公の想いをたっぷり描くことができる。感情の隅々まであますところなく表現できる。

だけど、難点もある。

一人称の視点は主人公の視点なので、主人公の姿や表情を描写することができない。主人公の様子を描けないから、盛り上げるべき場面でどう盛り上げるか苦心する。

もしそれを描こうと思えば、鏡やガラス窓に映った主人公の姿を主人公に独白させるか、相手に言わせるしかない。

「ひどい顔をしてるね」彼は言った。

「えっ、そうかな？」

「目の下に隈がこびりついてるよ」

「ゆうべ悪い夢を見てさ。よく眠れなかったんだ」

これでだいたいの様子は読み手へ伝えられる。「彼」のセリフを気の利いたものにすれば、表現も豊かになる。だけど、あんまりやりすぎるとひつこくなってしまう。

その点、三人称は描写の幅がきく。主人公の姿もばっちり描くことができるから、盛り上げたい場面で主人公の表情や動作を思う存分描いて盛り上げやすい。

それに一人称では解説を入れることはできないけど、三人称ならできる。歴史小説で歴史的背景やその時代の習慣などを書き入れたい時は便利だ。

ただ、こちらにも弱点がある。

いろいろ応用がきくという意味では三人称のほうが優れているのだけど、主人公の気持ちに密着し続けることはむずかしい。三人称でも一人称的な心理描写を加えることはできるけど、ある程度のところでは切り上げないといけないから、世界のすべてを主人公の色に染めあげることとはできない。

一人称は使い勝手のよい小刀。

三人称は切った張ったと大立ち回りできる長剣。

といったところだろうか。

もちろん、一人称も三人称もいろんな使い方がある。

これはあくまでも僕の個人的な見方だけど。

「なろう」の作品評価はオール5

なろうに参加しはじめた頃、評価ポイントがあるのにはちよつと途惑ってしまった。

ご存知のように「文法・文章評価」と「ストーリー評価」の二項目があつて、それぞれ五点満点になっている。

なぜ文法の評価があるのかよくわからないけど、日本語の文章をきちんと書ける日本人は案外少ないから、そこを見てほしいということなのかもしれない。

初めのうちは作品を読んでも評価をつけなかった。他人の作品を評価するだなんて、おこがましい気がする。だけど、自分が書いた作品にポイントをつけてくれた方もいたので、それでは僕もつけてみようと思った。

面白いなと思った作品をいくつか選んで試しに点数をつけてみた。「1」や「2」をつけるくらいならつけないほうがいいからそれはやめにして、「3」が普通、「4」がよい、「5」がとてもよい、くらいの感じで考えた。だけど、途中ではたと困った。

ジャンルも長さもまちまちの作品を同じ基準では評価できない。エッセイにストーリーがいるのかといえ、かならずしもそうではない。短編小説も同じだ。もちろん、小説は「文章」と「ストーリー」だけで評価できるものでもない。キャラ、構成、アイデアなどいろいろな要素がある。この二つだけで評価するのは、片手落ちだ。それに、普通、よい、とてもよい、といっても、あくまでも自分の感覚にすぎないから、客観的な物差しがあるわけでもない。

これでは、自分のつけた評価を説明できない。

Aという作品がなぜ四点で、Bという作品が五点なのかと訊かれても、「なんとなく」という以外に答えようがないではないか。

説明できないということは、責任が持てないということなので、やっぱりやめておいたほうがいいのかとも考えた。無責任なことは

あまりしたくないから。僕は評論家でも審査員でもないので、他人の作品を評価する資格があるのかと訊かれたら、そんなものはない。きちんと評価できるだけの鑑識眼もない。五段階で評価してくださいといわれても、僕の手にはあまる。

だけど、ポイントがあったほうがアクセスが増えて、読んでもらえる機会が多くなるのは事実だ。自分が面白いと感じた作品をほかの人に推薦するにはやはりポイントをつけておいたほうがいい。

そこで苦し紛れかもしれないけど、評価をする時はすべて「5」をつけることにした。

ほんとうの意味での評価というのはできないけど、「この作品はおもしろいから読んでみてください」という意味での評価ポイントだ。それに、作品を書くのはやっぱり骨の折れることだから、「おつかれさまでした」という意味もこめて作者を激励したい。

ただ、なかには真剣に考えてポイントをつけている人もいるだろう。人それぞれの考えでやればいいことだから、僕の考えが絶対に正しいとは思っていない。なかには評価システムに消極的な人もいるから、そんな作者さんの作品にはなるべくポイントをつけないようにしている。向こうの方に気を遣わせてしまうことになっては悪いから。

僕自身の作品についていえば、ポイントはあってもなくてもどちらでもいい。もちろん、つけてもらえればうれしいけど、ポイントよりもむしろお気に入り登録が増えてくれたほうがもっとうれしい。投稿した作品のお気に入り件数が増えたとわくわくしてしまう。もともとお気に入り件数がすくないからなおさらだ。

というわけで、今では面白いと思った作品には全部「5」をつけることにしている。

日本人は行儀いよく言われるけれど

先日、今住んでいるおんぼろマンションの一階でエレベーターを待っていたら、ちょっと面白いことに出くわした。

急いでいたのだけど、あいにく、エレベーターは二〇階くらいの高さでとまったままなかなか下りてこない。もう一基のほうはさっき昇っていったばかりようで、階数の表示がぐんぐん上がっている。いささかじれながら待っていたら、ようやくエレベーターが下りてきてドアが開いた。

なかに乗っていた女の子の二人連れは、一階についたのかどうか途惑った様子で不思議そうにあたりを見まわす。

「一階なの？」

と僕に尋ねるので、そうだと答えた。エレベーターのなかでお喋りに興じていて、あつという間についたように感じたのだろうか。二人は納得のいかない顔をしながらもゆっくり出てきた。僕は彼女らが外へ出るのを待ってなかへ入った。

同じマンションの中年夫婦もいっしょにエレベーターを待っていたのだけど、エレベーターに乗ったとたん、おばちゃんが、

「あんたはほんとに行儀がいいわね（？真的？礼貌？）」

と感心したようにため息をつく。

「なんのこと？（什？意思？）」

僕は聞き返した。

「さっき、なから人が出てくるまで待っていたでしょう（？才，？等他？出来，他？出来以后，？才上？梯）」

「そうだけど（是？）」

「よく一階についてドアが開いたらすぐに人が入ってくるんだけど、あれは困るわ（？梯？到一楼？？的？候，人家？常？上？来，好？？？）」

おばちゃんは「アイヨー」とまたため息をつき、やれやれと首を

振る。

最近はずいぶんましになってきたけど、漢民族はあまりマナーを守らない。行列を作らずに窓口へわっと群がったり、行列があったとしても平気で割りこんだりする。人とすれ違っても、お互いに半歩道を譲るといふようなこともあまりしない。

その点、日本人は比較的マナーを守る。それだから、時々、日本人からしてみればなにげないことで「行儀がいいね」と中国人に言われたりするし、もっと大袈裟に「日本人は文明的だ」などと褒められることもある。中国人は行儀よくすることを「文明的な行為」としてとらえているようだ。

日本人は子供の頃から「行儀よくしなさい」と繰り返し躾けられる。学校でもそう教えられるし、世間でも無作法をとがめる風潮が強いので、自然と行儀には敏感になる。あるいは、過敏になるといつてもいいかもしれない。

中国人の親を見ていると、子供をあまり躾けない。それでいて、「うちの子は行儀が悪い。甘やかしすぎた」などと言って嘆いたりする。とりわけ、八十年代以降に生まれた一人っ子世代は「小皇帝」などと呼ばれ、家のなかで猫かわいがりされて育ったから、けっこうわがままな人も多い。もっとも、いつの時代でも若者は上の世代からなっていないと言われるものだ。古代バニロニアの楔形文字の碑文にも最近の若者はけしからんと書いてあるそうだけど、そんなに昔から若者の劣化が繰り返されているのなら、人類はとくに滅亡している。一人っ子世代には上の世代にはない長所があるし、バスや地下鉄のなかで老人に席を譲る彼らの姿をよく見かける。それを目撃した日本人はたいていびっくりしてしまう。留学していた頃、日本の大学の先生が同じ学校に通っていたのだけど、彼は五十代半ばで白髪が目立っていた。バスに乗るたびに教え子くらいの若者に席を譲られるものだから、気恥ずかしくなって髪を染めてしまった。無作法な大人だって結構多いから、「小皇帝」などという呼び方はあまりにも一方的な批判かもしれない。

話を元へ戻すと、「自分たちはあまり行儀よくない」、つまりがさつだという認識は、中国人の間でもわりあい共有されているようだ。日本では考えられないようなすさまじい動乱の時代を何度も繰り返した中国では、行儀よくすることよりもまず生き残ることが優先されたのだろう。行儀よくなどしてはサバイバルできない。彼らが自らを無作法だと嘆きつつも、改善しようする努力をほとんど見せないのは、そんな歴史的な背景があるのではないかと思っている。

ただし、行儀よくしたり、マナーを守めることは絶対的に正しいことではない。

日本人は過剰なほど行儀に気を遣う民族なのでそれを至高のものと思いいこみがちだけど、それは考えものだ。

たとえば、行列にきちんと並ぶということは、そこに秩序を生み出し、お互いに利益を得るということだ。行列がなければ混乱状態になる。そうになると、いつ自分の順番が回ってくるのかわからないし、腕力のない者は自分の番にありつけるかどうかさえわからない。窓口で切符を買うこともできなければ、満員電車に乗ることもできなくなる。行列を作ること、自分の順番が明確になり、並んでさえいえばいつか自分の番が回ってくるのが保証される。自分の順番にありつけるかどうかともわからない不安感を抱えているよりもよほど快適だ。

交通マナーにしても同じだろう。

信号を守らなければ自分の身が危ない。誰でも交通事故に巻き込まれるのは御免だし、車やバイクを運転していて人を轢いたりしたら大事だ。おおこし皆それをわかっていてから信号を守る。これも、秩序を生み出すことで利益を得たり自分を守ったりするためだ。

行儀やマナーはいつてみれば、たんなる処世術にすぎない。

僕がエレベーターで彼女たちが降りるまで待っていたのも、そうして「エレベーターを乗りやすくする」という自分の利益を引き出すためにほかならない。

中国人にしろ、日本人にしろ、表面上は行儀よく振舞っていても、物欲しそうないやらしい笑顔を浮かべている人はいくらでもいるし、自分の期待が裏切られたとすこしでも感じると掌を返したように横暴になる人もいくらでもいる。これは自分にとって利益になることを相手から引き出せなかったため、自分の利益や快適さを得るための振る舞いをやめただけのことだ。骨がほしくて尻尾を振って擦り寄ったのに、もらえなかったから不貞腐れたのと同じこと。

こう考えてみれば、中国人の無作法さというものは、行儀よくするという行為は自分の利益や快適さを得るための最適な選択ではないので、今まであまり重視してこなかったということになるのではないだろうか。

もちろん、行儀やマナーなど守らなくていいといっているわけではない。それを守ることは社会生活を営むうえで大切なことだけど、それよりももっと大切なことがある。

他人の無作法をとがめる人の心に、はたしてどれだけのやさしさがこもっているのだろうか？ 周囲が混乱してしまっただけは自分の利益が引き出せなくなるから困ると、自分の欲得を守るために相手をとがめるケースが多いのではないだろうか。もちろん、僕自身を含めて。

問われるべきなのは、行儀作法を守ることよりも、むしろ、愛ややさしさだと思う。肝心なのは、行儀のなかに人を思いやる気持ちが入っているかどうかだろう。処世術にすぎないモラルを最高のものだと考えては、つまらない人生を送ってしまうことになる。やさしさのこもった行儀作法は世界をあたたかいものにするけど、自分の利益を守るためだけの行儀作法はこの世界をぎすぎすしたものに変えてしまうから。とはいっても、愛とやさしさだけで生きていけないのも、また事実なのだけれど。

エレベーターを降りてから、こんなことをふと考えた。

追悼 三浦哲郎先生 〔『白夜を旅する人々』〕

僕の大好きな作家がまた一人、逝去された。

短編小説の名手と謳われた三浦哲郎さんだ。

享年七十九歳だから、大往生といえはそうだけど、やはり悲しい。数少ない純文学作家がまた一人減った。

芥川賞を受賞した『忍ぶ川』に代表されるように、どちらかといえば叙情的で古風な作品を得意とする作家だった。推敲を重ねに重ねただろうと思われる温かくて美しい文章を綴る書き手だ。短編の構成力もすばらしい。

はじめて読んだ作品は、自伝長編『白夜を旅する人々』だった。

三浦さんの一家は、生まれつき身体に色素のない「先天性色素欠乏症」と呼ばれる遺伝病を持った家系だった。彼は、男三人、女三人の六人兄弟の末っ子だったのだけど、いちばん上のお姉さんといちばん下のお姉さんが先天性色素欠乏症に罹り、気の毒なことに体が真っ白だった。この病気は女性だけが発症するらしい。男性はその遺伝子を持っていても、その病気にはならない。だけど、その男性が女の子を作った場合、その子は発症する可能性がある。

この遺伝病のために三浦さんの兄弟はみな苦しみ、次々と若くして命を失ってしまう。三浦さんはそんな兄弟の人生を思いやりに満ちた視線で丹念に描いた。ぼろぼろ涙を流しながら読んだ覚えがある。

重いテーマを扱った作品なのだけど、悲惨な運命を書いた悲しい小説というだけでもない。そこに作家としてのすぐれた力量を感じる。三浦さんの家族を襲った運命は過酷だったけど、なんともいえない温もりのある小説だった。描写も美しいし、なにより彼の故郷の南部弁の会話がとても温かくて切なくて、よかった。

こんな作品を書く小説家はもうあらわれないのだろうかと思う。宿命を背負い続けた三浦さんの旅は終わった。

新作を読めないのは残念だけど、どうかゆっくり休んでください。
おつかれさまでした。

追悼 三浦哲郎先生 〵『白夜を旅する人々』〵（後書き）

個人的には、『白夜を旅する人々』、『忍ぶ川』、『ユタとふしぎな仲間たち』、『みちづれ』（いずれも新潮文庫）がおすすめです。機会があれば、ぜひ読んでみてください。

お茶目な保険

ルイス・フロイスの『日本史』を読んでいたら、思わずほほえんでしまったシーンがあった。ちなみに、この本は戦国時代に日本へキリスト教の布教にやってきたイエズス会の宣教師が書いたものだ。洗礼を受けたある老人が数珠をくりながら「南無阿弥陀仏」と唱えていた。それを見た司祭が驚き、なぜそんなことをするのかと尋ねる。あなたはキリシタンではありませんか、と。老人の答えがまたふるっている。

「私は今まで大の罪人でございました。そして私は、キリシタンのコンタツ（筆者註・数珠）でもってお祈りし、私たちの主なるデウス様に、私の靈魂に御慈悲を垂れ給えとお願い申しております。しかし私はお説教において、主なるデウス様はお裁きの折、大変に厳正であると承りましたので、私が死にます時、自分の罪があまりに多いために、デウス様が私をその栄光の中へ導くに価しいと思し召されることがたぶんにあり得ようと存じます。それゆえ、私はそういう場合に備えて、この数珠で阿弥陀様にもお祈りし、その時には極楽と言われる浄土へお導き下さるようにと願っているのです」

老人の答えを聞き、居合わせた人たちは楽しくなって笑ってしまった。司祭は洗礼を受けた時にあなたの罪はすべて赦されているのですよと言い、阿弥陀様には祈らないように説得した。

おそらく、この老人は自分の心と真摯に向き合い、どうすれば自分の魂が救済されるのかを真剣に考えたのだろう。そして、その結論は自分の罪深さを自覚することにほかならなかった。これではとても救われないかもしれないと。

彼は敬虔なキリシタンになる前は、敬虔な仏教徒だったのだと思う。キリスト教も仏教もこの世は地獄だと説く点では一致する。この二つの宗教は「地獄の思想」でできているから、敬虔に信仰すればするほど己の罪深さを思い知ることになる。戦いの続く戦国時代

にあつては、なおさらそんな機会が多かったかもしれない。

それにしても、ゼウス様がもし駄目だった時のために備えて阿弥陀様も拜んでおくとは、なんともお茶目な保険だ。阿弥陀様はいわばキープ君扱いだけど、それでも救ってくださいと老人は阿弥陀様の懐の深さを信じていたのだろう。いかにも日本人らしい話だと思う。

お茶目な保険（後書き）

引用は、『完訳フロイス日本史』（松田毅一・川崎桃太訳、中公文庫）による。

とまったエスカレーターの正しい乗り方は？

広州の繁華街ではとまっているエスカレーターをよく見かける。どういいうわけか知らないけど、しょっちゅう故障するらしい。日本ならさっさと修理するのだろうけど、ここは中国なのでそのまま何日間もほったらかしの場合もよくある。しかたないので、みんなとまったエスカレーターを階段代わりに使っている。

僕はとまったエスカレーターに乗る時、なぜかいつも途惑ってしまふ。条件反射というやつだろう。エスカレーターを見た瞬間、こちらの脳みそはエスカレーターのスピードに合わせるように足へ指令を出し、自然と歩幅が大きくなって足が速くなる。これではいけないと思うのだけど、足が勝手に動いてしまう。

エスカレーターは動かないから、ステップへ乗り移ったとたん、一瞬、体がふわっと浮いたような感じになって、足がもつれるとまではないかなくてもぎくしゃくする。それでようやく、僕の脳みそはこれではいけないと気づき、さっきの指令を修正するようだ。僕は呪縛が解けたようになって、やっと普通に歩ける。はたから見ればおかしい格好をしているのだろうなと思うとすこし気恥ずかしい。

この間、僕とおんなじような人を見かけた。彼はすこし前のめりになりながら歩幅を広げてとまったエスカレーターへ乗ったのだけど、その瞬間、足がよろめいた。彼には申し訳ないのだけど、あんな不恰好なことをするのは僕だけでないと知ってほっとした。ほんとうに安心した。仲間がいるというのは心強い。

それにしても、とまったエスカレーターを見た瞬間、僕の意識は「とまっているぞ」と気づいているのだから、脳みそもそれなりの指示を足へ出してスムーズに歩けるようにしてくれてもよいではないか。でも、なぜかままならない。とまったエスカレーターをしっかり見ているのにもかかわらず足の運びをそれに合わせられないとは、僕の体はいたいという仕組みになっているのだろうか？ 不

思議だ。

たんに僕の運動神経が鈍いだけなのかもしれないけど、幼い頃からすりこまれた条件反射は変えようがないのかなあ。我ながら、困ったものだ。

お金が悪か？ 人が悪か？

「お金は悪じゃない！」

先日、ある人がそう声高に叫ぶのを聞いた。

彼は金儲けするのは悪いことではないと言いたかったらしい。

たしかに、お金自体は悪ではない。お金はただの道具だ。紙にインクで一万円などと刷ったり、金属片に十円などと刻み、「とりあえずそれを〇〇円と仮定して使いましょう」ということに過ぎない。いくら高級な紙や高度な印刷技術を使っても一万円札そのものに一万円の価値があるわけではない。一万円札はただの紙切れにすぎない。

そんな道具を善か悪かなどと決め付けること自体が滑稽というものだろう。

お金に善悪はない。

善悪は人にある。人の心にある。

悪い稼ぎ方をすれば、その人が悪いことをしたということだ。

いい稼ぎ方をすれば、その人がいいことをしたということだ。

使い方もまたしかり。

たとえば、包丁で人を刺してしまったとしても、包丁自体が悪いわけではないのと同じだ。悪いのは他人を傷つけた人間だ。

いちばん怖いのは、「お金は悪ではない」と言いながら、悪い金儲けをしてしまうことではないだろうか。この論理でいくと、お金は悪いものではないから、それを稼いでいる私も悪くない、つまり自分に責任はないということになる。だけど、果たしてほんとうにそうだろうか。そんな言い逃れのような発言は、自分の心と真摯に向かい合った結果だろうか。

さっきお金に善悪はないと書いたばかりだけれど、ただ、お金には不思議な魔力がある。人の心を狂わせる魔性を秘めている。いちばん身近な凶器かもしれない。だから、心してかかりたい。思えば、

漱石の小説にはお金にまつわるどろどろした話がわりと出てくる。漱石は、お金を通じて人の心のダークサイドを描きたかったのかもしれない。

誤解のないように断っておきたいけど、金儲けを否定しているわけではない。今の世の中の仕組みでは、まさか切符売場やスーパーやレストランで物々交換するわけにもいかないから、お金がないと生活できない。それに、なにをするにしても先立つ物が必要だ。僕だってすこしばかりの経済的な余裕はほしい。もっとも、そう思ってしまうことが僕自身の限界だし、もっと大きく言えば、お金を使った経済の仕組みしか思いつかないのが今の人類の限界なのだろうけど。

大切なことなので、繰り返し強調しておきたい。

お金に善悪はない。

善悪は人にある。お金を稼いだり使ったりする人の心にある。

自分の心を問わずに、お金やほかのものに責任を押しつけてしまうのはいけないことだ。

保守的な数字

会議に出ていた時、「保守的な数字」という言葉を耳にした。

どうということなのだろうと思って説明を聞いていると、どうやら「控え目な数字」ということらしい。その後、彼は「コンサヴァティブな数字」とも言っていたので、それでぴんときた。

ネットの辞書を検索してみると、con serv a t i v e には、

- 1、保守的な、保守主義の
- 2、〈評価などが〉控え目な、穏健な、用心深い
- 3、〈服装などが〉地味な

という意味がある。

はじめは「コンサヴァティブな数字」Ⅱ「控え目な数字」というつもりで使っていたのだけど、途中から別の訳語の「保守的な」と混同して「保守的な数字」と言うようになったのだろう。ひと口に保守といってもいろいろあるから、保守が控え目とは限らない。自己主張の激しい保守だっていくらでもある。「保守的な言葉」と言われても、なんのことだかぴんとこなかった。でも、言葉は生き物だから、そのうち「保守的な数字」という言い方が普及して市民権を得るかもしれない。

いいか悪いかは別にして、こんな風にして言葉の意味が変わっていくんだらうな。

キムタクみたいで優しくて自分のことだけを見てくれる人を紹介してくれと言わ

ずいぶん前のことだけど、ある中国人の女の子とおしゃべりしていたら、誰かいい人はいないかという話になった。彼氏がいなくてさびしいそう。知り合いの中国人の男の子を紹介してあげるよと言っていると彼女ははしゃぐ。好みを訊くと、キムタクがタイプなのだから。調子づいた彼女は、このほかにも、車を持っていることだとか、自分の欲しいものはなんでも買ってほしいだとか、なんだかんだといろいろ条件を出してくる。

「それはちよつとレベルが高すぎるよ。白馬の王子様だね。そんな男の子はなかなかいないからねえ。もっと現実的な条件を言つてよ」

と僕は言つた。

その女の子は二十歳過ぎのごく普通の女の子だ。夢見る年頃なのかもしれない。でも、キムタクみたいな男前をリクエストされても紹介のしようがないではないか。僕は条件を値切つたけど、やはり理想はゆずれないらしい。結局、イケメンで優しくて、自分のことだけを見てくれる人という線にまでしか下がらなかった。恋人募集中の時は、あれこれと理想を思い浮かべるものだからしかたないのかもしれない。

「ハードルが高いなあ。あいにく、知り合いでそういった男の子はいないねえ。ところで、その三つのうちでいちばんだいじなのはなに？」僕は訊いてみた。一つだけなら、条件にあてはまる人がいるだろう。

「イケメン！」

すかさず元気な答えが返ってくる。

「それじゃ、イケメンだけど、自分だけを見てくれるんじゃないかって、あっちこっちで浮気する人でもいいの？」

「そんなのいやだ」

「優しくなくて、俺の言うことはなんでも聞けっていう人でもいいの？ 亭主関白みたいな感じの男の子は？」

「そんなの困る。料理も家事もできて、わたしの身の回りの世話はみんなやってくれる人がいい」

「えっ？ 君はなんにもしないの？」

「だって、上海人は料理も家事もみんな男がやってくれるのよ」

「でも、ここは上海じゃないよ」

「そうだけど、だって、わたしは料理も家事もできないもの。家ではなんにもやらないし」

「勉強すればいいじゃない。家事くらい誰だってできるよ」

「そんなのむりよ」

「イケメンはもてるから、けっこう面倒なことになるかもよ。いろんな女の子が追いかけるからね」

「でも、やっぱり、キムタクみたいにスーパー格好いい男がいい。

私の希望は三つだけなんだから、ぴったりの人を紹介してよ」

彼女は目をきらきらさせる。

うーん。できない。

その気もないのに自己推薦されてもなあ

前回の話の続き。

「それじゃ、僕にも誰かい子を紹介してよ」

僕は逆襲に出た。いろいろ条件をつけて困らせてやろう。むちなな要求を出そうとしたとたん、彼女はフッフと不敵に笑う。

「わたしはどう？」

「え？」

勝ち誇ったようなまなざしをした彼女を見て、僕は目が点になった。

「だから自己推薦するわ。わたし自身を紹介するのよ。どう？」

「あのさ、僕は君がさっきいった条件にはまったく当てはまらないんだけど。だいいち、イケメンじゃないだろ」

「格好いいと思うわよ」

ゴマをするなら別の人にくれと言いたかったけど、やめておいた。

「僕は料理を作ってもらいたいし、家事だってできるだけやって欲しいんだよ」

「それで」

おいおい、都合の悪いところは素通りか？

「その人だけを見るだなんてできないかもよ。僕は本を読む時間と書きものをする時間がほしいんだ。けっこう時間がかかるんだよ。

それに、小説を書いているとほかのことはかまっていられなくなるから、彼女のことなんてほったらかしになりがちだし」

「いいわよ。わたしだって、ずっといっしょにいと気づまりだもん」

「さっき言ってたこととぜんぜん違うんだけどさ。君が僕を追いかける気なんてさらさらないんだろ」

「どうかな」

彼女はとぼけてみせる。なんだかずるいなあ。見え透いているからかわいいものなんだけど。

「その気もないくせに、どうして自分を推薦したりするんだよ」

「だって、いろんな人に追いかけられていたほうがいいでしょ」

彼女はアハハとほがらかに笑う。白馬の王子様に取り囲まれた自分の姿を想像して、ルンルン気分になっている。

そりゃ、誰だって、追いかけてくれる人が多かったら気分いいだろうけどねえ。

『徒然草』を音読してみた

一年ほど前、吉田兼好の『徒然草』を初めから最後まで通して読んだ。

『徒然草』は学校の授業で読んだ程度だったから、一度全部読んでみたかった。昔習った教科書には、お祝いの宴席で鼎かなえをかぶって抜けなくなってしまったという仁和寺の法師の話が載っていて面白かった。隠者という生き方にも惹かれるものがある。デカルト曰く、「よく隠れるものはよく生きる」。洋の東西を問わず、「さわがしい世間から隠れる」という生き方にはなにか共通するものがあるのだろう。人生にとって大切なことが書いてありそうだ。

なんとなく岩波文庫版の『徒然草』を買って中国へ持ってきたんだけど、読みはじめてから、ちよつと失敗したかなと思った。なにせ簡単な注釈だけで現代語訳がない。受験勉強以来、ほとんど古文に触れていないから、単語や文法などはとうに忘れてしまっている。なかなか意味を読み取れない。もどかしい限りだ。おまけに、読んでいてもどうもしっくりこなかった。目が文字のうわつづらをすすべるようで、言葉が頭のなかへ飛びこんでくれない。

はたと思い当たって、声に出して読んでみた。さいわい、『徒然草』の章はどれも短いから、すぐに読み返せる。

一度目はかなりつかえた。語釈を見て意味を確かめなくてはいけない単語もいろいろあるから、立ち止まってばかりいる。だけど不思議なもので、同じ文章を二度三度と音読しているうちになんとなく意味がわかるようになった。なぜか心にすんと落ちる。理屈で理解するのではなく、ただ意味を感じるのだ。

物の本によれば、ヨーロッパで黙読が始まったのは十二、三世紀頃のことらしい。それまでは読書といえば音読するのが当たり前だったそうだ。一冊の本をすべて音読するのはけっこう体力を使うから、読書はいい運動になったのだとか。あごの筋肉と肺活量が鍛え

られそうだ。

ところで、古代中国の書物は句読点がついていないうえに改行もなかった。たとえば、

先帝創業未半而中道崩？今天下三分益州疲弊此誠危急存亡之秋也……（三国志・諸葛亮伝・出師の表）

といった具合に漢字がずらずら並んでいるだけだから、どこでセンテンスが終わって、どこで始まるのかも定かではない。現在出版されている『史記』や『論語』といった古典の本には句読点がついているけど、それはすべて現代になってつけられたものなのだから。中国で留学している時に先生からそんな話を聞き、僕は驚いてしまった。

「先生、それじゃ昔の人はどうしていたんですか？　だって、どう読めばいいのかぜんぜんわからないでしょう？」

僕は先生に質問した。さいわいというか、僕が通っていた学校は、大学というよりも塾みたいところだった。教室も小さくて人数も少なかったから質問しやすかった。

「音読してたのよ」

先生は言った。

「それでわかるんですか？」

「そうよ。声に出して読んでみれば、どこでどう文章が切れるのかなんて、自然にわかるものなのよ。昔の人はみんな音読していたから、句読点も改行も必要なかったの」

僕は中国語の古文を読めないの、そんなものかなと思っただけだったのだけど、毎朝学校の庭を通るたび、若い学生たちが立ったまま英語の教科書を開いて朗々と音読している姿を見ていたから、中国には音読の伝統がいまだに残っているような気がした。

「中国の学生は、朝音読するのが好きなんだね」

と、なにげなく地元の友人に言ったら、

「だって、晴れた朝に朗読するのは気持ちいいでしょ。空気だってさわやかだし、気分が晴れやかになるわよ」

という答えが返ってきた。たしかに、みんな気持ちよさそうに音読していた。

いつから日本で黙読が始まったのかは知らないけど、ほかの国と同じように昔はみんな音読していたのだろう。当然、書き手も音読されることを前提に書いているから、音読した時の文章のリズム感といったものにも気を配ったのかもしれない。黙読を前提にした文章と音読を前提にした文章では、文章のリズムやテンポがぜんぜん違うと感じた。『徒然草』は音読が合う。というよりも、音読しかできない書物なのかもしれない。少しずつ音読してじっくり味わった。含蓄のある話や興味深い話がいろいろあって面白かった。学校の教科書には載っていない大切なことが書いてある「人生の教科書」とでも呼びたくなるような、じつに味わい深いエッセイだ。

僕は、『徒然草』の最終章が大好きだ。

八つになりし年、父に問いて云はく、「仏は如何なるものにか候ふらん」と云う。父が云はく、「仏には、人の成りたるなり」と。また問ふ、「人は何として仏には成り候ふやらん」と。父また、「仏の教によりて成るなり」と答ふ。また問ふ、「教へ候ひける仏をば、何が教へ候ひける」と。また答ふ、「それもまた、先の仏の教によりて成り給ふなり」と。また問ふ、「その教へ始め候ひける、第一の仏は、如何なる仏にか候ひける」と云う時、父、「空よりや降りけん。土よりや湧きけん」と言いて笑ふ。「問ひ詰められて、え答へずなり侍りつ」と。諸人に語りて興じき。

わかりやすく噛み砕いて現代語訳するとだいたい次のようになる。

八つの頃、父に、

「お釈迦様はどういうものなのですか」

と訊ねた。

「お釈迦様はもと人だったのだけど、仏になったのだよ」

父はこう答えたので、私はまた訊いた。

「どうやって仏になったのでしょうか」

「お釈迦様の先生だった仏の教えを勉強して仏になったのだよ」

「そのお釈迦様に教えた先生はどうやって仏になったのでございませうか」

「それもまた、先生の先生だった仏の教えを勉強したのだよ」

「それでは、仏の教えを始めたいちばん最初の仏はどういった仏なのでございましょうか」

「さてさてどうなのだろうねえ。空から降ってきたのだろうか。それとも、地面から湧いてきたのだろうか。私もよくわからないねえ」と言って、父は笑った。

「こんなふうに問い詰められて、答えられなくなってしまいましたよ」

父は、このことをいろんな人に楽しく語ったそうだ。

兼好法師は子供の頃から好奇心が強くて、様々なことに疑問を持つ人だったようだ。子供の「なぜなぜ」質問に丁寧に答える父親の姿にも好感を覚える。ほほえましい親子の会話だ。兼好法師の父親が幼い彼の頭をなでながら楽しげに笑う姿が目につく。

『徒然草』は何度読み返しても飽きのこない文章が多い。時折、『徒然草』のページを適当に開いてみては、珠玉の随筆を声に出して味わっている。そのたびに、大切ななにかが体に染みこんでいくように心地よい。

ビザ事務所で思ったこと

今日、外国人居留証の手続きのために公安局の出入国管理処へ行ってきた。

さすがというべきか、世界中から人々が集まる広東省とあって、人でごったがえしている。機械のボタンを押して順番待ちのレシートを取ると、五十五人待ちと印刷されていた。一緒についてきてくれた総務の女の子によると、先週、別の日本人の手続きでここへきた時は約百人待ちだったそうだ。

申請受付カウンターの前の長椅子には、黄色い人、黒い人、白い人といろんな人種の人たちがいる。いろんな民族がいる。ほとんどの人はTシャツにジーパンやスーツといった日本人とあまり変わらない格好をしているけど、なかにはまれに、ムスリムの黒いチャドルを頭から被った女性や民族衣装のような服を着ている人もいる。カウンターの前では、ロシア人の若いカップルが途方に暮れた顔をしながらビザ事務所の職員と話をしていた。書類に不備があり、これでは申請を受け付けられないと言われてしまったのだろう。

待合室には話し声がざわざわと響いていた。

ほとんどが僕の知らない国の知らない言葉だ。

ここには何種類の言語が飛び交っているのだろうか？

疲れた頭でぼんやり考えた。

僕は彼らのことをなにも知らない。どんな風景のところで育ったのか、どんな食べ物を食べているのか、どんな暮らしをしているのか、どんな仕事をしているのか、どんな恋をしているのか、なんにも知らない。

いったい僕は、この世界のどれほどのことを知っているのだろうか？

白米食わせろ

僕は、物心がつく前からのタイガースファンだ。

大阪の男の子はだいたいそうなのだけど、まわりがみんな阪神タイガースを応援しているものだから、気がつけばいつのまにか阪神ファンになっている。幼い頃から洗脳されているようなもので、物心がついた後で他のチームを応援することなどできない。どんなに弱くても愛しいタイガースを捨てられるわけがない。ここまでくると一種の宗教かもしれない。

一九八五年に阪神タイガースが日本一になった時は、ほんとうに興奮した。

あの時の打線はこれでもかとはかりに打ちまくった。真弓さん、バースさん、掛布さん、岡田さんがみんな三十本以上のホームランを放ったし、中心選手ばかりでなく、ほかの選手も打ちまくっていたから、相手チームに五点取られてもぜんぜん心配しなかった。むしろ、この点差どうやってひっくり返すのかを楽しみにしていたくらいだった。実際、ツーランホームラン、スリーランホームランとホームランを連発して、そのままイケイケで逆転してしまうこともしばしばあった。

八五年の日本シリーズの相手は広岡監督が率いる西武ライオンズだった。

戦前の予想は圧倒的に西武が有利。なにせ、当時のライオンズはプロ野球界のお手本のチームだった。野球博士の広岡監督が鍛え上げたチームだけあって、チーム編成、練習方法、選手の管理法、選手の起用法、フィールドでの戦術などなど、あらゆる面でプロ野球界をリードする鏡のようなチームだった。

いっぽう、阪神は打線の勢いで勝ったチームだ。打線は水物とよくいう。打つか打たないかは、試合をしてみなければわからない。その点、いいピッチャーをそろえたチームは計算が立つ。いくらチ

ーム全体で二百本以上のホームランを放った阪神打線といえども西武の優秀な投手陣にはかなわないだろうと、おおかたの評論家たちは言っていた。阪神OB以外の評論家はみんな西武日本一を予想していたと思う。

僕はこの日本シリーズで絶対勝ってほしかった。最良のチームに勝って欲しいというだけではない。僕は、西武の広岡監督に個人的な恨みを抱いていたからだ。

広岡監督は、選手の身体を鍛えるためには選手に玄米を食べさせるべきだという固い信念の持ち主だった。それを知った僕の母親が感動してしまい、あろうことか、子供の身体を鍛えるためには玄米を食べさせるのがいいと家の食卓から白米を追放してしまったのだ。

炊飯器で炊くのは、七分づき米（完全に精米するのではなく、三割だけ玄米の成分を残したもの）、玄米、麦飯、強化米ばかりで、白米はいつさいなくなつた。誕生日の赤飯でさえも、わけのわからない米で炊く。僕と愚弟は繰り返し白米を食べさせるように要求したが、母親はいつさい耳を貸さなかった。昔はみんな玄米を食べていた。だから、昔の人は体が強かった。文句を言わずに食べなさいと。

麦飯は僕も好きだった。炊き立てはおいしい。七分づき米も慣れてしまえばそこそこおいしい。だけど、強化米だけは許せなかった。なんでもビタミンなどの栄養素を米に添加したのだそうだけど、妙な匂いがして食べられたしろものではない。炊きたてならまだなんとか我慢できるけど、一晚経てば電子ジャーのなかで黄色く変色し、とても米とは思えない味になる。食欲をそぐ味だ。かなり古い米を使っているのではないだろうかと思うくらい、とにかくまずい。いくら身体によいといっても、食欲がわかなければ意味がないではないか。

西武の選手たちも、広岡監督の玄米原理主義にはうんざりしていたようだ。

昔、日本ハムの監督をしていた大沢親分がどこかで書いていたの

だけど、日本ハム対西武のカードになるたび、ライオンズの主力選手が大沢親分のところへやってきて、「白米を食べさせてください」と懇願するので、しかたがないから日本ハムの食堂で彼らにこっそり白米を食べさせてあげたのだそう。嬉しそうに白米をがつつく西武の選手たちの姿を見て、「戦後の食糧難の時代でもあるまいし。高い年俸をもらっている野球選手なのにねえ」となかばあきれ、なかば同情したとか。

八五年の日本シリーズはもつれにもつれたけれど、シリーズ第六戦で長崎選手が満塁ホームランを放ち、タイガースが日本一に輝いた。あの戦いは阪神流放任野球と西武流管理野球の勝負だったのだけど、玄米原理主義では日本一になれないことを阪神タイガースがみごとに証明したのだ。母親に余計な智恵を吹き込んだ広岡監督に「ざまあみさらせ」と言ってやりたかった。

その後、我が家の食卓にはいつのまにか白米が戻ってきた。たまに麦を適当にまぜたご飯が出ることはあるけど、七分づきやにつきき強化米はなくなった。

理由は、食べ盛りの子供をふたり抱えているので、安い米を買わないことには家計が苦しいからだとか。安い米でもなんでも、銀メシを食べることができて僕も愚弟も大喜びだった。米はやっぱ白米がいい。

私の夢はポールフルトと一緒に旅行することです。愛すでる。

このタイトルを見てなにを書いているのだろうと思った人も多いだろう。誤植ではないので念のため。

タイトルの文章は、先日、近所のスターバックスへ寄った時に、スタバに置いていた落書き帳で見つけたものだ。たぶん、日本語を習い始めたばかりの中国人の若い女の子が彼氏のことを思いながら、あるいは素敵な彼氏を目の前にして書いたのだろう。「私の夢はボーイフレンドと一緒に旅行することです。愛してる」と書くべきところをすこし間違えているのがなんともいえずかわいらしい。恋をしてウキウキしている姿が目に見えかぶ。

ところで、広州の中心部にはスタバがいくつもあるのだけど、時々びっくりすることに出会う。

二ヶ月ほど前のことだけど、ブレンドコーヒーをテイクアウトしようとしたら、

「ブレンドコーヒーは苦いけど大丈夫ですか（直訳すれば、飲み慣れていますか）？」

と若い店員に訊かれた。

僕は一瞬、中国語を聞き間違えたのかと思い、「なんて言ったの？」と聞き返してしまった。店員はやはり同じことを言う。ブレンドコーヒーって苦いのがいいんだけどと思いつつ、

「没問題（問題ないよ）」

と答えた。

考えてみれば、広州のスタバではカフェオーレやホイップクリーム入りコーヒーといった甘いものを飲んでいる中国人が多い。中国人はコーヒーを飲む習慣がないから、苦いコーヒーというものは彼らにしてみれば飲めた代物ではないのかもしれない。華南で十年近く働いている日本人に訊いたところ、やはりまだ彼らは「おしゃれな感じのするスタバでコーヒーを飲みながらノートブックパソコン

を開いている自分が格好いい」というライフスタイルへのあこがれでスタバへきているだけだという。コーヒーの味はわかつちやいないと。若い店員はコーヒーの味はわからないけど、親切のつもりでそう訊いてくれたんだろう。

またある時、ブレンドコーヒーを頼んだら、

「すみません。ブレンドコーヒーは消滅しました（直訳）」

と返事が帰ってきた。

消滅???

まさか、世界中からブレンドコーヒーが消えるわけがない。そんなことを宣言されても困ってしまう。

「それって、ブレンドコーヒーがメニューから消えたってことなの？」

僕は恐るおそる聞き返した。中国はなんでもありのカオスのワンダーランドだから、なにが起きても不思議ではない。スタバからブレンドコーヒーがなくなることもしょーぶんに考えうる事態だ。店員は、例のブレンドは苦いけど大丈夫と訊いてくれた彼だった。

「なくなっちゃったですよ」

彼は、アイスコーヒーを入れておくプラスチックの容器を逆さにしながら僕に見せる。うーん。メニューから消えなくてよかった。それにしても、まだ夜の八時半だ。閉店まで二時間半もある。閉店間際ならしかたないかもしれないけど、ふつう、喫茶店はブレンドコーヒーを切らさないと思うんだけどなあ。広州ではブレンドはそれほど人気がないのだろうか。

「ブレンドコーヒーのかわりに、アメリカンを出しますよ。御代はブレンドのぶんだけで結構です」

彼はスタバはサービス満点なんですよとも言いた気に自信满满だ。日本のスタバの値段がどうなっているのかは知らないけど、なぜかブレンドよりアメリカンのほうが高い。

「いいや、僕はアメリカンが好きじゃないから」

せっかくの申し出だけど断った。僕が飲みたいのはブレンドだ。

アメリカンじゃない。

「ああ、味が濃いから」

彼はうんうんわかれるという風にうなづく。

——だから、そうじゃなくって！

僕は心のなかで叫んだ。中国にいるといろんなことをなかなかわかってもらえなくてとんちんかんな答えがよく返ってくる。それでいつも、「だからそうじゃなくって!」、と言うはめになる。わかってもらないものはどうしようもない。どうしようもないのだけど、そこで引くわけにもいかない。

お兄ちゃん、アメリカンはブレンドより薄味なんやで。アメリカンはブレンドにお湯を足すやろ。頼むからわかってや。

「アメリカンは味が薄いから飲んだ気がしないんだよ。白湯みたいでさ」

僕が言うと、彼はぽかんと口を開け、まるでそんなことは生まれではじめて聞いたというような顔をしている。僕がなにを言っているのか理解していない。彼は愛想もいいし親切だけど、スタバで働いていてもブレンドコーヒーをほとんど飲んだことがないのだろう。もつとも、彼を責めることはできない。僕も学生時代に喫茶店でアルバイトしていたことがあるけど、きっかけはその喫茶店で働いている女の子たちがかわいいという不純な動機からだった。じつをいうと、コーヒーは苦手で、喫茶店でアルバイトをしているうちに好きになった。

彼を責めてもしようがないのだけど、夜の八時半以降になるとブレンドはめったにないから、夜は行かないようになった。

スタバでいちばん困るのは、英語で話しかけられることだ。今僕が住んでいるところは外国人が比較的多いところだし、スタバの入っているテナントビルの上には日本を代表するような日系企業を初めとして外資系企業がたくさん入っているから、白人の姿もよく見かける。顧客サービスの一環として英語のできる店員をそろえているのだろうけど、僕としては北京標準語で話してくれたほうがあり

がたい。コーヒーの注文のやりとりくらいはなんとかできるけど、中国人の店員はきさくなのでいろいろ話しかけてくる。そうなるとうお手上げだ。雑談に応じるほどの英語力はない。バックパッカーをしていた頃は、英語でピーチクパーチク話していた記憶があるけど、もう何年も使っていないので、かすかな英語力も消えうせてしまった。何度通っても英語で話しかけてくる店員に根気よく北京標準語で返しているうちに、顔見知りの店員はようやく北京標準語で話しかけてくれるようになった。最近では、スタバへ行っても「英語を聞き取らなくてはいけない」というプレッシャーから解放されたのでほっとしている。

スタバのコーヒーを買うだなんて、なんて贅沢なことをしているのだろうと思われるかもしれないけど、実は広州でまともなコーヒーを飲もうとすればスタバのブレンドコーヒーのトルサイズを頼むのが一番安い。コーヒーハウスでブレンドを頼むとだいたい二十元（約二五〇円）ちょっとする。それも時々、とんでもない味をしたものが出てくる。あきらかに屑豆を挽いたものだ。スタバなら十五元（約一九〇円）。割引カードを使えば十三元。マクドのコーヒーもあるけど、日本のマクドのコーヒーのようにはいかない。Lサイズで8元（約百円）と安いんだけど、コーヒーの管理方法が悪くて煮立っているからクリームと砂糖を入れなければ飲めた代物ではない。そのまま飲んだのではインスタントコーヒーを飲んだのと同じように胸焼けしてしまう。コーヒー文化がまだまだ普及していない中国では、レベルの低いコーヒーでも商売になる段階だ。コーヒーを飲む人が増えれば、客も店員も味がわかるようになって全体の水準が向上するのだろうけど、いまのところスタバに頼るしかない。でもなんだかなあ。

そのスタバがちよっと頼りないんだよなあ。スタバでも時々変な味をしたブレンドが出てくるし。

スタバってグローバルなはずなんだけど、やっぱり広州のスタバには広州のローカルルールがあるようだ。グローバルなルールは、

なんとなく世界中のどこでも通用しそうな感じがするけど、じつはそうではなくて、決してどこでも通用するわけじゃないということがわかった。

近くてめっちゃめっちゃ遠い不思議の国、中国にいるといろいろな勉強になる。

私の夢はボールフルトと一緒に旅行することです。愛すでる。(後書き)

この章は以前活動報告で書いた『「ブレンドコーヒーは苦いけど大丈夫ですか?」 in 広州のスタバ』を大幅に加筆修正したものです。

お月見前夜

中秋の名月の日、漢民族は親戚一同が集まってご馳走を食べる。彼らにとってはハレの日だ。満月の日に一族がそろって食事して一家円満、ということらしい。

もともと中秋節は休みではなかったのだけど、二年前から法定休日になった。多民族国家を標榜しているはずの中華人民共和国が漢民族の祝日を法定休日にするこの是非は置くとして、漢民族はゆっくり中秋節を楽しめるようになった。しかも、法律上の休日は一日だけなのだけど、前の日曜日と後の土曜日の休みを中秋節の後ろへ移動させて、三連休としている。つまり、今年の場合、九月二十二日だけではなく、二十三日、二十四日も休みだ。もちろん、十九日の日曜日と二十五日の土曜日は出勤しなくてはいけないし、民間企業は必ずしも三連休にするわけではないのだけど、この連休を利用して実家へ帰る人もわりという。

中秋節には中国名物の月餅を食べる。ちなみに、中国に月見団子はない。

中秋節の一月前くらいから、街のあちこちで月餅を販売している。スーパーへ行くと月餅コーナーが必ずあって、箱詰めのみ月餅セツトが山のように積んであるし、ケーキ屋やスーパーだけでなく、ホテルやレストランでも売っている。スタバへ行った時、

「Do you like moon-cake?」

などと店員が訊いてくるので、なんのことだろうと思ったら、なんとスタバでもスタバ特製月餅を売っていた。

もともと、自分用に月餅を買う人はあまりいない。

中秋節の二週間くらい前から月餅げっぺいの配り合いがはじまるので、自分が食べるぶんを買う必要はないのだ。日本で言えば、お中元やお歳暮のような感じだろうか。

たいていの中国企業は得意先にも社員にも月餅を配る。昔留学し

ていた大学では、留学生に月餅を配っていた。あちらこちらで月餅を配るので、あまった月餅のおすそわけをいただくこともある。月餅といってもいろんな種類があって、一般的な餡子入りはもちろん、ハム入りといった変り種まであるのだけど、僕はなかにうずら卵の黄身がまるごと入ったのが好きだ。けっこうおいしい。

今の勤め先は月餅を配らなかったけど、かわりに商品券をもらった。このほうがいいかもしれない。あんまり月餅ばかり食べ過ぎると飽きてしまうから。

中国の会社はよく食事会を開く。日本ではあまり歓迎されないかもしれないけど、中国では重要なことだ。社員にご馳走を食べさせることは大事な福利厚生の一つになっている。

今は中国人の生活水準もかなり上がったけど、地方から出稼ぎで働きにきて、質素な生活を送っている若者も多いから、彼らにとって食事会は楽しみなのだろう。なにより、中国人はみんなで食卓を囲むことを好む。にぎやかなのがいいらしい。中国人は孤独や静けさを好まない。

中秋節の前夜、同じ部署全員で食事会を開いた。

五時半近く、オフィスのなかが華やいだ雰囲気になる。

僕は休み前に仕上げなくてはいけない資料の作成や突然のアクシデントの対応に追われていたのだけど、ふと顔を上げてまわりを見渡せば、みんなだいたい仕事を終えたようで帰り支度をしている。心なしか、いつもよりおめかしをしてきている女の子も多い。ちょっとしたお祭り気分だ。

定時で仕事をあがり、広州郊外の町へ移動。

中華レストランへ入ると同じような団体客がおおぜいいた。どのテーブルも賑やかだ。レストラン中に食器の鳴る音や話し声が渦巻いている。

中国人の同僚たちはワインで乾杯したいといい、レストランに一ダースほどのワインを持ち込んだ。どれも中国産のワインだ。店に持ちこみ禁止と言われないだろうかと思ったのだけど、店員はな

にも言わない。それどころか、ワインを入れるためのガラス製の壺のような容器を頼むと持ってきてくれた。

——やっぱりあれをやるのか。

と思ったら、案の定、壺に入れたワインにスプライトをまぜる。中国人はなぜかワインをスプライトで割って飲む。そのほうが甘くておいしいのだとか。どうしてそんな習慣がはじまったのかわからないけど、ワインをそのままストレートで飲むことはまだ。僕はそのまま飲んだほうがいいと思うのだけど、それが彼らの流儀らしい。ワインの渋みといったものを消すためにそうしているのだろうか。

さてさて、全員のワイングラスにワインのスプライト割りが並んだ。

日本ならここで誰かが音頭をとって乾杯するのだけど、中国では滅多にしない。料理が運ばれてきたら、だれかれとなく「さあ食べよう」と言ってみんな思もおもいに食べ始める。わりあい自由だ。

料理は唐辛子のたっぷりかったスパイシーな湖南料理。

湖南省は広東省の北に接しているため、湖南省からの出稼ぎが多い。街中のいたるところに「湘菜^{シャンツァイ}」と掲げた湖南料理店がいたるところにある。「湘」は湖南省の旧国名、「菜」は料理という意味だ。きのこの炒め物、川魚の兜煮、鶏肉炒め、豚肉炒め、鴨肉炒め、どれもぴりっと辛くて美味だ。このなかでも川魚の兜煮は湖南の名物料理。なんという魚なのかは知らないけど、かなり大きな頭をしている。唐辛子の効いた煮汁がおいしい。この魚の兜を食べた後、皿に麺を入れてスープをからめて食べればもっとおいしい。

次々と大皿料理が運ばれてくる。だんだんお腹がふくれる。唐辛子が効きすぎて顔中に汗をかいている人もいた。

——そろそろ出撃するか。

僕はビールの入ったグラスを持って、よそのテーブルへ行った。宴もたけなわになると中国名物「乾杯^ほ」攻撃が始まる。乾杯とは文字通り杯を乾す^ほことで全部飲まなくてはいけない。この文字通り

の乾杯を何杯も重ねることになる。

「中秋節快樂（中秋節を楽しもう）！」

と言って、そのテーブルの人たち全員といっしょに乾杯。

ビールを注いでそそくさと次のテーブルへ。なるべく主体的に動いたほうが彼らに溶けこみやすい。外国人だというだけで距離を置かれてしまうので、こんな機会を利用して距離をできるだけ縮めておきたい。同じ人間だということがわかってもらえれば、コミュニケーションもスムーズになるから。

ただ、激辛料理の唐辛子で胃腸がやたらめったら刺激されているのと、ワインのスパライト割りでいささか悪酔い気味だ。次のテーブルへ出撃しようとしたら、よそのテーブルから続々と乾杯しにやってくる。彼らにあわせてなんとか杯を乾し続けているうちに、胃が膨れてビールが入らなくなった。もともと酒は弱いんだけど、もうだめだ。胃から炭酸があふれてげっぷばかり出る。観念した僕は、あまり乾杯していない静かなテーブルへそそくさと逃げこんだ。もうじゅうぶん乾杯しておいたからいいだろう。一般的に中国人は人前で酔いづれた姿を見せない。僕もそうしておいたほうが無難だ。ほっと一息ついているうちに食事はお開きになり、二次会のカラオケへ。五〇人くらい入りそうな大きな部屋だ。

みんなが曲を選んでいるうちに先に一曲歌っておく。

中国人は順番を気にせず一人で何曲もいっぺんに入れてしまうから、先に歌っておかないと次にいつ歌えるかわからない。もつとも、一人で何曲も立て続けに歌う人もいるかと思えば、恥ずかしがって曲を入れない人もいるので、テーブルをまわって曲を入れなさいとすすめてまわる。どうしても歌うのが嫌だったらしかなないけど、せっかくなのだから一曲くらい歌わないともったない。

カラオケを歌わない人たちは、テーブルでさいころゲームを始める。おわんのなかでサイコロを振って、負けたらコップ一杯のビールを飲み干す遊びだ。以前「なろう」に投稿した『中国夜行列車団体旅行』のなかでそのゲームについて書いたので、興味のあるかた

はそちらを参照していただきたい。

酔っていい気持ちでソファーに坐っていると、

「ディスコへ行きましょう」

と、同僚の男の子が腰を振ってダンスする。

「カラオケはお開きにして移動するの？」

僕が訊くと、

「ここの一階にあるんですよ」

と、男の子は答える。

「一階？」

この店はディスコとカラオケが併設されているらしい。

一階へ降りてみると、ほんとうにディスコがあった。しかも、ただで入れる。ステージにはDJがいて、茶髪にへそ出しルックの踊り子が二人踊っていて、フロアにはぎっしり人が入ってかなり盛り上がっている。DJが時折、

「中秋節快樂（中秋節を楽しもう）！」

と叫び。「イエーイ」と歓声がわきあがる。

しばらく適当に踊っていたのだけど、ふとステージの脇を見ると、防弾チョッキを着た警備員が五人も控えているのが眼に飛び込んできた。薄暗いフロアを見渡すと、やはり警備員の姿がちらほら見える。物々しい警戒態勢だ。わざわざステージの脇を固めなくてもいいと思うのだけど、それだけ喧嘩や諍いが多いのだろうか。中国人たちは気にするふうもなく、踊り続けている。

踊りまくる中国人と周囲を固める防弾チョッキの警備員。

なんだか今の中国を象徴しているようだ。

中国人は長年続いている高度経済成長に酔いしれているけど、いざなにか起きればすぐに取り押さえようとガードマンが周囲を取り囲んでいるのだ。しかも、わざと目に付くところできめしく。

興奮めしてしまってそれ以上踊る気にもなれず、とぼとぼとカラオケボックスへ戻った。

どの部屋だか忘れてしまったので、一つひとつ部屋を確かめなが

ら歩いたのだけど、どのボックスも満員だ。ようやく部屋へたどり着くと、部屋には数人しか残っていなかった。半分以上の人たちはもう帰ってしまい、あとの人たちはディスコで踊っている。女の子がへろへろになった声で歌っていた。歌いすぎたのか声がかすれている。

時計を見るともう午前十二時だ。

「それじゃ、祝日を楽しんで」

そう言って僕はカラオケボックスを後にした。楽しい宴会だった。二三か月後にまた食事会があるだろう。その時、また楽しもう。

お月見前夜（後書き）

今日は曇り時々雨。お月さんは出てくれそうにありません。残念です。2010年9月22日中秋節に記す。

天才か、努力家か

イチロー選手のインタビュー集を読んでいたら、彼は「僕のことを天才なんていう言葉で片付けてほしくない。僕はどれだけ努力していることか」といったことを言っていた。天才だからあれだけヒットを打てるんだと簡単に言われてしまうのがよほど悔しいようだ。発明家エジソンの名言に「天才とは1%のひらめきと、九十九%の努力だ（Genius is one percent inspiration and ninety-nine percent perspiration.）」というのがあるけど、彼はその九十九%の努力を見てくれと強調したいのだろう。

たしかに、イチロー選手はかなりの努力家だ。血のにじむような努力を「天才」のひと言で片付けられたのではたまったものではないだろう。とはいえ、彼のファンならイチロー選手が野球のためにいろんなことを犠牲にして節制し、気の遠くなるような努力を重ねていることを知っているのだろうけど、一般の人々は彼の努力についてそれほど関心を払わない。

人は得てして他人の努力から目をそむけたり、見てみぬふりをしたりするものだ。他人が努力に努力を重ねて成功したのを見ても、「うまくやっただろ」とか「たまたま運がよかっただけだよ」とけちをつけたりする。はては、「なんであいつが?」と首をひねったりもする。楽して生きたいと思っている人にとって、他人の努力ほど目障りなことはないのかもしれない。

他人に勝った気分になりたければ、けちをつけるのがいちばん手っ取り早い。自分が汗をかいて苦労する必要もないし、手間暇もお金もかからない。他人にけちをつけた瞬間、「俺は勝った」と快感を味わうことができる。中国の作家・魯迅ろしんはこれを「阿Q精神」と名づけた。中国人の代表的な精神というのだけど、中国人ばかりではない。日本人も、ほかの国の人々もこの「阿Q精神」を持ち合わ

せている。とりわけ、今の日本はこの「阿Q精神」化が進んでいるような気がしてならない。

若い頃、天才肌の人と話をしたことがある。

頭がいいのか気が狂っているのかわからないくらい、頭の回転の速い人だった。とても同い年とは思えない。彼は、難解な文学理論をいとも簡単そうに滔々と論じ立てる。こんな人にはとうていかなわない、と僕は素直に白旗をあげた。逆立ちしても勝てっこないというのはこのことを言うのだろうと思った。

普通の人が、1、2、3、4、5と順番にステップ踏んで上がっていくところを、天才肌の人間は、1、3、5と一段飛ばしで駆け上がってしまう。あるいは、もっと素早く1、5、8という風に。そんな姿をみれば、別世界の人だと感じてしまう。だけどよく考えてみれば、そんな人はイチロー選手のように陰でかなりの努力を積んでいる。僕が話をした彼にしても、すさまじいまでの読書家だった。片っ端から本を読破して文学理論に関する才能を磨いたのだ。

彼の場合、環境にも恵まれていた。彼のご両親がインテリの読書家だったので、幼い頃から本に囲まれて育ったのだそうだ。もちろん、いくら本に囲まれていたとしても、読まなければ意味がない。彼は、与えられた環境を十分に活用したのだ。イチロー選手にしても同じだ。幼い頃に与えられた機会をしっかり掴んで才能に磨きかけた。

もちろん、幼い頃の環境ばかりが才能を助けるのではない。

ドストエフスキーは思想犯として逮捕されシベリアへ流刑となっただけ、その過酷な流刑地で人間模様を観察し続け、思索を重ね、神に祈り続け、自分の思想を深めた。あの時、彼がやけになって努力をやめていれば、『罪と罰』や『カラマーゾフの兄弟』といった傑作は生まれなかっただろう。ドストエフスキーは流刑という人生の危機を逆手に取り、己の才能を磨いたのだ。

ただ、努力をすれば誰でも一流になれるかといえば、そうでもないだろう。生まれつきの才能というものは、やはりあると思う。な

にごとにつけても、センスを感じさせる人とそうでない人がいる。向き不向きもあるし、器用な人と不器用な人がいる。残念だけど、持って生まれた才能や資質にはやはり差がある。

たとえば、僕がいくら努力してみたところで、三島由紀夫のような才能がほとぼしるきらびやかな文章を書けるはずもないし、村上春樹のようなお洒落で気の利いた文章も書けない。彼らのレベルに到達することなど、夢のまた夢のそのまた夢だ。

「天才作家と呼ばれたい」

などと僕が言えば、それこそ、

「アホちゃうか」

のひと言で終わりだ。彼らと肩をならべようだなんて、おこがましいにもほどがある。

なにより、そんなことを考えるより先に、僕は自分のちっぽけな才能さえろくろく磨いてもいないのだから、プロの書き手になどともなれはしない。しかし、類稀な才能を持ってこの世に生れ落ちた人であっても、ただぼんやりしていたのでは才能は開花しない。これまで書いてきたように、花を咲かせた人はみな相当な努力を積んでいるのだ。

僕は凡庸だからたいしたものは書けない。それはしかたないことなのだけど、それでも僕は、僕という器と僕に与えられた場所で踏ん張るしかない。せっかくこうして生きているのだ。遅まきながら、せめて天才と呼ばれる努力家たちの爪の垢でも煎じて一歩でも近づく努力をしたい。まだまだ学ばなければいけないことが山ほどある。その努力する過程にこそ意味があるのだと、僕はそう信じている。

とにかく居留手続きは終わったけど

尖閣諸島問題で日中関係が悪化していた時、僕は中国の居留手続きの最終段階に入っていた。もし日中関係がこじれにこじれれば、居留許可が下りない可能性もあった。報道によれば、一説には中国は報復措置として短期のノービザ渡航を取りやめることも検討していたのだとか。もしそれが本当だとすれば、ノービザ渡航取りやめの次の報復手段として日本人には居留許可を出さないという措置もあったかもしれない。

中国で働く場合、かなり煩雑な手続きを取らなくてはいけない。

- 1、近所の公安へ行って「外国人臨時住宿登録」を申請。
- 2、会社が外国人就業許可証（臨時版）を申請して取得。
- 3、外国人就業許可証（臨時版）と会社がそろえた各種書類を持って香港へ行き、労働ビザ（Zビザ）を申請して取得。
- 4、再び近所の公安へ行って「外国人臨時住宿登録」を再申請。
- 5、会社が外国人就業許可証（正式版）を申請して取得。
- 6、出入境ビルへ行き、外国人居留許可証を申請して取得。
- 7、三度近所の公安へ行って「外国人臨時住宿登録」を再々申請。

ざっとこのような手順を踏む。僕もたいへんだけど、会社の総務もたいへんだ。

以前はこの手続きも簡単で時間もそんなにかからずに取得できたそうなのだけど、一年半前に僕が同じ手続きをした時は、春節（中国の旧正月）休みをはさんで、二ヶ月半かかった。今度は、五か月だ。

この間、旅行ビザでしのいだのだけど、二回香港へ行って三か月の旅行ビザを申請した。香港へ行けば、路面電車や渡し舟に乗って街ぶらぶらしたり、香港島のそこうデパートに入っている旭屋で本

を買ったりできていい気分転換になるのだけど、出費もばかにならない。なにせ、広州で一杯六元の麺が香港へ行くと二十数元もする。今年はアジア競技大会が広州で開かれることもあって、外国人の就業手続きは特に厳しいのだとか。いちばん厳しかったのは北京オリンピックの前後だそう。そのときは、香港で労働ビザを取得できなくなり、いったん日本へ帰り、日本の中国大使館や領事館で申請しなくてはいけなかったという話を聞いた。テロを警戒してのこともあるだろうが、本質的には中国の態度が変わってきたのだといえるだろう。

オリンピックの開催によって中国政府も自信をつけてきた。

以前は外国からの投資は熱烈歓迎だったのだけど、「来たいのならどうぞ」という態度に変わってきた。もちろん、外国からの投資を拒みはしないし、歓迎しているけれども、以前ほど外資の誘致に熱心でなくなったということだ。外資系企業への優遇税制も優遇範囲が縮小された。一時期、外国の企業を優遇して中国本土の企業を優遇しないとはどういうことか、といった論調の中国の国内報道をよく見た。外国人ばかりに儲けさせるのはけしからんと。

尖閣諸島関連の日本のニュースでは「すわっ、報復措置か」といふようなことが報道されていたけど、ほんとうに報復措置なのかどうかはきちんと見極めたほうがいいだろう。中国にいれば、日本では考えられないようなアクシデントに出くわす。担当者の匙加減一つで物事がころころ変わる。法律はあることはあるけど、中国は法治主義ではなく、基本的に人治主義の国だ。中央政府は法律を守らせようとキャンペーンを張ったりするけど、数千年も続いてきた伝統がすぐに変わるとは思えない。しかも賄賂天国だ。「儲かる」公務員の役職の場合、売官が当たり前のように行なわれている。一筋縄ではない国だ。

広州地区の通関についていえば、アジア競技大会の関係で尖閣諸島問題が発生する前から検査が厳しくなり、通関が滞っている。税関関連のことばかりでなく、このところ、広州はアジア競技大会の

ためにいろんな物事がやりづらくなっている。なんでもパスポートを携帯していない外国人は罰金五百元だそうで、罰金を取るために公安がやつきになって外国人の集まっていそうなレストランを臨時検査して回っていたこともあった。高速道路の脇には検問ができ、ごくたまにだけ車を止められて検査されることもある。

そんなこんなで居心地の悪さを感じていたから、もし居留許可が下りなかったら、いったん日本へ戻って別の国へ行く準備でもしようと思っていた。居留許可がおりなかったら、それはそれでしかたのないことだ。よろずにつけて物事を割り切らなければ、この国ではやっていけない。

日本人学校に瓶が投げつけられたりした事件があったそうだけど、僕個人に関していえば、なにごともなく平穏無事に過ごした。

国家と人民は別物だ。

僕は、中国人個々人とのつながりのなかで生きている。いや、生かされているというべきか。個人的なつながりのある中国人の友人たちは、別段普段と変わりなく付き合ってくれた。国家のことは国家のこと、自分たちのことは自分たちのこと、とこんな風に割り切っているところがある。一般の人民は、そもそも自国の政府をあまり信用していない。もちろん、愛国心が燃えることもあるみたいだけど、たいていはすぐに冷めてしまう。時々、日本が中国を侵略したというようなことを僕に言ってくる人がいるけど、僕の見たところでは、そんなことを言うのはその人がこちらに心を開いている証拠だ。幼い頃から、日本は中国を侵略した悪い国だと教えこまれているので、べつに他意はないのだけど、つい口についてそんな言葉が出てくるらしい。だからそんな時は、

「君の国の政府が君のためにいったいなにをしてくれたんだい？」と問いかけるようにしている。そう言えば彼らはすぐに気づく。

「そうだよ。中国の政府ってひどいもんだよ」

と、今度は自国政府の悪口のオンパレードになる。僕も長い間中国にいた間に行政絡みで何度か煮え湯を飲まされたけど、人民にと

ってみれば、そんなことは日常茶飯事だ。できるだけ行政とは関わりたくないというのが人民の本音だろう。なかには心底、行政を怖がっている人民もいる。

話が横道へそれたけど、ある程度の友人なら、国同士が喧嘩したからといって友情にひびが入ることもない。もちろん、利害関係抜きの友人なら、ということだけど。

ともあれ、居留手続きは無事に終わった。これであちらこちらへ駆けずりまわらずにすむ。ほっとひと息ついた。

当分、まだ中国にいたりなりそうだ。

五十歩百歩

パワーポイントで作ったプレゼンテーション用の資料をPDFファイルにしてもらうことにした。

僕のパソコンには変換ソフトが入っていないので、コンピュータにやたらと強い日本人スタッフにお願いしようとしたのだけど、あいにく彼は出張中だった。そこで、そのソフトを持っている中国人スタッフに頼んでPDFファイルに変換してもらった。彼女は快く引き受けてくれてすぐにやってくれたのだけど、いつもならPDFファイルへ変換すればサイズが小さくなるはずなのに、逆にかなり大きくなってしまった。メールで送る手はずだったので、困った。しかたがないので、パワーポイントのファイルを四パートに分割し、それぞれのファイルをPDFにしてもらった。

「あのさ、王さんにPDFファイルにしてもらったんだけど、サイズが大きくなっちゃったんだよね。六メガが九メガになったんだよ。どうしてだろう？」

僕は不思議だったので、戻ってきた彼になにげなく訊いた。

「俺ならちゃんと小さくできますよ」

威勢のいい答えが質問と違う方角から返ってきた。どうやら自慢したいらしい。

「それって、裏技を知っているってこと？」

「技は関係ないです。やつらはろくなソフトを持っていないんですよ。だから、サイズが大きくなるんです」

彼は勝ち誇ったように言う。いまにもガハハと笑い出しそうだ。

「彼らは海賊版を使っているんだ」
なるほどと僕は思った。ありがちというか、中国では当たり前のことだ。

「俺のも海賊版っすよ」

彼はさらりと言う。ここで驚いてはいけない。中国の会社は平気

で海賊版のソフトを使う。日系企業の現地法人も例外ではない。以前勤めていた会社のパソコンはOSでさえ海賊版だった。

「でも、俺のは本物のソフトの海賊版なんです。やつらはわけのわからないソフトの海賊版をそこいらからダウンロードして使っているから、あれじゃだめっすよ。俺が持つてる海賊版ソフトの機能は本物とまったくいっしょなんです。だから、きちんと圧縮をかけて、ファイルのサイズを小さくできるんですよ」

「本物の海賊版って、つまり〇〇ビのソフトってわけか」

「そうっすよ。できる男は、ホンモノの海賊版を持っているんですっ！」

「どんなもだい、と彼の顔に書いてある。できる男と言うけど、「できるハッカー」と言ったほうがいいんじゃないだろうか？」

彼は、ホンモノの海賊版を手に入れることにプライドをかけている。中国には海賊版を無料ダウンロードできるサイトがたくさんあるから、彼にしてみれば、そんな誰でもできる簡単な方法で入手した海賊版ソフトなんてゴミみたいなものなのかもしれない。だけど、いずれにしても海賊版だ。五十歩百歩だと思っただけどなあ。

五十歩百歩（後書き）

ちなみに、日本語では「五十歩百歩」と言いますが、中国語では「五十歩笑百歩」——つまり、「五十歩が百歩を笑う」と「五十歩」と「百歩」の間に「笑う」という動詞が入っています。中国語豆知識でした。

完熟唐辛子ののったチョココレートケーキ

十月一日、今日は中国の国慶節。

現在の共産党王朝の建国記念日だ。

今日から一週間、中国は七連休になる。ちょうど行楽シーズンなので、旅行へ出かけたり、故郷へ帰ったりする人も多いようだ。

僕も休みに入ったので昼前までゆっくり寝て、洗濯機を回した。もう十月だけど、亜熱帯の広東省・広州はまだまだ暑い。ホットシヤワーを浴びるとのぼせあがってしまうので、毎日水シヤワーを浴びている。Tシャツを一日に二回取り替えたりすることが多いから、洗濯物もたまる。

街をぶらぶらした後、スタバへ入った。休日なので店の席はすべてうまっている。

レジでスタバカードを見せると、

「今日はコーヒー一杯買えば、もう一杯サービスしますよ」

と、店員の女の子は広東訛りの強い北京語でそう言った後、これまた広東訛りの強い英語でもう一度繰り返した。どうやら国慶節のサービスのようだ。ブレンドの一番小さいサイズを一つ頼んだ。

「三分待ってください」

彼女は、さっそく後ろのコーヒーマシンを操作する。

コーヒーができあがるのを待つ間、ショーケースを見た。マンゴーケーキやチョココレートケーキといった定番商品の横に新製品が並んでいた。唐辛子チョココレートケーキだ。

ごくありきたりなチョココレートケーキのうえに、完熟したつややかな唐辛子が一つ、ちょこんとのっている。

見た目はとてもきれいだ。チョココレート色と赤のコントラストがあざやか。唐辛子の大きさはまちまちで、短いのもあれば長いものもある。粒をそろえないのはご愛嬌といったところだろう。

チョココレートと唐辛子のコラボレーション。

どんな味なのか興味はあるけど、ちょっとこわい。

チョコレートと唐辛子の味が口のなかでぶつかりあうところを想像した。

辛くてひりひりする。焼けるような舌にチョコがおいさぶさる。唐辛子の辛さのぶんだけ、チョコの甘さがよけいにひきたつ。胃の腑がぽつと温かくなり、額と頬に汗がにじむ。ざつとこんなところなのだろうか。

「コーヒーできましたよ」

店員が僕へ声をかけてくれた。

涙の地域限定再生CD

この間、日本から友人が遊びにきた時、どうしても欲しかったCDを買ってきてもらった。

ところが、家のパソコンへ入れて何度試しても聴くことができない。曲名の表示は出るのだけど、スタートボタンを押してもうんともすんともいわない。「この種類のファイルはカバーしていません」という中国語の表示が出るだけだ。ちなみに、僕のパソコンは中国で買ったものだ。パチモンではありません。メーカーのオンラインショップで買った本物のパソコンなので、念のため。

日本から持ってきたほかのCDはちゃんと聴くことができるのにおかしいなと思いつつながらCDの注意書きを見た僕はひっくりかえりそうになってしまった。

なんと、このCDは特定の地域でしか再生することができませんと書いてあるではないか。そのアイコンマークにはしっかり「国内向け」と表示されている。

つまり、日本へ持って帰らないかぎり、このCDを聴くことはできないってことか。広東省では聴けないのか。啞然。

地域限定発売のCDというのは聞いたことがあるけど、地域限定再生CDというのは初めて見た。

やれやれ。

そんな意地悪なことをしなくてもいいじゃないか。

「天下の吉田拓郎がそんなみみっちいことをしてもいいのかっ?!」と、拳を突き上げたいところだけど、拓郎さんに怒ってもしようがない。どうせレコード会社が決めたことだから。

海賊版対策でこんなCDを作ったんだろうけど、海外在住者を切り捨てるような真似はやめてくれよな（涙）。せっかく楽しみにしていたのに、ほんと、悲しいよ。

涙の地域限定再生CD（後書き）

♪拝啓 僕はとても残念でしたゝ

雲南省で見かけた入れ歯専門の露店

雲南省を旅して回っていた頃、辺鄙な田舎町の市場へよく出かけた。

毎週何曜日開催と決めて、週一回開く少数民族マーケットだ。近隣の農村から大勢の人が市場へ集まる。雲南省には二十六の民族が住んでいるので、マーケットへ行けばいろんな民族衣装を見ることができた。

服や日用雑貨や漢方薬の露店が多いのだけど、そのなかには必ずといっていいほど、入れ歯専門の屋台があった。

板のうえに、大小の入れ歯が並べてある。奥歯もあれば前歯もある。一本だけのものあれば、二三本繋がっているものもある。総入れ歯もたまに見かけた。

入れ歯を露店で売るだなんて考えたこともなかったの、はじめて見た時はびっくりしてしまった。

こんなところで誰が買うのだろうと思ったのだけど、露店があるからには、買う人がいるのだろう。

ある時、皺だらけのおじいさんがその出店の前に立っているのを見かけたので、好奇心に駆られた僕は彼の様子をじっと見守った。

老人は、あれこれと入れ歯を物色する。素手で手にとって眺め、手頃な入れ歯を探す。

やおら、老人は自分の口へぱくりとはめた。

口をくちやくちやさせ、入れ歯の具合を確かめる。

屋台のおばちゃんは方言で老人へ話しかけ、接着剤のようなものを勧めた。これをつけるとしっかり固定できるよとも言っているようだ。

耳が遠いのか、老人は「だめだなあ」というふうに首を振って口から入れ歯を出し、板の上に置く。女主人がほかの入れ歯を勧めたけど、老人はそのまま立ち去ってしまった。

なんだか不思議な露店だった。

「価値」の牢獄からの脱出

小説を商品として売り出そうと思えば、他人のための使用価値があるものを書かなくてはいけない。

当然のことだけど、商品というものは、他人が使用価値を感じてなんぼのものだ。自己満足だけの「商品」を出しても、誰も相手してくれない。化粧品でも、トイレットペーパーでも、コンビニ弁当でも、車やバイクでも、消費者がこの商品には利用価値があると判断しなければ、買おうとしない。他人が買ってくれないかぎり、商品は商品になれない。他人が買ってくれない商品——つまり不良在庫はただのガラクタにすぎないから。

それではひるがってみて、小説の使用価値とはいったいなんなのだろう？

エンタメの場合は、わかりやすいかもしれない。

読者に楽しんでもらってなんぼだ。

ドキドキハラハラ、スリル、ユーモアといった愉快さを読者が感じるか、ここに小説の使用価値がある、とこんな風に単純化して言うてしまったら、エンタメの書き手に怒られてしまうかもしれない。だけど、読者が楽しめるかという一点にエンタメ小説の価値がかかっていることには異論がないと思う。

それでは、純文学の場合は？

「恥の多い生涯を送ってきました」（太宰治『人間失格』）
だとか、

「彼らが代表している人間というものを憎む事を覚えたのだ」（夏目漱石『こころ』）

などと書いている小説の利用価値っていったいなんだろう？

簡単に言えば、商品とは「世間のご機嫌を取る」ものだ。ご機嫌を上手に取れば取るほど商品は売れ行きがよくなる。お金が儲かる。だけど、こんなフリーズではとても世間のご機嫌を取れそうもない。

むしろ、反発を買ってしまうだろう。

僕は純文学系の書き手だけど、そもそも使用価値なんて考えて書いたことがない。わかりやすく丁寧に書くよう心がけているつもりだ。だけど、商品としてどれほどの価値を出すのか、ということにはまったく関心がない。

僕の関心は、使用価値の高い小説をいかに書くかということよりも、自分の抱えている課題をどうやって解決するのかという一点にある。自分を救いたい。自分が救済されたい。だから、その方法を探る手段として小説を書いている。自分のために書いている。自分を救済したいのなら、特定の宗教に帰依するという方法もあるけど、僕の場合、そうはならなかった。神様や仏様をだしにして金儲けする人たちは、どうにもいかがわしく思えてしまう。

もちろん、自分のために書くのだとはいっても、なにかを読者とわかちあえたら、これほどうれしいことはない。小説のエッセンスに触れたそんな感想をいただいた時は、小説を書いてほんとうによかったと思う。いささか大袈裟かもしれないけど、すべてが報われた気がする。人生は孤独なものだし、自分の課題は自分で背負うよりほかにないのだけど、それでもやっぱり、ひとりでは生きていけないから。

価値というものは相対的なものだ。

乱暴かもしれないけど、思いきり単純化して言うところなる。

Aの価値がBの価値を凌駕したときのみ、Aは値打ちがあるものとなる。しかし、Aの価値がBの価値を下回る時、Aには価値がない。

純文学で価値を追い求めて、その果てになにがあるのだろうか？

なんにもないような気がする。袋小路にはまってどこへも行けなくなるような気さえする。これは懐疑的過ぎる見方かもしれないけど。

僕は、価値よりも意味を追究したい。世の中がどう変化しようと

も、変わることのない意味をつきつめたい。意味とはもちろん人生の意味だ。この生の意味だ。

日常の生活では、使用価値の檻のなかで暮らすしかない。僕自身、商品を使用価値をあれこれ比べてものを買っているし、逆に職場では僕の「労働力」という価値を測られ、使い物にならないと判断されれば切り捨てられる立場にある。だけど、せめて小説を書いていく時くらい、価値の牢獄から抜け出して、どこか遠くを目指してみたいものだと思う。

民主化運動家のノーベル平和賞受賞と中国文明の限界

ゆうべ、中国の民主化運動家の劉曉衡氏が二〇一〇年度のノーベル平和賞を受賞した。

一夜明けて今日、さっそく知り合いの中国人に、「中国人がノーベル平和賞を取ったんだけど、知ってる？」

と、聞いて回ったのだけど、案の定、ほとんど誰も知らなかった。ネットで検索しても、人民日報がごく短い記事を書いているだけだ。人民日報は中国共産党の機関紙だから、庶民はほとんど読まない。ちなみに、広州でわりと読まれている地元紙「南方都市报」の一面は、「ホテルの朝食で中毒。広州の女性が四川で死亡」というものだった。一面はおろか、紙面のどこにもノーベル平和賞のことは載っていない。中国当局が報道管制を敷き、劉氏の受賞を報道させないように指示したのは間違いない。

劉曉波氏の名も、中国の庶民は知らないようだ。日本のニュースサイトの画面を見せても、「この人は誰？」という反応しか返ってこない。もともと、彼は反体制活動家だから、一般の人々が知らないのもむりもないだろう。中国政府としては人民に知られたくない存在だ。

ともあれ、中国国内では、劉氏のノーベル平和賞受賞はなかったことになっている。

僕の知り合いのある日本人は、

「名誉なことなのに、どうしてみんな知らないんだろうねえ？」

と首を傾げたのだけど、おおかたの中国人はこの喜ばしいニュースを知らされていない。

新聞の報道などで知っておられる方も多いだろうけど、劉氏は天安門事件以来の民主化運動の活動家だ。

天安門事件後に逮捕された時の罪状は「反革命罪」。釈放された後も、中国国内にとどまって民主化運動を続けたため何度も逮捕さ

れた。二〇〇八年には大幅な民主化を訴えた「08憲章」の起草に加わったのだが、このことによって逮捕され、懲役十一年の刑を宣告された。罪状は「国家政權転覆扇動罪」。現在も獄中にいる。

劉氏のノーベル平和賞受賞に関して、中国外務省のスポークスマンは当然声明を発表した。

「劉氏は中国の法律を犯した犯罪者である。このような人物に授与することはノーベル平和賞を冒瀆する行為だ」

簡単にまとめれば、このようになる。「悪法も法」だから、法を犯せば犯罪者ということになるけど、このような発言を詭弁きべんという。

基本的に、民主主義という思想は中国文明とは相容れないものだ。歴史的にみて、中国は強力な中央集権による専制政治を発展させてきた。現在の中国共産党も、この中国文明の枠のなかで政權を運営している。中国共産党は絶対であり、異論は許さないという専制政治だ。彼らの統治技術は非常に巧妙で、あらゆる反権力の芽を潰す。究極の独裁といってもいい。

これに対して、民主主義は権力を分割し、すべての人間に「一票」という権力を与える。誰でも自分の意見を自由に発表できるし、全員が選挙に参加できる。もし行政がおかしなことをすれば異議を申し立てることも可能だ。日本でいえば、日本人の成人は誰でも「一票」という名の一億分の一の権力を持っていて、投票所へ行ってそれを行使することができると。つまり、民主主義は究極の分権だ。

どちらが正しいかは言うまでもない。

民主主義は、人間一人ひとりの尊厳を大切にする優れた思想だ。人類が生み出した叡智、人類の理想といってもいいかもしれない。もちろん、民主主義にはいろんな問題があるし、様々な欠陥を抱えているのだけど、もしかしたら、今の人類は自らが生み出した叡智や理想を適切に理解して運用するだけの能力がまだ備わっていないだけなのかもしれないと思う。

「究極の独裁」と「究極の分権」。水と油だ。

この両極にあるふたつのものが手を取りあうことはきわめてむずかしい。

劉曉波氏はノーベル平和賞にふさわしいだけの実績を残している。何度牢屋へ放りこまれても、そのたびに再起して民主化運動を続けるなどということは、並の人間にはまねできないことだ。

「ノーベル賞を冒瀆するものだ」という中国政府の子供じみた声明は、人類の理想を冒瀆するものだ。また、中国外務省のスポークスマンは声明のなかで、

「ノルウェーとの関係が損なわれる」

と発言していたけど、こんな恫喝をするだなんて、これではある広域組織となんら変わらない。

人間は金儲けだけをすればいいというものではない。

権力闘争を勝ち抜いて、権力を握ればいいというだけでもない。人間性の向上と発展。これこそが人類の課題ではないだろうか。

民主主義は真の意味での人類発展の鍵を握る思想の一つだ。

さらに言えば、あのような幼稚な声明は、中国文明の限界を自ら露呈するものだった。

今の中国は高度経済成長が続き騎虎^{きこ}の勢いを見せている。だけど、それはたんに金儲けがうまくいっているというだけの話であって、中国が他国のお手本になるようなものを提示できるのかといえ、そうではない。

かつて、中国は東洋的な近代国家であり、近隣諸国の手本となる国だった。

日本の場合、中国の法律制度を見習って大宝律令（701）を制定し、平城京（710）や平安京（794）は唐の都・長安を模倣して建設した。中国は政治のあり方、文明のあり方の教師役だった。いろんな意味で「先進」を行く国であり、中国文明は最先端の文明だった。それを思えば、今の状態はお寒い限りだ。古代の中国文明はともかく、今の中国文明には他国や他民族が真似るべきものはな

にひとつない。今の中国文明にはなんの理念も理想もないからだ。

中国文明は、よくいえば「おじいちゃんの文明」と言えるかもしれない。成熟の段階を通り越し、完成した文明だ。一つの完結した形をもつ文明だ。だが、悪く言えば、「終わった文明」だ。もうどこにも発展の余地がない。文明の創造力は枯れはて、袋小路へはまりこんでしまった。

劉氏のノーベル平和賞受賞は、そんな行き詰った中国文明にちいさな風穴をあけるものだ。東洋的な古い近代が行き着き、がらんどうになってしまった中国文明に新しい命を吹き込むための、その魁さきがけとなるものだろう。

ただ、民主化に限っていても、今後の道のりは決して平坦ではない。いささか大袈裟な物言いになるけど、劉氏が戦っているのは中国文明の宿痼しゅくゑそのものだ。上から下まで権力の甘い汁を吸ってゆがんだ国家を築き、庶民を痛めつける政治屋や腐敗役人を一掃するのは容易な作業ではない。中国文明そのものに、そんな腐敗を無条件に肯定する土壌がある。今回の受賞によっても、中国国内の状況はなにひとつ変わらない。中国の民主化が進展するわけでもない。

それでも、劉氏の受賞はうれしいニュースだ。

たとえば状況がまったく変わらないとしても、いちばん大切なのは理想を訴え続けることだ。それが明日の希望へつながるのだから。

描かれないリアリティ（前書き）

男の子の生態について書いています。女の子は読まないほうがいいかも。

描かれないリアリティ

彼女とはじめてデートする時は、手をつなぎたいものだ。

手をつなげば、ときめきの風がふたりをつつむ。世界はこんなに輝いているのだと気づいたりもする。

だけど困ったことに、手をつなげば自然とあそこが膨張してしまう。そう、男の子の大事な部分が。

「不潔」などと言っではいけない。

これはどうしようもないことだ。

意志の力ではどうにもならない。

「鎮まれっ！」と念じてみても、かんたんに鎮まってくれるものでもない。

だったら、手をつながなければいいじゃないかと言われそうだけど、そうもいかない。やっぱり、ルンルン気分で手をつなぎたい。いっしょに歩いてくれる人がいるというのは、なにより嬉しいことだから。

冬場なら、ジャンパーかコートで隠せるのだけど、夏場は隠しようがない。見られたらどうしようと思うと恥ずかしくしようがないのだけど、なかなか引っこんでくれない。困ったものだ。

どうやら、恋をすることと体を求めることはイコールのようだ。

恋は求めることだから、それが自然なのかもしれない。それが動物としての人間の本能なのだろう。

ところが、青春小説や恋愛小説では、こんな場面はたいてい描かれない。

僕も初デートのシーンを描く時は、そんなことはカットしてしまう。

まず第一に書こうとも思わない。無意識のうちに避けているのだと思う。彼女の掌のぬくもりは心をこめて丹念に描くのに、彼の体について描かないのは片手落ちだと思うのだけど、やはり描かない。

初デートのシーンにそんな描写を入れたらどうなるのだろうかと思してみるけど、

——やっぱり美しくないよなあ。

とか、

——描くのもなんだか照れくさい。

と思ってしまう。

初デートのシーンは、登場人物の想いを思う存分描くことができるから結構盛り上がる。恋愛をはじめたばかりの初々しい恋人同士というのはいいものだ。ふたりの後姿には倅せがいつぱいつまっている。ふたりの心のなかは楽しい未来だけだ。それなのに、あそこが膨張したなどと描写しては、せっかくの初デートがなんだかいやらしくて胡散臭いものになってしまうような気がする。

もちろん、これは僕だけの考え方かもしれない。僕が「膨張」を描かないのは、その小説の世界観を壊さずに「膨張」を描写する力量がないだけのことだ。いろんな見方があっていいし、そうあるべきだと思う。

このことは現実が小説に反映されないほんの一例にすぎない。無意識のうちに醜いものとして遠ざけて描かれないことは、ほかにもたくさんあるのだろう。精一杯描写しているつもりで、その実、それとは知らずにタブーにしてしまっただけなことだらけなのかもしれない。

もちろん、小説は現実をそのまま写し取れば成立するというような単純なものではないけれど、こうした描かれないリアリティーを追究すれば、より深い作品を書けそうな気がする。

私は日本人のことあるね

中国で暮していると、

「韓国人？」

とよく訊かれる。

どうやら、中国人は日本人と韓国人の区別がつかないようだ。中国には韓国人が大勢いるから、「自分たちとは違う東アジア人」と話をしたら、まず韓国人を思い浮かべるのだろう。

「違うよ。日本人だよ」

僕がそう答えると、まずいことを言ってしまったと後悔の色を浮かべる人もときどきいる。国を間違えるのは失礼だと思っているようだ。僕はこだわらないけど、気にする人もいるだろうし。

「ほら、韓国ドラマをけっこう放送しているでしょ。なんか、テレビに出ている俳優さんに似てるなって思ったから。男前も多いし」
気を遣う人はこんな風に言ってくれるのだけど、それってフォロ―になってへんやん。

もつとも、バックパッカーになって旅をしていた頃は、よく韓国人の旅人が「アニョ〜」とかなんとか元気よく言いながら韓国語で僕に話しかけてきた。たいていの日本人バックパッカーはこんな経験をしているから、僕が特別韓国人に似ているというわけでもなさそうだ。韓国人の目から見れば、日本人は自分たちの同胞と同じ姿に見えるのだろうか。ともあれ、韓国人は自国の人間と日本人の区別がつかないようだ。それくらい似ているのだろう。

雲南省に住んでいる少数民族に間違えられたこともある。雲南省には漢民族を含めて二十六の民族が住んでいる。

十年ほど前、広州から雲南省の省都・昆明行きの列車に乗った時、雲南人の乗客が話しかけてきた。

僕がまったく中国語を聞き取れないので、話しかけてきたお姉さ

んは、僕が中国語を話せない少数民族だと思ったらしい。

「もしかしてヤオ族？」

彼女はそう訊いてくる。ほかの雲南人にも「あなたはヤオ族か？」と訊かれたことがあるので、どうやら僕の顔はヤオ族という少数民族に似ているらしい。ちなみに、ヤオ族は雲南省では山奥で田んぼを耕して暮している民族だ。

「ニホンジン」

僕は片言の中国語で答えた。

「ええっ？　ほんとう！」

お姉さんは心が躍おどってしまったようだ。

「中国語を話せる？」

「ハナセナイ」

「ほんとに日本人なんだ」

ほがらかに笑った彼女は勢いこんで中国語でいろいろ話しかけてきた。でも、僕は彼女がなにを言っているのかまったくわからない。ちんぷんかんぷんだ。せやから、話されへんねんてさっき言ったやん。

「ほんとうに中国語がわからないんだ」

ぽかんとした僕の顔を見て、彼女はしょんぼりしてしまった。あんまり落ち込んでいるものだから、ちょっとかわいそうだった。雲南人の喜怒哀楽の表現はけっこう素朴だ。うれしかったらすぐに笑うし、気落ちしたらすぐにしょんぼりしてしまう。僕はそんな雲南人が好きだ。

中国暮らしも長くなると、今度は日本人に中国人と間違えられるようになった。中国製のジーンズを穿いて、中国製のシャツを着て、地元の値段の安い理髪店で髪を切ってもらうと、中国人に見えるようだ。

僕が日本語で日本人に話しかけると、

「あ、ニイハオ」

と反射的に日本語訛りの中国語が返ってくることもあるし、

「びっくりしたあ。てっきり中国人かと思っていました」

と驚かれることもある。

最初はなんだかなあと思ったけど、今はもう慣れてしまった。

中国人から見れば、僕はやはり中国人には見えならしい。理由は、雰囲気と仕草が中国人とは違うからだとか。

それぞれの国の人たちには固有の雰囲気や仕草がある。いくら外国で長い間暮らしてみても、それは抜けないようだ。日本ではわからないことだけど、僕の体と心には日本の文明や文化がたくさんつまっている。僕自身が日本文化の缶詰といってもいいのかもしれない。もちろん、日本人なら誰でもそうなのだけど、外国で暮らしてみればこんなことにふと気づかされる。

僕が日本人であるのは、たぶん偶然なんだろう。たまたま日本人として生まれただけのことだ。

それでも、日本人であることから離れられない。日本人をやめることはできない。なるべく外国のいろんな習慣や文化を学んでみたいと思っているし、自分の殻を破ってみたいけど、僕は死ぬまで日本人であり続けるのだろう。当たり前のことのようだけど、思えばなんだか不思議な気もする。

なぜという問いかけ

なぜという問いかけは、とても切ない。

どうしようもないことだとわかっていながら、答えはもう出ているのだとわかっていながら、そう問いかけずにはいられない。理不尽なことや、裏切りや、自分の力ではどうしようもないできごと。たとえば、帰り道を確かめるようにしてなんども振り向きながら去ってゆく恋人に。その人にだけはわかってほしいのに、どうしてもわからうとしてくれない人に。

なぜと問いかけ続けて、人生を識^しる。

生きること悲しいことだと気づかされる。

思いのままに生きられないのは、愚かさで罪を背負っているからだ、それが私という人間の業なのだ。この世は存在の流刑地だから。それは、どこで暮そうともけっして変わりはないから。

なぜと問いかけ続けて、愛を識^しる。

それでも生きているのは、愛されているからだと気づかされる。愛されているということは、許されてあるということ。ときに愛を信じられなくなっても、それは自分の勁^{つよ}さを試されているだけのこと。

この世と呼ばれる存在の流刑地で、もっとやさしくなれ、もっと強くなれと励まされている。

なぜという問いかけはとても切ない。

切ないのは、私が私でいるから。

切ないのは、私自身だから。

昔の恋を思い出す時は

いつから素直に好きだと思えなくなってしまったのだろう。

若かった頃は、好きなものは好きと思えたし、そう言えたはずだった。自分の気持ちに正直だった。人を好きになるのに、理由や理屈などいらなかった。

今は、好きだと感じた瞬間によけいなことばかり考えてしまう。たいていは、自分の身を守るための打算だったりする。くだらないことだ。いろいろ痛い目にも遭ってきたから、臆病になるのも、むりもないことかもしれないけど。

ただ、すくなくともこれだけのことは言える。

自分に正直だった頃のほうがずっと生きいきとしていた。

年齢を重ねるにつれ、いつの間にか、できない理由ばかりをならべたてて、自分に言い訳するようになった。

昔の恋のことを思い出す時、懐かしいのは彼女のことではなくて、もしかしたら心のままに人を好きになれた自分自身なのかもしれない。心の底から湧き上がる情熱に素直だった自分なのかもしれない。

昔の恋を思い出す時は（後書き）

今はもうあまり聴かれていないのかもしれませんが、村下孝蔵さんの名曲です。この歌を聴きながら、このエッセイで書いたようなことをふと思いました。

村下孝蔵『初恋』『春雨』

<http://www.youtube.com/watch?v=iS4fMJsWI&feature=related>

奇妙な反日デモ

十月十六日、中国の成都、西安、鄭州などの都市で大規模な反日デモがあった。デモの内容は、もちろん尖閣諸島ついて抗議するものだ。

中国国内の報道によれば成都のデモには数千人が参加したそうだがぶん、日本では成都のイトーヨーカ堂が襲撃された映像が流れているのだろう。もちろん、中国国内では日系デパートを襲撃したなどという報道はなされていない。

ずいぶん前のことだが、成都に滞在していた頃、イトーヨーカ堂の地下食料品売場へ行つては一個一元のあんぱんを買ったものだった。日本のものと同じ味でおいしかった。エスカレーター配置が日本のそれと同じで、店内を回っているだけで落ち着いた気分になったのを覚えている。あんぱんのほかにも、コクヨの文房具やミズノのジャンパーを買ったりした。

初めて行った時、各フロアの売場に店員が大勢いてびっくりした。少なくとも、日本のイトーヨーカ堂の三倍は人を雇っていたと思う。雑誌かなにかで、成都のイトーヨーカ堂は地元の人々を大量に雇用することで地域に溶けこもうとしているという記事を読んだことがある。人件費の安い中国だからこそできることといってしまうがそれまでだが、それにしても、そのような企業努力をしていた会社が襲われたのは残念でならない。

国営新華社通信はデモの詳細を報道していないので、当然、各種新聞やテレビも伝えていない。各メディアには報道するなどの通達が出ているはずだ。これに対して、一部ネットの報道記事には、「日本共同通信社によると」などと前置きしたうえで成都イトーヨーカ堂のガラスを破ったことなどを伝えていた。また、画像や動画を掲載しているサイトもあった。だが、画像や動画のほうは政府当局によって削除されたり、サイトそのものが閉鎖されたりしてしまっ

たため、一部を除いて見ることができない。

デモから一夜明けた十七日、中国外務省の報道官は「日中は重要な隣人だ」と前置きしたうえで「デモを行なった人たちの気持ちはわかるが、愛国心は理性的に表現するべきであり、非理性的な行為や違法なデモには賛成できない」とのコメントを発表している。

このコメントを見てもわかるように、政府当局は事態の鎮静化を図ったのだが、十七日には四川省北部の綿陽市に飛び火して、反日デモが発生。約三万人が集まり、一部が暴徒化して日本車を破壊したりしたという。十八日には武漢でも反日デモが起きた。

日本でも、十六日に六千人ほどの規模の反中デモがあり、中国大使館を取り囲んだ。尖閣諸島、ノーベル平和賞の劉氏の釈放を求めている。中国国内の報道では、中国における反日デモはこの「日本の右翼」のデモに対抗するためのものだったと伝えられている。実際のところ、日本のデモに参加したのは「右翼」だけとは限らないようだが、ともあれ、中国の国内向けの報道ではそのように伝えられている。より正確に言えば、各新聞、テレビにそのように報道させ、人民にそう思いこませようとしている。つまり、一種の洗脳だ。

今回のデモは奇妙だ。

なにより、デモの実施時期がおかしい。

デモが行なわれた時、中国共産党の五中全会（中央委員会の会議）という政治的に重要な会議が開かれていた。

このような重大な政治日程が組まれている時期に大規模なデモが起きることは、通常あり得ない。デモが飛び火したり、成都や綿陽などのように暴徒化されては困るからだ。人民の怒りの矛先が日本へ向いているうちはまだいいが、それが中国共産党へ向けられると中国共産党の威信に傷がつく。どのようなデモであれ、中国共産党の中央が許可するとは考えにくい。

第二に、この時期にあわせて事前によく準備したうえで組織されたデモの可能性が高い。

写真を見た限りでは各種の横断幕も準備していたし、デモが始まったばかりの頃は比較的整然と行進していたようだ。突発的なデモなら、きれいな横断幕を準備する時間もなければ、整然と行進することもないだろう。

反日デモを行なうような「愛国青年」はだいたいが共産党の下部組織に属している人たちで、大学生が多い。彼らがデモの準備をした場合、当然、中央へ情報が上がるはずだ。そして、中共はかならず押さえにかかえり、中止させるはずだ。

第三に、偶然、複数の地方都市で一斉にデモが起きたとは考えにくい。しかも、地方都市だけで起きている。北京、上海といった二〇〇五年の時に大使館・領事館襲撃事件が発生した都市ではデモは行なわれていない。北京ではすでに先月、小規模な反日デモがあったが、首都という人々の政治的な意識の高い都市で今回の同時多発デモがなかったのはどうにも解せない。このあたりにも隠された意図を感じてしまう。

これらのことを総合して勘案してみると、おそらく、この日に合わせて複数の都市で同時にデモを実施するようにあらかじめ計画を練っていたものと思われる。誰かが——といっても中国共産党しかいないのだけど——裏で操っていたとしか考えられない。やらせデモだ。

中国共産党が今回のデモを裏で操っているのは間違いないだろう。ただ、中共のなかにもいろんな派閥があって、一枚岩ではない。

ざっくりいえば、現在、胡錦濤総書記の「親民派」と江沢民元総書記の「上海閥」もしくは「太子党」と呼ばれる二大グループが権力闘争を繰り広げている。

「親民派」はもうすこし人民によくしてあげましょうという一派。たたき上げの人物が多い。「上海閥」は特権階級が自分たちの利権を守るための集団だ。高級幹部の子弟が多い。このように書くと「親民派」のほうがよさそうだが、どちらもなにがなんでも中国共産

党の一党独裁を守るという点では一致している。一九八九年のチベット独立運動の際、数多くのチベット人が虐殺されたが、この陣頭指揮に当たったのは、当時、チベット自治区の党書記だった胡錦濤だ。どちらがいいとはいえない。どちらがまだましかというだけの話だ。

さて、どこの国でもそうかもしれないが、外交というのは実は内政問題だ。

今回、デモが行なわれていた時に開催していた五中全会（中央委員会の会議）では、太子党のリーダー格の政治家・習近平が親民派・胡錦濤の事実上の後継者として指名されるかどうかが焦点だった。胡錦濤は、二〇一二年に総書記の任期が満了となり、二〇一三年には国家主席の任期が切れる。胡錦濤の後を誰が引き継ぐのかは、内政問題の最重要課題だ。

習近平を推すグループが「反日カード」を切って「愛国学生」たちにデモを行なわせ、胡錦濤グループへ揺さぶりをかけたと考えられなくはない。簡単に言えば、胡錦濤へ対する嫌がらせだ。自分たちの主張を認めなければ、もっと騒ぎを起こすぞというシグナルかもしれない。

習近平は江沢民の子分筋にあたる。

江沢民は、国家主席在任中に「愛国教育」「反日教育」を推し進め、人民の反日感情を煽りにおあった。中国共産党の歴代の国家指導者のなかでは愚昧な人物だ。江沢民の子分たちが、親分の手法を真似したとしても不思議ではない。

もちろん、これは仮説にすぎない。ともあれ、五中全会では習近平が事実上の後継者に指名され、上海閥、太子党の思い通りにことが運んだ。このまま順調にいけば、二〇一三年には習近平が国家主席となる。

中国の「反日」にはさまざまな意味がある。

中国で反日デモがあれば、日本人は中国中が本気で日本を嫌っているかのように思いこみがちだが、それは考えものだ。

なかにはほんとうに日本が嫌いな人もいるだろう。だが、単純にそんな人たちばかりというわけではない。「反日」という道具を使って権力闘争に勝ちたい、出世したいと考える人物が案外多い。そんな輩は「反日」と叫んで自分がの上がるのがなにより大切なことで、日本とどう向き合うかといったことは、実はどうでもいいことなのだ。彼らが欲しいのは自分の出世のために利用できるスロ―ガンだ。野次馬に集まった人民にしろ、日本のことはなにも知らない。胸のうちに鬱積しているのは、広がるばかりの格差と中国共産党の腐敗に対する不満だ。ほんとうの意味での「反日」とはあまり縁のない人たちだ。

敵は本能寺にあり。

「反日」は実は中国の国内問題であり、彼らの内輪もめの道具として「反日」が使われているにすぎない。かつて江沢民は広がる格差と中国共産党の腐敗から人民の目をそらさせ、自分の権力を維持するために「反日カード」を濫用した。

これから、事態がどう推移するのかはまだわからないが、大切なのは過剰反応しないことだ。

中国の国内政治では「反日」はいつも政争の道具に使われる。そんなことをされたのでは、日本人としてはたまったものではないし、とぼつちりを受けるのも日本だ。とりわけ、僕のように中国に住んでいる日本人はなにかと嫌な目にあわされたりする。とはいえ、「反日」に対して安易に反応してしまうのも考えものだろう。彼らの御家騒動は彼らにやらせておけばいい。飛びかかってきた火の粉を振り払う必要はあるが、できるだけ関わらないことだ。

中国の「反日」は、日本と中国の外交問題ではなく、たんなる中国国内の内政問題にすぎないと割り切り、できる限り突き放してみたほうがよいのかもしれない。

地下鉄に乗って

今日、仕事の帰り道に広州の地下鉄に乗った。

座席に腰かけて本を読んでいたら、隣に坐っていた地元の女学生に話しかけた。十七、八歳といったところだろうか。広州人は幼く見えるので、もしかしたら二十歳くらいかもしれないけど。

「日本人なの？（？是日本人？）」

彼女は僕の顔を覗きこむように言う。

「そうだよ（是？）」

「わたしの言ってることがわかる（？听的？我？的？）？」

「もちろん（当然）」

「あなたの本を見て、日本の人だと思ったのよ（我看？的？，我得？？？是日本的）」

彼女は目を輝かせた。動物園でパンダ見た時のような目だ。好奇心を隠さないのは中国人のいいところだと思う。

中国では、いきなり他人に話しかけるのはごく当たり前のことなので、もう慣れていて。それが楽しみだったりもする。あれこれとひとしきり世間話をした。なんでも彼女は、来月開催されるアジア競技大会のボランティアをするそう。今から待ち遠しいらしい。

彼女と別れてから再び本を読み始めたのだけど、はたと困った。

僕は今、無謀にも『資本論』に挑戦している。とても難解だ。同じところを何度繰り返し読んでも意味を掴めない。なるほどすごいことが書いてあるような感じはするのだけど、それにしてもむずかしすぎる。マルクスは頭がいいのか、気が狂っているのか、よくわからない。さっき、ようやく今読んでいる箇所の子口の糸口らしきものがつかめそうになったかなと思ったところだったのに、なにを考えながら読んでいたのか、すっかり忘れてしまった。マルクスの文章は、意味不明な活字の羅列へ逆戻りした。

いや、人のせいにしてはいけない。

もともとまったく理解していないのだ。

むりやり背伸びして難しい本を読んでいる僕がいけない。

時間のかかることははじめからわかっているのだから、『資本論』はぼちぼち読めばいい。

ともあれ、地元の人と話せて楽しい帰り道だった。

せっかく中国に住んでいるのだから、地元の人と話すほうがよっぽど大事なことだ。

地下鉄に乗って（後書き）

というわけで、いきなり他人から話しかけられても平気な野鶴はみなさまの感想を大歓迎しておりますW

エレベーターの綱の断裂現象を発見しました

僕は今、広州の新都心の近くにある築二十年あまりのマンションに住んでいる。昔はお洒落なマンションだとけっこう評判がよかったのだそうだけど、今はおんぼろだ。

今朝、出勤しようとして、エレベーターに乗ろうとしたら、なかなかこない。二台あるのに、一台はとまったままだ。結局、五分くらいエレベーターを待つはめになった。

一階へ着いた後、隣のエレベーターを見てみた。前に柵がおいてあり、

「定期メンテナンス中に綱の断裂現象を発見しましたので、現在、緊急交換作業を行なっております。ご迷惑をおかけして大変申し訳ありません」

と、扉に張り紙が貼ってあるではないか。

そういえば、そのエレベーターは、時々変な揺れ方をしたり、嫌な音が響いたりしていた。エレベーターの綱は、細くて強いワイヤーをいくつも束ねてあるから、少々切れたところでどうってことはないんだろうけど、やっぱり多少不安になってしまふ。かなり古いエレベーターだから寄る年波には勝てないのかもしれない。

僕が今朝乗ったほうのエレベーターは、いちおうまともに動いていたけど、ほんとうに大丈夫なんだろうか？　ちょっぴり心配だ。とはいえ、乗っている最中に綱が全部切れてしまつてエレベーターが落ちたりしたとしても、その時はその時でしようがないのだけど。僕がコントロールできることでもないから、運命を甘受するよりほかにない。

歩道に植えてある溶樹の下で本を読みながら通勤車を待った。

この頃、ずいぶん涼しくなった。広州にしてはすがしい朝だった。

ヒューマニズムについて

高校生の頃、ヒューマニズムという言葉の意味は「人道主義」のことだと思っていた。わかりやすくいえば、やさしさや愛情といったものを大切にしましょうということだ。いうまでもなく、飢餓に襲われた遠い国の子供たちへの支援活動やホームレスの人たちへの炊き出しといった各種のボランティア活動はこの人道主義に根ざしている。

テレビドラマの『金八先生』シリーズはこの意味でのヒューマニズムにあふれている。『金八先生』の世界には必ず救いがある。たとえ生徒が問題を起こしたとしても、金八先生は「君はまだ人間として未熟なだけなのだから人生の勉強を積みなさい」と諭し、がんばれと励ます。金八先生は、自分の生徒は全員、彼らが成長したあかつきには人として素晴らしい存在になると信じている。言い換えれば、すべての人間をやさしさと理性を持った存在とみなし、全幅の信頼を寄せるということだ。

その後、ヒューマニズムには「人間中心主義」という意味もあるのだと知った。

この人間中心主義は、神も仏もいるものかという一種の無神論だ。つまり、人間こそがこの世界の主であり、神であるという考え方だ。近代が始まってから、この考え方がひろまり、神さまや仏さまはどこかへ押しやられてしまった。

人間中心主義が広まった裏には、それを必要とした時代の背景がある。神さまに縛られていたのではなにもできない。より正確に言えば、神さまを大義名分にしてこの世を支配しようとする宗教界に縛られたのでは、真実を見極めることも、自由に活動することもできなくなってしまう。ちょうど、地動説を唱えたがために教会から有罪判決を受け、監視つきの邸宅に閉じこめられてしまったガリレオのように。

宗教界からの縛りを解くことで、人間の活動の幅はぐっと広がり、近代科学の飛躍的な発展につながった。

ただ、この人間中心主義という考え方は一步間違えればとんでもないことになる非常に危険なものを含んでいる。もし人間が神のような全知全能の存在や仏のような慈悲のかたまりのような存在になれるのならそれに越したことはないのだけど、人間がそんなふうになれるかと問われたら「否」としか答えようがない。

『カラマーゾフの兄弟』の主人公の一人であるイワン・カラマーゾフは「神がいなければすべては許される」と言った。つまり、殺人も許される――罪にならないということだ。こんなふうに人間中心主義という考え方をおし進めれば、人間から理性ややさしさを引っこ抜いてしまうことにもつながりかねない。人間から理性ややさしさを引っこ抜いてしまうということは、人間が動物化してしまうということだ。そうなれば、王様気取りの勘違いした動物ばかりが我が物顔でうろつくことになる。

ヒューマニズムは諸刃の剣だ。

ヒューマニズムによって、人間は自由を得た。人間の可能性が大幅に広がった。だけど、人間であることの条件を考えなければ、容易に一個の野獣と化してしまい、自分が誰かを食い物にしたり傷つけてしまったとしても、それを自覚することができなくなってしまう。僕が子供の頃は、「人としてそんなことをしてはいけない」とよくたしなめられたものだったけど、そんな言葉はもう死語になってしまったようだ。

人間を理性とやさしさを持った人間たらしめるものはなんなのだろう？　ほんとうの意味で人間を人間たらしめるものはいったいなんなのだろう？

その答えは人それぞれだろうけど、僕自身だけではとても自分の理性ややさしさを保つ自信はないから、神さまや仏さまやお天道さまといった超越的な存在しか思い浮かばない。そういったものが自分を支えてくれているからこそ、時には過ちを犯したり、人を傷つ

けてしまったりしながらでも、理性ややさしさをなんとかまったく失わずにすんでいるのだと思う。狂った世の中でまっすぐ立って歩くためには、今のところそれしか思いつかない。

誰が芸術写真を切り取った？（前書き）

芸術の秋にちなんで、ある芸術写真集について書いています。この話はR15です。

誰が芸術写真を切り取った？

一九九〇年頃のトップアイドルといえば、やはり宮沢りえさんを挙げないわけにはいかないだろう。とくにファンというわけでもなかったけど、テレビや雑誌で彼女の姿を見るときれいだなと思ったものだった。

一九九一年秋、彼女の写真集『Santa Fe』が出版された。ヘアヌードのはしりの写真集だ。人気絶頂のアイドルのヘアが写っているということで話題沸騰。社会現象までになった。今はヘアヌードなんて当たり前だけど、当時は驚くべきことだった。出版部数は一五〇万部。芸能人写真集では今でも総出版部数第一位なのだから。

当時学生だった僕は、友人が買ったのをすこし見せてもらったんだけど、ため息が出るくらいきれいだった。

ワイドショーでは、「宮沢りえさんは日本人と白人との混血なので、歳をとったら太ってしまう。だから今撮影した」などとリポーターが言っていた。この身体がいつかほんとうにぶくぶくに太ってしまうのだろうかと思うと不思議な心持ちになった。そんなことがあっていいのだろうか。

眺めているうちに僕もこの写真集が欲しくなった。いやらしいなどと言っではいけない。『Santa Fe』はれっきとした芸術写真集だ。男はみんな芸術を愛するものなのだ。僕が手元に置いておきたいと思ったのは、芸術を愛するがゆえであって、ほかの意図はない。信じてくれないかもしれないけど、ないと言ったらないのだ。ほかの使い道などありえない。

買いたいなと思っではみたものの、この写真集は一冊四千五百円もした。当時、アイドルの写真集はたしか二千円前後のものが多かったと思う。通常の倍くらいの値段だ。とても手が出ない。

悶々と過ごしているうちに耳寄りな話を仕入れた。

なんでも大学の図書館の研究書庫に『S a n t a F e』があるという。大学の図書館には一般書庫と研究書庫があって、一般書庫は学部生も自由に本を借りることができるけど、研究書庫は大学院生しか借りることができない。学部生は閲覧のみ可能だった。

借りられないのは残念だけど、見るだけでもと思って図書館の下にある研究書庫へ行くことにした。

階段を下りてからバッグをロッカーに預け、受付で登記。研究書庫へ入る理由を書く欄があったので、ロシア文学関係の研究書を閲覧するとか何とか適当に書いた。僕の心にやましいところはひとつもない。だけど、誤解する人がいるかもしれないから、用心するに越したことはないだろう。

窓のない研究書庫はコンクリートがむきだしになっていて味もそっけもなかった。なんだか秘密組織の秘密研究所のようで、白衣を着たマッドサイエンティストでも出てきそうだった。

パソコンの端末で検索すると、やはり美術書のコーナーに置いてあるようだ。メモに控えた番号を見ながら写真集がずらりとならんでいる本棚を調べた。

あった。

表紙はいささかいたんでいるけど、まぎれもなくあの『S a n t a F e』だ。

誰にも見られないようこっそり小脇に抱え、廊下の奥のほうの隅にある一人用の机に向かって坐った。さあ、芸術の秋を心ゆくまで堪能しようではないか。

ところが、表紙をめくった僕は目が点になった。

なんと、写真集はあなぼこだらけではないか。

芸術的なあまりに芸術的な美しい裸体の写真は、むざんにもカットで切り取られ、誰かに持ち去られてしまった。どこもかしこも切り取られた跡だらけだ。

あせった僕は次から次へとページをくった。服を着た写真や風景のなかで彼女が小さく写っている写真ばかり残っていて、もう一度

見たいと思っていた芸術的なショットはまったく残っていない。これでは魚のあらみたいなものだ。おいしいところがごっそり抜けている。

やれやれ。

くるのが遅かった。

もっと素早く情報を仕入れて、『Santa Fe』の入荷直後に閲覧すべきだったのだ。

僕は、生協で買ったばかりのミニカッターをそっとポケットへしまった。

誰が芸術写真を切り取った？（後書き）

芸術を愛するあまりとはいえ、図書館の本を切り取るのはよくないことです。よい子のみなさんは真似しないでください。

広州アジア競技大会前夜

十一月十二日から、広州でアジア競技大会が開催される。

準備は着々と整っているようだ。広州の南部には選手村が建設され、各競技会場の建設も終わった。会場のそばには羊のマスケットが飾られていたりする。ちなみに、広州の愛称は羊城。マスケットキャラクターはそれにちなんで制作された。

サッカー場やバスケットコートなどがある体育中心のそばを散歩していたら、濃緑色の制服を着た武装警察がそこかしこに立っているのを見かけた。武装警察の一個小隊が、手足をぴんと伸ばしながら会場の付近を行進していたりもする。まさに厳戒態勢だ。

地下鉄駅では荷物検査が始まった。

地下鉄に乗るためにいちいちX線検査機にリュックを通さなくてはいけないので面倒くさいことおびただしい。大イベントはみんなそうなのだけど、イベントに絡む商売をしている以外のごく普通の一般住民にとって、あまりいいことはない。交通規制やらなんやらでいろんなことがやりにくくなってしまふ。

ビジネスでも影響が出ている。広州一帯ではビルなどの建設工事が禁止になった。中国の建設工事は防塵対策をしないので、埃がそこらじゅうに飛び散ってしまう。建設規制は、工事による大気汚染を防ぐためだ。僕の勤め先もこの規制にひっかかり、新倉庫の建設がアジア競技大会の後に開催されるアジアパラリンピック以降まで凍結となった。

高速道路にも検問所ができて、時々、検査のために車をとめられたりする。十一月からナンバーによる交通規制が始まるので、不審者対策も兼ねて設置されたようだ。検問所にはライフルをかかえた警察がいるので、あまりいい気持ちはしない。

ビザの取得も以前より手間がかかるようになった。

通常、一大イベントを開催する場合は、ビザの取得要件を緩和し

たりして、外国からどんどん見物客を招くものなのだけど、中国の場合は反対だ。北京オリンピックの時はビザの発給を制限して、なるべく外国人がこないようにした。あの時は観光ビザも取れなかったうえに、ビザなしで入国しても、その延長が困難だった。今回も、北京五輪時のような厳しいビザ発給制限とまではいかないけど、地方政府はなるべく外国人を減らすようにしているらしい。

パスポートを携帯していないと罰金五百元だそうで、公安は時々、外国人に対する一斉検査を実施している。主に、外国人宿泊客の多いホテルの付近にある飲食店へ立ち入り検査を行なうようだ。僕の知り合いは五つ星ホテルの近くにあるマクドナルドでハンバーガーを食べていたら、公安にパスポートを見せろと言われたそうだ。僕も、日本焼酎バーでどんこつラーメンを食べていたら公安にパスポート、就労許可証、臨時住居登録証の提示を求められたことがあった。

中国人の友人によれば、外国人が大勢きたのでは混乱してしまうので、そうしているのだとか。その話を聞いた時、僕は驚いてしまった。

「なんで？ アジア競技大会はアジアの大会なんだよ。中国の大会なら、外国人を制限するのはわかるけど、アジアの代表として広州で開催してるわけだから、アジア人に来てもらうべきだよ。そのほうが大会が盛り上がるんだから」

僕は彼にそう言ったのだけど、彼はぴんとこないようで、

「とにかく、外国人が大勢きたら人が多すぎて混乱してしまうよ。外国人にめっちゃくちゃされたら困るじゃない。政府もそう言っているよ」

と、なに喰わぬ顔で平然と言う。

よく言えば、彼は政府の言うことを素直に受け取っているようだ。悪く言えば、自分の頭で物事を考えていない。一般的に言って、中国人は目の前に置かれた現実にはめっぼう強いし頭もいいけど、自分の半径三十センチを越えた事柄に関しては驚くくらい政府の言い

分を鵜呑みにする。

このような外国人を制限するという考え方はおそらく、チャイニーズスタンダードというべきもので、国際社会では通用しないものだろう。アジア競技大会は中国のものではない。すべてのアジアの国のものだ。このような考え方はアジア競技大会の私物化にほかならない。「誘致に成功したからにはうちのもの」という発想しかできないのは、理解に苦しむ。

もっとも、これが中国文明の限界といえそうなだけど。この国には公^{パブリック}という発想がない。すべてが私^{プライベート}の延長線上にしかない。アジア競技大会のような政府事業にしてもそうだ。社会の公共性を重視するということは、中国ではほとんどないと言っている。

一大イベントなので警備を厳重にするのは理解できる。
なにがなんでも成功させたいという地方政府の意気込みも理解できる。

しかし、開かれたイベントを開催できない国が、開かれた国になるはずがない。経済発展にしたがって中国の民主化も進むという意見をちらほら見かけるけど、そんな意見を言う人ははっきり言って中国の実情をまったく知らない人だ。北京オリンピック時のビザ発給制限や今回の件を見てもわかるように、中国が開かれた社会になるのはまだまだ遠い先の話だろう。

天津飯を食べたいなあ

せっかく天津へきたのだから、本場の天津飯を食べたいと思って「天津飯のおいしいレストランを教えてほしい」と地元の人に訊いてみたのだけど、「天津飯」なる料理はないという答えが返ってきた。それでもあきらめきれずにいろいろ訊いてみたけど、みんな不思議そうに首をかしげるだけだった。

日本語の上手な天津人に訊くと、天津飯は日本で作った「中華料理」ではないかと言う。もしかしたら、日本へ渡ってきた天津人のコックが「天津飯」と称して売り出したのかもしれない。高校生の頃、週に二回くらいのペースで天津飯を食べていた。せっかく楽しみにしていたのに、あてが外れてしまった。

広東省に二年くらい住んでいるけど、広東麺も見かけたことがない。こちらにも、地元の広東人に訊いてみたのだけど、みな知らないと思議そうに答えるだけだ。これも、日本で作った「中華料理」なのだろう。

そういえば、昔長野県へ旅行した時、祭りの夜店で大阪焼きなるものを見つけた。お好み焼きの中身を回転焼きの型で焼いたものだった。僕は大阪生まれの大阪育ちだけど、そんなものは生まれて初めて見た。なんだか怪しいので、さすがに買わなかったけど。

〇〇と地名をつけた料理は、残念なことに、案外その地にはないものだ。それは重々わかつているけど、中国に住んでいるのに天津飯を食べられないのは、なんだか割り切れない気がする。

天津飯を食べたいなあ。

トン汁か、豚肉入り味噌汁か

広州の日本居酒屋へ入った時にトン汁を頼んだら、微妙なものが出てきた。

味はまずまずおいしいし、いちおうトン汁のかたちにはなっている。だけど、やっぱりなにかが足りない。トン汁というよりも、豚肉入り味噌汁といったほうがいいような味だ。

いっしょに酒を飲んでいた日本人と、

「煮込む時間が足りないのですかねえ」

などと、話したのだけど、彼も僕もトン汁の作り方を知らないの
で、結局結論は出なかった。

味噌汁に豚肉を入れてぐつぐつ煮込めばトン汁になるというわけでもなさそうだから、やっぱり、きちんとしたトン汁の味になる調味料かなにかを入れなくちゃいけないのだろうな。

なにをどうすれば、豚肉入り味噌汁がトン汁になるのだろう？

奇妙な流出ビデオ

尖閣諸島で「領海侵犯」を行ない、日本の巡視船にぶつかってきたという中国漁船を撮影したビデオがユーチューブに流出した。

今回の尖閣諸島問題は奇妙な点が多い。

まず第一に、長年にわたって問題を先送りになっていたにもかかわらず、突然方針を転換し、強硬な態度を取り始めた。それならそれでかまわない。

尖閣諸島は日本が実効支配しているのだから、中国漁船が悪質な行為を働いたという決定的な証拠があると主張するのなら、最初からビデオ映像を公開し、法に基づいて正々堂々と対処すればいい。中国共産党政府に遠慮することなど一つもない。

ところが、日本政府の対応はどうにも腰の定まらないものだった。いっこうにビデオ映像を公開せず、あまつさえ逮捕拘留した漁船の船長を「那覇地検の判断」で釈放してしまった。外交問題を地検に判断させるだろうか？ 通常、そのようなことはありえない。中国の強硬な態度にびびった日本政府が釈放させたに決まっている。この問題におびえていたのは中国政府も同じだったのだが、日本政府は問題の落とし処も考えずにさっさとチキンレースからおりてしまった。

問題のビデオ映像は、やっと公開されたと思ったら、一部の国会議員だけが観て部外秘とされた。外交には様々な機密事項があるから、やむをえない処置かもしれない。

ところが、極秘扱いにしたはずのこのビデオ映像は、あっけなくユーチューブにアップされてしまった。嚴重に保管されているはずのビデオ映像がこんな簡単に流出するものなのだろうか？ 政府内部の誰かがある意図——悪意といっていいだろう——をもってわざと流出させたとしたか考えられない。

六本に分割されたユーチューブの流出ビデオを観た。

あの映像を観た限りでは、中国漁船が故意に日本の巡視船を挑発したり、悪質な衝突行為を働いたとは思えなかった。逃げ惑ってたまたま日本の巡視船にぶつかったように感じる。パトカーに追いかけられたバイクがあわてて進路を誤り、パトカーへぶつかってしまったようなものだ。

一本目の動画にはもう一隻の巡視船の姿が映っていた。あの巡視船はいったいなにをしていたのだろうか？ 映像を見ればわかるように現場には二隻の巡視船がいた。二隻の巡視船が狩りをするように、一隻が中国漁船を追い込み、もう一隻にぶつかるようにしむけたのではないか。

映像はところどころ途切れている。つまり、編集されているわけだ。都合の悪い部分はカットして、中国漁船がさも悪質な行為を働いたようにみせかけるために編集した可能性は高い。

観終わった後も釈然としなかった。どうにも腑に落ちない。

政府はこの映像が決定的な証拠にならないことがわかっていたら、撮影したビデオ映像の公開を先延ばしにしていたのではないだろうか？

そもそも、この問題が起きたのは民主党代表戦の直前だった。

ご存知のように小沢一郎と菅直人で代表戦が戦われたのだが、ふたりの外交スタンスをざっくりわけると、小沢氏は対米対等親アジア派、菅はアメリカ隷属派となる。日中関係にひびが入った場合、困るのは小沢氏だ。漁船の船長を逮捕拘留したのは、小沢氏への嫌がらせだったのではないかと勘繰りたくなる。

しかも、ビデオ映像が流出した今月末（二〇一〇年十一月）には沖縄知事選挙があり、基地賛成派と基地反対派にわかれて戦うことになる。中国脅威論をあおれば、米軍基地賛成派候補に有利だ。米軍に出て行けとはいにくくなる。そこで、米軍基地賛成派の知事候補を当選させるために、誰かがビデオ映像流出をわざと仕組んだのではないだろうか。

ここまで、「誰か」が背後で仕組んだ罠だと書いてきたが、この誰かとはここまで書けばわかるだろう。もちろん、アメリカとアメリカの意向を受けた日本人だ。日本の現外務大臣もその例外ではない。

尖閣諸島の問題は、中国政府の面子を立てるために日本側ができるだけの譲歩をして問題を棚上げし、日本側は実効支配を続けるだけでよかった。それにもかかわらずことを荒立てたのは、ある悪意があるんじゃない。

日本と中国が仲良くなって困るのはアメリカだ。アメリカがわざと日本と中国の仲を引き裂き、日本と中国の対立状態を作りだすことで、日本をアメリカ側にひきつけておこうとしているようにしか思えない。

アメリカは、南沙諸島でもベトナムと中国の対立をあおっている。アメリカは中国を脅威とみなし、中国の周辺諸国をまきこんで中国の封じ込めをはかっているのだろう。

さらに勘繰れば、アメリカは日本をけしかけて中国と戦争をさせたがっているようにも思える。歴史をひもとけば、ごくささやかな領土紛争が全面戦争へつながった例はいくらでもある。そうならないことを願うばかりだが。

この問題の背後では、日中間の紛争を利用して漁夫の利を得ようとする連中が暗躍している。ろくでもない中国共産党政府を擁護する気などさらさらない。経済発展によって国力が増した中国は、態度が尊大になっていることも事実だ。だが、かといっていたずらに中国脅威論をあおりたてるのは問題だ。

悪意をもって尖閣諸島問題をあおりたてる連中に踊らされてはいけない。

あくまでも冷静に、突き放した視点でこの問題をみる必要があるだろう。

奇妙な流出ビデオ（後書き）

流出ビデオの問題は、現時点では中国でも大きく報道されています。
（2010年11月6日記）

僕という迷宮

若かった頃、自分の心が不思議でしかたなかった。

誰でもそうだろうけど、若い頃は心が揺れ動きやすい。ほんのちよつとした誰かの言葉に感動したり、動揺したり、傷ついたりする。友人や読んだ本からの影響も受けやすい。自意識が異常に過剰だったりするから、今から思えばどうでもいいようなことで死ぬほど恥ずかしくなったり、くよくよ悩んだりもした。

めまぐるしく動く自分の心は、まるで迷宮だ。^{ラビリンス} どうして誰かを好きになったり、嫌いになったりするのかもよくわからない。逆もまたしかり。

心がいったいどういう仕組みになっているのか、摩訶不思議な自分の心の正体を知りたくて心理学の本を読み漁った。

心理学関係の著作は書店の棚にいっぱいならんでいるけど、なかでも河合隼雄さんの著作をよく読んだ。

河合先生は日本にユング心理学を紹介した第一人者だ。ユング心理学自体、どこか東洋的な思想を感じさせるものなのでそれが僕の心にフィットしたのかもしれない。それを日本流にアレンジした河合先生の分析や考察もわかりやすかった。迷宮のように複雑な心にもコード（ある一定の構造）があるのだと知って、なんだか安心できるとような心持ちになれた。^{アーキタイプ} 目から鱗が落ちるようだった。

人間の心にはいくつもの原型がある。たとえば、映画『スターウォーズ』には主人公のルークとダースベイダーの決闘シーンがあるけど、それは「父親殺し」という原型だ。

これはオイディプスコンプレックスと呼ばれるもので、ギリシャ神話のオイディプス王の話から名付けられた。男の子は父親を乗り越えようとする中でなにかを掴み、成長する。このテーマは人類にとって普遍的なもので、たとえば、ドストエフスキーの『カラマ

『ゾフの兄弟』や村上春樹の『海辺のカフカ』といった文学作品でも繰り返し描かれている。

人間の心には、テリブルマザーという恐ろしい怪物も住んでいるらしい。

慈母という言葉があるけど、テリブルマザーはまったくその正反対の存在だ。子供の心を飲みこみ、すべてを自分の支配下に置こうとする。童話やファンタジーでは、たとえばヘンゼルとグレーテルの話に出てくる魔女のように恐ろしい老婆として描かれることが多い。身近な例でいえば、教育ママというのもこれにあてはまるだろう。

河合先生の本はほんとうに勉強になった。わけのわからないことだらけだった心の秘密を解明できたようで楽しかった。

だけど、そのうちはたと困ってしまった。

いくら心理学の本を読破してみても、どうしてもわからないことがある。仕組みというものは、たんなる枠組みに過ぎない。

僕が感じている痛みや怒りや焦りはどこからくるのだろうか？

人を好きになった時に感じる胸がいっぱいになるような心持ちはどこからくるのだろうか？

僕は、心の枠組みよりも、自分の心を突き動かしている動力源を知りたかった。

人間の心にはメカニズム論だけでは解き明かせないなにかがある。人間の心にはある一定の構造があるにせよ、心は決してメカニズムそのものではない。心のメカニズムだけしか見ないということとは、人間の体に通っている温かい血を否定することだ。心臓の鼓動を無視するということだ。メカニズム論はたしかに便利だけど、うっかりしていると、そのメカニズムの枠組みのなかでしか物事を考えられなくなる。人間の心には底知れない力が宿っているはずなのに、それでは生きる気力が奪われてしまう。

心理学は心を知るためのいい補助線にはなるけど、心の本質までは解き明かしてくれなかった。僕は、また迷宮をさまよい歩くよう

な気分へ逆戻りした。

心の源泉という問題をつきつめれば、なぜ生きているのかということにぶちあたる。

今から思えば、僕は自分の心を知りたいというよりも、むしろなぜ生きているのかということを知りたかったのだと思う。なぜ、喜怒哀楽を感じながら生きているのだろうか？ さらに言えば、なぜ僕は心を持っているのだろうか？ そんなことを知りたかったのだろう。追いつめられていた僕は自分の心が恨めしくてしょうがなかった。心なんてなければいいのに、と何度も思った。いつそ潰れてなくなってしまうばいいのにと。

こうなれば、もう信仰の領域でしか解決のつかないことなのかもしれない。

それも、習慣やしきたりや伝統といった袈裟を着たお仕着せの宗教ではなく、神さまか仏さまかお天道さまかは知らないけど、そんな偉大ななにかと一対一でさして向かい合い、純粹な問いかけを投げかけるところからしか糸口が掴めないものなのだろう。そうして全身全霊を傾けて掴み取ったもののしか、僕にとっての真実にはなりえないのだろう。

嬉しいことに出会ったり、いろいろ痛い目に遭ったりして、ほんのひとかけらだけ物事がわかるようになった。

おそらく、僕自身は自分が主体的に生きているように思っているけど、じつはそれはまったくの錯覚で、だれかに生かされている。なにかが僕を生かしている。なんとなくそんな風に感じる。だけど、まだまだわからないことだらけだ。

僕は、もういい年をしたおじさんになってしまった。

それなのに、今でも気持ちが揺れ動きすぎて自分の心がわからなくなるがしよっちゅうある。心の振り子は愛と罪の間をいったりきたりして、やさしくなろうという気持ちとエゴイズムという名の打算がないまぜになって混沌とする。自分自身の心をつぶさに点

検してみれば、僕はこんなことを感じているのかと今でも発見がある。

僕という迷宮の謎は、まだまだ解けそうもない。
迷うことは進むこと。

そう思っ、て、てくてく歩こう。

徹底した警戒態勢というか　（広州アジア大会開幕の裏側）

今日（二〇一〇年十一月十二日）、広州アジア大会が開幕する。たぶん、日本のテレビには競技会場の模様しか流れないだろうけど、市内は物々しい警戒態勢だ。会場付近では隊列を組んだ武装警察がしょっちゅう巡回している。

今晚、開幕式会場のあたり一帯は封鎖され、車、バス、タクシーが進入禁止になる。おまけに、会場付近の地下を走る地下鉄までも運休になる。わけのわからない措置だけど、地下で事故かテロがあったては困るということだろうか。そうとしか理解のしようがない。

さらに、会場付近の住人は、今晚自分の家を追い出され、自宅にすることができない。政府から一戸当たり三〇〇元が支給されるので、自分でホテルの部屋を取るのだとか。この話を聞いたときはさすがにびっくりしてしまった。日本でなら絶対に通らない措置だけど、独裁国家の中国ではまかり通ってしまう。でも、自分でホテルの部屋を探せといわれても、たぶん会場付近のホテルはみんな埋まっているだろう。追い出された人たちは親戚の家にも泊まりにくのだろうか。自宅のマンションの部屋から開幕式の様子を眺めようと楽しみにしていた人たちにはなんとも気の毒な措置だ。

今年三月のことだったけど、アジア大会のからみで、僕は広州郊外に間借りしていた安い部屋を追い出されてしまった。

公安がやってきて、「アジア大会があるので、外国人はこんな治安の悪い部屋に住んではいけない。なにかあると面倒だし、こっちが困るから出て行ってほしい」と言う。もちろん、表立ってそんなことは言わないけど、にこやかなつくり笑顔で話す言葉を意識するとそういうことになる。

出稼ぎ労働者が集まっている場所だったので、物価は安いけど、たしかに治安は悪かった。泥棒にやられたこともある。とはいえ、会場付近でもなんでもないので住んでいる部屋を出て行けとはあん

まりだ。僕がブラックリストに載っているとも思えないのだけど、とにかく、不安要素はすべて取り除こうということらしい。結局、部屋が見つかるまでの二日間、ホテル暮らしを余儀なくされてしまった。なんでもない外国人までも排除しようとするほど、広州の治安当局は神経を尖らせている。

日本の選手団にはがんばってもらいたいけど、こういった裏側を見てしまうと、アジア大会開催を素直に喜ぶ気にもなれない。

僕にとってアジア大会は、独裁政府がその気になれば市民の日常生活を犠牲にしてなんでもできるという権力の暴力性を学習するいい機会だった。

下半分だけのお月さま

今住んでいる広州市の北緯は約二十三度。だいたい北回帰線上にあたるので、夏至の頃は太陽が真上から照らすことになる。十二時くらいのちょうど南中した頃に外へ出てみると、自分の影は足元に申し訳程度にあるだけでほとんどなかった。歩いているうちにだんだん影が伸びてきたけど、それでもかなり短い。上から押さえつけて圧縮したようだ。なんだか自分が小人になったような気分だった。ここから眺める月は、日本とは違った形をしている。

下からだんだん欠けて半月の頃には、上半分だけのお月さまになる。新月を越えると、今度は中身を全部食べてしまった西瓜の切れ端のような下弦の月が現れて、次の半月の頃には下半分だけのお月さまになる。当然といえば当然のことなのだけど、そんな月を初めて見た時は不思議な気分だった。

ところで、仏教では月の光は真理を表すそうだ。やわらかい月光こそがこの宇宙の真理なのだとか。

日本で見える真理の形と広東で見える真理の形が違っているだなんて、まさかそんなことはないだろうけど。

口ひげ男の哑然な口説き方

いきつけの日本居酒屋で食事をしていたら、インド人かパキスタン人かそれとも他の国なのかはわからないけど、ともかく南アジアもしくは中東系の口ひげを生やした中年男が二人入ってきた。二人ともジャージ姿だ。どうやらアジア大会で広州へやってきたスポーツコーチのようだった。

なんと口ひげ男は、生ビールを運んできた広東人のウェイトレスに、

「会いたいから、明後日、お前の部屋へ行く」

といきなり訛った英語で宣告するではないか。

ウェイトレスは、私の部屋はテレビがないからなどと言って婉曲に断ったけど、「会いたいから行くんだ。明々後日しあさってはもうここを離れて国へ帰るから明後日しか会えない」とかなり強引。ウェイトレスはしかたなく「わかったわ」と答えてその場をおさめた。

ボトルで入れた焼酎を飲んでいた僕はなにげなくやりとりを聞いていたのだけど、哑然としてしまった。

そのウェイトレスはしっかりした子だ。中学を出てすぐに働きに出ているから僕なんかよりもよっぽどしっかりしているし、居酒屋で働いていればいろんな客がくるから助平オヤジをあしらう術も心得ている。たぶん大丈夫だろうとは思ったのだけど、とはいえ、なにかあったら助けてあげなくてはと、それから一応彼女と口ひげ不良外人の会話に耳をそばだてておいた。なかなか酔えない。

広東人はよくも悪くもしたたかだ。けっこうずる賢い。危険を察知したら笑顔でさらりと逃げてしまう。彼女はあたりさわりのない冗談を言って客を笑わせながらも、それ以上、彼らになにも言わせなかった。

店を出る時、

「わかつてると思うけど、あんなやつらを部屋に入れたらあかんで」

と僕が言ったら、

「わかってるわ」

と、彼女は面倒くさそうにうなずく。

「こんなのはたまにあることだから」

適当に煙にまくのだろう。商売柄とはいえ、助平おやじの相手をしなくてはいけないのはつらいところだ。

それにしても、初対面の女の子にいきなりお前の部屋へ行くなどというあんなストレートな口説き方は初めて聞いた。欲望が丸出しではないか。そんなので女の子を落とせるとでも思っているのだろうか。まさか、口ひげ男の本国であんなやり方が通用するわけでもあるまい。

日本人でも中国へやってきてから女遊びに目覚めて頭のヒューズが飛んでしまったような人をたまに見かけるから、国や民族を問わず、外国ではなにをやってもいいんだと勘違いして妙な弾け方をしてしまう男はいるものだ。だけど、それにしてもなんとも理解に苦しむ口説き方だった。

？好（ニーハオ）——中国の田舎では使わない言葉

いちばん最初に習う中国語は、やはり「？好^{ニーハオ}」だ。日本人の場合、わざわざ教えられなくても知っている人がほとんどだろうけど、語学はあいさつの言葉から学び始めるのがお約束だから、とりあえず勉強することになる。「？好」の意味は、もちろん「こんにちは」。

ところが、日本人でも知っている「？好」が中国の田舎で通じなくてびっくりさせられたことがあった。

以前、雲南省の農村出身の友人が帰省する時にいっしょに連れて行ってもらったのだけど、出会った村人たちに「？好」とあいさつしてみても、みんなきょとんとするだけだ。なにも話さず、ただ不思議そうに僕の顔を見る。ぽかんと口を開ける人もいる。

不思議に思った僕が、

「いくら標準語が通じにくいといっても、みんな？好くらい知っているよねえ」

と友人に訊いてみると、

「このあたりじゃ？好なんて言わないわよ。あいさつする時は『ご飯を食べた（吃？了？）？』とか『どこへ行くの（？去？里？）？』って言うものなのよ」

と、説明してくれた。

田舎の農村のことなのでみんな顔見知りだから、そもそも知らない人にあいさつをする機会がない。だから、彼らの方言にはそれにあたる言葉もない。日本語で言えば「こんにちは」という言葉がないようなものだ。

「使い慣れない言葉で呼びかけられたから、みんなびっくりしちゃったのよ」

彼女は楽しそうだった。

夜、村のおじさんたちといっしょにお酒を飲んだ。

おじさんたちは、

「あいさつすんときはやな、？好って言うんや。これからは標準語くらい話せんとあかんわな」

「そうやで。これからの時代はやっぱり標準語やで」

「標準語を話せたら誰とでも話ができるしな」

「当たり前やん。標準語は中国人共通の言葉なんやから」

などと口々に言い、お互いに肩を叩きあって盛り上がる。

「？好、？好。カンパーイ」

挙句の果ては、？好という言葉を着にして乾杯までしてしまった。いったいどこの国の人やねんとツツコミたいところだけど、国土も広大だし、十三億人もの人口がいるのだから、全員に同じ言葉で話しましょうといってもむりがあるのだろう。あるいは、日本人が「これからは英語くらい話せなくっちゃねえ」と言うのと似ているのかもしれない。実際、おじさんたち自身はがんばって標準語で話しているつもりなのだけど、訛りがきつくてよくわからないことも多かった。会話に行きづまると、友人を呼んで標準語と方言の通訳をしてもらった。もっとも、言葉が通じなくてとんちんかんやとりになっても、それがまたおかしくて笑い転げたりもするのだけど。あたたかく迎え入れてくれて楽しかった。

翌日、村を散歩していると、

「？好っ」

と笑顔で呼びかけられた。ゆうべいっしょに酒を飲んだおじさんだった。

コンビニのレジの脇で発見したもの（前書き）

この話はR15です。

コンビニのレジの脇で発見したもの

日本のコンビニも中国へかなり進出していて、広州市内にはセブンイレブンやファミリーマートがあちらこちらにある。ローソンは上海へ進出しているようだけど、広州まではきていない。

中国資本のコンビニもあるけど、品揃えはやはり日系のほうが好みにあうので、ファミリーマートやセブンイレブンをよく利用している。たとえば、中国で販売しているサントリーのウーロン茶の場合、砂糖入りと無糖の二種類があるのだけど、中国資本のコンビニでは砂糖入りしか売っていなかったりする。こちらの暮らしにもずいぶん慣れたけど、それでもやっぱり砂糖入りのお茶は飲めない。

この間、朝、日系コンビニで缶コーヒーを買おうとしてびっくりしたことがあった。

日系、中国系を問わず、コンビニのレジの脇にはたいていコンドームが置いてある。それも目立つようにずらりと並べてあったりする。日本のコンビニでもレジの脇に置いていたような気がするけど、レジの周りには「ついで買い」で回転のいいものを置くのが鉄則だから、けっこう売れているのだろう。

何気なく缶コーヒーをレジへ置いた僕は目が点になった。

な、なんと、コンドームの隣にバクブレーターが置いてあるではないか。見間違えたかなと思って手にとってみたのだけど、まちがない。あの大人の玩具だ。お値段は二六〇元（約三千円強）也。思わず、まじまじと見てしまった。

使ったこともないし、買おうとも思わないけど、レジの脇に置くということは、やっぱり売れているんだろうなあ。

サヨナラだけが人生だ

世の中へ出れば、たえずいろんなことに折り合いをつけなくてはならない。

世間が欲望の総体だとすれば、人と人の欲望はいつもぶつかりあう。本格的に衝突する前に折り合いをつけなければ、とんでもないことになる。取引先とも、上司とも、同僚とも折り合いをつけながら仕事をする。折り合いをつけることが仕事といってもいいかもしれない。別の言い方をすれば談合だ。人と交わる時も、角を立てないように折り合いをつけながら相手と話をする。折り合いをつけることが話をするということなのかもしれない。ごく一部の親しい人をのぞいて、ほんとうの気持ちは誰にも言えないから。

相手ばかりではなく、自分自身とも折り合いをつけなくてはならない。

理想の自分の姿があったとしても、それが100%叶うわけでもない。自分が英雄^{ヒーロー}であるはずもない。だから、自分を取り巻く現実と自分自身とに折り合いをつけなくてやっていかなくはならない。折り合いをつけたところで、なるべく自分のやりやすい道を模索する。

もしかしたら、いろんなことに自然と折り合いをつけることのできる人が生き方上手なのかもしれない。

ただ、どうしても折り合いをつけられないこともある。

相手に自分の世界に住んでほしいと言われた場合がそうだ。

それだけではどうしてもできない。相手はそれで満足できるのかもしれないし、幸せになれるのかもしれないけど、それでは自分が窒息してしまう。言い方を換えれば、相手の欲望に飲みこまれるということだ。自分の人生を自分自身で生きられなくなってしまう。

こうなれば、その人と袂^{わかれ}を訣つよりほかにない。

——サヨナラだけが人生だ。

そうつぶやいて、相手の世界から去るよりほかに術はない。たとえそれが親や恋人であったとしても。

むろん、自分の世界に住んでほしいと望んだ人を批難する気持ちは毛頭ない。そう願わずにはいられないのは、独りでは生きていけない人間の悲しい性なのだから。僕自身も、時に、相手にそう望んでしまうものだから。どうしても、求めてしまうものだから。

アジア大会閉幕式をテレビで見ながら

夕方、仕事場から家へ帰る途中、突然、高速道路が渋滞した。

車はうんともすんとも動かない。道路が封鎖されたとは思えない渋滞の仕方だった。

さいわい五分ほどですぐに車は流れ出したのだけど、前へ進むと案の定、アジア大会専用車のステッカーを貼った大型観光バスが十数台、数珠繋ぎになって走っていた。選手や関係者を乗せたバスをスムーズに高速道路へのせるために、一時閉鎖していたようだ。並走するバスのなかをのぞいてみたら、不思議なことに、ほんの少数しか乗っていないのが多かった。選手の人数分バスを用意したのだけど、競技の終わった選手が閉幕式を待たずに帰国したためにあまつてしまったのだろうか。バスの隊列は時速百キロですっかり暗くなった高速道路を飛ばす。その前後を公安のパトカーが護衛していた。

市の中心部へ戻った後、そのままレストランへ入った。壁に大画面のテレビがかけてあって、アジア大会閉幕式の番組を流している。まだ始まっていないので、放送スタジオにいるアナウンサーとアシスタントが興奮気味になにやら話している。地元のテレビ局の中継だったので、広東語での放送だった。なにを話しているのかはまったく聞き取れない。

八時ちようど、オリンピックなみの凝りに凝ったショーが始まった。次々と花火があがる。街中で打ち上げ花火をあげるため、開幕式の時と同じように会場一帯が封鎖された。ただ開幕式の時とは違い、通行許可証があれば、地域住民は封鎖エリアへ入って自宅へ戻ることができる。

次は、歌舞ショーだ。踊り子がわんさかいるので、まるでマスキームを観ているみたいだ。ショーはプログラムを替えながら延々と続く。そろそろ終わりかなと思って、また違うショーがはじまる。

中国風のショーばかりでなく、インド風、日本風といった各参加国のものもあった。中国人は派手で大きなことを好むから、こんな大掛かりなものをやりたがるのだろう。レストランの手の開いたウェイターたちはずっとテレビを観ているので、呼んでもなかなか気づいてくれなかったりする。ショーは約五十分ほど続いて終わり、ようやく閉幕式の宣言が始まった。中国人は喜んでいるのかもしれないけど、僕には自己陶醉としか思えないショーだった。

一緒に食事をしていた日本人に、

「もし日本でアジア大会を開いたとして、こんなショーをやったらどうでしょうね？」

と訊いてみたら、

「税金の無駄遣いって批難されるでしょうね」

「そもそもこんな派手なショーをする予算が取れないでしょう」

と、冷静な答えがそれぞれ返ってきた。

おそらく、二人とも当たっている。

高度成長が続いているから、政府の資金は潤沢だ。いくらでも無駄遣いできる。だけど、繁栄はいつまでも続くものではない。

——今が中国のいちばんいい時期なんだろうな。
テレビ画面を観ながらふと思った。

男はみんな浮気者と言うけれど

「男はみんな浮気者よ。だから、怖いわ」

中国人の女友達とお喋りしていたら、ふと彼女はしょんぼりした。「どうしたの？」

僕は訊いてみたのだけど、彼女は恨めしそうな顔をしてどこかを見るだけでなにも言わない。

男は浮気者だと主張する中国の女の子は割合多い。独占欲が強いから、それだけ猜疑心も強くなるようだ。中国の女の子の場合、普通に友達付き合いしていても、彼氏ができた途端に彼氏以外の男を拒絶するような態度を取る女の子もけっこういる。

「友達なんだからさ、そんな冷たい態度をとらなくてもいいだろ」
と言ってみても、

「彼氏ができたから」

と言って頑かたくなだったりする。真面目な子ほどこんな傾向が強いようだ。ふつうに仲良くしてたのに、掌を返したように冷たい物言いをされたり、冷たい態度を取られたりしてさびしい思いをしたことが何度かあった。

パーティーの初めにみんなで自己紹介しあう時、カップルで参加している女の子は、

「わたしは王君の彼女です」

などと堂々と宣言する。裏をかえせば、「王君はわたしの彼氏だから横取りしないでよ」とその場の同性へ警告を発しているわけだけど、男も「劉さんの彼氏です」と言わなければいけないらしい。こう言わないと、浮気しようとしているんじゃないかと疑われるそうだ。

中国の場合、恋愛Ⅱ結婚という考え方がまだまだ根強い。

彼氏ができたばかりだという別の女の子と話していたら、彼女はなにやら怒っている。どうしたのと訊くと、

「彼がわたしと結婚しようと言ってくれないんです。わたしはもう別れようと言いました。ひどいです」

といって悲しそうな顔をする。

「まだ付き合いはじめたばかりだろう？　結婚なんてゆっくり考えればいいじゃない」

僕は慰めてみたのだけど、

「もし結婚する気もないのに付き合っていたら、時間の無駄遣いになります。親にも怒られます」

と言って彼女は首を振る。

「結婚したいんだ」

「当たり前じゃないですか。彼はわたしのことを好きだと言います。でも、結婚しようとは言いません。わたしがはっきりしてって言っても、彼はなんにも言わないんですよ。ずるいです」

「それで別れるの？」

「いいえ、もうちょっとお互いを理解しようと思っています」

眉間に皺を寄せていた彼女は楽しそうに笑った。惚れた者の弱みというのはこういうことを言うのだろうな。僕が納得しかけた矢先、

「だから、わたしたちはまだ恋愛をしていないんです」

と、彼女はわけのわからないことを言い出した。

「えっ？　どういうこと？　付き合っているんじゃないの？」

「結婚を考えて付き合うなら恋愛ですけど、そうでないからまだお互いを理解しあっている段階なんです。彼がわたしとの結婚を考えてくれるなら、わたしは彼と恋愛します」

「結婚を前提に考えないお付き合いだなんて、恋愛じゃないってことだね」

彼女の理論にはいささかびっくりさせられたけど、恋愛⇨結婚という考え方が強い中国ではそういうものなのかもしれない。

「でもさ、いちおう、どっちかが相手のことを好きだって告白したんだよね？」

「ええ、まあそうですけど」

「どっちから告白したの？」

「彼からです。彼がわたしのことを好きって言ってくれました。女の子が告白するのはあまりよくないです」

彼女が言うには、女の子は自分は浮気するようなふしだらな女ではないことを証明するために、男から告白されるのを待つものなのだとか。好きな男がいても、自分から言わないのだそう。自分から告白すれば、あっちの男へ近寄ったり、こっちの男へ言い寄ったりする浮気性な女だと思われてしまうから、それが嫌だと言う。たぶん、保守的な女の子なのだろう。べつに好きなら好きと言えばいいと思うのだけど。

なんだかんだと話しこんでいるうちに、また男の浮気の話になった。彼女も男はみんな浮気者だと言う。中国の女の子の頭には、「男＝浮気者」のイメージがすっかり刷りこまれているようだ。

「中国の女の子はみんなよくそういうけど、そうじゃない男だっているだろう？」

「浮気しない男はいません」

彼女は真顔できっぱり断言する。

「そんな怖い顔をしないでよ」

すきあらばと狙うのが男の性かもしれないけど、あんまり疑いすぎるのもよくないと思うんだけどなあ。

英語を話そうとすると……

数年前、京都の鴨川沿いの道を散歩していたら、白人のお兄さんに英語で道を訊かれた。彼が広げたプリントアウトの紙には簡単な道筋が描いてあって、目的地に星印がついている。京都の町の地理には疎いんだけど、○条通りと道の名前がローマ字表記であったから、それと道の標識を照らし合わせた。ご存知のように京の町は碁盤の目のようになっていいるからわかりやすい。

「ゴー・ストレート、アンド・ターン・ライト」

と英語で言おうとしたら、

イージーワンチェンゾウ ランホウヨウグアイ
「一直往前走、然后右拐」

と中国語が口をついて出てくる。僕は慌てて英語で言いなおした。お兄さんはふむふむとうなずく。

ほっとしたのもつかのま、

「この通りはここでいんだよね」

といったことを訊いてくるので、

「イエス」

と言おうとしたら、

ドゥイ
「对」

とまた中国語が出てくる。僕がうなずきながら言ったから、わざわざ英語で言い直さなくてもこれであっているかわかってくれたようだった。たぶん、あのお兄さんは僕が日本語で返事したと思ったんだらうな。

バックパッカーをしていた頃は、ごく簡単な英語でピーチクパーチク話していた覚えがあるけど、今ではすっかり忘れてしまった。なにしろ、学校を出て以来、まともに勉強をしたことがない。

先日、仕事である研究所を訪問した。日本から出張でやってきた日本人二人と僕の三人で中国人の研究者と面談したのだけど、日本人の二人は流暢な英語を話すし、中国人研究者と彼の秘書も英語が

達者なので、面談はずっと英語だった。

僕はただたんに同行しただけで、英語でのやりとりはいっしょに行った日本人二人がやってくれたし、話の内容はわかっているのでなにを言っているのかくらいはだいたいつかめたのだけど、それでも、時々僕に話を振ってくるので困った。

「御社の従業員は何人くらいですか？」

と英語で訊かれたので、

「About two hundred」

と答えようとした。頭のなかでは英語の単語が浮かんでいるのに、
ターガイ リャンバイカレン
「大概、？百個人」

と、また中国語が口について出てくる。

みんな英語で話しているのに、僕ひとりだけついていけない。僕以外の四人は、英語を聞いて英語で理解しながら会話しているようにだけ、僕ひとりだけ違った。どうやら、耳で英語を聞きながら、頭のなかでは自動的に中国語へ変換しているようだ。

しかたがないので、話を振られたら「すみません、中国語で」と断ってどんな簡単なことでも中国語で話した。みんな英語で話しているのに、一人だけ中国語を話すのは気が引ける。中国人は話をわかってくれるけど、日本人のほうが理解できなくなる。英語で順調に話が進んでいるのに、その流れを中断してしまうのは申し訳ない。申し訳ないのだけど、話せないものはしょうがない。しょうがないのだけど、やっぱり申し訳ないので冷汗をかいた。

僕みたいな英会話の訓練をほとんどしたことのない中国語使いは、英語を話そうとするとだいたい同じような現象に陥る。中国語のほうが第一外国語になっているので、外国語を話そうとすると条件反射的に中国語が口について出てしまうのだ。

面談の後、中国人研究者に昼食をご馳走していただいた。

彼の部下の若い人たちといっしょに大きな円卓を囲んでの食事だったのだけど、それもすべて英語だった。中国人の若い人たちも流暢な英語を話す。会話に加わりたし、かわいい女の子がいたので

仲良くなりたかったのだけど、場を乱してはいけなかったのでほとんど黙っていた。

やっぱり英語ができたほうがなにかと便利なんだよな。

若い頃にちゃんと勉強しておけばよかった。

あんまり中国語脳になりすぎると……(前書き)

前回の続きの外国語のお話。

あんまり中国語脳になりすぎると……

英語をマスターする場合、英語で物事を考えて英語で理解することが不可欠だ。これを英語脳という。中国語も同じで、中国語で物事を考えて中国語で理解しなければいけない。中国語を聞いて、それをいちいち日本語に変換していたのではスピードが遅すぎて、こみいった会話などとてもできない。さしずめ、頭のなかに日本語OSと中国語OSの二つのオペレーションシステムをつけるようなものだろうか。

雲南省で留学していた頃、僕も中国語脳を作ろうと必死だった。とはいっても、初級クラスから中国語の勉強を始めたので、はじめのうちは単語もそれほど覚えていないし、中国語の複雑な文章を頭のなかで組み立てることなんてとてもむりだ。そこで、

「今晚、なにを食べようか」

とか、

「何番のバスに乗ればいいんだろう？」

といったかんたんなことを中国語で考えるようにした。日本語が心に浮かんだ時は、すぐに心のなかで中国語に言い換え、自分が日本語を使うのを禁じた。語学の才能がある人はもっとスマートに外国語を習得できるのかもしれないけど、僕みたいなポンコツ脳みそではそうもいかない。とにかく、なりふりなかまっていられなかった。アホになったつもりで一から積み上げなければ、とてもマスターできるものじゃない。

正直言って語学は不得意だ。学生時代は英語でさんざん苦労したくちだった。僕にとってアルファベットの羅列はインクの染みにしか見えなくて、ちんぷんかんぷんだった。『試験に出る英単語』を何度暗記しても、覚えたそばからすぐに忘れた。

それでも一念発起して留学したからには、語学は嫌いだなどといつてられない。単語の暗記が苦手だと自分でも自覚しているから、

なんども教科書を読んで、テープを繰り返し聞いた。頭で理解するのではなく体にしみこませるしかない。中国人の友人を何人か作ってなるべく彼らとだけ過ごそうにしたり、日本語の本もほとんど読まず、日本のDVDもほとんど観ず、日本人同士の付き合いも極力断ったりして、日本語にはできるだけ触れないようにした。こんな風に中国語漬けの生活を送って、ようやく粗悪品だけど中国語脳らしきものができあがった。日常会話をなんとかこなせるようになり、留学の目的はとりあえず達成できたかなとほっと胸をなでおろした。

だけど、今度は反対に、日本語が出てこなくて困った。日本人と会話しようとすると言葉がスムーズに出てこない。日本語を話そうとするにつつかえたり、なんて言えいいんだろうと考えこんでしまったりするし、頭のなかにまず中国語の文章が浮かんでしまうので、それを日本語へ翻訳して話していきなり。言葉の選び方も変だ。硬い言葉をどうしても使ってしまう。一般的に言って、中国語使いはどうしても漢文っぽい言葉の使い方になりがちだ。

日本語と中国語は、「一杯」、「簡単」、「社会」、「自由」という風に同じ漢字を使った同じ意味の言葉がたくさんあるから、それを現代中国語の発音にしてそのまま使えば済むので助かるけど、なかには同じ漢字を使った熟語でも微妙に意味が違っていたりすることがある。そんな言葉を使おうとすると、どっちが日本語の意味で、どっちが中国語の意味だったのかわからなくなって混乱したりもする。

僕の知り合いで中国語脳が完璧に出来上がりすぎてしまった人がある。彼は中国の大学を卒業して、そのままこちらで働き、中国人の奥さんと一緒に暮している。仕事以外はほとんど中国語だけで暮しているようなものだ。ある時、彼と話していたら、

「えっと、朝、太陽が出るのはなんて言うんでしたっけ？」
などとすつとぼけたことを僕に訊く。

まさか同時通訳をできるくらい中国語の技量の持ち主が中国語

でなんというのか訊いているわけでもないだろうと思い、

「もしかして、日の出？」

と答えたら、

「ああ、そうでした。日の出でしたねえ」

と、彼はほがらかに笑った。

ここまでくると中国語が母国語になっているようなものなのかもしれない。

もつとも、彼はかなりの天然ボケで、いっしょにタクシーに乗っていたら、

「いやあ、さっきの歩道橋、いきなり人が渡るから危なかったですよねえ」

などとまたすつとぼけたことを言う。もちろん、人が歩道橋を歩いて危ないことなんてひとつもない。周囲に歩道橋があるわけでもない。僕は目が点になったのだけど、根が関西人なのでボケられたら、そのまま放っておけない。

「それを言うなら、横断歩道やろ」

とりあえずツツコミを入れたら、

「えっ？」

と、今度は彼の目が点になる。どうやら、歩道橋と横断歩道の区別がついてないようだ。

「道の上に橋がかかっているのが歩道橋で、道路に白い縞々を描いたのが横断歩道だよ」

しょうがないので僕は説明した。

「そうだったんですかあ」

彼はふむふむとうなずく。なかなか素直な人だ。僕はこんな飾らない人が好きだ。でも、目を白黒させながら僕の話聞いていたから、ほんとうにわかったかどうかは怪しいものだなと思っていたら、案の定、一週間くらいしてから、

「えっと、道路に白い縞模様をつけたあれはなんて言うのでしたっけ？」

と、また僕に訊く。

「せやから横断歩道やがな」

僕は爆笑してしまった。ちなみに、「中国語ではなんて言うの？」と訊いたら、「レンシンヘンダオ人行横道」とすぐに答えが返ってきた。

彼の例から考えてみると、もしかしたら、中国語をマスターしたあまりに日本語が出てこなくなったり、日本語と中国語が混乱するのは天然ボケのなせる業なのかもしれない。僕もけっこう天然だから、人のことはまったく言えないのだけど。

テロリストを裏返せばレジスタンス

飛行機に乗る時、毎回、空港の検査ゲートでずいぶん手間取る。まず行列に並ばなくてはならない。

行列ができるとわかってはいるのだから、検査ゲートの配置を工夫して数を増やしてくれてもよさそうなものだけど、どの空港もゲートの数は限られている。

順番がきたら、鞆のなかのノートパソコンを出して、ズボンのポケットのものも全部出して、上着も脱いでと大忙しだ。荷物の少ない時は、あらかじめポケットのものを上着のポケットへ入れたりして準備できるけど、荷物が多いとそうもいかない。ゲートを通過したら、こんどはパソコンをしまつて、ポケットのものを全部しまつて、上着を着る。

ゲートを通過した時には搭乗開始までもう時間があまりなくて、慌ててトイレへ駆けこんだりする。

テロ対策のための全身透視スキャナーがあるそうだけど、いくらテロ対策のためとはいえ、自分の裸を見られるのはごめんだ。いくらなんでもやりすぎだと思う。

テロ対策があたかも正しいことのように語られる。だけど、僕は眉唾ものだと思っている。

テロリストは、裏を返せばレジスタンスだ。

たとえば、ナチスドイツの占領下でフランスのレジスタンスが活躍したけど、ナチスの側から見れば、フランスのレジスタンスは自分たちに楯突く立派なテロリストだ。同じように、アルカイダもイスラムの側から見れば、レジスタンスであつて、テロリストではない（もしアルカイダという組織がほんとうに存在して、彼らが9・11の実行者だったとすればの話だけど）。

圧制を受けたり、外国に占領されたりとんでもない嫌がらせを受けたりと圧倒的な暴力に組み伏せられた者が自分たちの権利や自由

を確保しようとするれば、ゲリラ的な暴力で抵抗するよりほかに手段がない。残念なことに、一般的に言って暴力に対抗できるのは別の形の暴力でしかないからだ。キリストは「右の？を打たれたら、左の？を差し出せ」と言ったけど、現実には、そんなことをすればなぶり殺しにされてしまう。

テロ対策の検査ゲートを通るたびに、

——やれやれ、

と思ってしまう。

テロ対策に奔走する国家側にも、レジスタンスの側にも、どちらにも「正義」はある。そして、どちらも「正義」という名の暴力を行使している。暴力は悪にはかならない。悪に巻きこまれるのは、ごく真面目に働いて、ごく真面目に暮している人たちだ。

天才は時代の課題を背負う——尾崎豊は第二のさだまさしになるはずだった

マニアックな題材でごめんなさい。尾崎豊さんもさだまさしさん
も知らない人はスルーしてくださいな。

尾崎豊さんがカバーしたさだまさしさんの歌。

<http://www.nicovideo.jp/watch/sm1443960>

天才は時代の課題を背負う ――尾崎豊は第二のさだまさしになるはずだった

おもしろい音源はないかなと思って『ニコニコ動画』のなかを探していたら、尾崎豊がさだまさしの歌をカバーしたものがあつたので、さっそくかけてみた。

尾崎豊とさだまさし。

まったく想像のつかない取り合わせではないか。面白そうだ。

音源は尾崎豊が十四歳の時のもので、学園祭かなにかで『縁切寺』と『雨やどり』を弾き語っている。ちなみに、『縁切寺』はさだまさしが組んでいたフォークデュオ「グレイプ」の代表曲で、シングルにはなっていないけど、ファンの間では人気が高い。鎌倉の東慶寺（縁切寺）を舞台にしたせない悲恋の歌だ。

いっぽう、『雨やどり』はさだまさしがソロになった時の一枚目のシングル。コミカルではのぼのとしたラブソングだ。

「それでは『縁切寺』へいききたいと思います」

という初めのトークからして、グレイプ時代やソロになったばかりの初期のさだまさしのそれにそっくりだ。やさしい好青年。

それにしても、なぜ尾崎豊がさだまさしの真似をしているのか？

僕は目が点になった。

画面に出てきたコメントよれば、尾崎豊はさだファンだったのだとか。コアな尾崎ファンは知っていたのかもしれないけど、僕は初めて知った。

ギターのイントロとともに『縁切寺』の弾き語りが始まった。

中学生の声なのでとてもかわいい。

まだ声変わりしていないのではないかと思わせる澄んだ高い声だ。とはいえ、幼稚なところはまったくなくない。さだまさしの曲は半音上がったり、半音下がったりするので非常に難しいのだけど、基本的に音程をしっかりと取りながらとても丁寧に歌っている。

尾崎少年は高音をあやうく綱渡りするようにたどったり、声にビ

ブライトをかけたりして、すっかりさだまさしになりきっている。もちろん、たんに物真似をしているだけではない。情感をたっぷりこめて歌っているから、悲しい恋を振り返る主人公の気持ちがとても十分すぎるほど伝わってくる。それも、思春期特有のどこか微熱をはらんだナイーブさと不安定さをないまぜにして。尾崎豊はやっぱ天才だったのだと、あらためて納得させられた。まだ年端もゆかないのに、楽曲の本質をしっかりと把握したうえで歌っている。こうした感性は天賦の才なのだろう。

曲の間のMCは、さだまさしが「やさしさ世代の代表」と呼ばれていた頃を彷彿^{ほうふつ}とさせるあたたくてやさしいトーク。

次に、尾崎少年が「学校をずる休みした時に歌っていた」という『雨やどり』へうつる。

これもさだまさしそっくりなのは、言うまでもない。明るくて楽しそうな歌声を聴いていると、微笑みながら歌っているニキビ面が目の前に浮かんでくるようだ。主人公の女の子の気持ちになりきって、サビのところをきれいに歌い上げている。高い声がなにより魅力的。僕は思わずうっとり聴き入ってしまった。尾崎豊がこんなにかわいいとは知らなかった。

僕は尾崎豊のベストアルバムを一枚持っていただけなので、彼の歌のことをくわしくは知らない。彼を語る資格もないと思う。だけど、一般的に言って、尾崎豊といえばやはり「反逆者」のイメージが強いのではないだろうか。『十五の夜』で「盗んだバイクで走り出す 行く先もわからないまま」と叫び、『卒業』で「夜の校舎 窓ガラス 叩いて回った」と叫んだあの姿だ。だけど、このカバール音源から聞こえてくるのは、やさしくてナイーブでかわいらしい好青年尾崎豊だ。

彼が影響を受けたシンガーはさだまさしのほかにもいるのだろうけど、この音源を聴いた限りでは、典型的な叙情派フォーク青年としか思えない。あのまま成長していれば、尾崎豊は第二のさだまさしになっていたのかもしれない。さだまさしのように日本情緒を得

意としてやさしく哀しく歌い上げるシンガー・ソングライターにな
っていたのかもしれない。

おそらく、時代がそうはさせなかった。

天才児は、時として、「時代の課題」あるいは「時代を病理」を
背負うことになる。それは、天才だけの特権でもあるし、天才だけ
の悲劇とも呼べるものだろう。近代文学で言えば、夏目漱石、芥川
龍之介、太宰治、中島敦といった作家たちは、時代の課題や時代の
病と向かい合い、血へどを吐きながら作品を書いた。

尾崎豊がスターダムにのしあがった頃は、一億層中流社会がほぼ
実現し、日本人全体が経済的に一番豊かだった時代だった。だけど、
その陰では人の絆が断ち切られ、人間関係の酷薄化が進んだ。管理
のための管理社会ができあがりつつあった。高度成長を遂げた後で、
人間をモノ扱いするという近代化の負の側面が重くのしかかっていた。
た。

僕が中学生の時、学校の先生がこんなことを言ったのを覚えている。
八十年代半ばのことだ。

「今の時代は個性的な人なんていないですよ。金太郎飴みたい
にどこをとっても同じような人がいるんです。みんないっしょ。そ
れが企業に求められている人材なんですよ。そういう人たちを育て
るのが教師の役割なんです」

尾崎豊のような天才なら、そこになにか後ろ暗いものをかぎとつ
たのだろうけど、ぼんやりした中学生だった僕には、その発言に潜
む欺瞞や罪深さを見抜けなかった。ただ、漠然と人をなめているな
あとしか感じなかった。

金太郎飴などにさせられたのでは、たまったものではない。

人にはそれぞれの個性がある。自分の人格は自分で創るものだ。
自分の人生は自分で創るものだ。ほかの誰でもない、自分自身で決
めて、自分自身で築き上げるものだ。

「俺はここにいます」

時代は、そう叫んでくれる代弁者を必要としていた。おそらく、

尾崎はその要請に応えて、反逆児になった。反逆児とは真実の告白者であり、虚偽の告発者だ。彼は世間の嘘を糾弾し、人生にとって大切なことを唄い続けた。血へどを吐きながら自由に生きさせない世間に抗い続けた。

ただ、天才は幼い頃に自分の形ががちり決まってしまうので、今度は逆に自分の殻を突き破ることが難しくなる。

人は誰でも歳をとる。もちろん、天才も例外でない。歳をとれば、若かった頃には見えなかったものが見えるようになる。思慮深くもなる。人はそれを成熟と呼ぶ。

天才もやはり人だから、成熟する。成熟すれば、それなりの方向性を探し出し、それなりの殻を身につける必要がある。平たく言えば、新境地を切り拓き、自分の器をもっと大きくしなければならなということだ。だけど、天才の殻は硬くて強すぎるから、なかなか脱皮できない。才能に恵まれているだけに、そのぶん、脱皮の苦しきは凡人の想像を絶するものがあるだろう。天才芥川龍之介が「将来に対する唯ぼんやりした不安」に押しつぶされて自殺してしまったように、たぶん、尾崎豊も脱皮に失敗してしまったのだと思う。彼は二十六歳の若さで他界した。残念なことだ。

今では、校舎の窓ガラスを叩き割るなどという話を聞かなくなっただけで、「俺はここにいる」と叫びたい気持ちは、きつと当時も今も変わらないと思う。人の絆が断ち切られた今では、叫んでもむだだとあきらめているのだろうか。それとも、若者にそう叫ばせないほど、社会ががんじがらめになってしまったのだろうか。その両方かもしれない。

「俺はここにいる」

尾崎豊が背負った課題は、今も解決がついてない。

外国暮らしは血圧が上がる？

職場で健康診断があった。

僕と同じ年くらいの日本人三人でいっしょに血圧を測ったのだけど、三人とも以前より上がっている。僕は正常の範囲内だったけど、上限いっぱいだった。もともと低血圧気味だったのに。朝起きるのが苦手だった。

歳のせいかな、脂っこい中華料理の食べすぎが原因かといろいろ話をしていただけで、二人とも中国へきてから血圧が上がったと言う。言われてみれば、僕もそうだ。

「やっぱり、外国で暮らしていると気が抜けないんだよ。自分では慣れたつもりでいても、どこか気を張っているんだよね。すかっと疲れが抜けることがないもん。毎日どこか緊張していたら、そりゃ血圧も上がるよね」

だいたいこんなところで意見が一致した。

中国の暮らしも合計して六年あまりになるけど、今でもどこか気を張っている。島国で育った人間は外国になじもうとしてもなじみきれないのだろう。今でも、毎日、なにか異質なものと向かい合っている。根本的なところで自分には受け容れがたいものと向かい合っている。そんな気がしてならない。日本へ帰った時にほっとした気分になるのは、なにかあたたかいものにつつまれたような気分になるからなんだろう。

とはいえ、ここで暮しているおかげで、日本ではできない経験をいろいろしたし、日本ではわからなかったことをいろいろ識^しった。サプライズ☆！ なことが多くて面白い。血圧がちょっと上がるくらい、しょうがないか。

祈り（前書き）

ひとりの女性が子どもを抱いてやって来て、こう言いました。「マザー、私は食べ物をもらいにあちこち訪ねました。私たちはこの丸三日間何も食べていないのです。けれど人々は、あなたは若い人だから、自分で働いて、お金を稼ぎなさい、と言って、だれひとりとして何もくれようとしなかったのです」——マザー・テレサ

祈り

今年も多くの人々が路上へ放り出されてしまった。この年末も、派遣切りに遭ったりして職を失った人たちが路上へ放り出されるだろう。哀しいことだ。

今の世の中はごく一握りの特権階級をのぞいて誰も倖せにしない仕組みになっている。普通の人々――当たり前のことをごく当たり前前にまじめにやっている人々が報われる仕組みにはなっていない。多くの人々が生活や生存そのものを脅かされ、そんな人たちの数は、毎日増えている。このままでは、今は安泰に暮している中流層の人たちも、遅かれ早かれ生活や生存が脅かされるようになるだろう。

勇気ある一部の人々がこのむごい仕組みを変えようと運動を続けているけど、彼らの取り組みはまだ成功していない。人を不幸にするシステムを築きあげた輩の力はまだまだ強い。勇気ある人たちの活動がうまくいくことを願うばかりだ。

祈ってみたところで現実はなにも変わらないのかもしれない。だけど、祈らずにはいられない。祈らなければなにごともしまらない――そんな気もする。

どうか、路上へ放り出される人が一人でも減りますように。

一人でも多くの人がまともな仕事を得られますように。

まともな賃金を手にして、まともな暮らしを送ることができるようになりますように。

人々を苦しめ続ける今の仕組みが一日も早く終わりを告げますように。

祈り（後書き）

愛は、今日始まります。今日、だれかが苦しんでいます。今日、だれかが路上にいます。今日、だれかが飢えています。私たちの働きは、今日という日のためにあるのです。昨日は過ぎてしまいました。明日はまだ来ていないのです。——マザー・テレサ

諸葛孔明はどこまで南征したか？

小説『三国志』の南蛮遠征の話が好きだ。『三国志』ファンなら誰でも知っていると思うけど、諸葛孔明が遠い雲南省まで遠征する話だ。

『三国志』のなかでも、あの部分だけ雰囲気が違う。異国情緒（中国から見れば）たっぷりに描かれていて、象兵が出てきたり、瘴気を出す川があったりしてなんだかどきどきしてしまう。孔明が快勝するのも気持ちいい。

小説では諸葛孔明が雲南の地へ深く入りこみ、南蛮王・孟獲を七度捕らえて七度解き放し、ついに心服させたことになっている。雲南省南部の思茅という町には、諸葛孔明が馬を洗ったとされる池が記念公園になっていて孔明の像が立っている。雲南省南部の少数民族には、田んぼで牛が牽く鋤は孔明がもたらしたという伝説もある。ある時、中国でテレビを観ていたら三国志特集を放送していた。

孔明ははたして雲南省のどこまで進軍したのかということがテーマになっていただけ、出演した中国の学者さんは、なんと孔明はビルマ（ミャンマー）まで行ったと主張していた。

「歴史書の『三国志』には孔明が『不毛の地へ入った』とする記述があるが、深い森につつまれた雲南省が不毛の地などであるはずがない。『不毛』というのはきつと地名を音訳したものの違い。不毛の発音はブーマオ。ずばりビルマ（ミャンマー）だ」

と、学者さんは自信たっぷりに言い切る。

いくらなんでも「不毛」がビルマというのは飛躍しすぎじゃないか？ 僕の頭のなかは？ マークだらけになった。珍説奇説を堂々と主張するところが中国人の面白いところでもあるのだけど……。

びっくり仰天した僕は、中国の大学院で中国史を研究していた日本人にほんとうにそうなのか訊いてみた。

「いやあ、実を言うと孔明が雲南省まで行ったのかどうかもあやし

いものなんですよ。たぶん、四川省の南部の少数民族地帯まで行って、そこで全体の指揮を執っていたのだと思いますよ。個々の武将はもちろん雲南省へ行ったわけですけど。かりに孔明が雲南省へ入ったとしても、せいぜい雲南省北部まででしょうね。昆明までできたかどうか……。ビルマだなんて、絶対に行ってないですよ」

彼は参ったなあという顔をしながら僕に解説してくれた。

孔明ファンの僕としては、ビルマはともかく孔明が雲南省で大活躍したことにしておいてほしかったから彼の話を聞いてちよつとがっかりしてしまったのだけど、史実がそうなら仕方ない。雲南省南部にある孔明が馬を洗ったという池のことを話すと、彼は「あり得ないです」と苦笑していた。

伝説にいろんな尾ひれがついて話がふくらむのは、さすが諸葛孔明と言ふべきか。

諸葛孔明はどこまで南征したか？（後書き）

ちなみに、中国では孔明のことを諸葛亮と「苗字十名前」で呼びます。諸葛孔明という「苗字十字」の言い方はしません。諸葛孔明という呼び方は日本独特のものなのです。漢字四文字のほうが日本人にはぴったりでこんな習慣が定着したのかもしれませんがね。

中国のクリスマス その1

もうすぐクリスマス。

広州のホテルやショッピングモールでは、大きなクリスマスツリーを飾ってあったり、店の売り子が赤いサンタ帽を被っていたりする。こちらでもクリスマス気分だ。街をぶらぶらしていると、ちょっとしたきうきする。

「子供の頃、クリスマスの時に親にプレゼントをしてもらったことがある？」

と、地元の若い人に訊いてまわってみたのだけど、もらったことがあるという人は一人もいなかった。プレゼントをおねだりしようと考えたこともなかったそう。小さな子供のいる二十代後半くらいの若い親たちに子供にクリスマスプレゼントをあげるのかと訊いてみたけど、みんなそんな予定はないと言う。小さなクリスマスツリーを家のなかに飾ったこともないのだとか。

「そりゃ、大陸の中国人はそんなことをしないよ。だって、クリスマスなんてものがあるって知ってから、まだ何十年も経っていないんだよ。親が子供の靴下にプレゼントを入れるなんてことはないよね。彼らはクリスマスの由来も知らないし。もっとも、クリスマスは西洋のお祭りだから、中国人が祝う必要もないけどね」

香港人のおじさんはこんなふうに解説してくれた。

ちなみに、香港はやはり植民地の歴史があるので、一般の家庭でもお祝いをするのだそう。おじさんも子供が幼かった頃は「サンタさんにお前の希望を伝えてあげるから欲しい物を言いなさい」と子供が欲しがっているものを聞き出し、イブの夜中にこっそり枕元へ置いたのだとか。日本人の親と同じことをしている。香港はクリスマスが祝日になっているけど、キリスト教の信者以外は日本と同じようにただのお祭りとして楽しんでいるそう。

「香港は、中国伝統の祭りも、仏教の祭りも、西洋の祭りもみんな

祝うよ。だから、カレンダーは祝日だらけさ。いっぱい休めるよ」
おじさんはユーモラスにほえんだ。
なんかずるいなあ。

中国のクリスマス その2

こちらのカップルは、日本と同じようにクリスマスを一緒に楽しむ過ぐす。

中国人の友人たちとクリスマスのことをいろいろ話していた時、「それじゃ、君も彼氏になにかプレゼントを贈るんだ」

と、僕が何気なく言ったら、彼女はぽかんとした。

「クリスマスって男が女にプレゼントするものなのよ」

「えっ？ 恋人同士でプレゼントの交換をしないの？」

今度は僕がぽかんとした。

「どうして女の子が男にプレゼントするの？」

彼女は首を傾げる。

「だってさ、交換したほうが楽しいだろ。男だってプレゼントをもらったら嬉しいんだし」

「なんだか変よ。おもしろいことをするのね」

彼女は楽しそうに大笑いした。

一般的にいつて、中国では彼女が彼氏へプレゼントを贈ることはあまりない。バレンタインデーも彼氏が彼女へプレゼントを渡すだけだ。どうやら、中国では祝いの日は「彼氏が彼女に自分の甲斐性を見せる日」ということのようなのだ。たぶん、それが中国人の伝統的な考え方なのだろう。

「もし野鶴さんの彼女がプレゼントをあげなかったらどうする？」

友人がこう訊くので、

「そんなことは許さない。むりやり買わせる」

と、僕は断固として答えた。中国流ではないかもしれないけど、僕だって男だということを見せなくてはいけない。

「えー、ひどいわ」

「ひどいのはどっちだよ。僕だってプレゼントが欲しいんだもん。そんな高価な物をくれだなんて言わないよ。ちっちゃな物でいいん

だよ。ハンカチとか手袋とか、そんなものでいいんだよ。気持ちの問題じゃないか。プレゼントを交換するのは、お互いに相手を大切にしましうってことだよ」

「でもやっぱり、中国の女の子はプレゼントを贈らないと思うわ。そんな習慣がないもの」

彼女はあくまでも言い張る。習慣の壁を打ち破るのはなかなかむずかしそうだ。

中国のクリスマスなのだから、中国人が楽しめるように中華風にアレンジすればいいわけだけど、それでもプレゼントだけはゆずれないよなあ。

キップルさんのこと

キップルさんがなろうに顔を出さなくなっただけで、いぶん経った。もうかれこれ十か月くらいになるだろうか。

僕はキップルさんの作品が大好きだ。

なにより、彼の詩人としての感性和やさしさに惹かれる。キップルさんが投稿した作品はすべて読んだ。

音楽神話を描いた短編小説『ステイヴ・ゴッドの短くも幸福な人生』神業とかみさんの日々』で奇抜なアイデアに腰を抜き、散文詩『たどり着けないイブ』ではしみじみした。詩『ねじ式』を読んで生きることについて考えさせられた。詩『草を食むものたち』ではエスプリとユーモアを楽しんだ。

彼は詩人なので、詩がいちばん多いのだけど、大人の味わいのあるエッセイも面白い。まだまだほかにも素敵な作品がいっぱいある。感想を送ろうかと迷ったのだけど、あの頃はなろうに参加し始めてからまだ日も浅かったし、もともと人見知りの激しい性格の僕は、はにかしくてなかなか送れずにいた。

そんなある日のこと、突然、キップルさんから感想をいただいた。おまけに、僕をお気に入りユーザー登録までしてくださった。僕は舞い上がってしまいそうだった。僕もさっそくキップルさんをお気に入りユーザー登録させていただいたのだけど、お気に入り矢印が入ったのを見て、心臓がバクバクしてしまった。

それから、すこしばかり感想のやりとりやメッセージを交換した。思ったとおり、キップルさんはやさしい詩人だった。基本的に人間のできた人なのだけど、自分の世界をしっかりとっている。表現には頑固だ。そこがまたいい。僕はまたまた嬉しくなってしまった。

ところが、彼との交流はごく短い間で終わってしまった。

キップルさんは、『幽霊の存在を感じたというエッセイ』『玉川温泉での不思議な気持ち』を最後にふつりと作品を投稿しなくなった。

あらためて続きを書くにあつたので楽しみにしていたのだけど……。なろう自体にも顔を出さなくなったようだ。

キップルさんが書いた報告活動によれば、長い間入院していたのだけどぶじに退院することができて自宅へ戻り、社会復帰に向けて体力作りに励んでいるとのことだった。

職場へ戻って忙しい日々を送っているのだろう。それで、なろうに作品を出す時間も、顔を出す暇もなくなってしまったのかもしれない。仕事が忙しいのはいいことだ。きっと、ばりばり働かれておられるのだろう。どこかで元気にされているに違いない。

でも、やっぱりさみしい。

友達がふらりと転校してしまったようだ。

——キップルさんが帰ってきてくれないかなあ。

そんなふうに思いながら、いままで彼の作品のレビューをいくつか書かせていただいた。僕のマイページのお気に入りユーザー欄は、いつもキップルさんの名前が出るようにしている。

またいつか、キップルさんの新作を読めたらいいな。

キップルさんのこと(後書き)

キップルさんのなろうのマイページ

<http://mypage.syosetu.com/48697/>

キップルさんの散文詩『たどり着けないイブ』のレビューを書かせていただきました。

<http://novelcom.syosetu.com/novelreview/list/ncode/90830/>

興味のある方は作品を読んでみてください。せつないクリスマス・イブを描きたいいい詩です。散文形式なので読みやすいです。

<http://ncode.syosetu.com/n0839j/>

指紋認証装置が正しく作動しなかった場合の中国人の反応について

僕の勤め先には入口に小さな指紋認証装置が置いてあって、指紋を押してタイムカードの代わりに使っている。

朝はいつもそこに行列ができるのだけど、なかなか動かない時がけっこうある。何度押してもエラーになってしまいう人がいて、その人で行列がとまってしまふのだ。遅刻しかけだったり、朝イチから大急ぎで仕上げなくてはいけないことがあったりすると焦ってしまう。

そんなに出来の悪い機械でもないし、どうしてしょっちゅう行列がとまるのだろうと不思議に思ったので、中国人従業員の様子をじっくり観察することにした。それで、ようやくなぞが解けた。

指紋認証装置の脇には雑巾が置いてあるのだけど、彼らは十人が十人とも自分の指を拭いて、それからまた画面を押していた。

何十人も指紋装置を押せば、指紋を押す画面が汚れて正しく反応しなくなってしまう。いくら自分の指を拭いてみたところでしかない。画面の汚れを拭き取ることが先決だ。それくらい察しがつくだろうと思うのだけど、誰も気づいていないようだし、画面を拭こうともしない。画面を拭かないから、何度押してもエラーになる。それで行列がとまっていたのだった。

日本人なら、おそらく画面が汚れていると気づいて汚れた画面をさっさと雑巾で拭いてしまふだろう。だけど、中国人はこのことに気づかない。自分の指を拭いてきれいにするのは当然といえば当然なのだけど、そこで発想がとまっていて機械のことまで考えていない。それで反応してくれないと言って嘆いている。

こんな時、同じ東洋人といっても、日本人と中国人では発想がずいぶん違うよなと実感する。

今年最後の眠りに就く前に2010

今年とはどうか、今年もというべきか、いろんなことがあった。個人的にはかなりきつい一年のスタートを切ったのだけど、なんとか乗り越えることができてほっとしている。困難な時期にいろんな方に励ましの言葉をいただいて感謝にたえない。お陰さまで、なんとか今年も生き延びることができた。また、今年もやさしい人や誠実な人にたくさん出会うことができた。それがいちばん嬉しいことだった。

僕が今住んでいる中国でも、故国の日本でもいろいろがあったけど、ひとつだけ書いておきたいことがある。

暮らしの問題だ。

いや、暮らしなどというこんな書き方は生ぬるいだろう。ここまです態が悪化した今では、むしろ生存の問題と呼べきだ。

数多くの人々が満足に生計を立てられなくなって久しい。

以前、ほかのエッセイで書いたことだけど、この問題は一個人の力でどうにかなるものではない。世の中の仕組みを変えなくてはとうしようもない。このことはいくら力説してもしたりないくらいなので強調しておきたい。生計を満足に立てられないのは、決して個人の努力不足などではない。世の中が人々を生きさせない仕組みになっているからだ。人々の暮らしが成り立つようにするためには、早急に世の中の仕組みを変える必要がある。

今の仕組みではいくら企業が儲かって、働く人々に還元されるようにはなっていない。リストラや賃金カットをして利益を上げた企業の取締役が企業の利益を増大させたとして高額報酬を得るようになっていく。これではあべこべだ。正規労働者、非正規労働者を問わず労働条件は厳しくなるばかりで、人間がモノ扱いされている。こんなことが許されていいのだろうか？

仕事にありつけない人も大勢いる。仕事に就けないということは、世間に参加できないということだ。多くの人々が世の中から疎外されている。世の中に「お前はいらぬ」と言われた人々の気持ちはどうだろう。つらいどころではない。命がかかっている。生きる糧がどうしても手に入らなければ、ホームレスにならざるを得ない。これも許されないことだ。

この問題の根底にある大きな要因の一つは、グローバル企業が競争力強化を口実に行なう下請け企業叩きだ。グローバル企業が彼らを支えている下請け企業に対して情け容赦ない値下げ要求を続ける限り、この問題は解決しない。とはいえ、グローバル企業は人の生き血をすすりようなまねをやめないだろう。極端な話、グローバル企業の本社に爆弾でも送りつけて爆発させでもない限り、彼らの考え方は変わりそうにもない。下請け叩きという暴力に対しては、別の形の暴力でしか対抗できないのがこの世の悲しい現実だから。

危機はすぐそこに迫っている。

今の世界経済の状態は非常に危ない。リーマンショックに端を発した金融システム崩壊の諸問題は根本的にはまったくにも解決していない。とりあえず痛み止めを打って誤魔化しているだけの話だ。来年もヨーロッパの国が破綻するだろう。下手をすれば世界恐慌になるかもしれない。

そんな事態に陥った場合、今の仕組みのままでは数多くの人々が不幸を抱えこむことになる。大勢の人々が追いつめられ、食いつめた人たちは命さえ落とすことになるだろう。

時代の闇は濃くなるばかりだ。

だけど、未来を変えられないわけではない。未来は自分たちの意志ひとつにかかっている。どんなに動かしがたい仕組みに思えても、変えられない仕組みなどにひとつない。古い話になるけど、ベルリンの壁だって壊れた。ソビエト連邦が解体してバルト三国などは独立を勝ち得た。日本人だって同じことができる。人間は、仕組み

や状況に適應することだけが能ではない。新しい仕組みや状況を創り出す力も持っている。ひどい体制を覆くつがえすことができる。希望はいつでも、一人ひとりの人間のすぐそばにある。

一個人としては、世の中がどうなろうと、日本がどうなろうと、世界がどうなろうと精一杯生きなくてはいけない。仕組みや状況がどうだからといって、自分をあきらめるわけにはいかない。

——畢竟、意志ひつぎの問題だ。

これは中原中也の詩『頑がん是ぜない歌』の一節だけど、この頃、この言葉がよく心に浮かぶ。

今年最後の眠りに就く前に2010（後書き）

今年最後の『ゆっくりゆうやけ』になります。

読んでくださったみなさま、感想を送っていただいたみなさま、ツイートしてくださったみなさま、レビューを書いてくださった星野さま、ほんとうにありがとうございます。みなさまの温かいご支援のおかげさまをもちまして、ここまで続けることができました。来年もぼちぼち更新しますので、よろしく願います。

みなさまの二〇一一年が実り多きものとなりますように。

それでは、よいお年を。

恋は魔法

人を好きになった時、胸が痛くなるのはなぜだろう？

その人以外のことは、なにもかもがどうしてもよくなって、心のすべてが溶けてしまう。

青虫がさなぎになる時、目の細胞だけを残してほかはすべてどろどろに溶けてしまうのだそう。そうして、いったんすべてを溶かしてしまってから、成虫へ変身するのだとか。恋をした時も、そんなメタモルフォーゼ（変容）が心で起きている。胸が痛くなるのはきつと、心がすべて溶けてしまうからなんだろう。今までの自分の過去や傷口といったものが溶けてなくなってしまうからなのかもしれない。

恋のさなぎがぶじに羽化して美しい翅^{はね}を広げる時もあれば、羽化に失敗してしまうこともある。

羽化に失敗した恋はせつない。ちょっと涙色。

だけど、もちろん恋が成就するに越したことはないけど、胸が痛くなるくらいに好きになれる人に出会えただけで、感謝すべきなのだろう。その人のすべてに。巡り合わせに。ほんとうの出会いというものは有難いものだから。

もし幸運がほほえんでくれて恋を成就できたら、青空を自由に翔べばいい。青空はどこまでも広がっている。

ところで、人を好きになるのに理由はないという。たしかにそうかもしれない。今までの自分の恋愛を振り返ってみても、その人を好きになったからとしかいいようがない。好きなタイプはあるのだけど、タイプの女の子ばかり好きになるわけでもない。不思議だ。

とはいえ、物書きのはしくれとしては不思議というだけではすませたくない。相手のなにかが恋する人の胸に刺激を与え、その人の

心を溶かしてしまっていることには違いなのだから。

恋は魔法。

だからこそ、魔法の秘密を解き明かしてみたくなったりする。無謀かもしれないけどね。

好きな人はいるの？

好きになってしまった人には自分の想いを告げたくなる。

自分がどれだけその人のことを想っているのか知ってほしい。

それでもし、自分の気持ちを受けとめてくれたらもっと嬉しい。

好きな人にはやさしくしたいし、やさしくされたいものだから。楽しい時間をいっしょに過ごしたいから。

でも、片想いだったらどうしようと悩んでしまう。

失うのはやっぱり怖い。

ふられたら、好きだという気持ちをあきらめないといけない。なんだか気まづくなって、ともだちでさえいられなくなってしまいかもしれない。それがいちばん怖かったりする。

冗談めかして「好きな人はいるの？」と尋ねてみる。

相手の何気ない表情を深読みしては、ひよっとしたら自分のことを好きでいてくれるかもしれないって喜んだり、僕じゃダメなのかなあって落ちこんでみたり。

そんなふうに悩むのも恋の愉^{たの}しみ——といえはそうなのだけど。

エビフライの尻尾

いつの頃からかは忘れてしまったのだけど、僕はエビフライの尻尾を食べるようになった。

エビフライの尻尾は残すものだと思っていたのだけど、ある時友人が、

「なんで残すの？ もったいないやん。カルシウムがいっぱいあるんやで」

と言ひ、嬉しそうにエビフライの尻尾を口へ放りこんだ。

僕は、彼の満足そうな表情に誘われて食べてみた。

案外、おいしい。

どうして今まで捨てていたのだろうと不思議に思っただけだった。

今でもごくたまに日本料理屋でエビフライを注文することがあるけど、無性にエビのしっぽを食べたくなる。自炊せずに全部外食で済ませているから、カルシウム不足なのだろう。おまけに外国で暮らしていると日本では自然と摂取できていた栄養分が摂れなくてバランスが偏るのかもしれない。中華料理でも川エビのフライがあるのだけど、それが出てくると、ほかの料理にはめもくれずに川エビを頭から丸かじりばかりしていたりする。身体が自然とカルシウムを求めているようだ。

尻尾を？み砕く時のばりばりとした食感が楽しい。

なんだか元気になれそうな気がする。

ボクの色に染まれ

恋は始めたばかりが勝負。

女の子の心は恋のときめきで溶けているから、わりと素直に男の子のいうことを聞いてくれる。自分の色に染めることができる。冷静に考えれば、どうして僕なんかの言うことを聞いてくれるのだろうと思うたりするのだけど、むずかしいことは考えないことにして、女の子は僕の色に染めてもらうのを待っているんだ、と思うことにしている。

わざと僕のわがままをいろいろ言ってみる。

自分の好きな食べ物や好きな映画を勧めた時に、はにかみながらうなずいてくれたりすると、「かわいいなあ」って思ってたときどきしたり、嬉しくなったり。ちょっとした魔法使いの気分になって、「もっともっとボクの色に染まれ」

なんて思ってしまう。もちろん、あんまり調子に乗りすぎると女の子は息苦しくなってしまうから、そこは気をつけないといけないのだけだね。なるべくやさしく、やわらかく。フォークダンスでリードするみたいに。

僕は上手に恋をできるほうではないし、不器用な恋しかしてこなかったのだけど、初めのうちに男の子の色でたっぷり染めたあげた恋のほうが、長続きするような気がする。

こんな考えは、やっぱり男のわがままかな？

書くことでしか自分の存在を証明できないのだから

毎回そうなのだけど、小説を書いている間は夢中だ。

頭のなかにあるもやもやしたイメージのかたまりと格闘して、イメージを言葉の明るみへ引きずりだし、なんとかしてそれを言葉で象ろうとする。^{かたど}

小説を書く前に創作ノートを作って、テーマ、主要登場人物のキャラクター、舞台、問題提起すべきことなどをざっと書いておくのだけど、それだけではやはり曖昧なままだから、書いては推敲を重ね、何度も書き直しながら作品にする。

書いている間にいちばん気をつけないといけないことは、ディテールを考えすぎるばかりにモチーフを見失ってしまうことだ。たとえば言えば、画家がキャンバスに向かって絵を描いている時、キャンバスばかりを見つめて風景や人物や静物といった描くべき対象物を見なくなってしまうようなものだろうか。もちろん、ディテールのしっかりしていない小説は読んでいてもつまらないから、細部をしっかりと仕上げることは重要なことなのだけど、僕は主題を大切にしたい。僕がなりよりも格闘すべきなのは、ままならないこの世の現実やままならない自分自身だ。その格闘の成果として作品が生まれる、とそんな風に考えている。僕が尊敬しているドストエフスキ―、夏目漱石、芥川龍之介、中島敦、太宰治はそういった作家だった。

ようやく書き上げた後は、険しい峠の頂きにたどり着いたようだ。見晴らしがいい。気だるい疲労が心地いい。

書き上げた直後は頭に血がのぼっているから、のぼせあがって興奮していたりするものなのだけど、何日か経つとそれもおさまって心に平静さが戻る。

気持ちの落ち着いたところで、書き上げた作品をつらつらと反省

してみる。勝負を終えた棋士が駒を動かして初手からトレースしてみるように、自作の軌跡を振り返ってみる。毎回、ここはこうすればよかったとか、あそこはああすればよかったとか、反省しきりだ。とはいえ、もやもやしたイメージが一個の作品として形になったのを見ると、自分の書きたかったことがよくわかる。自分はこんなことを考えていたんだといまさらながら発見したりする。

たぶん、これが小説を書くことの一番の収穫なのだろう。もしかしたら、小説を書くということは、自分を知るための作業なのかもしれない。自分の知らない自分に出会うための修行なのかもしれない。

心のもやもやが晴れて、すっきりした気分。なにはともあれ、一歩前進できた。迷宮のように混沌とした自分の心にすこしばかりまとまりがつく。

人生は旅。

書くことでしか自分の存在を証明できないのだから、書き続けるよりほかにない。

ひと休みしたらまた続きを歩こうと思いながら、山並みの向こうに見える次の峠をぼんやり眺めてみる。人の命は泡沫うたかたのようなものだからいつまで生きられるかはわからないけど、歩けるうちにできるだけ歩いておこうと思う。

中国企業にコピーされた製品をコピーし返すたくましさが必要かも

日本の某文具メーカーは中国で自社ブランドのニセモノ商品が大量に出回っているのを知り、中国でこれだけ偽ブランドが浸透しているのならわが社の本物の製品も絶対に売れると考えて中国へ進出したそうだ。

中国で買ったその会社のボールペンの質があまりよくないので不思議に思っていたのだけど、この話を聞いてようやくわかった。僕が購入したのはニセモノだったのだ。それにしても、偽ブランドを逆手に取って自社ブランドの本物売りこむとはなかなか商魂たくましい会社だ。

ちなみに、中国には大学入試のマークシート対応専用の鉛筆があるのだけど、それも大量にニセモノが出回っているのだとか。HSK（外国人向けの中国語検定試験）もその大学入試用の鉛筆を使わないといけないのだけど、留学中に申し込みに行った時、受付の事務員さんが、

「ニセモノが多いから、なるべくきちんとした文房具店で鉛筆を買ってね。ニセモノだとマークシートをきちんと読み取ってくれなくて、あなたの努力が無駄になるかもしれないから」

と、注意してくれた。その事務員さんによると、中国の大学入試では知らずにニセモノの鉛筆を買って試験に臨んだばかりに、不本意な成績しか取れなくて志望校へ入れない人がいたりするそうだ。でも、そんなことを言われても僕には本物とニセモノの区別がつかない。

困ったなあと思ったのだけど、用心しておくに越したことはないから検定会場になった大学の近所にある大きな文房具店なら大丈夫かもしれないと思い、わざわざそこへ買いに行った。検定の後で自己採点した結果とHSKの事務局に返してもらった採点結果が同じ

だったから、たぶん本物の鉛筆だったのだろう。

閑話休題。

日本の某文房具メーカーは、中国でどのようにコピーされているのかを知りたくて、その偽ブランドボールペンを試しに分解して調査してみたのだそう。

もちろん、品質は本物に遠くおよばないのだけど、コピー技術のなかになかなかいいものがあって、それを使えばコストダウンできることがわかった。某メーカーはさっそく中国企業のコピー技術を盗んで自社の製品に応用し、コストダウンを図ったそう。

コピー商品や偽ブランドが当たり前の中国では、日本の技術がコピーされると嘆いてばかりいても始まらない。この某日系メーカーのように、中国企業のコピー技術をコピーし返すくらいのたくましさが必要なのかもしれない。なにはともあれ、タフでなければ生き馬の目を抜くような中国では生き残れないのだから。

春節前の風景

もうすぐ春節だ。

中国では元旦を祝わずに、今でも中国の旧暦の正月——春節を祝う。中国独自の太陰暦なので、毎年少しずつ日がずれるのだけど、今年は新暦二月三日が春節に当たっている。僕の住んでいる広州では、春節を過ぎれば、寒さがやわらいで暖かくなる。亜熱帯に住んでいるからかもしれないけど、陽射しはもう春。

「明日、帰省するんだ（明日要回家了）」

などと、知り合いの中国人たちは嬉しそうに言う。

とりわけ、地方から都会へ働きにきている人たちは春節を心待ちにしている。家族を大切にする中国人にとって、というよりも家族で団結しなければ暮していけない彼らにとって、家族との再会はなによりの楽しみだ。

市場の周りをぶらついてみれば、大きなビニール袋を抱えた家族連れがどっさり買い物をしている。買い物袋の中身は多少違っても、年末に人々がすませなければならぬことは日本も中国も同じだ。

街角には屋台が出て、春節用の飾り売っている。紅地に金色の文字で「福」と書いた張り紙や紅いぼんぼりやふくよかな顔をした童子の絵が並べてある。果物やらお酒の瓶が山盛り入った贈答用の大きなバスケットも置いてあった。

こちらではみかんの鉢植えを飾る家も多い。市場の通りには、小さなみかんの実をたわわにつけた鉢植えがずらりと並べてあった。鉢の大きさは両手で一抱えほどで、高さは胸くらい。

これは「大桔大利」^{ダー・ジュイ・ダー・リ}という縁起物だそう。日本では門松を飾る家は少なくなっただけ、日本の門松のようなものだろう。

「桔」は「橘」の俗字で、みかんのこと。みかんの実を黄金に見立て、お金が儲かりますようにという意味をこめているのだとか。み

かんの枝に紅色のポチ袋を飾りつけ、みかんの鉢植えを中心にして、その周りに菊の小さな鉢植えを並べるのが定番だ。なにはともあれ、この国の人々は真っ先に金儲けを願う。お金でしか自由を買えないから、と言え、言いすぎになるだろうか。それとも、お金で買える自由しか知らされていないから、と言ったほうがいいだろうか。

日本の年末もそうだけど、春節前になると銀行に行列ができる。

地方から出稼ぎに来ている人たちは、こつこつ蓄えた貯金を下ろして田舎へ持ちかえり、そのお金のおかげで農村の実家は年を越すことができる。貧困から抜け出すことができる。

この間、昼休みに銀行のATMでお金をおろそうとしたら、ATMが二台ともとまっていた。銀行の職員に訊くと、

「みんな大量におろすからねえ。もうお札が切れてしまったんだよね。補充できるのは三時くらいかなあ。でも、その時になってみないとわからないけどねえ」

とのんびりした顔で言う。彼だけ一足先に春節休みに入ってしまったようにほっこりした顔をしている。

こりやだめだと思い、急いで別の支店へ行って行列に並んだのだけど、運悪く、ちょうど僕の順番でお金が切れてATMが動かなくなってしまった。隣の台に並ぼうとしたら、隣のATMのお金も今しがた切れたところで、不思議そうに目を丸くしたおばちゃんが「どうなってんのよ？」と銀行員に訊いていた。僕はあきらめて引き返すことにした。

お金を引き出すのはなんとかなるけど、この時期、いちばん大変なのは帰省用のチケットの手配だ。一説によると、春節前には四億人もの人々が帰省するのだとか。四億人といえば、日本の人口の三倍以上。気の遠くなる数字だ。

一番安い交通手段は鉄道だから、やはり列車が人気だ。

春節の頃に列車に乗った人の話によると、通路にはびっしり人が座っていて、デッキも満員電車なみに人が立っているのでトイレへも行けないほどなのだとか。なかには、座席の下に潜りこんで横に

なっている人もいるらしい。

春節休暇中の広州から雲南省の昆明まで、交通手段の値段を調べてみた。

飛行機のチケットが片道約八〇〇元から一一〇〇元（約一万円から一万四〇〇〇円）、夜行寝台バスが六〇〇元（約七五〇〇円）、夜行列車の硬臥車（日本のB寝台）が三四一元（約四三〇〇円）だ。軟臥車（日本のA寝台）が五三九元（約六七〇〇円）だから、ぼろぼろの夜行寝台バスのほうがゆったり寝ることのできる軟臥車より高かったりする。鉄道の硬座（普通座席）なら一九四元（約二三〇〇円）なので、エアチケットと比べれば四分の一以下の値段だ。

ちなみに、春節帰省輸送期間の一か月間、中国国鉄は貨物列車の運行を休止して帰省用の臨時旅客列車を増発する。だけど、みんな列車の切符を求めたがるので臨時列車がいくら出たところで鉄道の切符を手に入れるのはとても難しい。なにしろ、四億人が帰省する民族大移動なのだから。

春節前になると駅の窓口には長蛇の列ができる。五、六時間待ちというのはざらにあるうえに、自分の順番がきたところでお目当ての列車の切符が残っているかどうかもわからない。

ただでさえ入手しにくいところへ、旅行代理店やある組織が切符を買い占め、高い手数料をのせて転売したり、偽造切符が大量に出回ったりと、春節時期の鉄道切符には問題が多かったため、今年から広州駅やその他の一部の駅では窓口で身分証を提示しないと切符を購入できなくなった。切符には身分証の番号を印刷して、改札や検札の時にチェックするので、その身分証の人しかその切符を使うことができない。

「これで一般の人は切符が買いやすくなるよね」

僕は、中国人の友人に言ってみたのだけど、

「さあねえ。すこしはましになるだろうけど、どうだろうねえ」

と、彼は首を傾げていた。お上の対策をあんまり信用していないようだ。ともあれ、普通の人々がふるさとへ帰りやすくなるという

のだけど。

出稼ぎの人たちが多く住む郊外の店は早々に店じまいしてシャッターを閉じたりと、人通りも少なくなった。朝のラッシュ時のバスもいつもより空いている。職場の同僚も一足先に帰省したりして、くしの歯が抜けるようにがらんとし始めた。

道行く人々の顔も、春節を前にしてうきうきしたような、ほっとひと息ついたような。

ここ二週間ばかりは、春節までに片付けなければならない案件やトラブルの処理に追われて目の回るような忙しさだったけど、そんな生活の糧を得るための仕事も一段落ついた。

なんだか僕も、すこしほっとした気分になりかけている。

寒暖の差が激しすぎる広東流三寒四温

広州の街中をすこし離れて郊外へ出ればバナナ畑とライチ畑が広がって、マンゴーの木が街路に植えられているのだけど、こちらの冬は寒い。「亜熱帯のくせになんでこんなに寒いんだ」と思わずけちをつけたくなる。

日本の冬と変わらないくらいの寒さなので、二月二日に広州から日本行きの飛行機に乗った時、僕はジャンパーを着てズボン下を穿いていた。

それが、一週間経って広州へ戻ってみると、むわっとした生温かい空気につつまれた。その日の日中の最高気温は二十六度。夜でもTシャツ一枚で過ごせるくらいだった。寒い日本から帰ったばかりの僕は着込んでいたから暑くてかなわない。ようやくのことで空港から家へたどり着いた時には、汗びしょになっていた。

毎年、春節（中国の旧正月）を過ぎると、広州の気温は一気に上昇して夏みたいになる。だけど、このいい陽気はなかなか続かない。またすぐに寒くなってしまう。今夜は風が冷たいから、コートを羽織らないと風邪を引いてしまいそうだ。冬からいきなり夏みたいになったかと思えば、また冬へ逆戻り。こんな寒暖の差の激しい三寒四温を繰り返しながらしだいに気温が安定して、春らしいちやうどいいくらいの天気になる。

ただこの時期、いい感じの気候になるまでの間にいささかやっかないことが起きる。

湿度が一気にあがるせいかな、この寒暖の差の激しい気候のせいなのか、それともその両方が原因なのかはわからないけど、夜中になると結露して、窓ばかりでなく一階の床までびっしょり濡れてしまふのだ。陽の当たる場所は乾いてくれるけど、日陰だとなかなか乾かない。朝の結露が晩までそのまま残り、次の夜中にさらに結露す

るから床が水浸しになる。初めてこちらで春を過ごした時はほんとうに驚いてしまった。何事が起きたのかわからなかった。まさか床が結露するとは思ひもなかった。

今はマンションの九階に住んでいるから、さすがに床が濡れることはないだろうけど、去年は一軒屋の一階を間借りして住んでいたので困った。いくら床をモップ掛けしてもすぐに濡れてしまうし、タイル張りの床だったからつつかけを穿いて部屋を歩くと滑って転びそうになる。洗濯物も乾かない。部屋中のいろんなものに黴が生えてしまう。体にまで黴が生えそうで怖かった。

気候が安定するまでの間は、しばらく我慢だ。

エジプトのようなネットによる革命が大陸中国で可能か？

エジプトでネットによる革命が起きた。

民衆がネット上で次々とムバラク大統領の退陣を訴え、それに賛同した民衆が広場に集まり、デモを行なった。約三十年間、独裁政治を行なったムバラク大統領は退陣を余儀なくされた。

中国政府はこの民衆革命にかなり神経を尖らせており、エジプトに関する報道を統制している。中国では人民が不満をためこんでおり、このマグマがいつ爆発してもおかしくないからだ。

中国は経済成長が続いている。二〇一〇年のGDPは、日本を抜いて世界第二位になったことがほぼ確定したようだ。だが、経済発展の恩恵は、一般の人々へはほんのすこししか行き渡らない。ごく一握りの成功した人を除けば、実質賃金は下がる一方だ。物価が上昇しても、賃金はそれに見合うだけ増加しない。その一方で、公務員の給与は経済成長以上に伸び続け、官が民を収奪する形になっている。役人の腐敗も激しい。最近、中国鉄道省の大臣が収賄容疑で解任されたが、これはほんの氷山の一角のそのまたひとかけらに過ぎない。逆にいえば、役人へ賄賂を渡せば、融通をきかせてくれるということになるのだが。

さて、エジプトで起きたようなネットによる革命が中国でも起きるかといえば、当分、その芽はないだろう。

第一、大陸中国ではネットは厳重に規制されており、ネット上に政府批判の書き込みをただけで逮捕された例もある。

中国のネットには政府批判の書き込みは見当たらず、政治的なサイトもない。そのようなサイトが出現すれば、「調和を保つ」という名目でただちに閉鎖措置が取られる。したがって、ネット世論といったものが形成されることもない。中国政府が危険と認定した海外サイトにはアクセス禁止処置が取られるので、海外の情報も入っ

てこない。中国のネットは反政府運動を起こそうにもできないように処置が施されているのだ。中国の独裁政権は、今のところ小さな反抗の芽も確実に摘み取ることに成功している。

第二に、中国の人民はまだ衣食住が脅かされるほど貧窮に陥ってはいないことが挙げられる。

歴史を紐解けば、この国で革命が起きるのはいつも決まって人民が食うやくわずの状態に置かれ、混乱状態に陥った時だった。食べ物があるうちは、この国の人民は権力に対してはかなり従順だ。なにかあっても、「しかたない」と言っただけで済んでしまう。

現在、中国の各地で暴動が頻発し、デモ隊と警察隊が衝突して死傷者が出たりしているが、小規模なデモ隊が中国共産党の権力基盤を脅かすような事態には至っていない。いくら暴動が起きても、中国共産党はそれを押さえこむことができる。中国共産党の権力はまだ揺るぎないものがある。小規模な暴動といった小さな問題が生じることがあっても、全体としては人民をしっかり統制している。

将来、もし中国でネットによる革命が発生するとすれば、人民の生活が立ち行かないほど切羽詰り、政治が混乱して政府の統制がきかなくなった時だろう。

それにしても、と思わずにはいられない。

「共産党」という政党は労働者や農民といった働く人々のためのものだったはずだ。その働く人々のための政党が人民を搾取するあまりに人民の暴動を恐れるとは、下手なポンチ絵でも見ているようだ。

エジプトのようなネットによる革命が大陸中国で可能か？（後書き）

エジプトで起きた民衆革命は喜ばしいニュースだったが、軍のクーデターによって覆されてしまった。軍部がエジプトを乗っ取ってしまったのだ。これでは民衆革命の意味がまったく失われてしまう。ムバラク大統領という独裁者の後に、別の独裁権力が現れただけのことだ。

理解できないことに、アメリカのオバマ大統領がこの軍事独裁政権の誕生を歓迎する意の声明を発表した。アメリカは、世界中を民主化したがっていたのではないのか？ 民主主義と軍事政権は対極にあるものだ。これでは道理が通らない。結局、アメリカにとって都合のいい政権なら、誰でも支持するということなのだろう。

※1 カタールのアラブ専門衛星放送「アルジャジーラ」のサイトでエジプト民衆革命の様子を見ることができます。

<http://english.aljazeera.net/indent/spotlight/anger-in-egypt/>

※2 大陸中国のネットについては、以前、エッセイ『大陸中国の困ったネット事情』に書いたので興味のある方は御覧ください。

<http://ncode.syosetu.com/n16381/>

バレンタインディにチョコをもらうのは「男尊女卑」だと言われてもなあ

今日は、バレンタインディ。

中国にもバレンタインディはある。

「情人節」とよび、カップルで過ごす日だ。

中国では、彼氏が彼女にプレゼントを渡す。日本とは逆だ。もちろん、チョコを贈るのは日本だけの習慣なので中国にはない。

中国人の友人に、日本のバレンタインの習慣を話したら、彼は怪訝な顔をした。

「男はなんにもプレゼントしないの？」

「そうだよ。男は三月十四日のホワイトディに彼女にプレゼントするんだよ。だから、おあいこさ」

僕がそう言っても、彼は納得しない。本当に男はプレゼントを贈らないのかと何度も訊く。彼は、おもむろに、

「日本人はひどい。男尊女卑（大男子主義）もいいところだ」

などと言いだした。

「え？ 意味がわからないんだけど」

頭のなかは？マークでいっぱいだ。

「だって、男が女に貢がせるんだろ」

「うーん。そういうのじゃなくて、今日は女の子が男の子に告白していい日なんだよ。昔は、女の子から告白するのは少なかったからね」

「女が告白するなんてよくないよ。そんなことをしたら女の子はあばずれだと思われてしまう」

彼はなかなか頑なだ。

チョコをもらうことが女の子に貢がせていることになるなんて考えたこともなかった。男尊女卑って言われてもなあ。

飛行機のタイヤを交換しております

中国の北方の街から飛行機に乗った。

こちらの飛行機はよく遅れる。朝はだいたいまともに飛んでくれるのだけど、だんだん遅れが重なって、夕方の便に乗りうるとすると、二時間待ちは当たり前だったりする。ひどい時には四、五時間待ちになる。

昨日乗ったのは夜八時半の広州行きだった。

案内板には遅れの表示はない。

だけど、油断は禁物だ。クレームを避けるためだろうけど、こちらの飛行場では直前になるまで遅れは表示されない。遅れていても表示しないこともしばしばだ。

案の定、予定時刻の八時を過ぎても搭乗開始になる気配がない。

「ねえ、まだ乗れないの？」

僕は搭乗口のカウンターに立っている航空会社の制服を着たお姉さんに訊いてみた。

「今、タイヤを交換しているから、ちょっと待ってね」

人の好きそうなお姉さんはにこやかに笑う。

「えっ？ タイヤ？」

「そうなの。タイヤの調子がおかしいのよ」

「わかったよ……」

僕はそううなづくほかなかった。タイヤが壊れたままでは滑走できない。むりに飛ばうとすればえらいことになる。離陸できたとしても飛行中に故障したのでは、着陸できない。強行着陸したら、エンジンが爆発してしまうかもしれない。

包み隠さず状況を教えてくれたのはいいんだけど、ちょっと怖かった。

飛行機のタイヤを交換しております（後書き）

おかげさまでぶじに帰ってきました。

エジプト民衆革命の意義

エジプトで起きた民衆革命の背景には、アメリカとアメリカと結びついた特権階級によるエジプトの搾取というむごい現実があった。アメリカの操り人形だったムバラク大統領はアメリカの言いなりになり、エジプトの民衆をグローバルリズムという名の悪魔のひき白に売り渡した。グローバルリズムとは、冷酷かつシステムティックな搾取装置のことだ。経済成長とは裏腹にエジプトの人々の暮らしは苦しくなる一方だった。むしろ、経済が成長すればするほど搾取が進み、暮らしはひどくなるといったほうがいいかもしれない。

不満をためこんだ民衆は、アメリカによる裏支配やグローバルリズムにノーを突きつけた。自分たちの国を自分たちの手に取り戻そうとしたのだ。

エジプトの民衆革命の意義はこの一点にある。

自分たちのことは自分たちで決める。

自分たちの尊厳は自分たちで守る。

ごく当たり前のことだ。

エジプトの民衆は、ごく当たり前のことをごく当たり前に実行しようとしたに過ぎない。

革命にも様々な種類があるが、民衆が自発的に起こす革命は自分の身を守るためであり、自分たちの暮らしを守るためのものだ。それほどエジプトの人々が自分の身に危機感を抱いていたということだろう。

もちろん、革命は万能薬ではない。それによって一挙に世の中がよくなるわけでもない。しかし、追いつめられた人々が革命のほかには搾取や圧制から身を守る方法がそれ以外にない。

エジプト民衆革命と同様な動きが中東各地に広まっている。エジプトのそれをご存知の通り、チュニジアで起きたジャスミン革命に

触発されたものだ。だが、これは中東ばかりの問題ではない。アメリカも中国も、そして日本も状況は似たり寄ったりだ。グローバルリズムによる支配が世界各国で進行し、世界中の人々の暮らしが脅かされている。

ただ、残念なことにエジプトの民衆革命は軍部のクーデターによって覆されてしまった。その裏には、既得権益を守り甘い汁を吸い続けようとする勢力の策謀があった。日本でもそうだが、外国の勢力と結びついた特権階級の抵抗は根強い。あらゆる手段を駆使して権力を守り続けようとする。民衆側に強力なリーダーがいればまた違った展開になったのかもしれないが。

革命という言葉の響きは、ある人にとっては胡散臭い社会主義イデオロギーの匂いがするかもしれない。またある人にとっては、ロマンティックな響きがするかもしれない。しかし、働けば働くほど貧しくなるといふ世界中の大多数の人々のことを鑑みれば、民衆革命の真実というものはもっと泥臭く生活臭に満ちたところにある。

民衆の声はたったひとつ。

「まともな暮らしを送りたい」
ただそれだけだ。

ホラー小説より恐ろしいプロレタリアート小説（前書き）

『セメント樽の中の手紙』（葉山嘉樹著）のネタバレを含みます。
ご注意ください。

ホラー小説より恐ろしいプロレタリアート小説

中学生の頃、国語の授業の時に教科書に載っていた『セメント樽の中の手紙』を初めて読んだ。あるセメント工場での事故を綴った掌編だ。恐ろしい作品だった。

セメント工場に勤めるある若者が破砕器クラッシャーに石を放り込む作業をしていたところ、あやまってクラッシャーのなかへ落ちてしまった。周囲の作業員は急いで彼を引き上げようとしたのだけど、うまく救い出すことができなかった。結局、彼はセメント原料の石もろとも粉々に砕かれてしまい、クラッシャーのなかは若者の血あけで朱に染まってしまった。

このシーンを読んでいて、なによりも不思議だったのは、誰もクラッシャーを止めようとしなかったことだった。ひどい話だけど、機械を止めてはいけないのだ。機械をとめれば効率が悪くなってしまうから。人間の命よりも、効率のほうが大事だから。たとえ人命を犠牲にしたとしても、機械を動かし続けることが最優先されるべきことなのだ。この残酷さはなんなのだろう？

しかも、人間一人が粉々に碎かれ、血みどろになったセメントは、まるでなにごともなかったかのようにそのまま工事現場へと送りこまれてしまう。経営者の立場から見れば、たとえセメントに粉々になった人間の肉や血や骨が混ざっていようとも、そのまま使えるのなら売ってしまったほうがいい。そうしなければ、クラッシャーに放り込んだ石がむだになり、損をしてしまう。セメントになった彼は工事現場へ送りこまれ、ダムの壁になった。この薄気味悪さはなんなのだろう？

『セメント樽の中の手紙』は、ホラー小説より怖いプロレタリアート小説だ。現実味がたっぷりあるぶんだけ、よけいに恐ろしい。読んだ後、僕は怖くてしかたなかった。国語の先生はこの作品につい

て講義していたのだけど、わけのわからなくなった僕はただぼんやりと聞いていた。

お金が人間の尊厳を無効にしてしまう。

知性とやさしさを持った人間を人間たらしめる大切なことが抹殺されてしまう。

『セメント樽の中の手紙』が発表されたのは昭和になったばかりの頃だけど、この小説に描かれたことは決して過去のことではない。現代でも、金儲けのために人間の尊厳が傷つけられている。昭和の初めに葉山嘉樹が問題提起したことは、解決されるどころか、ますますひどくなるばかりだ。

現在の世の中の仕組みでは、お金がなければ生きてゆけない。なにをするにもお金が必要だ。しかし、利潤の追求が絶対的に正しいことになれば、それはもう人の世ではなく、鬼の世というほかにないだろう。お金が神様になってしまえば、人間同士が食い合いするよりほかにない。そんな世の中などごめんだ。

いつの日か、『セメント樽の中の手紙』は過去の人類の愚かさを示す遺物と言えるような時代がくればいいのだけど。

ホラー小説より恐ろしいプロレタリアート小説（後書き）

『セメント樽の中の手紙』（葉山嘉樹著）は青空文庫で読むことができます。

<http://www.aozora.gr.jp/cards/000031/card228.html>

隣の市の給食はおいしい

高校に入学したばかりの頃、隣の市に住む新しい同級生と学校給食の話で盛り上がったのだけど、隣のH市の話を聞いてびっくりしてしまった。

僕が通っていたN市の小学校では、年に二三回、お雛様の日や六年生の最後の給食の日といった特別な日だけケーキが出た。お雛様のケーキは、桃色、白、黄緑の三色ケーキで、それがとても楽しみだった。

ところが、H市ではなんと毎月一回、給食にケーキがついたという。しかも、なんのイベントもないごく普通の日に。H市のクラスメイトはケーキくらいどうってことないよといった顔をしていた。僕はうらやましくてしやうがなかった。

僕が通っていた小学校では、月に一回ご飯食が出た。砂糖をいっぱいまぶした揚げパンや黒パンは好きだったけど、普通のコッペパンとご飯を比べたら、やっぱりご飯のほうがいい。いっそ、毎日ご飯だったらいいのと思ったものだった。

ところが、H市では週に一回はご飯食だったそう。しかも、ただの白いご飯ではなく、炊き込みご飯や五目御飯などが多かったのだとか。僕は話を聞いているだけでつばが出てきた。

僕の家からチャリンコで十分も走ればH市だったのだけど、市が変わるだけでこんなに給食が変わるものかと思議でしやうがなかった。

なんでも、H市には工業団地があつて企業がたくさんあるので、税収が多くて市の財政が潤沢なのとか。それで、給食のメニューも豊富だったそう。いまさら小学生に戻つて給食を食べなおすわけにもいけないからどうしようもないのだけど、なんだかなあとちよつと割り切れなかった。

ちなみに、給食のメニューのなかでは、デザートのカルピスゼリーがいちばん好きだった。ぺらぺらの薄いプラスチックの容器に入った四角いゼリー。たしか、月に一、二回は出ていたと思う。カルピス色のゼリーを見ただけで、なんとなく楽しい気分になった。もういちど食べてみたいな。

やっぱり模型の特撮がいいな

特撮もののテレビ番組を観て育ったせいかな、CGの技術が進んだいまでもやっぱり模型を使った特撮が好きだ。

子供の頃に観ていた『ウルトラマン』シリーズは、戦闘機の上にピアノ線が見えていた。ウルトラマンと怪獣が戦う町は模型だった。ウルトラマンがどおっと倒されるとジオラマの町が破壊されてしまう。それをとってもリアルに感じて興奮していた。

特撮とはジャンルが違うけど、NHK教育で放送していた人形劇の三国志はいっぱい模型が出てくるので観ていて楽しかった。

なかでも、赤壁の戦いの時に曹操が築いた水上要塞のジオラマは圧巻だった。子供の頃はただすごいなと思って観ていただけだけど、大人になってからもう一度観てみると、こんな手のこんだものをどうやって作ったのだろうと思う。手作りの模型はなんとなくあたたかみがある。

今ではもう模型を使った特撮などなくなってしまった。今時、いちいち模型を作って撮影をしていたのでは手間もお金もかかってしかたないだろう。模型の特撮では撮影できるものに限りがあるし、CGのほうがいろいろできて便利なのだろうけど、できるものなら凝りに凝った模型の特撮を観てみたいなと思う。

Character assassination

誰でも、根も葉もない噂を立てられて困ったことがあるだろう。

人間ほど噂に弱い生き物はない。

とりわけ、妬みや恨みをかきたてるような噂にはあつけないほど弱い。

それは、人の心にどうしようもないほどに、後ろめたい欲望が渦巻いているからだろう。たぶん、人の心の奥には、自分はこれほど努力しているのに評価されないという恨みつらみや、自分は苦勞しているが他の誰かは楽をして不当な利益を得ているという妬みがわだかまっている。彼の足を引っ張り、自分より上に立たれるのを邪魔したいという暗い願望もあるだろう。恨みつらみを掻き立てられた人間は、得てして自分自身の心に渦巻く悪を検証もせずに、自分が正義だと思いこみやすい。実際のところは、後ろめたい欲望にただ操られているだけなのに。

ある人物に狙いを定めてあらぬ噂をまき散らし、その人物を社会的に抹殺してしまうことを、英語では”character assassination”（人物破壊）と呼ぶそうだ。”assassination”には、暗殺、名誉の毀損という訳語があるけど、この場合はまさに「暗殺」がぴったりくる。

敵を葬りたいと思えば、この人物破壊が手軽で便利だ。それが事実であろうとなかろうと、悪い噂はあっという間に広まってしまう。劇場版『フランダースの犬』を例に挙げるとわかりやすいかもしれない。

少年ネロは風車に放火したと決めつけられ、村八分にされてしまう。しかも、誰にも相手にされなくなるどころか、パトラッシュが牽く荷車でミルクを運ぶ仕事も奪われてしまい、生計すらも立てられなくなったネロは、最後には自殺同様に死んでしまう。彼を死に

追いやったのは、少女アロアの父ばかりではない。積極的であれ、消極的であれ、村人たちも加担していた。無実の放火罪を背負わされたネロは死ぬよりほかに道がなかった。『フランダースの犬』が日本で流行ったのは、人物破壊がまかり通る世間の愚かさや怖さがよく描かれているからなのかもしれない。

今の日本の政治の世界では、小沢一郎議員に対する人物破壊が行なわれている。「政治とカネ」をめぐる虚偽のキャンペーンによって、評価は貶められ、しかもでっちあげの罪で起訴までされてしまった。彼に限らず、”character assassination”（人物破壊）”によって政治家が失脚することは歴史を紐解けばいくらでもある。

人物破壊をしかける側には、必ず欲望や野心が働いている。

ネロを追いつめたアロアの父は、自分の娘がネロと仲良くなるのを好まず二人を疎遠にさせたかった。小沢議員を社会的に抹殺したい人々は築き上げた特権を守り、既得権の甘い蜜を吸い続けようとしている。自分自身の利益に過敏な人間は、自分自身に対する噂にも敏感だから、どんな噂を流せば人々がどう反応するかも心得ている。人物破壊をしかける輩は煮ても焼いても食えない。

とはいえ、どういう形であれ、人物破壊の片棒を担いだ後で、後味の悪い思いをしたり、損をするのは自分自身だ。消極的であれ、積極的であれ、そんなことには加担したくない。迂闊な噂にのって、大切な友人や知人を傷つけたりするのはごめんだ。自分の首を絞めることに手を貸すのもごめんだ。

巧妙にしかけられた人物破壊を見抜く智恵を持ちたい。後ろめたい欲望を掻き立てられるような噂を耳にしても、冷静でいられる平常心を持ちたい。もちろん、たっぷり自戒をこめて。

こういうのを火事場泥棒という

東日本大震災に関して、与野党が復興財源確保のために増税協議を始めるそうだ。称して「復興税」。復興のために増税などというこんなばかげた話があるだろうか。こういうのを火事場泥棒という。菅は首相になってから、ことあるごとに増税を主張してきた。自民党の谷垣はもともと増税論者。この二人はなにかにつけて増税をしたがる。今回、彼らは増税のための格好の口実を見つけたようだ。「復興のために資金が必要」といわれれば、一般の人々が反対しにくいのがみそだ。やり口が実に狡猾だ。

震災の後には、当然ながら経済活動は落ち込む。工場や商店が倒壊し、道路などのインフラもずたずたになるのだから、まともに経済活動を行なえるわけがない。もちろん、大震災の影響を受けるのは東日本ばかりではない。日本全体が影響を受ける。すでにいろんなメーカーでラインストップが起きている。計画停電が実施されれば、さらに多くのメーカーが影響を受ける。経済は確実に落ちこむ。

こんな時は、減税して民間経済の体力を休めるのが常道だ。増税の「ぞ」の字も口に出さないのが政府関係者の務めだ。政府が増税を口にすれば投資が冷え込んでしまう。しかも日本経済は今デフレの状態にある。今回の大震災は弱り目に祟り目だ。ただでさえ食うや食わずの人が大勢いるのに、こんな時に増税をしてはいけない。まだベッドで寝ていなければいけない病人に向かってグラウンドを走ってこいというようなものだ。復興税といえば聞こえはよいかもしれないが、現実には逆効果しかもたらさない。

震災の後は火事場泥棒（または詐欺）が現れるものだが、まさか日本国家という火事場泥棒が現れるとは思ひもなかった。

福島第一・第二原発の事故について

日本でスリーマイル島事故以上の原発事故が起きた。同時多発メルトダウンだ。

福島第一・第二原発で発生した事故に関して、日本政府とその広報部であるNHKは情報統制を敷いた。民間の大手マスコミも事実を報道しない。

今回の原発事故報道はあきらかにおかしい。

「まずはひと安心」というニュース解説が流れた後、悪い情報が飛び込んでくる。その繰り返しだ。まったく信用できない。「大本営発表」が繰り返される間に、事態は刻一刻と悪化した。

さいわいというべきか、元原発格納容器設計者だった後藤氏が実名を名乗り、カメラに顔をさらしてネット・ジャーナリストや外国人特派員の記者会見に臨んでくださったので、有用な情報を得ることができた。彼の勇氣に敬意を表したい。彼が出演している原子力資料情報室の会見を見れば、大手マスコミが報道しない事実を知ることができる。

現在、原子炉を爆発させないために現場関係者が努力を重ねているところだが、問題は次の二点につきるようだ。

1. 炉心を冷却できるか？
2. 格納容器が持つか？

炉心は今でも燃料棒が露出した状態で非常に危険だ。

格納容器にはすでに設計基準の限度以上の圧力がかかっているため、いつ壊れてもおかしくないという。

格納容器に海水を入れているが、これは前例のない非常措置のた

め、うまくいくかどうかは未知数。予断を許さない。

官房の発表にはごまかしが多い。

官房は環境中へ放出する放射能は微量なのでたいした影響はないと発表しているがほんとうだろうか？ 素直に信じることはできない。官房が発表した放射能線量のデータでさえ信用できるかどうかわからない。ジャーナリストの広河隆一氏が福島第一原発から約四キロメートル離れた双葉厚生病院や役場前で測定を行なったところ、一〇〇〇マイクロシーベルトまで測定可能なガイガーカウンターの針が振り切れたという。

設計者の後藤氏はベント（安全弁）を開くことを「究極の選択」と表現した。

つまり、原発から放射能が漏れることはあってはならない、ということだ。これが原則だ。もちろん、原発の町へ行けば、信じられないような話をいろんな聞くことができるけど、原則は原発から環境中へ放射能を出さないことなのだから、官房の説明は非常に無責任と言わざるを得ない。

そして、この安全弁を開いて蒸気を逃がす作業では間に合わなくなったため、格納容器へ海水を注入することにした。海水によって原子炉を冷やそうというものだ。

ただ、この手段は最後の措置だそうだ。

前例のない非常手段のため、うまくいくかどうかは誰にもわからない。

格納容器の高さは四〇メートルもあるので、なかをすべて海水で満たせば、格納容器の下のはうは約四気圧の圧力がかかることになる。格納容器の設計そのものは四・三気圧まで耐えられるようになっていて、最大で八気圧まで上昇したものに海水を加える——つまり、最大で八気圧十四気圧になるため、どこまで持つかはわからない。持ってくれることを祈るばかりだが、格納容器に亀裂が生じる可能性は十分に考えられる。

また、気象庁はこの三日以内に七〇%の可能性でM7クラスの地

震が起きると予想している。もしそうならば、電源が落ちたりと現場が混乱してどうなるかわからない。このほかにも、水素爆発や水蒸気爆発などのさまざまな危険が考えられる。

これだけの事態が進行していながらも、日本政府はまだ虚偽の発表を続けている。虚偽というのが言い過ぎなら、都合のいい事実だけを語り、真実を語ろうとはしない。多くの人々の命がかかっているというのに、非常に不誠実だ。

官房や電力会社は「すべて公表すればパニックが起きる」というかもしれないが、それは責任逃れの口実にすぎない。

このような非常事態の場合、情報を公開し、最悪の事態を想定したうえで対策を打つべきだ。人々も、正確な情報や警告がないのであれば行動すればよいのかわからない。デマも広がりやすい。いちばんやっかいなデマは今回の原発事故はたいしたことはないのに騒ぎすぎるのはいけないとか、放出される放射能などたいしたことではないというものだ。それを真に受けた人々が被爆してから後悔しても、とりかえしがつかない。

原発で作業を行なっている作業員や自衛隊の隊員は、文字通り必死だ。気の毒なことに彼らは放射能まみれになった。犠牲者が多数出るのは間違いない。彼らは身を挺して原発の爆発を防ごうとしている。命をかけた努力をむだにしないためにも、政府は情報をきちんと公開すべきだと思う。

福島第一原発の一号炉から四号炉までは隣接して並んでいる。そのうちの一つが爆発すれば、ほかの原子炉も吹き飛びかねない。もうそうなれば、広範囲に渡って放射能汚染が発生する。どこまで広がるのかは誰にもわからない。

こんな事故は嘘だと誰かが証明してくれるといいのだけど。

最悪の事態にならないことを祈るばかりだ。

福島第一・第二原発の事故について（後書き）

原子力資料情報室のホームページで記者会見を見ることが出来ます。

<http://cnic.jp/modules/news/>

三月十二日の記者会見の様子はこちらでもご覧になれます。

<http://iwakamiyasumi.com/archives/7597>

今回の震災で亡くなられた方々に哀悼の意を表します。

まだ救助されていない方々が一刻も早く救助され、一日でも早く復興されることを願っています。

なにかと大変だとは思いますが、どうかお体にお気をつけてください。

「ヤシマ作戦」に拍手

いいツイートを見た。

「ヤシマ作戦」のツイートだ。

節電に協力するため、十八時から電気を使わないという。そして、このツイートを広めてほしいという。

なんてやさしい人なんだろうと嬉しかった。

エヴァの作戦名をつけるところもいい。

わかりやすいし、ノリ気になれる。

節電をすれば被災地域の人たちがずいぶん助かる。とくに病院などはそうだろう。日本人のなかには助け合いの精神が生きている。

僕は中国に住んでいるからこの「ヤシマ作戦」に協力できないけど、もっともつとこの「ヤシマ作戦」が広まることを祈っている。できるだけ大勢の人が助かってほしい。

こんなやさしい若者が大勢いるのだから、日本の将来もまだまだ捨てたものじゃない。時代の闇は深まるばかりだけれど、僕はそう信じたい。

チェルノブイリ原発事故の時にウィーンを旅行していた人の話

中学生の頃、チェルノブイリ原発で事故があった。

ちょうどその時、理科の先生の友人が新婚旅行でウィーンへ行っていたそう。先生は友人の話をしてくれた。

先生の友人夫妻は朝、宿の窓を開けた。見晴らしもいいし、とてもさわやかな空気で気持ちよかったそう。

その日、夫妻は帰国のために空港へ向かった。が、なんとその空港にあったガイガーカウンターが激しく反応してしまった。致死量とかそういうのではないけど、被爆したことには間違いない。

原因は、チェルノブイリからウィーンまで運ばれてきた風。ずいぶん離れているけど、はるばるやってきたのだとか。

放射能から逃げるためには風向きに注意する必要がある。風下にいたのではいくら逃げても追いかけてくる。

みなさん、どうかご無事でいてください。

逃げられる人だけでも、逃げてください。

放射能の村でじゃがいも畑を耕す老婆

前回、放射能は風下へ向かって広がると書いたけど、もちろん例外もある。

チェルノブイリ原発事故による汚染マップを見れば、まったく関係なさそうなところにぼつりと高濃度の汚染を示す点がある。まるで筆先からぼとりと絵の具の色が落ちたみたい。これをホットスポットと呼ぶらしい。

なんでも風の流れからふらりとほぐれた放射性物質が雨となってそこへ降り注いだのだとか。だから、風下ではないからといって、決して安心できるわけでもない。放射能が名札をつけているわけでもないから避けようがないけど、とにかく雨に打たれないことが大切だ。

ふと、昔観た映画を思い出した。

チェルノブイリの半径三十キロ以内にある立ち入り禁止の農村を取材したドキュメンタリー映画だった。

ここが放射能に汚染されているのかと思うくらい、夏の森はきれいだった。背中に透明の翅をつけたかわいらしい妖精でも出てきそう。もちろん、見目麗しい自然を仔細に調べてみれば、さまざまな傷跡や畸形の植物や動物が見つかるのだろうけど。

村人たちが強制退去になった廃村のなかに一軒だけ、まだ人の住んでいる家があった。皺だらけになった老夫婦が暮らしていた。子供や村人たちがいくら説得しても頑として耳を貸さないそう。この村で生まれ育ったのだから、最後までここで生きてここで死ぬと。老婆は節くれだった手に鍬を持ち、庭のちいさなじゃがいも畑を耕していた。

歳を取ってから他所へ移り住めと言われても困ってしまうだろう。それも生き方のひとつなのだろうけど。老夫婦がいけないというわ

けでもないのだけれど。

放射能の村でじゃがいも畑を耕す老婆（後書き）

ベラルーシ（白ロシア）におけるチェルノブイリ原発事故の汚染マップを掲載しているサイト。

<http://www.kakehashi.or.jp/>

みんな中国へおいでよ

広東の友人と東日本大震災の話になった。

友人は地震と津波がいつぺんに襲ってきたことに驚いたようだ。

山奥の農村で育った人なので、海で地震が起きたら津波も起きるというのがうまく結びつかないらしい。

「雲南省でも大地震があったばかりだし、日本は地震と津波だし、地球はどうなっちゃったんだろうねえ」

と首を傾げていた。

「避難所に人があふれたり、救援物資が届かなかったり、原発から放射能が漏れたりしてたいへんなことになっているんだ」

僕がそう言ったら、

「だったら、みんな中国へおいでよ。こっちで暮せばいいじゃない」と、友人はほがらかに笑う。

こんなふうに考えるあたりは大陸的なおおらかさだと思う。おかげですこしだけ気分が軽くなった。

みんな中国へおいでよ（後書き）

みなさまの無事をただひたすら祈っています。

ただでさえ少なかったくわしい報道が余計に減ってしまった。

肝心の情報が出てこない。

炉心がどうなっているのか、格納容器がどうなっているのか、おとといあたりから、ぱったりと報道が途絶えてしまった。

炉心にかわって浮上したのが使用済み核燃料貯蔵プールの問題だ。核燃料貯蔵プールの水が、熱によってすさまじく蒸発していると大騒ぎになったのに、今現在プールの水がどうなっているのか、どこを探しても情報がない。プールの水が完全に干上がってしまった、爆発のおそれがある。爆発してしまえば、もちろん、大量の放射性物質が撒き散らされてしまう。なかがどうなっているのか、もう誰にもわからないのかもしれない。

三月十八日、自衛隊は約四〇〇トンの水を三号機に向かって放水したそう。

三号機は、放射能物質のなかでも非常に毒性の強いプルトニウムを混ぜたプルサーマル燃料を使用しているから、いちばん危険だ。しかも、プルトニウムは一度体内へ摂取されるとなかなか体外へ排出できないのだとか。

さて、三月十八日に自衛隊が放水した水四〇トンの体積は、四〇立方メートル。八トントラックに換算すれば、荷台の約七割の体積だ。プールを満たすためには一〇〇〇トン以上の水が必要だから、危険をかえりみずに放水作業を行なった自衛隊員の方々にはいくらか感謝してもしきれないのだけど、これではとても足りない。焼け石に水だ。

もちろん、三号機のほかに、一号機、二号機、四号機も同じ問題を抱えている。こちらもプールへ水を送りこまなければならぬ。本格的にプールへ水を入れようとすれば、給水ポンプを使うしか

ないが、停電状態で電源がない。

そこで、外部電源をつなげる作業が懸命に行なわれている。作業員の方々は決死隊だ。この方々にも深く感謝したい。東京電力の記者会見によれば、十九日の朝には二号機の配電盤へケーブルがつながる見込みだそうだ。

だが、たとえば電源がつながったとしても、いちばん大きな問題がある。

給水ポンプが果たして動くのかどうかということだ。

地震、津波、爆発によって給水ポンプの設備は相当なダメージを受けている。地震によって強い衝撃を受け、津波で海水をもろにかぶり、今は強い放射能を受けている。配管が壊れている可能性もある。給水ポンプが無事に作動する保証はどこにもない。

ただ、ポンプが動いたとしても、まだ問題が残っている。

プールが割れていないかということだ。プールが壊れていれば、いくら水を入れてもただ漏れになってしまう。

むずかしいハードルがいろいろあるけど、作業の成功を祈るばかりだ。まずは電源さえ確保できれば、最悪の事態を回避するための足がかりができる。

使用済み燃料貯蔵プールを冷却できればいいのだけれど――**福島第一原発**

東京消防庁が夜中に放水作業を行なったとのこと。消防隊員の方々にも深く感謝します。

体内被曝が怖い

ラジウム温泉では、微量のラジウム（Ra）やラドン（Rn）などを含んだ鉱石から放射能が放たれる。放射能が人体の細胞を傷つけるのだが、その際、人体の自然治癒作用が働き、身体が活性化する。ほんのすこし体を傷つけることで逆に身体が元気になるというしかけだ。

放射能による健康被害については諸説が乱れ飛んでいる。CTスキャンでも放射能をあびるのだから大丈夫という説や、レントゲン撮影時の放射線量と比較して今回飛び散った放射能はたいしたことはないという説もある。

だが、被曝に関しては次の二点がポイントになる。

1 累積被曝量（放射能を浴び続ける時間とその量がどれほどになるか）

2 体内被曝の有無（放射性物質を体内に取りこんだかどうか）

レントゲンの撮影は一瞬で終わってしまう。係りの人に、

「大きく息を吸ってください」

と言われ、息を吸ったところでバシッ。それで撮影終了だ。しかし、福島第一原発から出た放射能が空中に浮遊している状態ではそうもいかない。

消防庁や自衛隊の必死の放水作業のおかげで福島第一原発の危機がとりあえず一山越えたとはいえ、放射能はまだ撒き散らされ続けている。原子炉本体の状況が不明な今、まだまだ予断を許さない。二十日午後十二時過ぎの保安院の記者会見では、三号機の格納容器内の圧力が上昇しているため、なかの空気を抜いて圧力を下げるという。つまり、放射性物質がまた撒き散らされるということだ。し

かも今までのウェットベントの方式とは違い、ドライベントで行なう予定とのことだ。ドライベントを行なえば、今までの百倍の放射能が飛び出すことになるという。また、二号機の格納容器は損傷しているとの発表があった。つまり、今後、長期間にわたって放射能が漏れるということだ。今後、各地の人々の累積被爆量がどうなるのか、まだまだ予測不可能だ。

放射能が充満した格納容器の弁を開けると言われても、さほど驚かなくなってしまった。放射能に慣れてしまうことがいちばん怖いことなのかもしれない。ドストエフスキーは『死の家の記録』のなかで、人間はどんな悲惨なことでも慣れてしまうものだと言っている。

レントゲンのように体の外から一時的に微量の放射能を浴びたとしても、さほど心配はいらない。

いちばん怖いのは放射性物質を体内へ取りこんでしまうことだ。外からの被爆と内からの被爆では話がまったく違う。放射性物質を含んだ水や埃を体内へ入れてしまうのがいちばん恐ろしい。

ヨウ素131やセシウム137といった放射性物質をいったん体内に取りこんでしまえば、人体に重大な影響を及ぼす。ベラルーシではチェルノブイリ原発事故の際、ヨウ素131を甲状腺へ取りこんでしまった子供がかなりいて、今でも甲状腺の異常肥大などに悩まされている。ずいぶん以前にそのドキュメンタリー番組を見たことがあるけど、子供たちが苦しむ姿は見ていて気の毒でならなかった。大人は大丈夫だとしても、子供が危ない。被爆した子供たちは、健康ばかりではなく、社会的に差別されて苦しむことになる。

報道では「微量の放射性ヨウ素やセシウムが検出された。健康に影響はない」としているが、用心に越したことはない。健康以上に大切なことはないのだから。

僕の祖父は被爆者手帳を持っていた。

ヒロシマで原爆投下があった時、兵隊にとられていた祖父は山向こうに駐屯していて、核爆発直後の広島市内へ入って救助活動を行

なった。

不幸中の幸いというべきか、祖父は原爆病に罹ることなく、酒の飲みすぎが原因で脳溢血で他界した。

ただ、当然のことながら、戦友のなかには原爆病で苦しんだ人がかなりいたという。戦友会の世話役をしていた祖父は戦友が発症するたびに役所や議員とかけあっていたのだとか。

余談になるが、祖母は祖父にそんな活動をするのはやめてほしいと思っていたそうだ。祖父の戦友には「原水爆絶対反対」の信念をもつ左翼系の人もいる。被爆者なのだから、そんな人も多かっただろう。戦前、社会主義思想をもつ祖母の親戚のお兄さんが特高に捕まって拷問にかかったそうで、祖母は左翼の人が家にくれば、彼らを追いかけている特高がまでが家へやってきて、祖父が捕まってしまうと非常に怯えていたのだとか。いくら時代が変わったとはいえ、過去の忌まわしい記憶がまわりついてはなれなかったようだ。

閑話休題。

原爆病の発症のしかたは人によってまったく異なる。同じ部隊に所属していて広島市内の同じ被災地で作業していたにもかかわらず、祖父のようにまったく発症しない兵隊もいれば、戦友のように発症してしまう人もいる。なかには繰り返し白血病になって悲惨な目に遭った人もいたのだとか。その人の体質によるのかもしれないが、救助活動中に埃を吸ったりしているはずだから、その時どれだけ埃を吸ったりして内部被爆したのかということもおそらく関係しているのではないかと思う。

長々と文章を連ねた挙句、最後にちゃぶ台をひっくり返すようなことを書いてしまうけど、実をいえば、放射能が人体にどんな悪影響を及ぼすのか、その全貌も細かい実態も、誰もはっきりとわかっていない。悪魔の尻尾はつかんでいても、その姿を見た人は誰もいない。わかっているのは恐ろしいことになるということだけだ。それはscientistと称している人も同じだ。なにしろ、人類が放射能を「発見」してから、ほんの百年ばかりしか経過していな

い。まだまだ研究不足だ。

今回の事故で環境中へ放出された放射能を体内へ取りこんでしまった人が、それがもとで将来癌になったとして、いったいだれが今回の事故の放射能が原因だと証明できるのだろうか？ 統計として発癌率がどれほど高まるのかということは言えるのかもしれないが、個々人がこうむる具体的な影響まではわからない。万が一のことがあった場合、泣き寝入りしなければならぬのは当人だ。自分の身は自分で守るしかない。

とりわけ、妊娠中の方や子供は、事態の收拾がつくまで、用心に用心を重ねるに越したことはないだろう。疑わしいと思われるものは口に入れないこと。また、風向きと雨に要注意だ。

こんなことを書けば、風評被害を広めるなどと言われるかもしれないが、現状ではリスクをすべて排除すべく万全の対策を採るしかないと思う。それが決死の覚悟で事故現場へ向かった人たちの想いへ応えることではないだろうか。彼らはこれ以上の犠牲者を出さないために、敢えて危険な現場へ赴いたのだから。

彼らの努力が実を結び、一刻も早く事態が收拾されることを祈るばかりだ。

体内被曝が怖い（後書き）

原発には当然ながら大きな利権がからんでいます。

今はまだそのことを云々するべきときではありませんが、ここもメスを入れなければならないところです。たとえば、テレビ局や新聞は電力会社から広告収入を得ているために、正面切って電力会社や原発を批判しにくいことなどです。そのことを頭の片隅に入れておいていただければ幸甚です。

雨季のさがけ

はじまった。

朝、一階へ下りると、フロア一面が結露して、床がびっしょり濡れていた。

湿気の季節の始まりだ。

毎年、この時期になると、あたりはもやに包まれ、もわっとした空気があたり一面に漂う。五百メートル先の高層ビルの上半分が霧に隠れている。ベランダに洗濯物を干しても乾かない。シャワールームも昨夜シャワーを浴びた時と同じ状態で、ずっと濡れたまま。換気扇を回しっぱなしにしてもすこしも乾かない。

仕事場へ行けば、倉庫の貨物が濡れているという。貨物には特大サララップでラッピングをしているので、ラップの外に水滴がつかただけだけど、この湿気では金属性の部品に錆が生じやすいので心配だ。

夕方、部屋へ帰ると、ドアが濡れていた。パソコンに向かうために、椅子に腰掛ければ、椅子に置いた竹の尻当ても湿っぽい。試しにアコースティックギターを弾いてみたら、湿気のせいでチューニングが狂ってしまい、音がばらばらになっていた。この間、知人にいただいたマーチンだから大切にしたいのだけど。マーチンはほんとうにいい音がする。湿気で傷めてしまったては申し訳ない。ハードケースを買ってきて、なかに乾燥剤をいっぱい入れて保存しておいたほうがよさそうだ。

今はマンションの九階へ引っ越したのでずいぶんましだけど、去年は、出稼ぎ労働者が住む町の片隅で一階の部屋を間借りして住んでいたからたいへんだった。床一面にバケツで水をぶちまけたように、スリッパで部屋を歩けば、つるつるすべって危ない。踏み出した足だけつっとなすべり、何度も股裂き状態になって怖かった。モ

ップがけをしても、そのそばからすぐに床が濡れてしまう。窓は閉めたまま。開ければ、湿気をたっぷり含んだ重い霧がなだれこんでくる。湿気のおかげで体がぐにゃぐにゃになりそうだった。

「食在広州（食は広州にあり）」というだけあって、ここは食べ物がおいしいし、とくに飲茶は最高なのだけど、亜熱帯特有の湿度の高い気候がやっかいだ。もうすこし気候がよければ住みやすいのだけれど。

こんな状態が半月かそこら続いて、すこし天気がよくなったかなと思ったら、本格的に雨季へ突入する。一日中しとしと雨が降ったり、スコールになったり。

床がびしょ濡れになるのは雨季のさきがけだ。

この地で暮し始めて三度目の雨季。

今年は、もうすこし上手にやりすごせるようにならないと。

中国・広東省には、日系企業の工場が数多くある。

東日本大震災の影響から、一部の日系メーカーでは先を見越して早くも工場の生産調整を始めた。減産だ。

中国の工場で製品を生産と聞けば、すべて中国国内で作っているように思う人がいるかもしれないが、実際はそうではない。

最新の技術や中核技術となるものは、どのメーカーでも日本にしている。最新技術や中核技術を使う部品や原材料は日本の工場で作る。技術力が日本の製造業の生命線なのだから、当然の措置だろう。

たとえば、特別に粘りのいいプラスチック原料の粒、震動の激しい箇所で使用しても長持ちする特殊なネジ、金属の棒を折り曲げて加工する時に使う専用のワックス、最新の精密電子部品といったものは日本から輸入し、それを中国の工場で用いて製品を製造する。中国ではこれらの日本から調達する部品や原材料を「日調品」と呼んでいる。この日調品がなければ、中国にある日系メーカーの工場は生産することができない。

日調品は船でゆっくり輸送するので、今のところ日調品の在庫が切れた工場は少ないようだが、日本の仕入先が被災したり、放射能汚染の立ち入り禁止区域にある場合、この先、仕入れが困難になる。また、日本の仕入れ先が直接被災していなくても、その工場が被災した工場から品物を購入して日調品を生産していた場合、その工場も生産が止まってしまう。そうなれば、当然、日調品は中国へ届かなくなる。あらゆる工場が網の目になってつながっているので、一部で問題が起きれば、連鎖的に波及する。

さて、この日調品を中国で生産すればいいかといえ、そうもいかない。中国で作れるのなら、とっくにそうしている。そのような

品物は、中国本土企業の技術力では製造できない。日本のメーカーも自社の中核技術を守るために海外生産しない。中国で生産できないからこそ、高価な日本製をわざわざ輸入しているのだ。

それでは、アメリカやドイツといった他の先進国のメーカーに依頼して作ってもらえばいいかといえば、これも簡単ではない。たとえばできたとしても、特殊な物だけに、生産開始にこぎつけるにはそれ相応の準備期間がいる。

自動車、パソコン、デジカメ、家電製品のどれをとってみても、製品は部品の集大成だ。ある一つの部品が欠けても製品を製造できなくなる。

四月に入れば、ほとんどすべての日系メーカーで減産や生産ラインの停止といった状態が発生するだろう。あるメーカーの担当者に聞いたところでは、今のうちから減産を始めてなるべく生産ラインが止まらないようにするか、復旧した日本の仕入れ先から航空便を使って緊急輸入するよりほかに手立てがないという。仕入れ先そのものを変更することはむずかしく、自社の工場に必要な日調品が生産されない場合はお手上げだそうだ。

問題は、中国の日系メーカーだけにとどまらない。日本の大手メーカーは世界中に工場を建てている。

日調品の供給停止は中国ばかりではなく、タイ、マレーシア、アメリカ、ヨーロッパなどでも起きる。当面、海外の日系企業は日調品の調達に苦慮し、苦戦を強いられることになりそうだ。

中国に限っていえば、中国国産メーカーの実力がついてきたため、日系メーカーの製品でなくても、中国国産製品で十分だ。とはいえ、やはり日系メーカーの技術力は群を抜いているので、長持ちするいい品物が欲しいとなった場合、やはり日系メーカーの製品を選ぶ消費者が多い。

製品を製造することさえできれば、日本ブランドは信頼されているので販売できる。それが中国においても、日本においても、他の海外の国においても、多くの人の職を確保することにつながる。

被災した工場が一刻も早く復旧することを願うばかりだ。

「パパ、赤ちゃんはどうやってできたの？」という子供の質問に中国人はどんな

「子供に赤ちゃんはどうやってできたのって質問されたら、どんな風に答えるんだい？」

僕は広東人の友人に訊いてみた。彼は僕と同年代で、中学生と小学生のお子さんがいる。

「まあ、適当に答えるけどねえ。拾ってきたとかさ」

「それはあんまりじゃないの。子供は悲しむよ。僕だったら泣いちゃうよ」

そう言ったら、彼は笑う。

「そうだね。たしかに、かわいそうかもしれない」

「鳥が赤ちゃんを運んでくるとか、キャベツ畑でできたとか、そんな言い方は中国にはないのかな？」

僕が重ねて訊いたら、広東流の答え方を教えてくれた。

「石が赤ちゃんになったって答えることが多いかな」

なんでも、『西遊記』の孫悟空は石から生まれたので、子供たちはたいていその説明を信じるそうだ。「あ、孫悟空といっしょなんだ」と。ちなみに、中国人は猿が大好きだ。動物園へ行けば、猿山へ向かってピーナッツやらみかんやらを熱心に投げ入れている中国人の姿を見ることが出来る。

誰もが知っている『西遊記』を使って子供を納得させてしまうあたりが、中国流で面白い。嬉しくなった子供たちは、きんとうん？斗雲に乗る夢でも見るのだろうか。

海へ流れた放射能が引き起こす “生物濃縮”

福島第一原発は震災から三週間経った今でも、放射能のただ漏れが続いている。原子炉本体を納める圧力容器に穴があき、そこから高濃度の放射性物質を含んだ水が漏れた。しかも、その水が海へ流出してしまった。三月三十日には基準値の四三八五倍のヨウ素131が検出された。

ヨウ素131（半減期八日）、セシウム134（半減期二年）、セシウム137（半減期三〇年）のほかにも、猛毒中の猛毒とされるプルトニウムも付近の海を汚染している可能性が高い。プルトニウムの半減期は二万四〇〇〇年だ。今、福島第一原発から漏れたプルトニウムは、約千世代以上に渡って環境を汚染し続ける。もつとも、もし人類がそれまで続いたとしての話だが。

チェルノブイリ原発事故によって、チェルノブイリの美しい森は放射能汚染によって松が枯死してしまい、「赤い森」と呼ばれるようになったが、福島第一原発付近の海が「赤い海」とならないことを祈るばかりだ。

さて、放射能は付近の海を汚染するばかりではない。当然、海流に乗って遠くへ流れ、世界中の海を汚染することになる。かつて、ロシアは海に放射性物質を投棄し、国際社会から強い批難を浴びた。同じように、世界の国々は日本へ向ける視線を厳しくしつつある。日本政府や御用学者がいくら口先だけで安全だと言っても、誰も信用しない。

バランスを取るために付言しておく、かつて海で原爆や水爆を爆発させて核実験を行っていた時代があった。太平洋戦争敗戦の翌年の一九四六年七月には、太平洋マーシャル諸島のビキニ環礁で核実験が実施され、旧帝国海軍の戦艦長門と軽巡洋艦酒匂がその実験台になった。初めに行なわれた空中爆発実験の結果、酒匂は沈没。

長門は空中爆発実験では損害軽微だったものの、二度目に行なわれた水中爆発実験の後、船体に亀裂が入って沈没した。海底に沈んだ戦艦長門は、格好のダイビングスポットになっているそうだ。

一九五四年には、同じくビキニ環礁で行なわれた核実験の結果、付近で操業中だったマグロ漁船の第五福竜丸が被爆した。この実験による被爆者は二万人にのぼるとも言われている。

世界の海を放射能で汚染しているのはなにも日本だけではないが、もちろん、だからといって汚染していいというものでは決していない。やっかいなのは、海で放射能の生物濃縮が起きてしまうことだ。

高校で生物の授業を選択していた人は「食物連鎖」を習ったことがあるだろう。

ごく簡単に言えばこういうことだ。

小さな動物や植物を、中くらいの大きさの動物が食べ、大型動物がその中くらいの動物を食べる。そして、最終的には、人間がその大型動物を食べる。なんてことはない。小さな生物はより大きな生物に食べられてしまうというただそれだけのことだ。

問題なのは、この食物連鎖の過程において、より大型の生物の体内に毒物が濃縮されることだ。この問題は、陸でも起きることだが、海が放射能で汚染された場合は次のようになる。

被爆した小さなプランクトンを小魚が食べ、小魚の体内被曝量が上がる。その小魚を中型の魚が食べて、今度は中型の魚の体内に放射性物質が蓄積される。そして、今度は大型の魚が中型の魚を食べるので、大型の魚の体内に大量の放射性物質が取りこまれる。当然、大型の魚になればなるほど食べる量が多いので、体内に蓄積する放射性物質の量も多くなる。

実は、放射性物質とはまた別の物質だが、毒物の生物濃縮はもうすでに起きている。海食物連鎖の頂点に立つイルカやクジラの体内には、水銀やPCB（ポリ塩化ビフェニル）といった化学物質が蓄積されている。PCBは今ではあまりなじみがない物質かもしれないが、非常に毒性の強い物質だ。かつては変圧器やコンデンサと

いった電気機器の絶縁用油などとして幅広く用いられていた。これらの毒物が体内に大量に蓄積された結果、イルカやクジラの畸形の増加や生殖能力の低下が指摘されている。

海に放射性物質がばらまかれれば、必ずこの生物濃縮の問題が起きる。最終的に体内に放射性物質を蓄積した魚類を食べるのは、いうまでもなく人間だ。海に流れ出た放射性物質はブーメランのように人間へ跳ね返り、長年にわたって人体を汚染してしまう。苦しむことになるのは、ごく真面目に暮らす人々だ。

母なる言葉、ほんとの言葉

いちおう、日本語が僕の母国語ということになった。

今、いちおうって書いたんは、わけがあるねん。ちよっと辛抱して読んでみてえな。

僕の生まれた国は日本やから、日本の標準語が僕の母国語ということになる。理屈は通つとるわな。なんも問題あらへん。せやけど、なんかしつくりこうへんのや。母国語と母なる言葉は別物^{べつもん}や。ちゃうと思うねん。

僕は大阪で生まれて、大阪で育った。せやから、大阪弁が僕を育てた言葉や。僕の母なる言葉や。十九の時に東京へ行ったんやけど、それまで大阪の言葉しか使ったことがあらへんかった。

大阪の言葉は日本語の一方言やから、大阪弁と東京標準語は似てゐることは似てる。せやけど、やっぱりちゃう。標準語はよそ行きの言葉。そんな感じがつきまとして離れへん。

実は、いちばんこれを感じるんは、中国で日本語ができる中国人と日本語で会話する時やねん。大阪の言葉なんて相手はわからへんから、標準語で話さんとしやあない。

「あれ、チャウチャウちゃう（あれはチャウチャウじゃないの）？」

「ちゃう、チャウチャウちゃう（違う、チャウチャウじゃない）」

「チャウチャウちゃうんちゃうん（チャウチャウじゃないのと違うの）？」

「ちゃうちゃう、チャウチャウちゃう（違うちがう、チャウチャウじゃない）」

こんな風に大阪弁が通じればええんやけど、ちっさい時から大阪で育った外国人やないとまずむりや。それに、相手がいくら日本語が達者でも、すこしスピードを落として話してあげんといかん。機関銃みたいに喋ったら、相手は聞き取られへん。言いたいことをち

やんと伝えられへん。とくに、仕事の時は、正確に伝えへんと後で問題が起きるから氣イ遣うわ。

標準語でゆっくり喋つとると、どうも胸がかゆくなるんや。なんや、外国語でも喋つとるみたいや。肚の底から出た言葉やない。頭だけで考えた言葉や、ほんまのことが言えてへんとそんな氣がしてしゃあないねん。東京標準語は外国語——そんな氣すらするんやよ。たぶん、生まれ育った故郷を離れて暮してゐる人はわかってくれると思うんやけど、ほんまの氣持ちは母なる言葉でしか話されへん。自分の正直な氣持ちをそのまんまで語れるんは母なる言葉しかあらへん。北海道生まれの人も、九州生まれの人も、それはみんないっしょやと思う。標準語を使^{つか}たら、どっかズレるんや。

日本語は、たしかに母国語や。それはそれで間違いないんやけど、僕にとっては、大阪の言葉が母なる言葉なんやよ。ほんまの言葉やねん。

夏の始まり

亜熱帯の広州では夏が始まった。

四月十一日の最高気温はこちらの気象台の発表で二十七度。街中はもっと高いに決まっている。十二日の予報も最高気温二十七度。しばらくこの暑さが続きそうだ。湿度も高く、むしむしする。この原稿を書いているのは真夜中だけど、Tシャツを着ているだけでも暑い。ま、皮下脂肪が厚いからかもしれないけど。

今日は、車に乗って一日中外回りをしていた。開け放った車の窓から入ってくる風が心地良かった。

「ミニスカートの女の子が増えましたね」

なんて陽気にはしゃぐ知人もいる。

それはそれで嬉しいことなんだけどねえ。

楽しい創作ノート作り（前書き）

この連載もおかげさまで第一〇〇回を迎えることができました。ささやかな記念なので一〇〇回目はなにを書こうとかとあれこれ考えたのですが、やはり「小説家になろう」サイトで発表しているの
で、創作系の話を用意しました。今まで読んでくださった方々に厚く御礼申し上げます。ぼちぼちと連載を続けますので、今後ともよろしくお願いいたします。

楽しい創作ノート作り

長い話を書き始める前は、創作ノートを作ることにしている。

こんな話を書いてみたいなというイメージが脳裡に浮かんだら、仮のタイトルを決め、テーマと主要登場人物について、箇条書きでそれぞれ二行か三行くらいささっと書いてみる。

テーマはシンプルであればあるほどいい。複雑にしようとするなにかを書きたいのか、自分自身でもわけがわからなくなってしまう。ネタバレになってしまうけど、例えば『貴女と蒼穹を翔びたかった』のテーマは「大切なもののために闘ったのか？」だった。主人公の気持ちになりきり、このことについてずっと考えを巡らせながら小説を書いた。

プロットのほうはあまり練らない。というよりも、僕の場合、いくら考えてもうまく思い浮かばないので練りようがない。ストーリーは結末だけは決めておいて、あとは実際に小説を書きながらどうやって結末へ持っていくかと考える。ストーリーは、物語の面白さよりも、どんなストーリーがテーマにふさわしいかという観点から決めるようにしている。たぶん、エンターテインメントではほとんど採らない手法だと思うけど。

人称をどうするかも大事な問題だ。この連載の『一人称で書くか、三人称で書くか』でも書いたけど、一人称は使い勝手のよい小刀で、三人称は切った張ったと大立ち回りできる長剣みたいなものだと思う。一人称は主人公の気持ちになりきりやすいうえに、心理描写もみっちりできて、小説を主人公の世界観で染め上げやすいから、このところ一人称で書くことがほとんどだ。たまには三人称で書いておかないと、そのうち三人称が書けなくなるような気もするけど、とうぶん、一人称が続きそう。もとはといえば、僕は三人称のほうが好きだったのだけだ。

簡単に大枠を決めたら、とりあえず出だしを書いてみる。

実際に書いてみないとわからないことも多い。出だしはその小説の世界観と主要人物の描写が主だから、試し書きをすればイメージがもうすこしはつきりする。僕はこんなことを書きたいのだなど自分で気づいたりもする。小説というものは、頭のなかのもやもやとしたイメージを引っ張り出して、楽しんだり四苦八苦したりしながら言葉でなんとか形をつける作業だ。もっとも、僕は描写が下手だから、こんな偉そうなことを言えたものではないけど。

こんな感じでいいかなと思えるまで何度か冒頭を書き直す。冒頭だけでイメージを？めないときは、もうすこし先まで書いてみる。『生煮えの鮎』の場合、バイオリンを甲高い音でかき鳴らすようにして出だしを書いたので、そこだけでは全体の感覚を？むのがむづかしかった。だから、とりあえず先へさきへと急いで書いてみた。

冒頭をある程度固めたら、また創作ノートへ戻る。？んだイメージの種を膨らませるのだ。

ネットを検索して資料を集めたり、小説を読んだり、DVDを観ながら気になった言葉を書きとめたりして、ベッドにごろっと寝転がっては小説世界を思い浮かべながらいろいろ妄想してみる。あれやこれやと考えているうちにイメージが肉付けされて具体的になってくる。テーマについても、つつこんで考えられるようになる。ずいぶん時間のかかるやり方だなと我ながらあきれてしまう。でも、こうしないと長い話を書けないのだから、ほかにやりようもない。

僕の好きな話には、かならず問題提起がある。問題提起が話を深め、そこから力強いメッセージが生まれる。

問題提起などと書けば大袈裟に響くだろうから、プロ野球の出来事を例に引いてみよう。

二〇〇五年四月二十一日、東京ドームで開催された阪神・巨人戦。七回裏ジャイアンツの攻撃。ツアアウト満塁の場面で清原和博選手がバッターボックスに立った。ピッチャーは当時中継ぎへ転向したばかりの藤川球児投手。藤川投手はフォークボールを投げて清原選

手を三振させた。

清原選手はまさか変化球で勝負されるとは思っても寄らず、「ストリートで勝負しないなんて信じられへん。ち×ちんついでのかっ!」

と怒りのコメントを発して、物議を醸した。

これは、「男らしさとはなにか?」というこの問題提起だ。「男なら真っ直ぐ勝負しろ」というのが清原選手のメッセージ。もちろん、このメッセージが「正しい」かどうかはまったくの別問題。往々にして「正しさ」は個々人の価値観によるものだから。たぶん、ノムさんなら、「アホなこと言^うてんと、もっと考えて野球せい」と言うだろう。

これは問題提起の一例だけど、素材は身近なところにいくらでも転がっている。

もちろん、問題提起やメッセージに具体性や重みを与えるのは、登場人物のキャラクターだ。キャラクターとメッセージが?み合っていないと頓珍漢なことになる。さっきの例で言えば、へなちょこな選手が「真っ直ぐ勝負しろ」と言ってみてもしょうがない。しかるべきキャラクターにしかるべき問題を提起させる必要がある。キャラクターをしっかりと作り上げないと、問題提起やメッセージが生きいきとしたものにならない。

キャラ作りをする際、僕は各キャラクターの声を必ず先に決めるようにしている。

このキャラクターはどの声にしようかとあれこれ考え、俳優さんや声優さんや囃家の声を頭のなかで鳴り響かせてみる。もうすこしいい声はないかとほかの声も探ってみたりして、しっくりくるまで何度かその作業を繰り返す。キャラの役柄と性格にぴったりの声を見つけたら、キャラ作りはだいたい七割くらい完了だ。もちろん、このキャラはこの声でいくとはじめから決めておく場合もある。『祝福を遠くはなれて——エンタープライズ、カミカゼの奇襲を受く』のタイラー艦長は、前から一度この声で描いてみたいと思っていた

声にした。誰の声なのかは内緒。

声が決まったら、キャラクターの容姿を決める。俳優さんの声を選んだ場合、自動的にその俳優さんがキャラクターの容姿になったりする。容姿の描写は大事だから、いろいろ考えて、できりがぎりイメージをはっきりさせるようにしている。一人称小説の場合、カメラアイが主人公の視線に固定されるので、主人公自体の描写はなかなかしにくいけど、小説のなかで描くかどうかは別として、やはりきちんと決めておくことにしている。

プロの作家の小説作法を読んでいると、書いている途中から登場人物が書き手のコントロールから離れて、勝手に動き出すといったことがよく書いてある。そうなればしめたものだ。僕の場合、声をしっかり決めておけば、書いている途中から勝手に喋ってくれるようになり、頭のなかで各キャラクターの声が互いに響きあうような感じになる。

『罪と罰』、『悪霊』、『カラマーゾフの兄弟』といったドストエフスキーの作品群を分析した哲学者バフチンは、登場人物の声がそれぞれ独立して響き合う形式の小説のことを「ポリフォニー小説」と呼んだ。僕の書くものはしよせんたかがしれているけど、ドストエフスキーの爪の垢でも煎じて、すこしでも近づけたらと思う。憧れの作家だから。

声が響き合うようになれば、登場人物が勝手に動いてくれてストーリーも自然と固まる。格好をつけた言い方をすれば、「人の歩いた跡が道になる」といった感じだろうか。実際の人生にしても、できあいのストーリーがあって、それを僕がなぞるのではなく、ままならない現実や自分自身とえんやこらと格闘しているうちに、自身の物語ができるものなのだから。

キャラクターの声と容姿が決まったら、出だしを書き直したり、もうすこし先を書いてみたりしてイメージを固める。できるだけ、キャラの声が頭のなかですっと自然に響くように何度も練習する。それから、また創作ノートへ戻り、あれこれと考えを練って、思い

ついたアイデアや途中でこんな場面を入れたいなと思ったものを書きつけておく。どんな小説にしようかと考えをめぐらせている間がいちばん楽しい時なのかもしれない。実現可能かどうかは別として、いろいろと夢が広がるから。

いけない。

軽く書くつもりがけっこう長くなってしまった。与太話ばかり書いていないで、肝心の創作ノートをちゃんと作らないと。

それにしても、こんなことをしている僕とはいったい何者なのだろう？

楽しい創作ノート作り（後書き）

あくまでも我流の創作ノートの作り方です。僕は純文学系が好きで、大きな物語を好むので、そちらサイドへかたよっています。

牛のように働きますっ！

「田舎から来ました牛のように働きます」

先日、日本語のできる中国人が送ってきた履歴書を読んでいたら、こんな表現を見つけた。もちろん、日本語を話せることが採用の条件なので、履歴書は日本語で書いてもらっている。

「馬車馬のように働く」という表現は知っているけど、田舎からきた牛のように働くというのは初めて知った。たぶん、これは中国固有の表現で、それを直訳したものなのだろう。

それはともかく、なんだか迫力のある表現だ。一所懸命がんばりますという気合が伝わってくる。

中国の農業はまだまだ機械化されていないから、農村では水牛が田んぼを耕していたりする。僕がぱっと連想したのは、いつか雲南省の山奥で見た棚田を耕す水牛の姿だった。ほとんど腹まで泥に浸かりながら、ゆっくりゆっくり鋤を牽いていた。相当な重労働だから、水牛も農夫もたいへんだ。たぶん、履歴書を送ってきた彼もそんな水牛の姿を念頭において書いたのだと思う。

中国で暮らしていると日本ではみかけない表現によくぶつかる。それがけっこう僕の脳味噌を刺激してくれたりする。これも外国暮らしの醍醐味の一つだ。

古本屋めぐり

学生の頃から古本屋にはお世話になった。

東京の古本屋街といえは、やっぱり神田神保町がいちばん品揃えが豊富だけど、いちばんよく通ったのは学生街の古本屋だ。なだらかな坂の両側に古本屋が何軒かならんでいて、学校の帰り道によく冷やかした。古本屋を行き過ぎると、ロードショーから半年くらい遅れた映画を二本立てで放映している映画館があったので、よくそこへ入ったりした。学割料金で二本分の映画を楽しめるのだからお得だ。

学生のことだから、もちろん、値段の高い本はよっぽど欲しいものや必要な本でない限り買えないけど、店先の百円均一のワゴンをよく探すと掘り出し物があつたりする。ごくたまにだけ、とうの昔に絶版になった岩波文庫の小説を見つけることがあって、それがとても楽しみだった。今でこそ、岩波文庫の絶版になったものが「リクエスト復刊」と称して定期的に復刊されるようになったけど、当時はそんなサービスはなかったから岩波文庫の古本は貴重だった。毎年、秋になると学校のすぐそばにある神社の境内で古本市が立ったので、それが始まったら授業そのけで神社へ行って掘り出し物をあさった。トルストイの『生ける屍』を見つけた時は感動した。しかも、売値はたったの十円。戦前に印刷されたもので、昭和十七年〇月〇日にどこそで読んだと昔買った人が表紙裏に鉛筆で書き込んでいた。彼はどんな感想を持ったのだろうかと思像してみたりしたものだった。

学生街の古本屋のいちばんいいところは、なんといっても値段の安いことだ。

神保町では二千円で売られているような本が、たったの百円で手に入ったりする。トルストイの『生ける屍』は薄い文庫本だし、有

名な作品ではないけど、神保町の古本屋ならそここのいい値段がついただろうと思う。少なくとも、十円や百円では絶対に売つてくれない。

今は広東省に住んでいるから古本漁りもできなけど、今度東京へ行く機会があったら久しぶりに古本屋街をぶらついてみたいな。

シーワーシングウーって誰？

西洋人の名前を中国語表記にすると時々とんでもないことになるのでよく泣かされる。

たとえば、アーノルド・シュワルツネッガーの中国語表記は、

阿諾德・施瓦辛格

となる。

発音は、アーヌオドゥー、シーワーシングウー。名前の発音は似ているけど、姓のところはあっているようなあっていないような。はっきり言えばかすっているだけだ。いきなり「シーワーシングウーがどうしたこうした」なんて言われても誰のことだかさっぱりわからない。『ターミネーター』のことを話している時にこの単語が出てきたら、シュワちゃんのことかな、と見当がつくかもしれないけど。

もう一つ例を挙げてみよう。

レオナルド・デカプリオの中国語表記は、

莱昂纳多·迪·普里奥

となる。発音は、ツアイマオナードウオ・ディーカープリアオ。こちらは、姓はだいたいあっているけど、名前は全然違う。レオナルドの発音のどこをどうすれば「ツアイマオナードウオ」になるのか、さっぱりわからない。誰か教えてくれっ！ 中国は漢字だけしかないから、それですべてを表現しようとするのは無理があるのだろう。

もっとも、昔の日本でも、「ギョエテとは 誰のことかと ゲーテいい」という川柳があったくらいで、西洋人の名前をどう表記するかでけっこうてこずったようだ。日本でも中国でも、西洋人の名前を音訳するのは案外むずかしい。

シーワーシンググーって誰？（後書き）

ちなみにゲーテの中国語表記は、グー・ドゥー歌徳です。

太陽が大きいですねえ

はじめて中国へ来た時、片言の日本語を話す中国人に、

「今日は太陽が大きいですねえ」

と言われたことがあった。

僕はなんのことかわからず、きょとんとしてしまった。

太陽が大きいってなんだろう？

相手がまぶしそうに目を細めたので、僕は、陽射しが強いってことなのかなと思い、

「いい天気だね」

と言ってみた。

「暑いですよ。太陽が大きいですよ」

相手はうなずきながらそう言い、だるそうにする。かみあっているような、かみあっていないような会話だけど、僕が考えた意味でだいたいあっているようだった。

ぴかっと晴れた天気の時、中国語では、

タイヤンダー
「太陽大」

と表現する。

気持ちはわかる。

太陽がまぶしく輝いて陽射しのきつい時には、そんな風に感じるものだ。自分の受けた感覚を素直に表したいいい表現だと思う。もっとも、これは農村の人が好んで使う表現だそうで、都会育ちの人はあまり言わないのだとか。

最近、こんな風に言われたら、なるべく突っこみを入れるようにしている。

相手が「太陽大」と言ったらすかさず、

「大きさは一緒や。太陽の高さは高くなったり低くなったりするけど、大きさは変わらへんやろ。太陽が巨大化したら、地球は焼けて

まうがな。人類絶滅やで」

と混ぜっ返す。中国人は冗談が好きだから、たいていは笑ってくれる。

他国の表現に突っこみを入れるのもまた面白いものだ。

コーポラティズムについて

「コーポラティズム (Corporatism)」という言葉はあまりなじみのないものだろう。

ひと言でいえば、大企業による社会の支配だ。

大企業は社会の一部でしかないのにもかかわらず、その一部が社会全体を支配する。この現象がアメリカやヨーロッパはもちろん、日本をも蝕^{むしば}んでいる。このコーポラティズムは、企業や経済活動の自由を最大限に尊重するという新自由主義とコインの裏表をなすものだ。

コーポラティズムの最大の問題は、民主主義が損なわれてしまうことにある。

民主主義の理念とは、国民一人ひとりが投票権という名の権力を持ち、国民が政治のあり方、方向性、政策を決めるということだ。「国民の、国民による、国民のための」政治を行なうための手段である。もちろん、民主主義が最善のものというわけではない。民主主義には様々な欠陥がある。かつて、英首相のチャーチルがいみじくも言ったように独裁制や貴族政治に比べれば「まだまし」なものに過ぎない。

とはいえ、現在のところ、民主主義よりもいい方法は「発明」されていない。とりあえずは、民主主義をいい方向へ発展させるよりほかに、人々の暮らしをよくするための方法はないといえる。

民主主義は、ご存知のように、投票によって政権を選択する。二〇〇九年に日本で起きた自民党から民主党への政権交代がそうだった。民主党は「民意」によって選ばれた政権だった。

ところが、コーポラティズムに支配された社会では、この「民意」が民衆の知らないところで無視されることになる。大企業は政治家

へ多額の献金を送って政治家をコントロール下に置き、自分たちに不利な政策の実現を阻止しようとする。または、民意が反対している政策を実現しようとする。

民主主義の原則にしたがえば、政策を決定するのは投票権を持つ国民によって選ばれた代議士だ。しかし、企業は投票権を持ってない。投票権を持っていないものが政治をコントロールすれば、社会がゆがむのも当然だ。

典型的な例が政府による大企業の救済だ。

リーマンショックによる金融恐慌が起きた際、アメリカの三大自動車メーカーの首脳は政府の救済を求めて、ホワイトハウスへ駆けつけた。新自由主義においては、経済活動のすべての結果は「自己責任」ではなかったのか？ 「自己責任」を主張し、多くの人々の生活を破壊した者たちがなぜ自分たちだけ例外扱いしてもらおうとするのか？ しかも、最高経営責任者たちは、多数の従業員を解雇するリストラ策を発表する一方、自分たちの高額な報酬を契約だからと言い張り、カットされることを拒んだ。彼らは自分たちの金儲けが順調にいつている時だけ「自己責任」を標榜し、自らが行き詰まると民意もかえりみずに勝手にルールを破ろうとごり押ししたのだ。しかも、彼らの救済に使われたのは税金——つまり公共の財産だ。最高経営責任者たちは「大きすぎて潰せない」という大義名分によって公共の財産を使わせ、自らの私利を図った。無理を通せば道理が引っこむ。まったく、道理を外れた話だった。

コーポラティズムは、政治家のほかにマスコミをも支配する。

代表的な例が今回の原発事故だ。

電気事業連合会という電力会社の関連組織から、毎年、多額の広告費がマスコミに流れている。この広告費があるため、マスコミは電力会社に対して物が言えない仕掛けになっている。

東京電力は福島第一原発の事故から二か月が経過してはじめて、炉心溶融——メルtdownを認めた。これは事故当初からさんざん

指摘されたことだった。重大な隠蔽である。メルトダウンばかりでなく、様々な危険情報を隠し、ずいぶんと日にちが経った後で発表する。本来なら、批難轟々となってもいいはずだが、大手マスコミはなぜかこのことを正面切って深く追及しようとしめない。東電を批難すれば電気事業連合会からの広告をとめられてしまうため、それを恐れているのだ。大手マスコミが世論に与える影響は大きい。コーポラティズムはマスコミをコントロール下に置くことで、世論を操作する。

コーポラティズムの世の中にあつては、民衆とはかけ離れた場所で重大な政策が大企業の都合のいいように決定されてしまう。陰謀といっても差し支えない。民衆がいくら投票で民意を示しても、この陰謀によつて様々なことがなしくずしにされてしまう。現在の日本の民主党もこのコーポラティズムによつて蝕まれた状態にある。民主党のなかにもコーポラティズムに反対する一派がいるが、彼らの闘争はまだ成功していない。

もちろん、企業が自らの私利利益を図るために社会へ働きかけを行なうことは昔から常にあつたことだ。しかし、それがある限度を超えれば、社会そのものを破壊するようになる。なぜなら、企業の目的は利潤の追求であり、社会の構築や安定ではないからだ。社会を破壊すれば最終的には企業も潰れてしまう。いわば宿主と寄生虫の関係にあるわけだが、そのようなことはコーポラティズムの眼中にはない。ひたすら宿主の体を貪り食い、自らだけが肥え太ろうとする。

出来事の表面だけを見ても、実際のところなにが起きているのか、正確なことはつかめない。その出来事の背後にある構造を把握しなければ、表面上のできごとや政府やマスコミのプロパガンダに振り回されるだけでなくにも理解できない。社会全体に生じていることも、一個人の身の上にも起きていることも。

コーポラティズムの行き過ぎた世の中にあつては、「公利公益」

がたえず企業の「私利私益」によって侵される。現在進行している日本の社会を蝕む様々な現象の背後にはこのコーポラティズムも大きな一因として潜んでいる。

コーポラティズムについて（後書き）

「コーポラティズム」については様々な様式や見解がありますが、ここでは企業による社会支配という意味だけに用いています。

また、日本の社会をゆがめているものは、コーポラティズムのほかにいろいろと存在します。

スロー散歩のススメ

食事の後、たまにゆっくり散歩する。

歩く速度を普段の半分から三分の一くらいに落としてみる。老人がぶらぶらとゆっくり歩くような感じで。

そうしてみると、見慣れた町でも新しい発見があったりする。

通りの店の店員の何気ない動きが目にとまったり、道行く人のふとした表情や連れ立って歩く恋人たちの仕草が目飛びこんできたりする。気分がゆったりして落ち着く。

物事を考えるのは歩きながらいい。

血の巡りがよくなるから、僕のぼんこつな頭でもすこしばかり冴えてくれて、考えがすすむ。

京都には「哲学の道」と呼ばれる遊歩道がある。観光名所になっているので行ったことのある方もいるだろう。水路沿いの気持ちのいい道だ。哲学者の西田幾多郎はその道を歩きながら思索に耽ったのだとか。

イタリアにはニーチェが思索に耽ったという哲学の道がある。

こちらは、ほとんど断崖絶壁とも思える急斜面の階段を昇り降りすることになる。一度そばを通ったことがあるけど、しんどそうなので昇るのはやめにした。さすが、「神は死んだ」などとのたまったニーチェだ。スケールが違う。でも、あんな心臓破りの坂道を昇り降りしながら思索になんか耽っていたら発狂してしまうのもむりはない、とちよっぴり思った。

今の季節は夜の散歩にちょうどいい時期だ。ガジュマル榕樹が植わった街角で涼しい夜風に吹かれながら、最近読んだ本のことや書きかけの小説のことをぽつりぽつり考えたりする。

司令官の差で負けたミッドウェー海戦

子供の頃、家の風呂場を改装してくれた大工のおじさんが空母飛龍の元乗組員だった。艦橋の真下にある伝令所で任務についていた彼は、昭和十七年六月五日、ミッドウェー海戦に参加した。ミッドウェー海戦は、主力空母四隻を擁した日本の南雲機動部隊と主力空母三隻のアメリカ機動部隊が激突した天王山の戦いだった。

当時の日本機動部隊は世界で最強の部隊だった。ゼロ戦隊、雷撃機隊ともに精鋭揃いで、とりわけ、急降下爆撃隊の命中率は神業としかいいようのない高さを誇っていた。機動部隊の兵力、練度、士気の高さは、どれを取ってもアメリカを大きく上回っていた。

ただし、日本の軍令部（艦隊司令部）と機動部隊首脳の方法はアメリカよりも劣っていた。

ミッドウェー作戦は、急遽決定した作戦だった。

準備が間に合わないのも、もう一か月遅らせられないかと各方面から要請が相次いだのだが、そのまま強行してしまった。また、作戦目標がミッドウェーであることを誰にも知られてはいけないにもかかわらず、海軍基地のある呉では町の誰もがミッドウェー作戦のことを知っていた。徹底的な緘口令を敷かなかったのは気が緩んでいたとしかいいようがない。敵に作戦がばれないように暗号の乱数表を変更すべきだったが、開戦当時のものをそのまま使用し、その結果アメリカに暗号を解読され、ミッドウェーが攻撃目標であることがアメリカに知られてしまった。

一番致命的だったのは、敵空母が現れないだろうと甘い希望的観測を抱いたことだ。本来であれば、敵も必死で反撃に出てくることを考慮し、ミッドウェー沖で米空母と対決するための戦術を十全に練っておかなければならなかったにもかかわらず、それを怠った。

機動部隊同士の戦いは一瞬で勝負が決まる。

そして、戦いは錯誤^{エラー}の連続だ。

エラーを最小限に抑え、敵が見せた一瞬の隙を突き、相手方の空母を破壊したほうが勝利する。

戦うためには、まず敵のありかを知らなければいけない。敵の所在がわからなければ攻撃のしようがない。だが、機動部隊司令部は索敵をおろそかにした。

黎明二段索敵——つまり、夜が明けないうちに第一弾の偵察機を出発させ、夜が明ける頃に同じ偵察ライン上に二機目の偵察機を出発させるという二段構えで敵を探すべきだった。日の出の頃には、一機目の飛行機が索敵ラインのほぼ先端——つまり一番遠い地点で偵察を開始し、二機目は味方の機動部隊に近いところから偵察を始める。こうすれば敵の発見率が格段に高くなる。

だが、日本の南雲機動部隊は、一つの索敵ラインにつき偵察機を一機だけを使用する一段索敵しか行なわなかった。加えて、偵察ラインの間隔をもっと狭く設定して、きめ細かく偵察しなければならぬのに、索敵網が粗かった。このような偵察軽視のために、敵艦隊の発見が遅れ、攻撃が後手に回ることになった。

攻撃隊の使用方法もまずかった。

第一次攻撃隊にミッドウェー島の基地を攻撃させ、第二次攻撃隊を艦隊出現に備えて艦隊攻撃用の兵装で待機させるという方法を採用していたのだが、第一次攻撃隊がさらに基地を攻撃する必要があると打電したため、第二次攻撃隊の爆弾と魚雷を陸上基地攻撃用の兵装へ転換する作業を行ない、ミッドウェー島を再度攻撃することになった。そして間の悪いことに、ちょうどこの作業中に敵艦隊発見の知らせが入った。

この時、空母蒼龍と飛龍の二隻で編成した第二航空戦隊司令官の山口多聞提督は陸用装備のまますぐに出発することを機動部隊の最高司令官である南雲忠一提督に進言したが、機動部隊首脳部はこれを却下した。

たしかに、陸上攻撃用の兵装のまま敵艦隊を攻撃しても効果は薄い。判断のむずかしいところだが、急降下爆撃隊だけでも先に発進させる必要があっただろう。

機動部隊首脳部は艦隊攻撃用の兵装で敵空母を叩く正攻法を決定。今度は装着したばかりの陸上攻撃用の兵装を艦隊攻撃用へ再度兵装転換作業をしなければならなくなった。艦隊攻撃用の兵装のまま待機していれば、すぐに出発できたのだが、むだな作業のために一刻を争う貴重な時間を浪費してしまった。

実は、この兵装転換問題は、ミッドウェー海戦に先立って行なわれた四月のセイロン島沖海戦の際、すでに同様の事態が出現していたものだった。セイロン島沖海戦はイギリスの弱小部隊を相手にした戦だったために大事には至らなかったが、セイロン島沖での教訓を活かして問題解決の対策を講じていれば、ミッドウェー海戦ではスムーズに敵を攻撃することができただろう。

ようやく二度目の兵装転換が終了し、攻撃隊の発進準備に入ったその時、アメリカの急降下爆撃機が日本機動部隊へ襲いかかってきた。空母赤城、加賀、蒼龍に爆弾が命中。これが甲板上と格納庫に転がっていた陸上攻撃用爆弾の誘爆をさそい、三隻は大破炎上。戦闘不能となった。唯一生き残った空母飛龍が孤軍奮闘して攻撃隊を二度発進させ、米空母ヨークタウンを大破させたが、この日の午後、命中弾を喰らい、航行不能状態に陥ってしまった。

最終的には、主力空母赤城、加賀、蒼龍、飛龍の四隻、重巡洋艦一隻が撃沈され、母艦艦載機二百機以上を喪失した。三千人強の戦死者が出ている。これに対して、アメリカ側のそれは、空母一隻と駆逐艦一隻の沈没にとどまった（空母ヨークタウンは最後に潜水艦伊一六八がとどめを刺した）。開戦以来、初めての敗北。それも空母部隊壊滅という大敗北だった。日本海軍は太平洋を所狭しと暴れ回った騎虎の勢を失い、進撃がほとんど止まってしまった。

負けたといはいえ、日本海軍の兵士はよく戦った。戦闘機隊はア

メリカの攻撃機を多数撃墜し、機動部隊の各艦は対空砲火で多数の敵機を叩き落した。各空母は命中弾を受けるまで、見事な操艦技術によって何十発もの爆弾と魚雷をかわし続けた。生き残った飛龍の攻撃隊は少数機での攻撃にもかかわらず一回目の攻撃でヨークタウンを射止めている。

優秀な乗組員や搭乗員を擁していたのだから、機動部隊首脳部が敵機動部隊の出現を予想し、それに備えて入念に戦術を練っておけば十分に勝機を？ことができた戦いだった。ただ、現場がいくらがんばりを見せても、司令官の戦略や指揮がまずければ戦いに勝つことはできない。勝負にすらならない。指揮官の戦略ミスや判断ミス是个々の兵士がカバーしようとしても限界がある。戦いというのは、しかるべき戦略としかるべき戦術があつてはじめて勝利できるものだ。戦力を活かすも殺すも、司令官の指揮次第。もちろん、これはどんなプロジェクトにもいえることだが。

日本の拙劣さに対して、アメリカは徹底的に手段を講じた。

全力をあげて日本の暗号を解読し、日本海軍の次の攻撃目標がミッドウェー島であることを突き止めた。ミッドウェー島の航空基地の防備を固め、陸上航空機を増強したことが、先に述べた日本の機動部隊の兵装転換を誘うことになった。また、五月の珊瑚海海戦で大破した空母ヨークタウンをたった三日で修理してとりあえず航行可能な状態までもっていき、約千人の修理員を乗せたまま出航してミッドウェー島沖へ向けて航海しながら修理を続けた。空母ヨークタウンは最低三か月は再起不能と思われ、日本側はまさかミッドウェー島沖へ現れるとは予想だになかった。逆に、日本海軍は珊瑚海海戦で無傷だった空母瑞鶴を搭乗機不足という理由からミッドウェー海戦への参加を見送っている。

ミッドウェー海戦にかけた日米の意気込みは、まったく違う。アメリカはできるかぎりのことをやったが、日本は甘い見通しのまま打つべき手を打たず必勝体制を敷かなかった。ミッドウェー海戦は、司令官の重大な戦略ミス、戦術ミス、判断ミスの連続によって負け

た戦いだっただといえる。負ければいろいろとぼろが出るものだが、それにしてもぼろが多すぎた。負けるべくして負けた戦いだっただ。なによりも惜しいのは、現場の必死の努力が水泡に帰してしまい、鍛え上げた優秀な乗組員や艦載機搭乗員を多数失ったことだ。

若き日の大工のおじさんは、アメリカ軍の攻撃を受けて大破した飛龍から脱出して一命を取りとめた。毎年六月五日、ミッドウェー海戦の日がやってくると断食をして、亡き戦友たちの冥福を一日中祈るのだと言っていた。彼はぜひぶん前に逝去されたが、今はあの世でかつての戦友たちと盃を交わしているのだろうか。

まっすぐ伸ばしたルーズソックス in 昆明

ずいぶん前のことだけど、留学していた昆明の街角でルーズソックスを穿いた女の子を見かけた。もちろん、地元の中国人だ。だけど、穿き方が変だ。しわしわにして穿かないといけないのに、膝下あたりからぴんとまっすぐ伸ばしたまま穿いている。まるでブーツを履いているみたいだった。

「あれだけどさ」

僕はその女の子の足をこっそり指しながら、一緒に歩いていた地元の人の子の友人に言った。

「知ってるわよ。日本ではやっているんでしょ」

「だけどさ、穿き方が違ってるんだよ」

「どうして？」

「足首のちよっと上くらいにして、ゆるい感じでしわしわにしてはかないと可愛く見えないんだよ。もっと上から穿いてもいいけど、やっぱり、足首あたりでしわしわの部分を作らないとね。あれじゃ、普通の靴下と同じだろ」

「なんでしわしわにするの？」

「だから、それが可愛らしいんだよ」

「そんなしわしわにしたらみっともないじゃない。変な風に思われてしまうわよ」

「だからさ——」

と、話は平行線のまま終わってしまった。女性ならどう可愛いのかを説得する言葉を持っているのだろうけど、あいにく僕にはない。ファッション雑誌で見たことがあるだろうと言っても、「見たことはあるけど、やっぱり変よ」と返されておしまいだった。

たぶん、ルーズソックスをまっすぐ伸ばして穿いていた女の子も、しわしわにすると格好悪いと思ってそうしていたのだろう。まっす

ぐ伸ばしたのでは「ルーズ」じゃないんだけどなあ。

四川美人の憂鬱？

四川美人は中国の三大美人の一つ。

四方を高い山に囲まれた四川省は曇りか雨の天気が多くて、太陽はほとんど顔を見せない。晴れたとしてもうす曇。秋も深まると毎日霧が立ちこめ、夜部屋の窓を開ければ、ドライアイスの煙のような霧がどつとなだれこんでくる。まぶしいほどに太陽が輝くことなんてほとんどないから、色白の女性が多い。

広東省で働いていたある四川人の女の子が古里へ帰ることになった。四川人らしい白くてきれいな肌をしている。顔立ちはごく普通にかわいい。

地元の就職口も見つかったし、親も帰ってきて欲しいとのことだったので、

「よかったじゃない」

と僕は言ったのだけど、彼女の表情は四川の天気みたいに曇ったままだ。

「帰りたくないの？」

僕は訊いた。

「あんまり」

「どうして？」

「四川には美人がいっぱいいるから、わたしなんか埋もれてしまいます。いい相手を見つけようとしても競争率が高くなってしまいます」

半分冗談だけど、半分しょんぼりしている。女の子はそんな風に考えるんだと思った。

「きつといいご縁があるよ」

僕はそういつて慰めた。ほんとに、こればかりは「縁」だからね。

腕のいい理容師さんに切ってもらったのだろうか

理髪店で「すこし短めに」と頼んだら、思いっきり短くされ、なんだか漢民族好みの髪型にされてしまった。こちらの人はぴっと整っていて精悍そうな髪型を好む。もっとも、ダサイと言えばダサイし、オヤジくさいと言えばオヤジくさい。中国に住んでいるといろんなリスクを引き受けなければならぬのだけど、変な髪形にされてしまうのもチャイナリスク（？）の一つだからしょうがないとあきらめている。虎刈りでもないし、ちゃんと整った形になっている。悪くはない。でも、やっぱり、割り切れない。

以前、中国人の友人に、

「どうしてそんなにくしゃくしゃの髪型をするのか？」

と訊かれて困ったことがあった。

前髪を垂らし、ヘアセメントワックスをつけてすこしずつ髪をひねり、波立つような感じにしていた。日本でなら珍しくともなんともない髪型だ。だけど、それが彼の目には「くしゃくしゃ」と映ったらしい。

この波立つ感じがいいのだという説明しても、相手は全然納得してくれない。「子供っぽいからやめておいたほうがいいよ。ぼさぼさだもん」のひと言で終わってしまった。頑固な中国人の固定観念を打ち破るのはむづかしい。いつも負けてばかりだ。僕がもっと丁寧にセットしておけば、わかってくれたのかもしれないけどさあ。

ところで、今は髪型は中国人に受けがいい。

「さっぱりしたね。前よりずっといいよ」

なんて言われる。

この間、散髪に行った店では、腕のいい理容師さんに当たったのだろう。

誉めてくれるのは嬉しいんだけどね。なんだかなあ。

“チャイナシンドローム”が起きている？

『チャイナシンドローム』は、一九七九年、アメリカで製作された映画。タイトルの意味は、メルトダウンを起こした原子炉の核燃料が原子炉を突き破って地中深く潜ってしまい、アメリカから中国へ突き抜けてしまうということだ。もちろん、しやれを利かしたオーバーなタイトルだが、映画の内容は原発事故を扱ったシリアスなサスペンスものだ。この映画が公開された直後にアメリカのスリーマイル島原発事故が起きたことから話題になった。

ところで、東電の発表によれば、福島第一原発一号機の原子炉はなかの水がすっかりなくなり、完全な空焚き状態になっているそうだ。原子炉の空焚き——これほど恐ろしいことはない。一号機ばかりではなく、二号機と三号機も空焚きになっている可能性が強い。

肝心なのは空焚き状態になった後どうなったのかだが、まだ発表されていない。おそらく、今は真相を隠しておき、数ヶ月後に発表するのだろう。とはいえ、現段階でも、ある程度のことは推測がつく。『チャイナシンドローム』と同じような状態になったと思えばいい。

どろどろに熔けた高熱の核燃料は塊となって原子炉本体の底を突き破り、原子炉から落下。原子炉の外を覆っている鋼鉄製の格納容器も突き破っただろう。格納容器は高熱の核燃料に耐えられる代物ではない。ちなみに、核燃料は棒状の時はその表面に水を循環させることで冷却できるが、それがぐちゃぐちゃに熔けて塊になってしまふとちよつとやさつとでは冷やせなくなる。表面積が小さくなり、水をかけても効果的に熱を奪い取ることができないからだ。

原発建屋の地下水をためる施設では超高濃度のストロンチウム90が検出された。どうやら、核燃料はほんとうに地下へ潜ってしまったようだ。そうでなければ地下水から大量の放射性物質が検出さ

れるわけがない。もちろん、地球を貫通して日本の反対側にある南米へ行ってしまう、なんてことはないだろう。だが、このままでは汚染された地下水を通じて核物質が広範囲にばらまかれてしまうというのに、地下水汚染を食い止める手段はまだ講じられていない。汚染を広げてしまったては現場の必死の努力がむだになってしまう。

昔レンタルビデオ店が借りて観た映画がまさか現実になるとは思ひもなかった。

核燃料が暴走して誰も制御できなくなっているのも恐ろしいが、今必要な対策がなされないのはもっと恐ろしい。なにより恐ろしいのは、こんな怖い話を聞いてもなんだか慣れてしまっている自分自身のような気がしないでもない。

うなぎはどこだ？

広州行き中国南方航空に乗っていたら、食事の時間になった。中国人のスチュワーデスはワゴンを押しながら、

「にわとり、うなぎ」

と片言の日本語で乗客に訊いている。もちろん、鶏肉弁当にするか、鰻弁当にするかと訊いているのだ。

機内食で鰻が出るなんて珍しい。しかも中国の航空会社で。僕は迷わず「うなぎ」と頼んだ。

ところが、ふたを開けた僕は目が点になった。

ぺらぺらのアルミ箱のなかには鮭が二切れのっているだけ。うなぎはどこにも見当たらない。なかに潜っているのかと箸でひっくり返してみたけど、やっぱりなかった。結局、鰻弁当ではなく、しゃけ弁当だった。

鮭は中国語で「三文魚^{サンウエンユイ}」という。サーモンの音訳からそう呼ばれているようだ。うなぎは「鰻魚^{マンユイ}」。どちらも中国のスーパーで売っているし、誰でも知っているから、鮭と鰻の区別がつかないはずがない。

うなぎはどこへ行ったのだろうか？？？

社会主義と独裁主義は別物

中国のことを「社会主義だから独裁主義なのだ」という人がよくいるが、本来、社会主義と独裁主義はまったくの別物だ。「社会主義Ⅱ独裁主義」という流布された通説は冷戦時代に意図的に作られた誤解だ。

ひと口に社会主義といっても何種類もあるが、ここでは単純にマルクス主義のことにしておこう。ちなみに、カール・マルクスと彼の盟友だったエンゲルスが提唱した共産主義は数ある社会主義のうちの一種類にすぎない。マルクスは、自分たちの社会主義はひと味もふた味も違うのだと主張し、自分たちの思想を共産主義と名付けた。

マルクスの予言（とあえて書く）によれば、社会主義革命はイギリスのような資本主義の先進国で起きるはずのものであった。資本主義の矛盾が極まり、どうにもならないほどに行き詰って革命が発生し、社会主義へ移行するというわけだ。

しかし、実際に革命が起きたのは、イギリスのような資本主義の最先端に行く国ではなく、ロシアや中国といった資本主義の後進国だった。もちろん、後進国というのは「資本主義」という尺度で見ればということであって、別の尺度をとれば、違った見方ができる。ロシア人も中国人も僕は好きだ。

さて、ロシアと中国は資本主義的な発展の遅れた国だったという以外にも、別の共通点がある。それは、強い権力を好むという国民性だ。ロシアはかつてモンゴル人に国土を蹂躪されたこと――タタールの軛――が民族的なトラウマとなり、自分たちの身を守るためには強力な権力が必要だと信じるようになった。

中国は広大な領土と膨大な人民をまとめるために強力な権力を必要とし、世界でも例を見ないほどの巧妙な専制機構を作りあげてき

た。中国の歴史は専制強化の歴史といってもいい。なにしろ、大学のなかに公安の派出所があるのだからびっくりしてしまう。もちろん、この公安は酔っ払った学生や喧嘩した学生を取り押さえるためのものではなく、反政府的な動きがあればすぐに取り締まるためのものだ。これでは自由な学問や思想など、生まれるはずもない。

ところで、マルクスはドイツ人だ。ドイツも後発の資本主義国だが、民主主義の土壌がある国だ。というのは、民主主義は西欧のキリスト教から生まれた思想であり、平たく言えば、神の前では皆平等という考え方が強くなければ成立しないものだからだ。おそらくマルクスは社会主義というものは民主的なものでしかありえないと思っていた節がある。よく言えば楽天的と言えるし、悪く言えば、独裁国家で社会主義政権が誕生した際にどのような事態が発生することになるのか、その見極めが甘かったと言える。

独裁主義国で誕生した社会主義国家は、民主主義にはなりようがなかった。

ロシアも中国も彼らの流儀で政権を運営することになり、社会主義という理想は、革命家たちが権力闘争を重ねるうちに独裁主義によって換骨奪胎されてしまった。つまり、権力維持のために、あるいは権力闘争のために社会主義が利用されるようになったのである。ソ連ではスターリンが、中国では毛沢東が政敵を抹殺するために大粛清を行なった。その犠牲者は数百万人とも数千万人ともいわれている。豊かで平等な社会を創造するはずが本末転倒なことになってしまった。たとえどんな素晴らしい理想であっても、人間の物欲や権力欲という手垢のついた時点で墮落してしまうものなのだけだ。

冷戦時代、ソ連や中国は言うまでもなくアメリカや日本といった西側諸国の敵だった。

社会主義という思想は、アメリカの自由競争原理主義とは正反対のものであり、わかりやすく言えば、アメリカンドリームとは相容れないものだ。日本にとっては、社会主義は天皇制の廃止につながり、国体（国の基礎的な政治体制）を脅かすものだ。アメリカの為

政者にとっても、日本の為政者にとっても、社会主義は自国の原理を脅かす危険な思想だったため、そこで社会主義Ⅱ独裁主義というレッテルを貼り、悪のイメージを植えつけようとした。ソ連や中国はたしかに独裁体制の国だったので、こうしたプロパガンダはわかりやすく効果があり、誤った通説が広まった。

こんなことを書いている僕も、昔はこの通説を信じていた。だが、中国へきて中国人と混じって暮らしているうちに、この国はもともと独裁体制しかあり得ない国で、独裁主義と社会主義は別物なのだということが骨身にしみてわかるようになった。また、コーポラティズム（※）または新自由主義という名の極度に歪んだ資本主義の時代に暮していると、昔は過去の遺物にすぎないと思っていたマルクスを見直すようになった。マルクスの分析には、なるほどとうなずかされるものが多い。

通説、俗説、過去の観念といったものにまどわされずに、真実の在りかを見極めたいものだと思う。

社会主義と独裁主義は別物（後書き）

※コーポラティズムについては本連載の第105話『コーポラティズムについて』（2011年5月19日発表）をご参照ください。

ライチの季節

六月下旬から七月上旬にかけて、広州の街角にはいつせいにライチが出回る。ライチの旬の季節だ。果物店の軒先に、町の屋台に、暗紅色のライチが山盛りになって並ぶ。白い果実はとても甘くておいしい。新鮮な果物をいろいろと楽しめるのは、南国住まいの特権。ライチは、漢の武帝の時代にはすでに栽培されていたそうだ。こんな美味な果物だから放っておく手はないだろう。

唐の楊貴妃はライチが好物でわざわざ華南から取り寄せさせていたのだとか。楊貴妃の死後、玄宗皇帝はライチを彼女の墓前に供えたという。白居易や杜甫の詩にもライチの名前が出てくる。ちなみに、ライチは漢語で荔枝リジーと書く。この漢字の日本語読みは「れいし」。ライチという呼び方は？南語びんなんご（福建省南部の言葉）だそうだ。ひと口にライチといってもいろんな品種があるけど、やはり甘味が深くて種の小さいものが多い。「挂緑」や「糯米？」という品種はどちらも人気が高い。

ただし、おいしいからといって、あんまり食べ過ぎるのは禁物。中国医学ではライチは「熱い」食べ物になる。食べ過ぎれば、体を温め過ぎてしまうことになるので、吹き出物ができてしまうし、ひどい場合には鼻血が出る。

ひと箱おすそわけしていただいたのだけど、食べ切れそうにないから、実を？いてタッパーに詰め、冷凍庫へ入れてシャーベットにした。

ライチの季節（後書き）

ブログ『風になりたい』にライチ狩りの写真をアップしました。

<http://blog.google.ne.jp/noduru/>

e/bac42c5b493aal272ffc76120672
1742

夏バテ払拭のために栄養価の高い食べ物を食べなくてはと思うのだが

広東の地では夏が始まってから二か月経った。

亜熱帯の暑さと容赦ない湿気にやられ、夏バテになってしまった。気分はグロッキー。体がだるくてしかたない。この地では、夏はあと三か月も続く。早く「秋」にならないかなあと思う今日この頃。

とはいえ、だるいとばかり言ってもいられない。やらなければならぬことは山ほどある。小説も書かないといけないし、働いて生活の糧も得なくてはならない。女の子と遊びにだって行きたい。栄養のつくようなものを食べてばてた体を元気にしようと思ったのだが、はたと迷った。

もうすでに体に栄養はついている。お腹にたっぷり養分がたまっているのだ。これ以上栄養をつけたら、ズボンが入らなくなってしまう。顔にだって養分が十分ついている。これ以上太ったら、崩れかけの顔の線が本格的に崩れてしまう。

困った。

まったく、男ってやつはよ

めっちゃかわいいバイトさんが僕の下に入ってくれた。

真面目だし、人当たりも柔らかい。いかにも亜熱帯育ちといったのんびりさがある。日本語もそこそ上手だ。顔は典型的な美人というわけではないけど、華がある。たぶん、僕が働いているフロアのなかで一二を争う可愛さではないだろうか。

僕にとっては待望のバイトさんだった。

なにせ、今までなんでも一人でやっていた。

中国は不思議の国。

ここで仕事をしていると、想定外のハプニングの連続だ。

「うそー」

と、毎日、声が裏返る。「なんでそんなことまで確認しなくちゃいけないの？」というようなことまでいちいち確認しなくちゃいけない。おまけに、ネットの通信速度が遅いから、メールを開くのにかなり時間を食ったりもする。めっちゃくちゃ忙しいのに、お客さんに出す資料のホッチキス止めさえも、国際宅配便の手配も、すべて自分独りでやっていた。

そんなところへ手伝ってくれる人ができたのだから、ほんとにほっとした。これですこしはカリカリしなくてもよさそうだ。カリカリするのは好きじゃない。でも、追われているとどうしてもそうやってしまう。

バイトといっても、普通のアルバイトとはちょっと違う。

彼女には「実習生」ということで入ってもらっている。

中国の大学では「実習生」という制度がある。インターンシップだ。

すべての大学生は、四年生の時、何か月間か企業で実習しなくてはいいけない。そうしなければ卒業できないのだ。ほかの国でどうな

っているのかは知らないけど、この制度は「労働」を重視した社会主義の時代の名残りだろうか。

実習生は、卒業後もそのままその企業で勤めてもいいし、別の会社に移ってもいい。僕としては、今のうちにビジネス日本語をみっちり習得してもらい、来年も続けて勤めてくれれば、なんて思っている。仕事の内容がわかっている人が社員になってくれれば、いろいろとはかどるから。もちろん、卒業してからどうするかは、彼女が決めることだけど。彼女自身の人生なのだから。

かわいい実習生がきたという噂はすぐに広まり、日本人の同僚が連れ立って僕の席へやってきた。二人とも物欲しそうな顔だ。

「新人さんはどこにいるんですかあ？」

と、僕に問いかける鼻の下がすでに伸びきっている。まぬけな犬面。

ちよっかいを出されたり、変なことをされてはかなわない。

やっとこさ入ってきてくれた実習生なのだ。大切に育てて一人前の日本語使いにシなくてはならない。僕は責任重大なのだ。

ちょうど彼女が席を外していたところだったので、

「今、総務へ行って手続きをしています。時間がかかると思いますわ」

とかなんとか適当なことを言って体よくお引取りいただいた。

帰りの通勤車のなかでは、別の日本人の同僚が、

「あの女の子の名前はなんていうんですか？」

と、にやけた顔で訊いてくる。

「聞いてどないすんねん？」

僕は思わず意地悪になる。年頃の娘を持ったお父さんのような心境だ。変な虫がついてはかなわないと心配になってしまう。

「名前くらいいいじゃないですか。ボクは結婚しているんですよ」

「そんなん関係あらへんやろ」

実際、関係ない。浮気する男のいかに多いことか。

「そんなじゃないっすよ。うちのチームの男の子に紹介してあげた

いなくて」

「あかんで。仕事しにきてもらってるんやから。まずは、みっちり仕事を覚えてもらわんと」

と、釘をさしておいた。

妙なことになって、彼女に辞めるだなんて言われた困ってしまう。日本語を勉強している学生はたくさんいるけど、まともな日会話のできる人はあんまりいない。辞められてしまえば、代わりの人を探すのにひと苦労もふた苦労もするのは目に見えている。

そんなこんなで、しばらくは「虫」を追い払うのに労力をさかれそうだけど、ともあれ、早くビジネス日本語を覚えて、すこしでも僕を手助けしてもらえれば非常に助かる。

ところで、折り入って読者諸子にお願いがある。

そんなめっちゃかわいい子を面接して、即採用を決めたのはいったいどこの馬の骨なのだという根本的な問題には、決して触れないでいただきたい。ここはひとつ、武士の情けということで、スルーしていただきたい。

まったく、男ってやつはよ。

ロシア人が抱いた永谷園のお茶漬けのりとの松茸の吸い物の感想について

ロシアへ行って、ロシア人の知人を訪ねたことがあった。お土産は永谷園のお茶漬けのりと松茸の吸い物。

ごはんがあるわけでもないのに、彼はさっそくお茶漬けのりの封を切り、

「海の香りがする」

と言って喜んだ。大陸の人なので、却って海の匂いに敏感なのかもしれない。僕自身は幼い頃からお茶漬けのりが好きだけど、海の匂いがするとは一度も思ったことはなかった。

「日本人は魚の香りがする」

とも、彼は言った。

ロシア人から見れば、そんな匂いがするらしい。日本人は、自分たちがそんな匂いがするとは思ってもよらないけど、いろんな感じ方があるものだ。

彼は永谷園の松茸の吸い物の大ファンでもあった。

八袋くらい持っていたら、

「おお、こんなにいっぱい」

と、彼は無邪気に感激していた。さっそくカップを二つ取り出し、「野鶴さんも一緒に飲もうよ」

と僕に勧める。

「僕はいつでも飲めるからいいよ。お土産に持ってきたんだから君が飲んでくれよ」

と言っても彼は聞かない。彼はさっさと二人分の松茸の吸い物を作ってしまった。断るのもなんなので、いっしょに松茸の吸い物をすすった。

「おいしいねえ。なんともいえない香りだよ。わくわくする」

彼は大満足の様子で、もう一杯飲みたいと言う。もう一杯飲んだ

ら、

「もっと飲みたいねえ」

と言う。とめられない感じだったので、僕も付き合い、結局、二人で八袋分を全部飲んでしまった。

どうやら、彼は永谷園の松茸の吸い物に日本のエキゾチックさを感じたらしい。

僕としては、インスタントの松茸の吸い物で大感激してくれて嬉しかったのだけど。

親知らず、痛む

親知らずが痛んで眠れない。

考えてみれば、最近、無意識のうちに？を手で押さえていることがよくあった。無意識のうちにかばおうとしていたのだろうか。痛いと感じたことはなかったのだけど。

以前、昆明で大学病院の歯科へ行ったことがあった。日本のように番号順に呼ばれるわけではないから、みんなデンタルベッドの脇に行列を作る。もちろん、歯科医は治療しているので、行列しながら他人の治療を見ている。デンタルベッドのうえで治療を受ける時は、たえず順番待ちの人の視線を感じることになる。早く終わって自分の順番がきてくれないかなあという気配を感じる。僕もそう思いながら人様の治療を見ていたからおたがいさまなのだけだ。

町の歯科診療所は美容院みたいなガラス張りで、外から丸見えの場合が多い。入るのはちょっと勇気がいる。偏見なのは自分でもわかってはいるのだけど、こんなのでほんとに大丈夫かなあどうしても思ってしまう。

広州の場合、外国人向けの高級歯科診療所もある。技術はたしかなのだろうけど、べらぼうな治療費を請求されそうだ。保険が利かないから治療費はそっくりそのまま支払わなければならない。どうしたものかと悩んでしまう。親知らずを抜くだけだから、町の診療所で十分だとは思っただけだ。

ところで、親知らずのことを英語では“wisdom tooth”と呼ぶそうだ。智慧のある歯なら、斜めになんかならずにもう少し考えて生えてくれよな。頼むよ。

香港の歯科治療はどうしてそんなに高いのか？（前書き）

前回の続きです。

香港の歯科治療はどうしてそんなに高いのか？

知人にいい口腔科を教えてください、さっそく行ってきた。

歯の痛みだけはどうにも抑えがたい。

前回、親知らずが痛むと書いたけど、痛んだのは親知らずではなくて、一番奥の奥歯だった。何年か前にご飯にまざっていた石を？んでしまい、ぱっくり割れたのだけど、痛くないからそのまま放置していたのがいけなかった。ぐりぐりと歯のなかをこねくりまわされ、脳天を貫く痛みが走る。治療が終わった後はぐったりしてしまった。歯科治療だけは、いい歳をした大人になっても慣れない。

根幹治療をして、欠けた部分をかぶせて、四回通って、×で一五五〇元也。今のレートでいえば、約二万円弱。保険は利かない。これが高いのか安いのか、正直言ってよくわからない。よくわからないけど、薄給の身にこたえる支出であることは確かだ。もっと早く診てもらえばよかったと思っても後の祭り。なんともトホホな支払いだ。

もちろん、探せばもっと安い歯科はいくらでもあるけど、ローカルの藪医者にあたって苦労した話もちろはら聞くので、治療に失敗されても困るからまずまずの評判のところを選んだ。代金は、第一回目の治療の時に全額を支払った。基本的にこちらの病院は前金制だ。

昔、広州の男の子にこんな話を聞いたことがあった。

彼は、彼女とデートの約束をしていた。

早く着いた彼は待ち合わせ場所で彼女を待った。ほどなく彼女が現れて道を渡ろうとする。と、その時、走ってきた車が彼女を轢いてしまった。

救急車を呼んで病院へ担ぎ込んだものの、医師は治療を始めてくれない。病院側は前金として五〇〇〇〇元を支払うように彼に求めた。

前金を払わなければ治療しないという。学生の彼がそんなお金を持ち合わせているわけもない。彼女の親や彼の親に電話したが、すぐにはこれない。

そうこうするうちに彼女は息を引き取ってしまった。

どうしようもなかったとはいえ、彼は彼女を見殺しにしてしまったと悩み続けた。僕は、つらそうな顔をして涙ぐむ彼になんと言って慰めたらよいものか、言葉が見当たらなかった。

日本なら、お金のことは後回しにしてとりあえず救急治療を行なってくれる。その点、日本のほうがずっとましだ。中国はお金が万能の社会。お金が万能ということは、逆に言えば、お金がなければ命すら救ってもらえないということだ。表面上は華やかな町だけど、ずいぶん怖いところに住んでいるのだとも思う。

ところで、香港在住の知人に聞いたところ、僕と同じような治療をすれば、ごく普通の歯科医で約五〇〇〇元（六万円強）はかかるのだそうだ。不思議に思った彼は周囲の香港人にその値段をどう思うかと訊いてみたのだが、

「それくらいするだろうね」

とみな納得していたのだとか。ちなみに、彼は日本語通訳がついてハーバード大学卒業の医師が治療してくれるという高級口腔科へも行つて診察を受けたのだけど、そちらでは、一万元（約十二万五千円）かかると言われた。もちろん、どちらも保険は利かない。

困った彼は痛いのをしばらく我慢して夏休みに日本へ帰り、親がかけてくれていた国民健康保険で治療した。往復のエアチケットと治療費をあわせても、香港のごく普通の歯科医で治すよりずっと安くあがつたそうだ。

香港の歯医者にかかればちょっとした虫歯を治すだけでも数万円かかる耳にしていたけど、ほんとうにこんなに高いとは思っても寄らなかった。香港の治療費があまりにも高額すぎるため、大陸へきて治療を受ける人もわりあいいるのだとか。

それにしても、どうしてそんな値段になるのだろうか？　日本は歯

科の治療代が特別安くて、ほかの国では高いものなのだろうか？
謎だ。

最後の特攻 ―― 責任の取り方 ――

一九四五年八月十五日、最後の特攻機が飛び立った。玉音放送が流れ、全国民に日本の降伏が知らされた後だった。

特攻に出撃したのは、大分基地で第五航空艦隊司令官として指揮を執っていた宇垣纏^{うがきまじめ}中将。艦上爆撃機・彗星の後部座席に乗り組み、彗星隊十機を伴っての出撃だった。特攻隊は沖縄方面へ向かった。宇垣提督の坐乗した特攻機は沖縄の米軍キャンプ付近に墜落したとする説が有力だ。

宇垣提督は日米開戦時の連合艦隊の参謀長を務め、真珠湾奇襲作戦やミッドウェー作戦の実現に尽力した。その後、第一戦隊司令官としてマリアナ沖海戦、レイテ沖海戦に参加し、第五航空艦隊司令官になる。第五航空艦隊は沖縄・九州方面に來襲した米艦隊に対して特攻作戦を実行した。

彼の特攻に対してはいくつかの疑義が呈されている。

日本が降伏を受諾した後――つまり、戦争が終わった後なのだから、敢えて攻撃する必要はない。もし日本に戦争継続の意志ありと看做^{みな}されれば、厄介なことになる。しかも、自分独りで行なうならまだしも、部下を道連れにしている。そこまでする必要があったのかどうか。もちろん、昂^{たかぶ}る感情が現場に充満していたことは間違いないだろう。供^{とも}をさせてほしいと部下たちが懇願したかもしれない。とはいえ、それを宥^{なだ}めるのも指揮官の大切な仕事だ。もし部下たちが特攻へ行きたいと言い出したのであれば、きちんと説得したうえで諦めさせ、生き残って日本の再建に努力するように諭すべきだった。

とはいうものの、揚げ足取りばかりしてもしかたない。上述の疑義はともかく、宇垣提督が責任を取ったということは間違いない。彼の採った方法は疑問点があったかもしれないが、「私も後から行

く」と特攻隊員にかけた言葉に対して、自らの命を捨てて責任を取ったのだ。なかなかできることではない。地位のある人間であっても、自分の責任を自分のものとして引き受ける者はさほど多くない。

特攻作戦については、フィリピン攻防戦の際、当時第一航空艦隊司令だった大西瀧治郎提督が始めたという通説が流布されているが、この説は大いに疑問だ。特攻作戦は第一航空艦隊が独自に始めたものではなく、明らかに軍令部（帝国海軍の中央司令部）が作戦立案したうえで、組織的に行なった作戦だ。大西提督は現場の将軍であり、中央において指揮する立場にはない。当時の大西提督には、組織的に特攻を行なうための部隊編成や機材調達の権限がなかったもので、彼が独自に準備できる作戦ではない。特攻作戦の首謀者は軍令部にいなければおかしい。

大西提督は終戦の翌日の八月十六日、特攻隊員への謝罪の言葉を記した遺書を残して割腹自殺している。おそらく、死人に口なしとばかりに、特攻作戦の責任を大西提督へなすりつけたものと思われる。

一部の提督は武人として己の責任を取った。しかし、残念ながら、特攻作戦の真相は戦後六十六年経った今日でもまだ解明されていない。

宇垣提督の特攻を最後として、このような悲劇が二度と繰り返されないことを祈るばかりだ。

ニュースキャスターのコメント

ニュースを伝えた後でニュースキャスターが語る何気ないコメント。

聞き流してしまえばなんてことのないコメントだが、注意深く聞いてみれば、そこに仕組まれた罠に気づく。ニュースキャスターは何気ない風を装い、実は世論を誘導するためのフレーズを発信している。

もし彼が主義主張をはっきり述べたのなら、受け手はそのコメントについていろいろ考えるだろう。だが、ニュースキャスターの語るコメントは、視聴者がすっと受け容れられるように巧妙な台詞回しを使っている。「分別」や「良識」といったものに訴えかけ、受け手になるほどと思わせてしまう。受け手は、知らずしらずのうちに自分の考えがある方向へ誘導されていることに気づかない。

怖いな、と思う。

にんじんの喩え話

中国人の女の子とたわいもない恋バナをしていた。

彼女は、早く恋人を作るようにと僕に勧め、

「にんじんの喩え話があります」

と、にこやかに言う。

「なにそれ？」

「野鶴さんのにんじんは穴を求めます」

「えっ、僕のにんじん？」

目が点になった。

「そうです。野鶴さんのにんじんです」

「それが穴を求めるの？」

「そうですよお」

彼女はやっぱりにこにこしている。シモネタを話している風ではない。妙な想像をしてしまった自分を恥じる。でもやね、「僕のにんじん」やとか「穴を求める」とか、そんなことを言われたら想像してしまうやん。

「それってさ、僕のにんじんなの？ それとも、僕がにんじんなの？」

念のために確認した。彼女の日本語はちょっとあやしいところがあるから、時々、話が頓珍漢になる。それがまた面白かったりするのだけだ。

「野鶴さんのにんじんです。にんじんの喩え話です」

彼女はきっぱり言い切る。人生にとって大切なものはなにかということをほがらかに、でも大真面目に話している風だ。

「うーん、そうなんだあ。それで話の続きは？」

「野鶴さんのにんじんはぴったり合う穴を見つけたら、入ります」
「なるほど」

僕は噴き出してしまった。真面目な顔でにこやかに言われるのでよけいにおかしい。僕が楽しそうに笑ったから、彼女はいよいよ調子づいた。

「にんじんは穴に入ったら、根を生やします。だから、野鶴さんはがんばっていい穴を探してください」

これでやっと話が見えた。

要するに、いい歳になっても独り身のままで大陸浪人のような生活が続けている野鶴に、どこかで根を生やしてがんばりなさいと励ましてくれているのだ。しっかりとした生活を打ち立てなさいと諭してくれているのだ。

気持ちはずっともありがたいのだけど、でもなあ、野鶴のにんじんと言うのは、やっぱりまずいと思うで。

苛政は虎よりも猛なり

一般的には、「苛政は虎よりも猛^{たけ}し」という読み方が流布しているかもしれない。この故事成語は『礼記』に載っている。

ある未亡人が墓の前で泣いているのを孔子が見かけた。嘆き方があまりにも激しいのでその訳を問うと、彼女は義父も夫も息子も、虎に襲われて死んでしまったという。むりもないだろう。孔子がどうして他所の地へ移らないのかと訊いたところ、苛政がないからだと彼女は答えた。このことから、「苛政は虎よりも猛なり」という言葉が生まれた。国家機構が暴力装置にほかならないことを端的に表現した言葉だ。

苛政とは、収奪できるだけ収奪する政治を指す。国民が窮状にあえでいるにもかかわらず、理屈にならない理屈をあれこれつけては増税、徴発、徴兵を繰り返す暴政のことだ。

人喰い虎が象徴する自然の脅威は、たしかに人を苦しめる。だが、悲しいことに、人間を最も苦しめるのは人間そのものにほからないのかもしれない。

がらんとした高級マンション

広州の珠江新城という地名のあたり一帯には高級高層マンションが立ち並んでいる。

ところが、夜、そのあたりを歩いてみれば、灯りのついていない部屋が多い。日本のバブルの時と同じように、投機目的で買われた部屋がたくさんあって、家主は値上がりを期待して高く転売できるチャンスを窺っているのだ。がらんとしたマンションはともさびしく見える。

実需のない建物はむだな建物——つまり、不良在庫だ。不良在庫はいつかは清算されなくてはならない。中国経済は右肩上がりで成長を続けているからいいようなものの、住宅バブルはいずれ弾けることになる。

ちなみに、中国では土地の所有権は売買できない。土地はすべて国家のもので、売買できるのはその使用权だけだ。土地の使用については政府の許認可がからむから、使用权の売買にあたっては巨額の闇の金が動くのだとか。これも、住宅価格高騰の一因になっている。賄賂もコストだ。当然、販売価格にそのぶんを上乗せして賄賂に使った資金を回収しようとする。マンションの部屋を購入した人は賄賂も負担させられるわけだ。

ともあれ、中国は二十年ほど高度成長が続いているから、人民はひと昔前の日本のように土地神話を信じている。端から見ている危なっかしいとは思うけど、日本のように痛い目に遭わなければ、不動産の値段は永遠に上がり続けるものではないとわからないのだらうな。

中秋節の挨拶

今日は中秋節。中国人にとっては、春節の次に大事な祭日だ。

満月は家庭円満を表す。そこで、大家族主義の中国人は親戚一同が集まっていっしょに夕餉の食卓を囲む。実家に帰れる人は帰って家族と再会するし、実家に帰れない出稼ぎの人たちは、こちらに住んでいる親戚で集まっていっしょにご飯を食べたりする。

僕の携帯電話にも、日頃付き合いのある人たちから中秋節の挨拶のメッセージが何件か届いた。友人だったり、同僚だったり、飲み屋の女将だったり、いつも頼んでいるマッサージ師だったり、白タク会社のオーナーだったり。たいていは、円満に団結しましょうといった祝いの言葉が書いてあり、最後に「中秋節快樂（中秋節を楽しんで!）」で締めくくっている。僕も祝いの言葉を書いて返事しなくちゃいけないのだろうけど、根が不精なものだから、シンプルに返事を返している。

中秋節快樂！

ナマケモノになりたい

友人と話していて、マーフィーの法則の話になった。

人生訓やらビジネスに役立つ教訓を書いたものだ。

たしかそのなかに「会社の仕事の八〇％は二〇％の人に集まり、残りの二〇％の仕事を残りの八〇％の人がこなす」とったものがあった。このパーセンテージが正しいかどうかは定かではないけど、ともかく、忙しい人ほどその人に仕事が集まってくるというものだ。僕はこうして放浪しながら駄文を連ねるのが関の山でほかに取り得もない男なのだけど、中国で働いていると、必然的に「日本人がやらなければいけない仕事」がいろいろ回ってくる。しかも、高度経済成長が続いているこちらでは業務が拡大しているから、仕事は増える一方。でも、人は増えない。はからずも、八〇％の仕事をこなす二〇％の人々のひとりになってしまった。

忙しさと給料を比べたらまったく割に合わないけど、そんなことを言っても仕方ない。そこで、いろんな意味で「冒険」しているのだ、と思うことにしている。中国は奥の深い国だ。摩訶不思議の国だ。中国の辞書に「不可能」という文字はない。同じように、「あり得ない」という文字もない。すべてがえられる。

エヴリシング・イズ・ポッシブル。

毎週一回は驚きのあまり「うっそー」と声が裏返る。一度車のホイールが燃えて炎があがってしまい、それがもとで車が全焼したことがあった。びっくり仰天だ。車のホイールなんて燃えるものだったっけ？ いったいぜんたい、どうやったら燃えるんだ？？ 毎日が刺激的であることは確かだ。

こんなことを書いては怒られてしまうかもしれないけど、根が気ままな性分だから、忙しさに追いまくられてカリカリするのは好きじゃない。ナマケモノになりたいと、ふっと思うときがある。日が

な木にぶら下がったり、枝に抱きついてうたた寝をしているアイツだ。

ナマケモノの写真を眺めていると不思議な思いにとらわれる。

なんだか悟りきった哲学者のようだ。

古代中国の老荘の思想には、一見、世の中の役に立たず無用にみえる存在こそ、最高なのだという考え方があつた。無用の人は無為自然——平たく言えば、むりがなくて、心が悠々自適としていて、いちばんいいというものだ。ナマケモノは老荘の最高の境地を体現しているような気さえする。

宮沢賢治は『雨ニモ負ケズ』のなかで、

ミンナニデクノボートヨバレ

ホメラレモセズ

クニモサレズ

サウイフモノニ

ワタシハナリタイ

とこんなことを書いた。実際には宮沢賢治はとても忙しい人だったのだけど、やっぱり「無用の人」になるのが理想なのかなと思ってしまう。

ナマケモノになってしまえば、仕事で悩むこともないし、女の子のことで悩むこともない。

いつか、ナマケモノになろう。

偽造ナンバーの白タク

知人が広州空港から市内へ向かった時のこと、空港にいた客引きに連れられて白タクに乗った。

空港を出た白タクはまっすぐ高速にはのらず、なにやら細い脇道へ入る。知人は堤防のようなところへ連れて行かれてしまった。人影のないところで車をとめた運ちゃんはニカッと笑い、

「チェンジ」

と、英語で繰り返す。

知人はなんのことだかさっぱりわからない。車を降りて金を出せと言われるのかと不安になってしまったそうだ。

運ちゃんはボンネットの前に立ち、やおらナンバープレートをはかっと外す。プレートはマグネットで装着してあった。それから、車内から持ち出した白いナンバープレートにつけかえた。

「ハイウェイ、ノー・マネー」

運ちゃんは、またもやニカッと笑った。

実は、彼がつけたのは軍専用のナンバープレートだった。

中国人民解放军の車は解放军専用のナンバーを持っている。白地のプレートなので一目見れば誰にでもすぐにわかる。軍の車は優遇されていて、高速料金や橋の通行料がタダになるのだ。もちろん、運ちゃんがつけたのは偽造ナンバーだ。正式のナンバープレートは取り外しできないよう封印をつけてある。マグネットで装着するだなんて、とんでもない。

高速道路にのった白タクはクラクションを鳴らしっぱなしにして、右へ左へと車線をかえながら次々と車を追い抜かし、料金所もスルーしてあっという間に市内へ着いてしまった。軍のナンバーをつけていけば、いくらスピード違反しても警察は手を出しにくい。

金儲けのために解放军のナンバーを偽造するとはなんともたくま

しい人だ。だけど、もしもばれたらタダではすまないと思うんだけどなあ。なにせ、相手は軍だからねえ。

遅すぎた中国進出計画

富士重工が中国に進出できなくなった。^{スバル}

スバルは大連に中国自動車メーカーとの合弁会社を設立して年間十五万台生産する計画を中国政府に申請していたのだけど、中国政府はこの計画を認可しなかった。

スバルの合弁相手は、奇瑞汽車。一九九七年に設立したばかりの比較的新しい会社だけど、GMのそっくりさんの車を作ったりして物真似戦略で急成長したメーカーだ。「QQ車」という名の低価格小型車が人気だ。

中国では自動車バンバン売れている。アメリカを抜いて世界第一位の販売台数だ。だけど、その一方で各自動車メーカーが増産したことで生産過剰気味になっているし、中国各地には自動車メーカーが乱立している。現在、中国政府は自動車メーカーの競争力を強化するために、各地の自動車メーカーの統合計画を進めているところだ。増えすぎたメーカーを整理しようとしているのだから、新規合弁会社の設立は認めにくい。

もしこれが五六年前だったら中国政府も歓迎したのだろうけど、進出計画が遅かった。バスに乗り遅れたといったところだろう。

中国もかなり発展した。十年前に比べればほんとうに便利になった。

外資ならなんでもいらっしやいという時代は、もうとっくに終わったようだ。

マッサージ万歳

悲しいかな、歳をとれば、あちらこちらにがたが出てくる。

バックパックを背負って放浪の旅に出ていたあの頃の俺は今いずこ。もうかなりくたびれてしまった。

そんなわけで真面目なマッサージへ定期的に通うようにしている。「真面目な」と書いたのはわけがある。中国へ遊びにきた日本人が「マッサージへ行きたい」と言い出せば、不真面目なところへ行きたがっていることが多い。自称他称清純派の野鶴としては、そういうところではなく、真面目な店へ行っていることを強調しておきたい。わざわざ強調するところがあやしいと思う読者諸子がおられるかもしれないが、やはり力説したい。

広州の街角にはあちらこちらにマッサージの店がある。「盲人按摩」の看板を掲げた小さな店もあれば、中医（漢方）治療を謳った病院風の店もある。病院風のマッサージ店では実際に漢方医がいて、薬を調合してくれたりもする。

真夜中に日本人の男二人で街角を歩いていたら、突然、

「マッサージ、やすい。やすいネ！」

と、シャッターの降りたビルの前に立っていたおばちゃんに日本語で呼び止められたことがあった。無視して通り過ぎたら、追いかけてくる。もちろん、こんな手合いは不真面目なマッサージの呼び込みだ。二百メートルくらい歩いてもまだ「マッサージ。やすい！」と叫びながら蟹股で追いかけてくるので、走って逃げた。なんだか山姥やまんばに追いかけられているようで、あれはちょっと怖かった。

今は行きつけの店を決めて、頼む人も決めている。

男のマッサージ師だと力が強すぎて痛いので、女の子で比較的力量の強い人に按摩してもらっている。女性に触ってほしいからではなく、適切に揉んでもらうために女のマッサージ師をお願いしている

ことを強調しておきたい。なにしろ、僕は清純派なのだ。わざわざ強調するところがあやしいと思われるかもしれないが、大切なことなので力説したい。

肩と背中を中心にして一時間半くらい揉んでもらう。終わった後は、ずっと身体が軽くなる。足のむくみも取れる。とても気持ちいい。

昼はパソコンに向かって仕事をして、夜は家で書き物をしているので、肩と背中がバキバキに凝っている。アンメルツやキンカンを塗ってなるべく凝りをとるようにはしているのだけど、やはり揉んでもらわなければ乾いたセメントみたいにカチカチになってしまう。中国には「刮^{かつさ}？」という伝統療法がある。

コインを水で濡らし、肩や肩甲骨の裏のあたりを軽くこする。もちろん、こすれたところは真っ赤になるのだけど、すこし傷つけることで逆に肌を活性化し、自然治癒力で肩の凝りをとるというものだ。

「ほんとに凝りまくってるね。刮？をしたほうがいいことあるよ」といつも頼んでいるマッサージ師のお姐さんに勧められたので、一度やってみてもらったことがあった。ところが、僕の体の状態が悪すぎたせいで、赤色どころか紫色になってしまい、彼女は、

「こんなの初めてみたわよ」

と、驚きを通り越して吹き出してしまった。身体が硬いから、凝りやすい体質ではあるのだけれど。翌日は痛くてかなわなかったけど、紫色は三四日でひいてくれ、その後は背中が軽くなって楽になった。刮？はたしかに効く。

なんだか、おやじくさい話を書いてしまったなあ。でも、おやじだからしかたないか。

中国でツイッターをするということ

中国から海外のツイッターへはアクセスできない。

政府が海外から情報が入り、それが暴動や政府打倒運動に繋がるのを恐れているためだ。

ツイッターの情報伝達力はすさまじい。情報発信力のある人をフォローしているだけでいろんな情報にアクセスすることができる。もつとも、情報の波にのまれてもそれを泳ぎ切るだけのタフさも必要になるのだけれど。自分だけの居心地のいい世界にいたいという人にはあまり向いていないツールかもしれない。

中国政府は「グレートファイアーウォール」という世界最大のファイアーウォールを築き、ユーチューブ、ニコニコ動画、FC2ブログといった政府にとって好ましくないサイトへのアクセスを遮断している。このことは、以前「なろう」に投稿したエッセイ「大陸中国の困ったネット事情」に書いたので興味のあるかたはご覧いただきたい。

ただし、抜け道もある。

グレートファイアーウォール回避ソフトを使えば、このネットの万里の長城を迂回して海外のサイトへ比較的自由にアクセスすることができる。僕はこの回避ソフトを使ってツイッターをしたり、アクセス禁止になっているブログを見たりしている。スグレモノだ。

もちろん、なんでも自由というわけにはいかない。

中国のネット回線は日本と比べると通信速度がかなり遅い。

こちらでは「4Mブロードバンドサービス開始！」などという広告をよく見かける。たったの4Mだ。しかも、ネット回線が細すぎるのか、ネットを使う人間が多すぎるのか（なにせ人口が多いから）、よくつまる。回線が切れてしまうこともよくある。

そんな通信速度の遅い状況で回避ソフトを使うと通信速度がさら

に落ちる。細いトンネルを通るのでスピードが落ちるようなものだ。それでツイッターや禁止サイトなどに繋がらないことがまある。

ツイッター禁止やユーチューブ禁止になったことのない人にはわかりにくいかもしれないけど、このふたつにアクセスできないのは非常につらい。飛車角落ちで将棋を指しているような気分になる。

重宝している回避ソフトだけど、今年の七月、八月くらいから急に繋がり具合が悪くなった。バージョンアップする度に状況が改善されるのだけど、またすぐに繋がりにくくなってしまう。現に、今も繋がらない。

中国当局は血眼になって海外サイトを見せないようにしているから、おそらく、この回避ソフトを妨害するためにあの手この手を打っているのだろう。

なにせ、政府のネット管理部門の責任者は、

「我々はネットの世界をきちんとコントロールできていない。能力不足だ」

と嘆きながらも、ネットの世界を完璧に管理しようとしているのだ。そもそも、ネットの世界を管理しようなどと発想すること事態が間違いだと思うけど。ネットは開かれていてこそ意味がある。

日本へ帰った時、ツイッターにアクセスした途端、タイムラインがすぐに現れるのを見てびっくりしてしまった。こちらでは、タイムラインが現れるのを根気よく待っていたりするし、一本のツイートを流すため一時間くらいかけたりすることもあるのだけど、そんなことをしなくてもさくさく使える。ツイッターは瞬間瞬間が勝負だったりするから、速いほうがいいに決まっている。中国のネット事情もそんなふうになってくれればいいのだけど。

池に落ちた

小学生の頃、家から自転車で二十分ばかり走ったところにある田んぼと小さな池へよく遊びに行った。こんなことを書いたら農家の人に叱られてしまうけど、田んぼは絶好の遊び場だ。ざりがにはいっぱいいるし、雨蛙も殿様蛙もたくさん取れる。たまに、牛蛙や田鰻を捕まえた。どろんこになって遊ぶのは本当に楽しかった。ザリガニや蛙を小エビを籠に入れて持ち帰り、家で飼育した。ザリガニが脱皮したり、小エビがお腹に卵をいっぱい抱えるのを見てはすごいなと思ったものだった。

田んぼの隣の小さな貯水池にはちょうどいい具合に木が倒れていて、それを渡って池の真ん中へ出てはあたりを網ですくって小魚や透明な小エビを捕まえたりした。ところが、ある日、つるりとすべって丸太から落ちてしまった。さいわい、とっさに丸太にしがみついたので下半身が池の水に浸かっただけですんだ。危ないところだった。僕は丸太にはい上がって遊び続けた。

その翌日、学校で全校朝礼があったのだけど、なんと先生は、あの池には破傷風という恐ろしいばい菌がうようよしているから入ってはいけないと言うのではないか。破傷風にかかると体が腐って三日で死んでしまうのだとか。僕はびっくりしてしまった。もっと早く言って欲しかった。

それから、どきどきしながら三日間を過ごした。死んでしまうかもしれないと思うと怖かった。もちろん、叱られるのは目に見えていいるから、あの池にどぼんと落ちましたなどは、先生にも誰にも言えない。

三日経ってもぴんぴんしているので僕はほっと胸をなでおろした。でも、その池には入りにくくなってしまった。相変わらず田んぼには通っていたけど、破傷風の池というのはおっかないのでそばを通り過ぎる時にはなるべく見ないようにしていた。破傷風は蛇よりも

つと怖い。なにしろ目に見えないのだから。そうこうするうちに、破れていたフェンスが修理されて池へ入れなくなってしまい、田んぼは埋め立てられて住宅地になってしまった。遊び場が減ってさびしかった。

小学校の日以来、あの辺りへ行ったことはないけど、あの池は今でもあるのだろうかと思ひ出すことがある。

肉といえば

関西で生まれ育ったので、肉といえば牛肉のことだとばかり思いこんでいた。

べつに贅沢をしているわけでもなく、豚肉を食べる習慣がなかっただけのことだ。どういうわけか、一昔前まで関西では豚肉をあまり食べなかった。豚の数が少なかったので、豚を食べる習慣がなかったのかもしれない。

家の食卓に豚肉がのぼるようになったのは、僕と弟が食べ盛りになってからだった。もちろん、安い値段で大量に食べさせるためである。母親も、それまでほとんど豚肉を食したことがないらしく、豚肉は案外おいしいものだと感じていた。

一浪してから東京へ行って一人暮らしを始めたのだけど、食堂で牛肉と思って肉料理を注文したら豚肉ばかりが出てくるのでびっくりしてしまった。

関東では肉といえば豚肉のことを指す。習慣がまったく違うのだ。居酒屋で肉じゃがを頼んだ時、豚肉の肉じゃがが出てきた。騙されたような気分になったのだけど、東京の友人たちは平気な顔で食べていた。誰も文句を言わないのが不思議だった。豚肉の肉じゃがははじめはなんだか食べにくかったけど、そのうち慣れてしまった。でも、やっぱり、肉じゃがは牛肉のほうがいい。豚肉の肉じゃがもそれはそれでおいしいのだけど、牛肉のほうが味がまっている。

今住んでいる中国では、肉といえば豚肉のことをいう。たまに牛肉を食べたくなった時はイスラム教徒の店へ行くことにしている。鉄板牛肉は最高だ。じゅうじゅうと熱く焼けた鉄板に牛肉炒めが載っている。牛肉を食べるとなんだか元気になる。

幼い頃に培った味覚は大人になっても変わらないものだなあと思う。味覚も「食文化」の一つ。自分の基礎になる「文化」はあまり

変わらないものらしい。

どくとるマンボウ讃 ――追悼 北杜夫先生

北杜夫先生の作品を初めて読んだのは中学三年生の時だった。

部活を引退してひまになり、ふらりと寄った書店の「新潮文庫・夏の百冊」コーナーに置いてあった『どくとるマンボウ航海記』を手にとった。昭和三十三年から三十四年にかけて、水産庁のマグロ調査船に船医として乗り組み日本からヨーロッパまで航海した時の紀行文だ。

独特のユーモアがおもしろかった。すつとぼけた感じだけど、上品で朗らかなユーモアだ。それから、いわゆる「どくとるマンボウ」もののエッセイを片っ端から読んだ。なかでも、旧制高校のバンカラな学生生活を描いた『どくとるマンボウ青春記』が面白かった。戦後の食糧難の時代で大変だったみたいだけど、あんなハチャメチャな学生時代を送ることができたらさぞ楽しいだろうなと思う。

『マンボウ周遊券』には作家の阿川弘之先生といっしょにマダガスカル島へ行った時のことが書いてあって、のんびり屋でおっとりしている北先生とせっかちで海軍仕込みのきびきびしたところのある阿川先生のやりとりが面白い。阿川先生もこの時のことを紀行文にしているので、あわせて読めばどくとるマンボウ先生の姿が浮き彫りになって、二度楽しめる。

ユーモラスなエッセイが人気の北先生だけど、彼の本質は詩人だと思う。

個人的には初期の抒情的な短編が好きだ。

『河口にて』というアントワープを舞台にした幻想的な短編が好きで繰り返し読んだものだった。『幽霊』はあまりの詩情に読んでいて眩暈がした。大袈裟ではなく、ほんとうに頭がくらくらした。大阪環状線の電車のなかで読んでいたのだけど、あわてて駅で降りて深呼吸したのを覚えている。ただし、たんに叙情的なだけではない。

詩情に流されるだけの書き手ではない。彼は精神科医でもあるので冷徹なまなざしを持っている。『岩尾根にて』、『羽蟻のいる丘』、芥川賞受賞作になった『夜と霧の隅で』には、冷酷なほどの描写が盛り込まれている。叙情性と冷徹さのバランスが北先生の純文学作品の持ち味なんだろうと思う。

個人的な趣味はさておき、代表作はやはり『楡家の人びと』だろう。ロマン（長編小説）としての完成度が高い。代々精神科医だった北先生の実家・斉藤家（実父は精神科医であり歌人だった斉藤茂吉）をモチーフにした大河小説だ。構成は完璧だし、各登場人物が活きいきと描かれている。なによりユーモアが効いている。もっと評価されてもいい作品だと思うのだけど。

カラコルム登山隊のドクターとして参加した経験をもとに書いた『白きたおやかな峰』のラストは圧巻だった。作品の最後の三分の一くらいからぐいぐいと読者を引っ張る筆力は凄い。北先生はストーリーテラーでもあった。

旧制松本高校時代からの盟友である辻邦生先生との対談『若き日と文学と』を読むと、北先生の一途な文学青年振りがうかがえる。書き手としては二人はまったくタイプが違うけど、北先生は辻先生からかなり影響を受けたのではないかと感じた。北先生にとって、辻先生は頼りになる先輩だったのだろう。

純文学、ユーモア小説、エッセイ、童話と幅広く手がけていながら、どれをとっても「北杜夫」印の作風だった。天才作家だと思う。

北杜夫先生に関するツイートを検索したら、いろんな人が彼に関するツイートを流してた。愛された作家だったんだなあとと思うと嬉しくなった。

ご冥福をお祈り申し上げます。

給料の遅配が当たり前の中国の会社

会社がまだ給料を支払ってくれないから、お金を返すのをもうちょつと待ってと中国人の友人から電話があった。もう一か月も遅れているのだという。お金がある時に返してくれたらそれでいいよ、と僕は答えておいた。

「中国の人にとって日系企業で働くメリットってなんですか？ やっぱり給料ですかね」

と日本人に時々尋ねられることがある。

もちろん、地場の中小企業に比べれば待遇はましだけど、中国人にとって一番魅力ある就職先は公務員や大きな国营企業だ。給与もいいし、福利厚生もしっかりしている。権力を使って賄賂をとることもできる。中国の公務員に比べれば日系企業はかなわない。

「給料もありますけど、給料の遅配がないというのも大きな魅力なのですよ」

と僕は答えるようにしてる。

僕の答えを聞いてびっくりする人が多いのだけど、中国の会社では給料の遅配は当たり前だ。

こちらの友人からはしょっちゅうそんな話を聞く。それで冒頭で紹介した友人のように五百元や千元といった当座の生活費を貸してあげたりする。もちろん、信頼している友人にしか貸さないけど。

その点、日系企業は給与の支払いがしっかりしているから、社員は安心して生活することができる。

なぜ、中国の会社でそんなに給料の遅配が頻発するのか、よくわからない。一般的に言って中国の企業は払いが悪い、というか、支払いはできるだけ払わずにすませたいというのが中国企業の態度だから、未回収金が増えて資金繰りが悪くなり、それで給料が払えなくなるのだろうか？ それとも、給料なんて払いたくないから、で

きるだけ支給を遅らせたいと経営者が考えるのだろうか？ 中国人の行き当たりばったりでその場凌ぎな性格を考えると、そもそも資金繰り計画が甘いというのもあるとは思うけど。

中国の工事現場で出稼ぎの労働者が給料を払ってもらえずに社会問題になったことがあった。建築会社は、給料を払ってしまえば、お金を手にした労働者が郷里へ帰ってしまうかもしれないので、それを恐れて払わなかったのだそう。給料を手になければ、出稼ぎ労働者はお金を手にするまで仕事をやめるわけにはいかなかった。こんなことがまかり通るのが中国だ。

以前、病院勤務の医師から給料が遅配になって生活費に困っていると聞かされた時には絶句してしまった。ちなみに、日本と違い、中国の医者への給与は一般的に比べて工場勤務のエンジニアと同じ水準だ。中国は人口がやたらめったら多い分、どこの病院も人であふれかえっている。その友人が勤めている病院も入院ベッドは常に埋まっている。儲かってしょうがないはずと思うのだけど、資金繰りがつかないらしい。病院の幹部が病院のお金を横領しているとは思えない。不思議だ。

無力感との戦い

もし貨幣を使わずに自給自足の暮らしをできるのなら、あるいは、貨幣の使用をごく少量に抑えることができたなら、行き詰った経済システムと距離をおいて比較的自由に暮らすことができるのだろう。

ところがそうはいかない。今の日本においては、貨幣を使わずに暮らすことなど、ほとんどむりだ。特に都会では、お金がなければなにもできない仕組みになっている。

コンピューターシステムのユーザーがパソコンのキーボードを叩く時、もはや独立した一個人ではなく、システムの一部と化してしまいうように（つまり、パソコンという道具の主人ではなく、システムの駒の一つになってしまふ）、貨幣を使用した人間は、もはや独立した一個人ではなく、経済システムの一部と化してしまふ。いささかシニカルな表現をすれば、貨幣の使用者は己の人生の主人公ではなく、経済システムの奴隷となる。今日の経済システムは社会を発展させるためのものではなく、大規模な搾取装置と化しているのだ、なおさら厄介だ。奴隷は搾取され続ける。筆者も含めて、多くの人々がこのような苦境に陥っている。真面目に働いても、暮らしが成り立たない。懸命に働いても、もっと働かなければ飯の種を取り上げるぞと脅される。職を変えようにも、新しい職は容易には見つけられない。

この経済システムへの対処法は人それぞれだ。

システムをうまく使つてのしあがろうとする人もいれば、自分の身边に小さな調和を築きシステムを見てみぬ振りをしようとする人もいるだろう。ここで誤解しないでいただきたいのは、それが悪いことだと言いたいのではないということだ。誰でも成功できるものなら、成功したいと願うものだろう。嫌なことなら、見てみぬ振りをしたいと思うものだろう。筆者もそう思う。経済システムがあま

りにも強大なため、実際問題として、今のシステムに問題があるとわかっていても、ちよつとやそつとでは変えようがない。ほかに現実的な対処法がないため、そのように適応するほかに術がない。すくなくも、苦しいなりに息をつくことができる。

ただし、うまくのしあがろうとしても、人口のほんの数パーセントの人間を除いて、このシステムの上位に立つことはむりだ。砂の絶壁を駆け上るようなものかもしれない。よほど才能と環境と運に恵まれた人でなければ、成功はむずかしい。また、見てみぬ振りをしてやりすごそうとしても、ますます苦しくなる状態におかれたまま無力感を感じさせられ続けることには変わらない。

では、「真面目に働いている人間がまともに生活できないのはおかしい」と異議申し立てをすればよいのかと言えば、これもまた簡単ではない。

システムは頑強だ。このシステムに対して異議申し立てを述べようとすると人は、無力感どころか、絶望感にうちひしがれるかもしれない。

搾取システムの要は、ウォール街を本丸にしている金融資本だ。金融資本は様々な分野の様々な企業に投資を行ない、手っ取り早く利益を上げるように要求する。企業はそれに応えるために、リストラや合法的な下請け叩きを行ない、労働者の生活を奪い、下請け企業の利潤を奪う。一次下請け企業は、二次下請け企業を叩き、二次下請けは三次下請けの製品やサービスを買叩く。どの企業でも、生き残るために人員整理や工場の海外移転をせざるを得なくなる。働き口がなくなってしまえば、消費は冷え、企業投資も冷え込み、世の中の資金の巡りが悪くなる。こうして、日本は恒常的なデフレーション状態となってしまった。現在のアメリカでも状況は同じだ。アメリカのほうも日本よりもっとひどいかもしれない。物を作って輸出しようにも製造業がほぼ空洞化してしまったのだから。

金融資本による大規模な搾取は暴力の変形だから、この暴力に対抗するためには別の暴力を用いる必要がある。暴力を牽制できるも

のは、別の形の暴力でしかない。デモを行なったくらいでは金融資本は態度を変えない。それくらいは問題の想定内として織り込み済みだろう。では、たとえばウォール街&シティ爆弾テロといった過激な暴力を使うよりほかにないのだろうか？ 答えは否だろう。過激な暴力の応酬は、たとえば、テロ抑止のための国家権力による統制といった別の種類の暴力に活躍の場を与えるだけの話だからだ。合目的ではない。

もちろん、今のシステムを軌道修正すればすべて丸くおさまるのかと言えばそんな単純な話でもないが、ただ一つ言えるのは、どのようなシステムであろうと未来永劫続くものではないということだ。システムを変えるためには、たとえば簡単ではなくとも、デモをしたのになにも変わらなくて無力感に襲われようとも、誰も耳を傾けてくれないと嘆きたくなくても声を上げ続けるよりほかに道はない。黙っていたのではなにも変わらない。「希望」はいつでも自分自身のすぐそばに在る。^ああとはそれに気づくか、気づかないかだ。時代の闇は濃くなるばかりだが、無力感に白旗をあげるわけにはいかない。絶望感に飲みこまれるわけにもいかない。それが相手の狙いなのだから。

歌詞で覚えた漢字の使い方

暗いと後ろ指を指されながらも、さだまさしさんの歌をよく聴いていた。

「オフコースだって暗いやん。『さよなら』って連呼するやろ」と反論しても、誰も賛同してくれなかった。

さださんの歌詞の漢字の使い方はちよつと独特だ。

たとえば、「幸せ」と言う言葉を漢字で表記する時、「倅せ」と人偏をつける。

いい表現だなと思った。

人偏のついているほうがあたたかい感じがする。

そこで調べてみると、人偏の「倅せ」はたとえば「僥倅^{ぎょうさい}」といったような思いがけない幸いの時に使われる漢字だとわかった。ふつうの「幸せ」とはちよつとニュアンスが違う。

考えてみれば、倅せというものは奇蹟なのかもしれない。どこかに落ちているものでもないし、探したまわったからといって見つかるとは限らない。たとえ、手に入れても、いつまでも続くかはわからない。壊れやすいものだ。

だからこそ、倅せは思いがけないものだし、大切なものなのだとも思う。

山口百恵さんに提供したヒット曲『秋桜』は、この漢字で「コスモス」と読む。

コスモスは英語の名前。和名は「秋桜」と書いて「あきざくら」と読んでいた。「秋桜」と書いて、そのままコスモスと読ませたところがミソだ。漢字には熟字訓といって、音読み、訓読みに関係のない読みを与える方法がある。たとえば、「七夕^{たなばた}」もそうだし、「

二十歳^{はたち}」もそうだ。「秋桜」という漢字に英語名の熟字訓を与えたことで、コスモスのイメージがぐっと強くなった。

熟字訓というものは、大和言葉に漢字をあてはめるものであって、英語の言葉を熟字訓として使うのは日本語の正しい使い方ではない、という反論もあるかもしれないけど、言葉はそもそも生き物だ。世につれて変化する。新しい表現を「発明」するのも表現者の大切な仕事だ。それこそが創意工夫なのだから。

『津軽』という曲には「蕭々（しょうしょう）」という表現がある。物寂しい様のことだそう。

漢字を見ただけでもなんだかさびしそうだ。「蕭」はもともとよもぎの一種を表す漢字だったようだ。よもぎがさびしく風に揺れるところから、こんな表現ができたのだろうか？

辞書には「蕭々と風が吹く」、「雨が蕭々と降る」といった事例が載っている。

「知る」と書くべきところを「識る」という書き方もあるのだとさださんの歌詞からおそわった。一般的には「知る」と書いて十分に通じるのだけれど、「認識した」ということを強調したい場合、「識る」と表現する方法もある。

厳しい局面に立たされた時や、日常生活の何気ないことでも、はっとおどろいて今まで気づかなかったことに、気づかせられることがある。今まで認識していなかったことを認識させられる時がある。そんなシーンを描く時は「識った」と書きたくなる。

まだまだほかにもいろいろあるけど、これくらいにしておこう。さださんの歌詞を読んでいてわかったのは、漢字には一般的な用法以外にいろんな表現方法があるし、いろんな工夫の仕方があるということだ。

漢字なんてどうでもいいじゃない、と思う人がいるかもしれない。

できるだけ漢字を使わずにひらがなにしたほうがいいと考える人もいるだろう。

人それぞれの考え方だから、自分の好きな方法で書けばいいと思うけど、漢字にしかできない表現がある。ところどころ、漢字を工夫して小説を書くのも面白い。

乗り合いバスの混み具合にみる経済発展の度合い

経済がほとんど発展していないところへ行けば、バスがめっちゃめちゃ混んでいる。

ラオスの田舎町からバスに乗った時、十九人乗りくらいのマイクロバスに三十人以上、すし詰めになっていた。しかも、その状態のままで三四時間くらい走ったりする。路線によっては、通路に風呂場で使うような小さなプラスチックの椅子が並んであって、それに坐ったこともあった。坐りにくいうえにでこぼこ道を走るので、バスが揺れるたびにプラスチックの椅子が歪んで右へ左へと体が大きく傾き、何度も倒れそうになりながら乗った。親切な地元のアオス人のおじさんが僕の肩をがしっとなで支えてくれたりもした。バスの需要はあるのだから、もっと走らせればいいのになと思うんだけど、いかんせんバスの台数が足りない、というか、バスを買うお金がない。道も整備されていないので、ちょっとした距離を走るにも時間がかかる。きちんと舗装して整備した道なら一台のバスで一日二往復くらいできるのだけど、土道では一日一往復が関の山だ。時間もかかるし、運転手もぐったりしてしまう。それでバスの本数が少なくなってしまう、混んだバスにみんな乗ることになる。

経済が発展してくると、バスを買うお金ができるので、新規参入業者が増えてバスの台数が増える。もちろん、経済が発展するにつれて乗客も増えるから、バスを走らせれば、走らせただけ儲かる。バスは相変わらず混んでいるけど、本数が増えて便利になる。

発展の過程では制度が整備されていないので、さまざまな抜け道がある。

中国の場合、中・小型のバスは、個人事業主のバス運転手が多い。バスは自分の持ち物で、バス会社に所属してある路線の業務を請け負う。いわゆる、オーナードライバード。運転手の女房が車掌を務

める。

始発のバスターミナルから乗る乗客の切符は、ターミナルの切符売場で販売するのでバス会社が把握できるけど、途中乗車のぶんまでは把握できない。そこで、バスターミナルを少し出たところに乗客が待っていて、車掌と料金を交渉して乗車する。バスターミナルから乗るよりも、安い料金を乗ることができる。もっとも、座席がいつも空いているとは限らないので来るバスが全部満席でけっこう待たされることもしばしばだ。それでも、待った分だけバス代が安くあがる。途中乗車分の収入は、当然、オーナードライバーの実入りとなる。バス会社も黙認していたというか、それがルールだったみたいだけど、ただ事故が起きたときは厄介だ。定員オーバーが発覚すれば、バス会社もドライバーも政府の交通当局や裁判所に責任を問われることになる。

新規参入が増えすぎると、今度はバスの供給が過剰気味になる。

十年前の中国がそんな感じだった。

オーナードライバーにはノルマがあるから、始発のターミナル駅である程度乗客を乗せなければならない。そこで、出発時間をすぎても発車せずに乗客がくるのを待っていたりする。そうすると次のバスの乗客を取ってしまうことになるので、次のバスも乗客が足りずに出発を延ばす。ひどい場合、次のバスの発車時刻間際になってもようやく出発したことがあった。当然、ダイヤが乱れる。

問題はダイヤの乱れだけではない。

乗客不足のまま出発することが多くなれば、バス会社の収入が減る。そこで、バス会社は市内で拾った乗客については、郊外のチェックポイントで乗客数を報告させたうえでそのチェックポイントで正規の切符を買わせるようにして、運賃がオーナードライバーの懐へ入るのを防ぐ。到着地近くの郊外のチェックポイントでも乗客数を報告させ、途中乗車して到着地まで行く客については、そこで切符を買わせる。長距離路線の場合、中間の都市のバスターミナルでも同じようにして、正規の切符を買わせるようにする。こうなると

車掌の存在意義がなくなるので、かあちゃん車掌が減る。オーナードライバーといっても、自分自身の懐へ直接入る収入が激減するので、ほとんどサラリーマン運転手と変わらない。バスで大儲けした時代は終わりを告げる。

モーターリゼーション、つまり自家用車の普及が始まれば、マイカーで異動する人が多くなるのでバスの乗客は減り始める。これが今の中国だ。長距離路線の需要はまだまだ旺盛みたいだけど、広州の郊外では座席の空いたバスを見かけるようになった。中国の場合、貧しい農民や出稼ぎ労働者が多くて車を買えない人が多いからバスの役割は今でも大きいけど、そのうち、日本みたいに地方のバスは通勤時間帯以外はけっこう空いているような状態になるのかもしれない。もっとも、春節（中国の旧正月）や十月の国慶節の時は、何億人もの人々が「民族大移動」するから、いくらバスを走らせてもぜんぜん足りないわけだけど。

経済の発展していない国では、がらがらのバスを走らせる余裕はない。ある程度発展した国でないとできないことだ。需要の少ない時間帯でもバスが走るということは便利さの証でもある。空いたバスをみるたびに、中国もそれなりに発展した国になったんだなあと思う。

触れ合ってみれば——日本研修へ行って

勤め先の中国人スタッフ三人を連れて日本出張に行った。

三十前後の男の子たちに日本の技術を教えるための研修旅行だ。

三人とも海外はもちろん、飛行機に乗るのも初めてなので、かなり興奮している。窓の外から真剣なまなざしでじっと雲を見たり、機内サービスのビールやワインを嬉しそうに飲んだりしていた。日本への入国カードを記入する時は、不安そうな顔でこれでいいのかと何度も僕に尋ねたりした。

日本の本社の方が成田空港まで迎えにきて、車で都心まで送ってくれた。三人とも顔がこわばっている。気心の知れたスタッフなのだけど、あそこを見てごらんよと話しかけても、緊張した面持ちのまま頷くだけだ。初めて海外へ行く時は誰しも緊張するものだけど、日本人ならあれほど硬くなったりしないだろう。日本人と比べると中国人にとって外国はまだまだ遠い異世界だ。

なんとか無事に本社への表敬訪問を終え、翌日、研修センターへ向かった。

中国人も緊張しているが、受け入れる側の研修センターのおじさんたちも緊張していた。外国人に技術指導するのは初めてなのだろうだ。

中国人スタッフは、学びたいという意欲が前面に出ていて、実に熱心に指導を受けた。質問があれば、すぐさま尋ねる。納得がいかないとことんまで訊く。日本人指導員はその業界の技術コンテンツでチャンピオンを取ったことのある選りすぐりの精鋭の方たちだったのだけど、相手が中国人とあって、初めはおっかなびくりだった。どうなることだろうと不安だったと思う。だけど、中国人のやる気に刺激を受けて、熱をこめて指導してくださった。僕は技術には疎いけど、素人目に見ても指導員の技術は美しい。中国人スタ

ツフは「これは本物だ」と感じて、真剣に技術を学ぼうとしてくれたのだと思う。おなじ勉強するなら、やっぱりいいものに触れなくてはいけないとあらためて感じた。

研修を終えた後、中国人スタッフにどうだったと訊いたところ、「中国で仕事をしている時は、自分は完璧にできていると思ってた。自分に間違いはないってね。でも、ここで研修を受けて、いろいろ足りない部分があるんだとよくわかったよ。まだまだ勉強しなくちゃいけないね」

と言っていた。

日頃、目の前の日常業務の対応に追われてほとんど休みなしで働いている彼らだけど、ステップアップのいい機会になったと思う。日本という環境に放り込んだのもよかった。実際に日本という国を見たことで、日本の技術をすんなり受け入れる気になってくれたのだと思う。彼らは日本の景色を見ながら、しきりに「清潔だ」と感心していた。清潔ということはいろんな面で整備が行き届いているということだ。整備された国だからこそ、こんな高い技術があると実感してくれたのだろう。

もちろん、日本で学んだものを中国で応用しようとすれば、いろんな障碍があって簡単にはいかない。研修を受けたスタッフは本物に触れて、いいものだと思えたと腹に落ちたわけだけど、中国にいる同僚たちに伝えるとなれば、いろんなハードルをクリアしなくてはいけない。だけど、真面目な彼らのことだから、自分たちで工夫して乗り越えてくれると思う。

日本人指導員も、中国人スタッフを気に入ってくれたようだ。今度には日本人指導員が中国へ来て、中国での指導がどうなっているのかをチェックすることになっているのだけど、四人の指導員が四人とも、中国へ行きたいと言ってくれた。さつた。

「『再見』と言ってくれたから」

というのがその理由だ。「再見」はさよならという意味だけではなく、「再び見ゆ」――つまり、また会いましょうという意味がこ

められている。それを感じてくれたのだ。

中国人スタッフも日本人指導員もお互いに不安でおっかなびつくりな出会いだったけど、触れ合ってみれば、同じ人間だということが案外あっさりわかるものだったりする。なんてことはないのだと。

日本語を話せず、日本へ行くのも初めてという彼らを引率するのは結構な重労働でくたびれたけど、苦労しただけの甲斐があった。

広州モーターショーに行って

毎年、広州ではモーターショーが開催される。

広州には、トヨタ、ホンダ、ニッサンと日本の三大自動車メーカーがそれぞれ中国との合弁会社の工場を構えているので、自動車産業が盛んだ。いわば、デトロイトのような町だ。

モーターショーは賑わっていた。展示会場には、世界中の主要メーカーがほぼ出揃っている。日本から視察にきたある政府関係機関の人は、

「前回の東京モーターショーはさっぱりでした。やっぱり、モーターショーはこうでなくっちゃいけないと感じました」とさびしそうに言う。

今の中国人にとって車はステータスシンボルだ。誰もが車を欲しがる。自然とモーターショーを見学する人が増える。

日本でモーターショーが振るわないのは、小泉改革以来、国民から搾取を行なう政策を採った結果、車どころかその日の暮らしさえもままならない人が多くなったためだ。日本の車作りは決して、他国には負けていない。開発、製造などのそれぞれの部門で高度な技術とノーハウを持っている。そして、その高度な技術を運用できるプロフェッショナルな人材が揃っている。中国の国産自動車メーカーとは、底力がまったく違う。中国で働いていて感じるのは、日本の企業はやはりすごいなということだ。

誤った経済政策さえなおせば、日本のモーターショーも広州のような賑わいを取り戻せると思うのだけれど。

広島モーターショーに行って（後書き）

真面目な話から、いきなり軟派な話になりますが、モーターショーのモデルさんの写真をブログに掲載しています。目の保養になりました。こちらでどうぞ←

<http://blog.google.jp/noduru/efda149f475618133b3b2c880f5889>

北京標準語と訛り

三年ほど前、広州へやってきた時、広東訛りの中国語（北京標準語）がひどく聞き取りにくくて苦労させられたものだった。僕は雲南省昆明に留学してそこで北京標準語を習ったから、僕の中国語はいささか雲南訛りが入っている。不器用だから発音もうまくない。だから、人のことは言えないのだけど、とにかく広東人は標準語が下手だ。北京標準語で話しかけられているとはわからず、よくよく聞いてみれば相手が標準語を話そうとしていることがわかったこともしばしばだった。ある日本人は、初めて広州へきて会議に参加した時、

「へえ、広東語って案外北京標準語に似てるんだ」

と思ったそうだけど、よくよく聞いてみれば彼らは標準語で会議しているつもりだったのだとか。きれいな標準語を話す広東人はあまりいない。

しかも、下手なくせに「自分はちゃんと標準語を話している」と思いこんでいるものだから手を焼く。たぶん、小学校や中学校の先生が訛っていて、彼らの発音を手本にして標準語を勉強したから、それが正しいと信じているのだろう。テレビを観ていると、中年以上の広東人は大学の先生でも標準語をうまく話せない人がけっこういる。

僕は片言程度しか広東語がわからないのだけど、それでも広東語を聞いていると中国語の一方言だとはとても思えない。まったく別の言語のようにすら思える。一説によれば、北京標準語と広東語の差は、英語とドイツ語以上の開きがあるのだとか。広東人が北京標準語をうまく話せないのもむりのないことなのかもしれない。広東語は、言語学的にいつてベトナム語やタイ語のほうが近いんじゃないだろうか。

ともあれ、こちらに三年ほど住んで、広東訛りの標準語にもずいぶん慣れた。訛りがきつい場合を除いて、言っていることはだいたいわかる。慣れたところか、広東訛りが僕にもうつっているらしい。この間、久しぶりに雲南省を旅行した時、何回か「広東人ですか？」と訊かれたことがあった。広東人に間違えられるくらい標準語が下手になってしまったんだなあと思うとなんだか悲しかった。こちらで働きはじめてからというものの仕事の専門用語を覚えるほかは標準語の勉強をしなくなったから、そんな僕が悪いんだけどさ。

逆に、広い中国のなかでどこの人たちが標準語が上手かと言えば、意外なことに東北のいちばん北にある黒龍江省（省都・ハルピン）の人たちだ。雲南で通っていた大学のそばにハルピン人が経営する小さな餃子店があったのだけど、その女将が話す標準語はまるで語学学習用のテープを聞いているようで、非常に正確な発音だった。大学の標準語の先生よりもきれいな発音だから腰を抜かしてしまう。なぜハルピンの人たちの発音がきれいなのかといえば、黒龍江省はウイグルやチベットを除いていちばん最近漢民族の入植地（植民地）になったところなので現代の標準語の発音に近いのだとか。これを裏返せば、昔漢民族の植民地になったところほど、現代の標準語の発音とかけはなれてしまうということだ。

中国語学習者にとって、方言は最大の難関だ。

「たのむからもっと正確な発音で話してくれ」

と、やるせない気分になることもしょっちゅうある。

もちろん、訛りを聞き取るのも語学力のうちだけど、そもそも十億とも十五億ともいわれている人民に同じ言葉で話せというほうがむりなんだろうな。

恐るべき吉林人

吉林省は中国東北三省の真ん中にある省。省都は長春だ。緯度はだいたい日本の北海道くらいで、昔でいう満州平野の真ん中にある。長春はおだやかな感じのいい街だ。人ものんびりしている。

北海道くらいの緯度に位置していて、しかも内陸なものだから、十一月くらいから最高気温がマイナスになり、真冬になると氷点下三十度になったりする。とても寒いところだ。

寒いから酒を飲んで温まる。

酒を飲まなくては体が温まらない。

職場に吉林人の同僚がいて、しょっちゅう一緒に仕事をするのだけれど、なんでも彼は、地元に戻った時にはアルコール度数が五〇数度もある白酒を茶碗へなみなみと注いで友達と乾杯するのだそうだ。もちろん、文字通り杯を飲み干すのである。茶碗一杯分の白酒をひと息に飲み干して、すぐにまた乾杯する。二杯目を飲み干せば、三杯目の乾杯にうつる。そうして、延々と白酒を乾杯し続ける。それが彼らの飲み方なのだとか。

彼といっしょに日本出張へ行った時、日本の本社の人たちに夕食をご馳走になったのだけれど、その時、彼は本社の酒豪Sさんと飲み比べをした。ビールを何杯も乾杯でイッキ飲みして、サワーも次々と一気に飲み干しておかわりし続けた。飲み放題コースをお願いしておいてよかった。それはともかく、酒豪で鳴らしているSさんもかなわず、最後はどうとうダウンしてしまった。

「強すぎるよお。なんであんなに飲めるんだよお」

と、Sさんはつぶやきながら眠りこんでしまった。完全に潰れてしまった。

一方、吉林省の彼は、

「ビールもサワーも薄いですから、まだまだ飲めますよお」

と陽気にはしゃいでいる。ほんとうに、彼はまだまだ飲めそうだった。

恐るべき吉林人。さすが白酒を茶碗に注いで鍛えただけのことはある。

恐るべき吉林人（後書き）

危険ですので、白酒を茶碗に注いでイッキ飲みするのは、真似しないでください。

天津にはきたけれど

飛行機の出口から外を見て、一瞬目が点になった。

亜熱帯の広東省広州から北の天津へやってきた。

広州の日中の気温は十八度くらい。朝晩はすこし冷えるから上着を着るけど、昼間はシャツ一枚で十分だ。これに対して、天津の最高気温は三度くらいで、最低気温はマイナス三度くらい。とても寒い。

コートを持ってきたのだけど、うっかり油断していて、機内預けのトランクに入れてしまった。背広しか着ていない。

てつきり空港の建物のすぐそばについてそのままターミナルのなかへ入れるとばかり思っていたら、あろうことか、飛行機はただっ広い駐機場に着いてしまっていたのだった。タラップを降りて、バスに乗ってターミナルへ行かなくてはならない。外気の温度は二度くらい。

なんとも手荒い歓迎だ。寒いよ。僕は寒がりなんだ。

亜熱帯からくる便なんだから、ターミナルのそばにつけてくれよな、と文句を言っても始まらない。体をすくめてバスまで走る。幸い、バスは人がびっしりでおしくらまんじゅうをしているようだったからなかは暖かかった。助かった。もつとも、天津の寒さはさわやかだ。ふだん亜熱帯で暮らしていて、うだるような暑さと湿気にやられてなまっている頭が冴えるような気がする。

さて、天津には出張でかれこれ七回くらい来ている。二か月に一回くらいのペースで来ているのだけど、いつも郊外の飛行場からそのまま郊外の経済開発区——つまり工場や倉庫がいっぱい建っている工業団地で仕事して、また郊外の飛行場へ戻って飛行機に乗って広州へ帰る。まだ一度も天津市の中心部へ行ったことがない。一度くらいゆっくり市内見物をしたいけど、時間に追われているので、

なかなかその時間が取れない。

「天津ってどんなところ？」

と友達に訊かれても、

「いやあ、工場がいっぱいあったねえ」

としか答えられない。天津のお土産はスーパーで買う甘栗と天津名物のお菓子だ。市内へ行けばほかにも土産になるようなものがほかにいろいろあるのだろうけど。

テレビで天津市内の映像を見ると、古い洋館があったりする。中国の悠久の歴史のなかでは、かなり新しい町だけど、見所はありそうだ。せっかく中国で暮らしているのだから、いろんなところを見てみたい。

今回の出張も市内見学するゆとりはなく、工業団地でお仕事をし
て広州へとんぼ返り。なんともとほほな感じなのだけど、そのうち
余裕ができればすこしくらい時間を取ってささやかな観光をできる
ようになるんじゃないかな、と淡い希望を抱いている。

やる気ないですう

日本語のできる中国人の女の子を雇い、僕のアシスタントとしてつけてもらっている。いろんな雑務が舞いこんでくるし、日本ではあり得ないアクセントがしょっちゅう起きて振り回される。とても一人では仕事を回せない。

アシスタントの彼女は、今年の夏に大学の日本語学科を卒業したばかりだ。アニメ好きがこうじて日本語学科へ進むことにしたらしい。日本語の原音声でアニメを観賞できるようになりたかったのだとか。仕事が終わって家へ帰るといつもネットでアニメを観ているそうで、あまり有名でないアニメまでよく知っている。だから、仮にアニメちゃんとしておこう。

いろんな人を面接した時、新卒のなかではアニメちゃんの日本語能力がいちばん高かった。最初の面接はすべて日本語で行なう。新卒の場合、緊張してしまつてうまく日本語を話せなくなつてしまう人も多いのだけど、物怖じせずに着いていった。度胸があるところも買つて採用することにしたのだった。

もっとも、いくら日本語検定一級（英検でいえば一級レベル）を取つていて日常会話ができて、ビジネス日本語まではできないから、メールの書き方、挨拶の仕方、ビジネス文書の翻訳の仕方といったイロハをいちから指導した。初めの頃は日本への報告メールを書き上げた後、三〇分くらいパソコンの画面とにらめっこしながら何度も読み返して間違いがないかどうか確認してから送信していたものだったけど、飲み込みが早くてめきめき上達してうまくなった。右も左もわからないまま社会人になって、おまけに日本語で仕事をしなくちゃいけないのだから、かなり大変だと思うけどがんばっている。

ただ、広東人気質というか、アニメちゃんは亜熱帯の人間なので、

かなりむらっ気なところがある。中国人は全体的に気分屋だけど、広東人はとくにそれがはげしい。疲れがピークに達するととたんにふにゃっとなってしまう。

ある時、アニメちゃんといっしょに地下鉄に乗っていると、

「野鶴さん、わたしは疲れました。やる気ないですう。会社へ行きたくありません」

と、甘ったれた訴えを投げかけてくる。

「あのなあ、それが上司に向かっていう言葉か？」

「でも、ほんとうのことだからしょうがないじゃないですかあ」

「僕は仕事をいっぱい抱えさせられて大変なんだ。そばで見ているわかるだろう。そんなことを言ったら野鶴さんがかわいそうだと思わないのか？」

「はい、わたしもそう思います」

アニメちゃんはしゅんとしおらしい表情をして、

「わたしみたいな部下をもって野鶴さんはたいへんです。かわいそうですう」

と、どっと涙を流すような仕草をする。どうも本気でそう思っているようだ。

「自分でわかっていているんだったら、がんばりなさい」

「でもでもお、会社へ行きたくないんですう」

「だめだこりゃ」

僕は頭を抱えこんだ。

会社へ行きたくない時って誰でもあるけどさあ。

そうかと思えば、

「わたしの人生はまだ始まったばかりだから、人生を真剣に考えて自分自身が輝けるステージを探さなくてはいけないんです。今の職場にこだわっていてはいけないと思います」

などと生意気なことをのたまう。

「あのなあ、今までいったいなんのためにいろんなことを教えたんだ」

「野鶴さんは損してしまいますよね。でも、わたしの人生です」

それはそうかもしれないけど、手間暇かけて教育して、やっと最低限のことができるようになったばかりなのに、それですぐに辞められたのではたまったものではない。引き締めておかなければいけない。

「ふざけるなっ！」

僕はアニメちゃんにヘッドロックをかまして、文字通り締めた。機嫌の悪いときは屁理屈をこねて反抗するので、そんな時もヘッドロックをしてちゃんとやれと指導するようにした。今の日本だったら絶対にできないけど。というか、そもそもふざけた反抗の仕方なんかしらないけど。

ヘッドロック教育の成果はばっちりだった。怒るふりをする、頭を隠して逃げ、言い付けを守るようになった。やさしくなければ人ではない。だけど、やさしいだけではいけない。飴と鞭を使いわけなくてはいけない。

ところで、最近発見したのだけど、課内の食事を設定するとアニメちゃんのモチベーションがあがる。食事を楽しみにして、それまではルンルン気分ではりきって仕事をしてくれる。食事が終わるととたんにトーンダウンしてだらりとしてしまうのだけど。

じつにわかりやすい。

佛山市女兒轢き逃げ事件について

二〇一一年十月十三日、広東省佛山市で轢き逃げ事件が発生した。佛山市は広東省の省都・広州市の南西にあり、各種製造業の工場が建ち並ぶ工業地帯だ。日系メーカーも多い。

まず、路地を歩いていた二歳の女の子が白いワゴン車に轢かれた。ワゴン車は前輪で女の子を轢いた後、後輪でまた彼女を轢いて走り去った。通行人が三人通り過ぎたものの、誰も関心を払わずに通り過ぎ、第二の車がまた彼女を轢いた。合計十七人の通行人が女の子をそばを歩きながらも無視して、十八人目の通行人がやっと女の子に手を差し伸べた。女の子は病院へ運ばれたが八日後に息を引き取った。なんとも痛ましい事件だ

この映像は街角に設置してある監視カメラに録画されていて、テレビのニュース番組で報道された。ニュース番組や新聞報道では、案の定、女の子を見殺しにしたことについてモラルの低下といったことが叫ばれたが、ことはそう単純ではない。

中国人の知人とこの事件のことを話した時、まっさきに、

「ペテン師が多すぎるんだよ」

という反応が返ってきた。

つまり、轢き逃げされた女の子を助けようとして関わりになった場合、「女の子をこんな目に遭わせたのはお前だろう」と逆に無実の罪をなすりつけられてトラブルに巻きこまれる虞おそれがあるというのである。

「なにかの罠かもしれない。関わりになりたくない」

これが一般的な中国人の反応だろう。

広州の街角を歩いていると、

「パンをめぐんでください」

と呼び止められることがあるが、地元の間人には、

「絶対にあげちゃだめ。関わりになつたらどんな目に遭わされるかわかったもんじゃないから、絶対に無視すること」

と、何度もアドバイスを受けた。

中国に限らず、日本でも、都会に暮す人々は無用なトラブルに巻きこまれないように用心している人がほとんどだろう。モラルを高めろなどといったもむなしばかりだ。ニュースキャスターや新聞記者はそれで溜飲を下げられるかもしれないが、なんの解決にもならない。

人々の絆が断ち切られた社会では、他人に無関心にならざるを得ない。そうしなければ、自分を守れない。問題はここにある。たぶん、佛山市女兒轢き逃げ事件のようなことは、毎日、この広い中国のどこかで起きているのだろう。佛山市の事件はたまたま監視カメラにしっかり記録されていたので、大々的に取り上げられたにすぎない。

——恐ろしい世の中に住んでいるのだな。
とふと思う。

今年最後の眠りに就く前に2011

福島第一原発の事故であらためて明らかになったのは、利権による利権のための政がまかり通っているということだ。

利権は腐敗を生む。

腐敗は国を蝕み、人々の生活をおびやかす。

それが極端な形であらわれたのが、今回の原発事故なのだろうと思う。

事故が発生して以来、政府と東電は虚偽の発表を繰り返してきた。先日、首相が発表した「事故収束」宣言もそうだ。そんな子供騙しの宣言が通じると思いあがり国民をなめてかかっている。いやむしろ、国民のことなど眼中にないと言ったほうがいいのかもしれない。もちろん、福島第一原発の事故はまだ収束していない。

冷温停止などしていない。

原子炉から落ちた核燃料は発熱を続け、今も放射能をまき散らし続けている。

彼らが嘘ばかりつくのは、原発利権を守るためにほかならない。人々の生命や健康よりも、利権がらみのお金のほうが大事というわけだ。「事故収束」宣言も裏を返せば、「事故処理のめどはついた。原発事業を本格的に再開する」という原発利権グループへのメッセーじだ。

利権による利権のための政治は、なにも原発事故だけには限らない。

この寒空の下、多くの人々が職を奪われ路上へ放り出されている。彼らはなまけていてそうなのではない。能力がないからでもない。金融資本と大企業が必要以上の利潤——つまり、暴利を貪るために、その犠牲にされただけのことだ。まじめに働く人間がまとも

に暮せない政とはいったいなんなのだろう？ 人々の暮らしは利権のためにあるわけではない。

どうか、一日も早く原発事故が収束し、復興が進みますように。路上に放り出された人々の手にまともな生活が戻りますように。

今年最後の眠りに就く前に2011（後書き）

今年最後の『ゆっくりゆうやけ』になります。

お付き合いくださいまして、まことにありがとうございます。
来年もぼちぼち連載しますので、よろしくお願い申し上げます。
よいお年をお過ごしください。

考える章

考え方が変わったというよりも、ぼんやり生きていた僕がいろんな物事を真剣に考えるようになったのは、バックパックを背負って旅に出て、今住んでいる中国で暮らすようになってからだった。

デカルトは、

「我思う、ゆえに我あり」

と書いた。

考えることは、物事を疑うことから始まる。

だけど、たとえ世の中のすべてのものを疑って否定したとしても、そんな風に物事を考えている自分の存在は否定できない、ということだ。物事を疑っている自分だけは、しっかり実在している。

デカルトは疑って疑い抜いてとことん考えたから、こんな命題を書物に記したわけだけど、そこまで突き詰めなくても、「疑う」ということは考えることの第一歩になる。

外国で暮らしてみると、日本では考えられなかったことにいくわす。ささいなことでも、日本と外国の差異に考えさせられる。自分が培ってきた「常識」がばらばらと音を立てて崩れる。

日本人なら言わなくても通じる「暗黙の了解」が通じない。もちろん、外国にも、「暗黙の了解」はある。しかし、それは日本の「暗黙の了解」とはまた違ったルールで動いている。どうにも居心地が悪くて、心に棘がささったようで、胸がちくちくと痛むこともある。

小さなことでいえば、テーブルマナーがそうだ。

日本では、魚の骨や鶏の骨を絶対にテーブルのうえに置いたりしない。必ず、自分の皿に置くか、がら入れの器を用意してそこに捨てる。だが、中国ではテーブルのうえに置いてもいい。初めはかなり違和感があったけど、そうするよりほかにない。中国人の家に食

事に招待された場合、がら入れをくれとお願いするわけにもいかない。相手に煩わしい思いをさせることになるので、エチケット違反になる。今ではずいぶん慣れてしまったけど。

また、ご馳走によばれた時は、全部食べてはいけない。

日本では残さずに平らげるのが礼儀にかなっているが、中国の場合、それをするとはホストの面子を潰すことになる。つまり、中国人の考え方では、「ホストは客を満足させられるだけの料理を用意しなかった。もてなしが足りない」ということになるのだ。少しだけ残して、「もう食べられません。食べきれないほど用意していただいてありがとうございます」というふうに箸を置くのが礼儀にかなっている。

そんな壁にぶつかったところで、自分の常識を疑い始める。「常識」と「正解」は別問題なのだと気づかせられる。

さて、それからが大変だ。

固いと思っていた自分の基盤がぐらぐら揺れる。なにが「正解」なのかわからなくなってしまふ。

中国人は彼らの「常識」で僕にいろんな物事を問いかけてくる。もちろん、彼らの常識も「正解」ではない。「常識」は「常識」にすぎない。中国の文化のなかでだけ通じる処世術にすぎない。人と無用な摩擦を生まないようにうまく振る舞うということも、生きてゆくうえで大切な技術ではあるけど、民族の違いを超えて、時を超えて、変わらない大切なことを自分自身の手でしっかり？みたいと願うようになった。自分の軸をしっかり築かなければ、相手のいいようにされてしまったり、倒されてしまったりするから。自分がなにをしたいのかさえも、わからなくなってしまふから。

「正解」を求めるためには、その物事の本質はなんだろうという問いかけが不可欠だ。それなしでは、「正解」を得られない。理解できないことにでくわした時は、牛が胃の中のものを反芻するように繰り返し考える。正直なところ、いろんなことにぶつかりすぎて胃がもたれている感じではあるけど、いろんなことが勉強になった。

いろんなことを誤魔化しながら生きてきたんだとよくわかった。もちろん、僕自身のことだ。

外国での生活は苦勞が多いけど、その分、収穫も多い。思い切って放浪の旅に出てよかった。死ぬまでずっと、考える輩でありたい。そして、その糧で以て、文章を綴りたい。

肚をくくる

気の持ちようでいろんなことが変わる。

とりわけ、気が滅入っていたり、重い課題を抱え込んでいるときは、そうしてみたくなる。

たしかに、気を軽く持つということも、生きていくうえでは欠かせないテクニックだ。重い気分をひきずってばかりいては、やりきれなくなってしまうから。落ち込んでばかりもいられないから。誰でもほっとひと息つきたいから。

ただ、気の持ちようを変えれば、目の前で起きている現象そのものが変わってくれるのかといえ、決してそうではない。お酒を飲んでリラックスするのはいいけど、ずっと酒が入ったままでは困る。それと同じだ。

気の持ちようを変えたからといって、空を舞い、大地を穢す放射能が消えるわけでもない。若者を路上へ放り出す残酷な社会システムが変わるわけでもない。一部の利権団体からもらった献金のために政策を立案する「金で買われた民主主義」が変わるわけでもない。己の野心が世の中で一番大切なものと勘違いして人を傷つけても平気な人間を生み出す功利主義が消えるわけでもない。家族、友人、職場の人々との人間関係の軋轢や葛藤がなくなるわけでもない。

自分が抱えた課題を解決したいと思えば、まずその課題の本質を理解しなければならぬ。

つらくても、しんどくても、まなこ眼をしっかり見開いて現実を直視し、その背景にある本質的な課題を見据えなくてはならない。もちろん、自分のことを棚に上げ、自分ひとりだけ「安全地帯」にいるわけにもいかないから、冷徹な自己解剖も必要だ。すべてはそこからはじまる。

あれこれと悩むのは迷いのなかにいるからだ。

完全に迷いから抜け出せることはないかもしれないけど、人として生まれてきたからには、せめて迷いから抜け出すための努力をしたい。あべこべの世の中で、あべこべのまま暮していたのでは、つまるところ、自分自身を痛めつけるだけになってしまう。氣の持ちようを変えて難題をかわすより、肚をくくって目を見開いたほうがよほどいい。いささか歳を重ね、ようやくこんなことを学んだ。

帰省列車の切符

「帰れなくなっちゃった」

四川人の友人ががっかりしたように言った。春節（中国の旧正月）に故郷へ帰るための列車の切符が取れなかったのだという。広州へ出稼ぎにきている人たちは、ほとんど列車で帰る。それも寝台ではなく座席に何十時間も坐って。広州から四川省の省都・成都までは三十一時間の快速と四〇時間の臨時列車があるそうだけど、気の毒なことにどちらも売り切れ。四川から出稼ぎに来ている人は多いから、一日二本の列車ではとても足りない。

彼女は、今年三十一歳。四川のとある町の出身で、実家に子供を預けている。子供に会えるのは年に一回、春節の時だけだ。彼女のような出稼ぎのお母さんはけっこういる。日本人にはちょっと信じがたいことかもしれないけど、こちらではごく当たり前だ。彼女は一か月ほどの休暇をもらう予定だった。春節の間はゆっくり休む。そのかわり、普段はほとんど休まない。一説によれば、広東省だけで一億四千万人が省内へあるいは省外へ里帰りするそうだ。広東省の帰省者だけで日本の人口を超えるのだから、めまいがする。

「それでどうするの？　休みをずらして春節明けに帰るとかするの？」

僕は訊いた。

「やっぱり、春節に帰りたいわよねえ」

彼女はさびしそうに唇を尖らせる。中国人にとって春節は家族や親戚が集まる大事な行事だ。とくに田舎へ行けばいくほど、春節を大切にする。それは、社会も国も信用できないため、家族で結束しなければ生きていかなれないことの裏返しでもあるのだけど。

列車の切符は十日前から売り出される。この時期になると切符の仲介業者が出て、切符の手配を請け負い、依頼人のお金と身分証（

国内パスポート）をあずかって駅の行列に並ぶ。駅前は五六時間待ちは当たり前です。さまじい行列だ。彼女も仲介業者に頼んだそうだが、硬座（普通座席）も、硬臥（B寝台）も軟臥（A寝台）もだめだったのだとか。切符の電話予約の番号にもかけてみたけど、すべて売り切れだった。

ちなみに、広州駅で切符を買う時は、窓口で身分証を提示しなければいけない。切符には身分証の番号が印刷される。偽切符、業者の買占め、テロ、反政府活動を防ぐための措置だ。毎年、この時期になると大量の偽造切符が出回って新聞の紙面を賑わしたものだ。

「飛行機を予約するしかないかなあ」

どうしても春節に帰りたいようだ。

飛行機なら広州から成都まで二時間ほど到着するけど、チケット代は列車の何倍もする。航空チケットは出稼ぎ労働者にとっては今でも贅沢だ。飛行機に乗ったことがないという人もわりあいいる。高額のエアチケットを買うくらいなら、そのぶん節約して家族にお金を渡してあげようとする。彼らはお金でしか自由を買えないからお金を大切にする。それがいいかどうかはともかくとして。

里帰りの鉄道切符がなんとか手に入ればいいのだけだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8686m/>

ゆっくりゆうやけ

2012年1月10日01時52分発行